

---

# 流星のロックマン 古代文明再来

黒星

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流星のロックマン 古代文明再来

### 【コード】

N0938I

### 【作者名】

黒星

### 【あらすじ】

二年前の夏休み、星河スバルは世界を救うため、アポロンと呼ばれる存在を打ち倒した。それが、これから起こる事件の引き金になるとも知らずに。

並行世界より来訪したムーの電波体《十二神将》。今、スバル達と彼らとの闘いが始まる。

護りたい、大切な世界を巻き込んで……

## プロローグ？（前書き）

初書きです。

とりあえず頑張って行きます！

## プロローグ？

地球の何処とも知れぬ場所に、その者達は集結していた。

『……皆、揃ったようだな』

その内の一人、鎧を纏った老人が、他の者達を一瞥してからそう呟いた。

『……まあ一応。それより何ですか、いきなり召集かけるなんて。何かあったんですか？』

その老人の真向かいに座り込んでいた杖を背負った青年が老人に問う。

老人は頷き、暫く間を置いてからこう言った。

『……お前達は、二年前に何かあったのか、覚えているか？』

その言葉に、その場にいた者達の過半数が『二年前？』と口を揃えて呟き、首を傾げた。

誰も思い当たる節が無いのか暫く黙り込んでいたが、ふと先程の青年が顔を上げ、『そう言えば』と切り出して言った。

『何か“あっち”がやたらゴツタゴツタしてましたね。流星が降ってくるとかで』

『確かにそうだったな。しかし違う。それよりも前に』

『アンタ本当にバツカじゃないの、メルクリウス！？』

青年の言葉を否定した老人が言い終わる前に、若い女性の声が響いた。

その声の主に、メルクリウスと呼ばれた青年が抗議する。

『誰がバカだ、アルテミス！』

『アンタよアンタ！ 他に誰がいるってのよバカ！』

アルテミスと呼ばれた女性は、メルクリウスを更に罵倒し続ける。

『二年前って言ったら、私達にとって凄く、物凄く重大な事件があったじゃない！ それを忘れてすつとぼけたこと言ってるからバカだって言ったのよ！』

叫び終わると、肩で息をしながらアルテミスは俯いた。今の表情を見られたくないかのように、深く。

彼女のただならぬ様子に、流石のメルクリウスも黙らざるを得なかった。そして二年前の記憶を、もつと必死になって探る。

二年前。俺達にとっての重大な事件。

この二つのキーワードと今のアルテミスの様子。その関連性を考え、すぐに見当がついて、そしてその“重大な事件”を鮮明に思い出した。

『……思い出したか？』

メルクリウスの心を読んだとしか思えないようなタイミングで老人が訊ねた。

メルクリウスは頷き、アルテミスがいるこの場で答えていいものかどうか逡巡し、その彼女から『早く言いなさいよ』と促されたことで、ようやくその“重大な事件”を口にした。

『アポロンが、消滅しました』

ブローグ？（後書き）

スバル出ず（笑）

プロローグ？

『アポロンが、消滅しました』

その答えを聞いた老人は、『その通りだ』と頷いた。

『二年前、何者かの手によってあのアポロンが殺された。“我ら”の中で最強と謳われていた奴が、だ』

老人は全員の顔を一瞥し、続ける。

『お前達には黙っていたが、私はこの二年間、奴を殺した者を捜索し続けていたのだ』

他の者達がにわかになぞめき始める。そんな中、アルテミスが訊ねた。

『……それで、見つかったんですか？』

『……ああ、昨日、ついに見つけた』

老人が肯定すると同時に、その場にいる全員の眼前に一人の少年が映し出されたディスプレイが現れた。

数名の友人とおぼしき人物に囲まれながら笑う少年を見て、一同騒然とする。

『馬鹿な、まだ子供ではないか！？』

『こんな子供があのアポロンを殺したって、嘘でしょ？』

『からかってんのかよ？』

驚きと呆れの入り混じった声が次々と上がる。どう鼻屑目に見ても、この少年にそれほどの強大な力があるようには思えないからだ。だが一部、そう思っていない者もいた。

メルクリウスは『はあ』と盛大に溜め息をついて、

『アンタらバカじゃねーか？ 目見てみるよ目。コイツ、相当な場数を踏んだ奴しか持ってない、強者の目をしてるじゃねーかよ』

一部を除く、多くの仲間を小馬鹿にしつつ言った。

『そうね。それに、“人は見かけによらない”って人間たちの言葉にもあるように、こういう奴ほど危険だってアンタ達知らないの？』

アルテミスも、メルクリウスとだいたい似たような感情を込めた声色で告げた。

『……………テメエら』

立て続けに馬鹿にされた“少年を強者だと気付けなかった者”の中で、気の短い者がキレて二人につきみ掛かろうとするが、老人に妨害されて断念する。

それからしばし沈黙が流れ、ようやく全員が落ち着いたところで、アルテミスは訊ねた。

『……………で、間違いないんですよね、ゼウス。コイツがアポロンを

兄さんを、殺した奴で』

老人は、ゼウスは頷いた。

『……そう』

アルテミスはそう呟くと、ディスプレイに映る、平和そうに笑っている少年を、憎悪に彩られた眼差しで睨んだ。

『……ゼウス』

その様子を憐れむような目で眺めていたメルクリウスは、やがて老人の名を呼んだ。

『早く、話を進めてください』

そういった意味が込められているのだが、一応は伝わったらしく、ゼウスは皆に自分に注目するよう促す。  
そして、こつ切り出した。

『弔い合戦だ』

拳を胸の前で強く握り。

『我等が同胞、アポロンを亡き者にしたこの者を討ち取り、奴の無念を晴らすぞ』

ゼウスはそこで一旦言葉を切り、皆を一瞥して、長い時間溜めてから、叫んだ。

『我等、ムーの十二神将の手で!!』

プロローグ？（後書き）

何でプロローグとつに分けたんだろっ？

## 第1話：変化

とある街の、夕凧中学校という学校で、

「……………はあ」

ひどく憂鬱そうに溜め息をついている少年がいた。

彼の名前は《星河スバル》。

過去に三度も地球を救ったヒーロー、《ロックマン》として世界的に有名な少年だ。

そんなヒーローが今、頼杖をつきながらひどく憂鬱そうに溜め息をついているのだ。

「……………はあ」

二度目の溜め息。その様子を少し遠くから眺めていた少女が、トテトテと歩み寄って彼に声をかけた。

「どうしたのスバル君？ 何か悩み事？」

そうやって親しげにスバルの下の名前まで呼ぶ彼女は《響ミソラ》。

老若男女問わず凄まじい人気を誇るシンガーソングライターとして、これまた世界的に有名だ。

……………が、彼女は今、その活動を休止している。

本人曰く、

「おバカアイドルの類にはなりたくないから、この三年（中学校に通う間）は学業に専念したいの」

そんな彼女の問いに、スバルはけだるそうに答えた。

「……いや、悩み事はないんだけどね」

「じゃあ何で溜め息なんか……？」

その問いには、窓の外に広がる風景の最も遠い場所を眺めつつ答えた。

「……何かさー」

「うん」

「平和だなーって」

「そうだねー」

「暇だなーって」

「うん、そうだねー」

「……戦いたいなーって」

「そ　　って、え？」

思わず声を上げて首を傾げるミソラ。何か今、基本的に温厚なこの少年の口から、全然似つかわしくない言葉が発された気がする。

いやいやそんな訳ないって。きつと聞き間違えたんだよ。馬鹿だなあ私。

そうやって、聞き間違いとして処理し、一人で納得しようとしていたミソラだったが……、

『おいおい聞いたかよミソラ!! 今、あのスバルの口から、“戦いたい”って言葉が出てきたぜ!?!』

突如この場に現れた、青いライオンのような生物の言葉で、聞き間違えではなかったことを悟った。

このテンションの高い青獅子は《ウォーロック》。

元々はAM星人という身体を電波で構成されている宇宙人で、今はスバルのウィザードと呼ばれる存在だ。

そんなウォーロックに、ミソラはオドオドした様子で訊ねる。

「ロ、ロック君にも、やっぱりそう聞こえた?」

『おつよ』

即答するウォーロック。

二人して、遠い目をしながら溜め息をつきまくるスバルを眺め、

「スバル君、一体どうしちゃったんだらうね?」

『さあな。……ま、俺としちゃ、願ったり叶ったりなんだがなー』

ミソラが心配する一方で、ウォーロックは子供の成長を喜ぶ親のような慈愛に満ちた目をしている。

そんな二人の視線にスバルは気付いたようで、

「……？ どうしたの二人とも。人のことじろじろ見て」

その問いに対し、ウォーロックはともかくミソラは大慌てだ。

「え？ や、その……ね？ ほら、電波ウイルス退治とかで充分戦ってるのに、何で戦いたいなんて言うのかなあ？ ……って、思っ  
て」

慌てて勢いで発したにしては中々に良い出来の返答だったことに、ミソラは少し誇らしくなる。

それに対してスバルは、「ああ」と呟いたあと、

「……電波ウイルスとは、“戦い”なんかじゃないからだよ」

よく分からない答えが返ってきた。

「え、何で？」

当然、ミソラは意味が判らず首を傾げた。ウォーロックも同様の反応をする。

スバルによると、つまりこういうことだった。

「だってそれって、僕が一方的に攻撃してるだけだし……」

「『あー、なるほど……』」

納得して頷く二人。一度も反撃されることがなく、こちらが一方的に屠るだけなら、確かにそれは“戦い”とは呼ばない。

「だからね」と、スバルは続ける。

「ちゃんと反撃出来るくらい強い相手と戦いたいなー……っと思ってさ」

スバルのその言葉に、ウォーロックは感極まった様子で、

『おおおおおー！！ 聞いたかミソラあー！！ 今、スバルの口から  
“強いあ”』

『うるさいわよウォーロックー！！』

『ゴハアツー！？』

叫んでいたが、誰かに打ち臥せられて途中で止められてしまった。

今、ウォーロックを押さえ付けている琴のような物体は《ハーブ》。

元々はFM星人という宇宙人で、今現在はミソラのウィザードだ。

『く、くそっ……、退きやがれハーブ！』

『嫌よ、暴れるもの』

『抵抗しなきゃならねえこっちの方がもっと暴れるってのが判んね

えのかっ!?!』

『……………』

『……………お、おい? 何を……………つて、首を押さえんなあぁっ……………  
……………おぉお』

ハーブは首に全体重をかけることにより、ウォーロックの無力化に成功した。

そんな自分達のウィザードのやり取りを見て、苦笑するオペレーター二人。

「……………それにしても、まさかスバル君が戦いたいなんて言うなんて思わなかったよ。本当にどうしたの?」

「……………そういえば、何でだろ?」

『この戦闘狂の影響じゃないかしら』

「「あー、それだ」」

『……………おぉお』

首を圧迫されて抗議することすら叶わぬウォーロック。

その後すぐに授業開始の鐘が鳴り、二人は自分のウィザードをハンターV.Gに戻して授業の準備をはじめた。

第1話：変化（後書き）

スバルのテンションが低い…

## 第2話：一ヶ月

その日の放課後。

スバルとミソラは校門の前に佇んでいた。

友人の《委員長（白金ルナ）・牛島ゴン太・最小院キザマロ・ジヤック》を待ったためだ。

ただ、二人は既に二十分近くこの場所にいる。HRが終わって随分経ったというのに、一向に友人達が現れないからだ。

「……………」

おかげで二人共通話題が無くなって、もう五分近く無言状態が続いている。

……更に五分、十分と時が経ち、「流石にそろそろ限界……」と二人が感じ始めた時、

「わ、悪い、遅れた！」

と叫びながら走ってくる黒髪の少年が二人の視界に入った。

彼は友人の一人、ジャック。

二年前、世界中で活動していた犯罪組織ディーラーの中核を担っていた少年だ。

それ故、一度サテラポリスに捕らえられたのだが、ある人物の計らいですぐに釈放され、それ以降は学生として過ごしはじめて現在に到る。

そんなジャックを二人は、

「やあジャック、遅かったね」

「遅かったねえ」

清々しい笑顔で迎えた。

「す、すまねえ……」

その笑顔に何かうすら寒いものを覚えたジャックはすぐさま謝罪する。

スバルは溜め息をつきながら訊ねる。

「ま、いいんだけどさ。……それより、委員長達はどつしたの？  
一緒じゃないんだ」

「……ああ、委員長とキザマロは文化祭の件で先生に呼ばれた。ゴン太は補習受けてる」

ジャックはヒラヒラと手を振りながら、

「だから先に帰ってくれって言ってたぜ」

「そっか」とスバルは呟いた。ミソラもパンツ！と手を叩きつつ、

「あ、じゃあもう帰っていいんだ」

「そうなるな」

肯定。

「……じゃあ、帰ろっか」

二人を一瞥したミソラはゆっくりと歩き出した。余程早く降りたかったらしく、満面の笑みを浮かべて。男二人は、それに苦笑しながら同じような速度で追隨した。

それから約十分。

三人はウエーブライナーに乗るために駅にいた。まだ到着まで時間があるので、適当に話しをしながらその時を待っている。

スバルが「あはは」と笑いながら、

「……それにしても、委員長達も大変だね。まだ一月以上も先の文化祭のために呼ばれるなんてさ」

「だよな。まだまだ先の事に、そんなに力入れてどうすんだよって話だぜ」

「だよな」

スバルとジャックはお互いの言葉に同意し合う。正直笑い話程度のノリで二人は会話しているのだが、彼女にはそう聴こえなかったように、

ミソラが、おもむろに呻くように呟いた。

「それは違うよ二人共……」

「「？」」

「まだ”じゃなくて”もう”だよ！ もう一月しかないんだよ！  
力入れるの当たり前じゃん！」

若干キレ気味に「がーっ！」という擬音がピッタリな勢いで叫ぶ  
ミソラに怯える二人。

「で、でもさ……」

「でもじゃない！」

「ひっ！？」

スバルは反論しようとするが、ミソラの一喝により叶わない。  
そうやって隙を見せてしまったことが災いして、典型的な“文化  
祭時の女子のテンション”になったミソラの一ヶ月前に関する演説  
が行われた。

「二人共分かってないよ、一ヶ月前の忙しさが！ 一ヶ月前って  
うのはアレだよ。お店で言うところの“かきいれ時”なんだよ！  
超忙しいんだよ！」

「そこまで忙しくはないだろ」

とツッコミたい二人だったが、そうすると更にややこしい事態に  
なりかねないのでここはグッと堪えた。

結局、ミソラの文化祭の1ヶ月前に関する演説は、ウェーブライナーが到着するまで延々と続いた。

第2話：一ヶ月（後書き）

書き忘れ

作中では今、九月の中頃くらいです。

### 第3話・そういつ人

ロップランドーヒルズ、TKタワーの上空。

『はあ、はあ……ッ！』

『よっ、シルフィー。相変わらず遅いな』

『……ッ！ わ、私が遅いんじゃない、貴方が速すぎるんですよ！』

そこにその二人はいた。

飄々とした雰囲気漂う青年は、メルクリウス十二神将。

肩で息をしながら抗議している小柄な少女はその部下である《シルフィー》。

どちらもムーの電波体と呼ばれる、ただでさえ特殊な電波体の中でも更に特殊な存在だ。

しばらくして呼吸を整えたシルフィーが、腰に手を当てるといいう、上司と相對するものとは到底思えない尊大な態度で訊ねた。

『……で、何の用なんですか？ 私、ただついて来いって言われただけで、用件とか何一つ聞いてないんですけど』

『ああ、うん。それは今から話す』

そんなのはいつものことだと特に気にしないメルクリウスは、部下の問いに対して『んんッ！』と咳払いしてから、宣言するように

答えた。

『諜報任務だ!』

『何の?』

要点が一切省かれたメルクリウスの返答に、シルフィーは敬語を使わない、棘のある声で再び訊ねた。

至極恰好良いテンションで言い切ったつもりだったメルクリウスは、部下の冷たい返答にもへこたれず、しかしこれ以上何か言われると堪えられないような気がして、とりあえず真面目に伝えることにした。

『……二年前にアポロンを殺した奴の元に潜入して、素性を調べるんだよ』

『!?!?』

顔色が変わる。伝えられた任務のあまりに過酷な内容に、シルフィーは驚きを隠せない様子だった。

『……えらく簡単に言ってくれましたけど、それ私には荷が重たくありませんか?』

『……だろ?俺もそう思うよ。でもコレ、ゼウスからの勅令なんだ』

『……………』

そのゼウスからの勅令とやらの内容を、彼女はメルクリウスの表

情から大体察した。

相手はあのアポロンを殺せる程の手練れだ。万が一戦闘にでもなつて、万が一メルクリウスも殺されてしまった場合、十二神将は再び大打撃を喰らってしまう。

十二神将の代わりなど、そういないのだ。

……だから、

『……死んでも特に支障のない私が選ばれた訳ですか』

つまりは捨て駒。

シルフィーは、相手の力量を測るための捨て駒として駆り出されたという事だった。

『……俺は反対したんだけどな。聞いてくれねーんだよな、あの人』

苦々しい表情でメルクリウスは呟いた。

『つたく、人の部下をなんだと思ってやがんだあの爺……』

次いでそう毒づく。普段は絶対にそんなことは言わないのに、部下が捨て駒にされただけでここまで変わるのだ。

『……………えへへ』

思わず顔が綻ぶシルフィー。

そう、メルクリウスとはそういう人なのだ。

自分の代わりに誰かが危険に晒されることを決して良しとしない、そういう優しい人なのだ。

だからこそ、その人柄に惚れたからこそ、シルフィーはメルクリ

ウスの下についた。

『そつだ!』

メルクリウスがパンツ! と手を叩いた。明案を思い付いたとでも言いたげな嬉々とした表情で、正直誰でも思いつくような提案をする。

『シルフィー、お前待機してる。俺が行ってくるから。なあに、バレやしないさ。“こつち”の状況は“あつち”には伝わらない』

誰でも思いつけるからこそ、シルフィーもそんな案はとっくに思いついていた。そして、メルクリウスがそれを提案することも、彼女には予想がついていた。

だから、それに対する返答は既に用意してある。

『いえ、いいです。私が行きます』

シルフィーは簡潔に、メルクリウスの提案を断った。

『……………は?』

まさか断られるとは思っていなかったのだろう。メルクリウスはいたく驚愕した様子だったが、構わずシルフィーは続ける。

『お気遣いはありがたいんですが、それだと貴方が死んじゃうかも知れないので、いいです』

『いや、でもお前が行ったら……………』

『死ぬでしょうね。でもいいです。貴方が死ぬのに比べたらマシですよ』

シルフィーは一拍置いて、憂いの欠片もない笑みを浮かべながら、言った。

『私は、私が死ぬより貴方が死ぬ方が嫌なんです。だから、私が行きます』

『そもそもコレ、私に与えられた任務なんでしょう？』とシルフィーは付け加えように呟く。

『……………』

決意を聞かされて、メルクリウスは沈黙した。苦悩しているのが、シルフィーには手に取るように分かる。

やはりイレギュラーなくらい優しい人だな、と再び微笑み、折角固めた決意が鈍る前に、上司の名前を呼ぶ。

『……………メルクリウス様』

『……………あーハイハイ、判った、判った、判りましたよ。そんなに言うんだったら勝手に行ってこい』

メルクリウスは、ついに折れたようだった。服の中から、対象のデータが詰まった小型のカードをシルフィーに手渡す。

『……………んじゃまあ、……………頑張れよ』

『はいー』

カードを受け取ったシルフィーは力いっぱい返事をし、メルクリウスに背を向けた。

『……ただな、シルフィー』

『つと、……はい？』

さて、格好良く飛び去ってやろうかな……、と意気込んでいたシルフィーは、呼び掛けられたことにより、つんのめって飛び去れずに立ち止まる。

抗議の視線を向けるが、まるで意に介さないメルクリウス。そのまま彼は爽やかな笑顔を浮かべつつ、

『お前が負けそうになったら、殺されそうになったら、そんな時は俺も出る。お前を護るために、お前を死なせねーために出てやるから、ソレ覚えとけ』

シルフィーを指差して、力強く宣言した。

『……なーんで素でそういうこと言えるんですかねー、この人は』

シルフィーは顔を背けて、呆れたように呟く。

『……何か言ったか？』

『いーえ、別に何も。……ていうか、はい。判りました、念頭においときますね』

『あ？ おつ』

シルフィーは適当に頷きながら返事をする。独り言が聴こえなかったらしいメルクリウスは困惑しながらも手を振り、その様子を横目に眺めながら、シルフィーは今度こそ飛び去った。

第4話・決闘？（前書き）

短いです

#### 第4話：決闘？

ところ変わってスバルの生まれ育った町、コダマタウン。小学校近くにある公園。

そこでスバルとジャックは睨み合っていた。

別に喧嘩している訳ではない。

正式な決闘、ウェーブバトルをしようとしているのだ。

何故そういう流れになったのかと言うと、ウォーロックが原因だった。

それはさきほど、ウェーブライナーに乗っていた時のこと。

『そついやスバル、お前強えヤツと戦いてえとか言ってたよな。ならジャックとかお手頃じゃねえか？ それなりに強えしよ』

それに、ジャックのウィザード《コーヴァス》が食い付いたのだ。

『ああん！？ お手頃？ それなりだあ！？ ウォーロックちゃんごときが調子に乗ってんじゃねえぞ！』

気が短く、ウォーロック以上に戦闘狂なコーヴァスには、彼の上から目線な評価がどうしても堪えられなかったらしい。

そのまま車掌に注意されるほどヒートアップしたウィザード二人を鎮めること、そしてスバルの欲求を満たすために、ウェーブバトルをすることとなったのである。

二人は臨戦体勢をとったまま言葉を交わす。

「……にしても、どういつ心境の変化だ？ お前が強い相手と戦いたいと思うなんて」

「ウォーロックの影響だよ」

「……ああ、なるほどな」

『……おい、何でみんなそこで納得するんだ？』

ウォーロックが嘆くように呟くが、軽く無視される。

「ま、別にいいんだけどな。……にしても、ちょうどよかったぜ。俺な、そろそろお前にリベンジしてやるうと思ってたところなんだよ」

「なあコーヴァス」とジャックが同意を求める。すると、突如鳥のような電波体が現れた。

『ああそうさ！ アイツをブツ飛ばしたいと思ってたところだ！今はもう、勢い余って殺してえくれえだけどなあ！』

物騒なことをたまうこの鳥がコーヴァス。ハープと同じ元FM星人だ。

『っーかよお、早く始めようぜ！ もう我慢出来ねえ、抑えが利かねえんだよ！』

軽いトランス状態になったコーヴァスが喚き散らす。

「分かった分かった」

とジャックは呆れた様子で頷き、スバルに向き直った。

「俺らは準備出来たぜ」

「僕らはとつくに出来てたけどね」

「……すまねえ」

「いいから、早く始めようよ」

スバルがハンターV Gを構える。ジャックも同様に構えた。

……そして、

「トランスコード！」

「シューティングスター・ロククマン！」

「ジャック・コーヴァス！」

二人は自身のウイザードと電波変換し、スバルは群青のボディと紅いバイザーを備えたシンプルなスタイルの《シューティングスター・ロククマン》に、ジャックは烏を彷彿とさせる黒いボディで、翼から炎の電波エネルギーを放出して空を舞う《ジャック・コーヴァス》へと変身した。

「それじゃあ……」

「始めようぜー！」

一方。

『……男って物騒よねえ。もう少し大人しくできないのかしら』

「そう？ あれくらいがちょうど良いと思うけどなー」

『……下手すれば大怪我するような事してるのよ？』

「フツーだよフツー」

ミソラはハープにそう告げると、「スバル君頑張れー！」と、ジヤックが聞いたら泣いてしまいそんな応援を開始した。

『……………』

ハープは『あなた、変わったわねえ……………』と、若干感性が歪みはじめている自身のオペレーターの将来を心配しつつ、観戦をはじめた。

## 第5話：決闘？

「バトルカード・マッドバルカン！」

ロックマンの右手が複数の銃口を持った銃に変形した。ジャック・コーヴアスに狙いを定めて、無数の弾丸を放つ。圧倒的な弾幕が張られるが、

「遅えよッ！！」

ジャックは持ち前のスピードでその全てを回避した。一発も、かすってすらいない。

「……じゃ、次はこっちの番だ！」

返す刀で、ジャックはロックマンとの距離を一気に詰めた。炎の噴射力を用いた高速移動。ロックマンはそのスピードを視認は出来たが反応するのは若干遅れた。

「ヘルズシックル！！」

そうして僅かな隙を作ったロックマンに、ジャックは翼を振るった。

このままいくと直撃してしまうが、ロックマンは大きく体を反らすことで、鼻先をかする程度にまで被害を抑える。

……が、

「ぐっ……！！」

ロックマンは、まるで直撃したかのような苦悶の表情を浮かべ、膝を着いていた。

ジャックはそれ笑い、訊ねる。

「忘れてねえよな？ この技の能力」

「……バグライズ」

ロックマンは呻くように答えた。

《バグライズ》

状態異常の一つで、この能力を持つ攻撃を電波体が喰らうと、その電波体を構成する電波の周波数に異常が起き、体力を徐々に削られていってしまう。

ジャックのヘルズシッケルには、その能力が備わっているため、かすただけとはいえ攻撃を喰らったロックマンには、現在、周波数に異常が起きているのだ。

「……相変わらず、嫌な攻撃だよ」

ロックマンはうんざりした調子で呟く。異常にもある程度慣れたのが、まだ苦しそうではあったが立ち上がる。

「そりゃどーも」

その間に、ジャックは空へと飛び上がった。

「…………ジャック君優勢だね」

『飛行能力を持つ者と持っていない者の差が如実に表れているのよ』

「なるほどねえ。…………じゃあ、スバル君が勝つためには、その差を埋めるような何かをしなきゃいけないって訳だね」

『そういうことね』

「…………ところでさ、ハープ」

『何？』

「何か私達、解説と実況みたいじゃない？」

『…………確かに』

二人がそんな会話をしている間にも、戦闘は続いていた。

ロックマンが空を飛び回るジャックに遠距離攻撃し、それを回避したジャックが接近して攻撃、それを回避したロックマンがすぐさま反撃するも、再びジャックが回避して空へと逃げる。

先ほどからこれの繰り返しだった。

「…………イタチごっこ、だね」

『……そうだな』

ロックマンの顔が苦痛に歪む。

先ほどまでの攻防で、両者はかすり傷一つ負っていない。

だが、ロックマンはバグライズの影響で体力が徐々に奪われていつている。

一見すると互角の勝負をしているように見えるかもしれないが、違う。ロックマンだけが消耗するように仕組まれた作戦で、ジャックの掌の上で、彼は踊らされているだけなのだ。

「……このままじゃ、負けるね」

『……ああ』

「ていうかズルいよね。空が飛べるって」

『だよなあ。俺らも飛びりゃあいんだが……』

「……………」

『……どうしたスバル？』

「……その案、いただき」

「バトルカード・ワイドウェーブ！」

「！！」

変形したロツクマンの腕から、広範囲を襲う水の刃が放たれる。炎属性であるジャックの弱点である水属性での攻撃を、

「ッ！」

ジャックは翼を薙いで防いだ。僅かだがダメージが通り、少し苦しむ。

高温の翼で薙いだことにより水飛沫と水蒸気が舞い、ジャックの視界を阻む。

しかし、その状態でもギリギリ見えた。

腕に鳥を装着したロツクマンが突進してくるのが。

ジェットアタック！？

相当な速度でロツクマンが突進してくる。ジャックは攻撃後というとても不安定な体勢で、正直、この状態であれを回避するのは困難だ。しかし、そうしない訳にもいかない。

「ッ！」

ジャックは無理矢理身体を曲げて、どうにか回避した。右腕が少し削れるが、こんなもの攻撃された内には入らない。

ジャックは勝ち誇った様子で、ロツクマンの方を振り向いた。

「ははっ！ 残念だったなスバ」

そのまま彼は翼で追撃を仕掛けようとするが、言葉とともにその動作は中止する羽目になった。

何故ならば、

……鳥を支点にして身を翻すロックマンを視界に捉えたからだ。

「バトルカード・ライメイザン」

「!!!」

彼は電気を帯びた刀を構え、翻す勢いを利用してジャックを斬りつけた。

第5話・決闘？（後書き）

容赦ないスバル

## 第6話：決闘？

「ぐああああ！！！」

ロックマンの斬撃の直撃を喰らい、ジャックは腹部に深い傷を負った。人間の状態だったら生存が危ういくらい出血している。更に、

「！？ くそつ、上手く飛べねえ！？」

ライメイザンが帯びていた電気により身体が麻痺してしまい、飛翔することが出来ず、徐々に地上へと墜ちていく。

よく考えられた攻撃だった。

ワイドウェーブは、炎属性のジャック・コーヴアスの弱点である水属性だ。その回避を試みて、もし失敗でもしてしまえば致命的なダメージを喰らう羽目になる。よって、防ぐしかない。

そしてその時に飛び散る水飛沫や水蒸気は目隠しとして作用し、突進するロックマンに気付くのを遅らせる。

おそらくそのまま直撃してもあちらとしては問題なかっただろうが、ライメイザンを用意していたところを見ると、ギリギリ回避出来る程度に速度を調節していたのだろう。

……そうしてギリギリ回避したジャックは、攻撃後の体勢から無理矢理その動作に入っているため、この上なく不安定な体勢になる。そこにライメイザン。

これにより大きなダメージを与えるとともに、麻痺の能力でジャックの飛ぶ力を奪ったのだ。

ジャックが苦汁に満ちた表情で地面に降り立ったと同時に、ロックマンも着地した。

「というわけで、飛んでみました！」

『なるほどなあ……………』

親指を立ててテンション高めに叫ぶロックマン。ウォーロックは非常に感心している。

「……………ッ!？」

痺れでいつも通りに動かない身体を動かし、睨みつけるジャック。それに気付いたロックマンは、不敵に笑う。

「さあ、これでやっと五分の戦いが出来るね」

「……………はっ、何が五分だよ。地上戦だったらお前の方が有利じゃねえか」

ロックマンも彼を睨み、そのまましばらく睨み合いが繰り広げられる。

そして、

「バトルカード・スイゲツザン！」

「バトルカード・リュウエンザン！」

互いに刀のバトルカードを使用し、同時に斬りかかり、鏖競り合

い状態となった。

「やー、凄いねスバルくん。あんな短い時間であそこまで考えたんだ」

『スバルくんの並外れたバトルセンスの為せる技でしょうね』

「そっかー。……では、この決闘、一体どうなると思いますか？解説のハープさん」

『ノリノリねえミソラ。……戦況はスバル君優勢だから、このまま上手いことことを運べば、彼の勝利ね』

「ふむ」

『……でも、ジャックくんだって空中戦が得意ってだけで地上戦が苦手な訳じゃない。コーヴァスの戦闘能力も相当なものだし』

「ほうほう」

『だからまあ、どう転ぶかは最後の瞬間が来るまで判らないのが勝負というものだから、どうなるかまでは今は判断出来ないわね』

「なるほどー。……では以上！ハープさんの解説でした！」

『……あなたは一体誰に向かって言ってるのかしら』

二人は最初のうちは互角に斬り結んでいた。ただ時が経つにつれ、刀を使い慣れていないことと身体の麻痺が影響して、ジャックが押し始められていた。

傷も、明らかにジャックの方が多い。

くそ、早く抜けるよこの痺れ……！

ジャックはロックマンの剣をいなしながら祈る。この状態だと、いつものスピードが全く出せない。

「！？」

……と、そんなことを考えている間に、ロックマンが視界から消えた。

くそ、どこにいやがる！

周囲を見渡して捜そうとするジャック。しかしその直前に、

『ジャアアーツク！！ 下だ！！』

コーヴァスが絶叫した。それに反応し、彼は反射的に下を見る。そこには、身を屈めた状態で剣を振り上げるロックマンがいた。

ヤッバ！？

咄嗟に自分の刀をガードに使うが、全く衝撃を殺せていない。リウエンザンの刀身が砕け散り、ジャックは大きく吹っ飛んだ。

「があ……!？」

何度も地面をバウンドし、鈍い痛みが身体中に走る。しかし、そこまで深刻なダメージにはなっていない。

地面に当たる直前に、翼をはためかせて若干衝撃を殺しているから

え？

そんな自分の行動に違和感を覚えるジャック。しかし違和感の正体に気付く前に、滑り台に激突して肺の中の空気が無理矢理吐き出される。

そのまま地に伏したジャックに、ロックマンは歩み寄っていく。

「終わりだよ、ジャック」

死刑宣告の如き言葉をロックマンは言い放った。ジャックは身体を起こして膝をつく。

「……………」

顔を俯け、肩で息をする彼に、ロックマンはスイゲツザンの切っ先を向けた。あとはこれを首筋まで持って行けば勝利は確定するのだが、

「!？」

そこでロックマンは気付いた。

ジャックが、不敵な笑みを浮かべていることに。

「それは……」

彼は掌を地面に合わせ、

「どうかな……」

腕の力を利用して一気に立ち上がり、飛翔した。

「……ヤバ、痺れが抜けたんだ」

その様を見て、ロックマンは啞然とする。

「終わりだぜ、スバル」

さきほどのロックマンの死刑宣告をジャックは真似る。その手には紫色の炎が纏わりついていた。

「ペインヘルフレーム……」

そしてそれを一気に解放し、無数の火球を雨のように落下させた。

「……………」

そんな絶望的な状況の中で、ロックマンは……。

「ゴメン、ウォーロック」

『ん？』

「詰めを誤った」

『……そうだな』

避ける気もなさそうに突っ立って、パートナーに謝罪していた。

そして二人して、穏やかで全てを諦めた表情を作り、降り注ぐ火球の雨を受け入れた。

第6話・決闘？（後書き）

バトル、終了。

## 第7話：拾い者

「じゃあ、何か飲み物買ってくるね!」

ミソラはそう言っただけで公園を出ていった。

公園にはスバルとジャックとそのウィザード達が残される。ふと、スバルが呟いた。

「……………負けたあ」

「まったく、お前が“アレ”使わなかったから負けたんだぞ。判つてんのか?」

ウォーロックがスバルを咎める。スバルは頷いて、

「……………判つてるよ。でも、ほら、やっぱり“アレ”なんかより刀で倒したくなるでしょ? 男だったらさ」

「それはまあ、判らなくもねえけどよ……………。それでみすみす勝利を逃すのも男としてはどうかと思うぜ」

「……………そうだね」

スバルとウォーロックが言葉を交わし、「『はあ……………』」と同時に溜め息をついた。

その会話の内容に、いつの間にか真正面に立っていたジャックとコーヴァスが納得がいかなそうな表情で、

「『おい』」

「……………何？」

敗者二人が会話を中断して、勝者二人の方を向く。  
ジャックが明らかに苛立った口調で、訊ねる。

「今の会話、まるで「本当は勝てたけど、手加減したから負けました」って言ってるように聞こえたんだが」

「む、手加減じゃないよ。僕は刀の方が恰好良く勝てそうだと思う  
て」

「手加減じゃねえか！？ その……………何だ、“アレ”？ とやらの方が刀よりも強力なんだろう！？」

「……………まあ、そうだけど」

「ほら見る手加減じゃねえか！！」

ジャックが絶叫する。真剣勝負だったにも拘わらず、手加減されて、その上勝たされたという事実が腹が立って仕方がないのだ。

そしてふと、ジャックは思い付いたように言った。

「スバル、その“アレ”ってのが何なのか教えるよ。もし俺がその“アレ”とやらを使っても戦況は変わらないと判断した場合は、手加減については許してやる」

それだったらどっちにしる俺の勝ちだったってことだし、とジャックが人差し指を立てる。

「……えつと、本当に良いの？ 後悔しない？」

「いいからさつさと教えろ」

スバルが躊躇するも構わず、ただひたすらに催促するジャック。

「そこまで言うなら……」とスバルは呟き、一度大きく深呼吸してから、使わなかった“アレ”の名を告げた。

「ヘビードーン」

「……え？」

「麻痺して上手く身動き出来ないジャックに、すかさずヘビードーンを落とそうと思ってたんだよね。滑り台でぐったりしてる時も一瞬思っただけど」

《ヘビードーン》とは、……相手の頭上に巨大な石像を召喚し、そのまま落下させて相手押し潰す凶悪なバトルカードのことである。

「……いや、なんつーか、怒って悪かったなスバル。手加減してくれてありがとう」

「うん、どういたしまして」

ジャックは逆に謝ってしまった。

もしそれが実行されていた場合、確かに負けていた。……いや、というより、命が危なかった。

そして、そんな非道なバトルカードを使った戦法を一瞬でも実行しようと思ったらしいスバルに、ジャックは本気で恐怖した。

あのコーヴァスですら、ビクビクと震えている。

やがてジャック達が青ざめた顔で「……ヒキガエル」と呟いたその時に、ミソラが帰ってきた。

「ただいまー」

「あ、おかえりミソラちゃー」

『……おい、何だよソレ?』

「んー? 拾った」

思わず呆然とするスバルに代わり、ウォーロックが訊ねた。それにミソラはあっけらかんと答える。

もう本当、呆然とするしかなかったのだ。

ミソラは確か、「飲み物買ってくるねー」とか言っただけの言葉通り飲み物を買に行ったはずなのだ。しかしそんな彼女の腕には、明らかに飲み物ではない別のものが抱えられている。

『拾った……っってお前、ソレは……』

「うん、ウィザードだね」

そう、ミソラの腕には、一体のウィザードが抱えられていたのだ。

『何がどうなってそうだったんだよ?』

「んー、何かそこで倒れてたからさ、ほっとけなくて」

その返答にウォーロックは首を傾げて、

『倒れてたって、……何で？』

「いくらなんでもそこまでは判らないよ」

ミソラも同じ方向に首を傾げる。

すると、今まで会話に参加していなかったスバルが、ようやく呆然とした状態から脱したらしく「あー」と拳手した。

「それってさ、もしかしてノイズのせいじゃない？」

「ノイズ？」

『ああそうか、あんだだけ派手に戦ってりゃ、ノイズも発生し放題だわな』

ノイズとは、ウイルスを呼び寄せたり電子機器の障害などを引き起こす原因とされているエネルギーのことだ。

これは電波で構成されている物質からは少なからず発生しており、とりわけウィザードからは大量に発生している。電波人間も然りだ。更に、ウィザードが暴走すると発生するノイズが極端に増加するのも判っている。

スバルとジャックは別に暴走していた訳ではないが、暴走状態とさして変わらないレベルの戦闘を行っていたので、結果的に大量のノイズを発生させてしまっていたのかもしれない。

「……ってことは、それ俺らのせいなのか？」

まだ若干青ざめた顔で、恐る恐るジャックが訊ねた。

『そりゃそうだろ』

とコーヴァス。

「……と、とりあえず他の場所に移そう。もし本当にノイズのせいだったら、ここに居たら危ないし」

「あ、じゃあスバル君の家に運ぼう」

スバルの提案を聴き、ミソラが更に提案した。  
自分の家を運ぶ場所に指定されたスバルは当然疑問を口にするが、それに対する彼女の返答はあまりにも簡潔すぎて当たり前前すぎた。

「だって近いし」

「そんだけ!？」

『……もういいから、早く運びなさいよ』

ハーブの呆れ気味の声を聞き、とりあえずこのウィザードはスバルの家に運ばれることになった。

第7話・拾い者（後書き）

よく分からない展開

第8話・妖精（前書き）

長いです。

## 第8話：妖精

ミソラが拾ったウィザードは、ローブの様な物を纏った、長い緑色の髪と翡翠色の目を持った女性型のウィザードだった。

その容姿には全員が同じ感想を持った。

妖精みたいだ。

ウォーロックやコーヴァスまでもがそう思うほどなのだ。それほど、このウィザードには“妖精”という言葉が合うのだろう。

そのウィザードはとりあえずスバルの家に運ばれたのだが、ほとんどノイズがないこの空間でも、未だに覚醒する兆しはなかった。

「スバルくん、ジャックくん、……… どんだけ強力なノイズ出してたの？」

「……… ゴメン、判んない」

「ノリと勢いだけで戦ってただけだしなあ。……… ノイズの発生とか、全く考慮してなかったし」

咎められ、申し訳なさそうにウィザードに視線を向ける。そんなに苦しそうではないが、目覚めないのなら当然ノイズによる何らかの影響が出ているのだろう。

「ほらジャックくん、こういつ時の対処法教えて。元ディーラーでしょ？ クリムゾン目茶苦茶集めてたじゃん。当然ノイズには詳しいよね？」

ここでミソラはジャックに訊ねた。

ディラーは、ノイズの結晶であるクリムゾンを蒐集し、その力を用いてメテオGを地球に墜落させようとしていた組織だ。

その目的を成就させることに、首領であるキングよりも意欲的であったジャックならば、こういう事態の対処法に詳しいはず、そう思ったからこそ、彼女は彼に訊ねたのだ。

……しかし、そのジャックはなんとも歯切れの悪い様子で、

「……いや、悪い。俺は集めてただけだから、ぶっちゃけ知らねえ

……」

予想と期待を一挙に裏切られたことにより、呆然として硬直するミソラ。

この上ないくらい申し訳なさそうに視線を逸らすジャックに、しばらくして正気に戻った彼女は、一言だけ言い放った。

「……役立たず」

「……なあ、頼むから、もうちょっと冗談っぽく言ってくれよ……」

冗談の欠片もない口調で役立たず扱いされ、泣きそうになるジャック。それを憐れんだスバルは、強引に話題を変えることも兼ねて、ずっと気になっていた事を訊ねた。

「……ところでさミソラちゃん。このウィザードの近くにオペレーターはいなかったの？」

「いなかったよ。ていうか、オペレーターどころか人っ子一人いなかったよ」

それはそうだ。あんな化物同士が争っているかのような戦場に、ただの人間が近寄ってくるはずがない。

……となると、

「……ウィザードが倒れてたのに、オペレーターはいない、か。もしかして、最初から一人だったとか……」

「え？」

「……もしかしたらこの娘、はぐれウィザードなのかも」

「……ええ、何で？ そんな訳ないじゃん。こんなに可愛い……っていつか、綺麗なウィザードなのに」

スバルが立てた予想を、ミソラは即座に否定した。しかし、

「じゃあ、何で一人で倒れてたの？」

「！」

その事実を突き付けられると、反論のしようがなかった。

「自分のウィザードが倒れたら、普通すぐにハンターV.Gに戻すよね。なのにそれがされてないってことは、オペレーターがいないってことになると思うんだけど」

スバルが言い終わると、全員、件の妖精のようなウィザードを眺める。相変わらず、状態に変化はなし。目を覚ます気配すらない。

『……………』

そうやってまた時間が経った。今のところ、目が覚めないこと以外は特に異常はなさそうだったので、対処法は皆でじっくり考えようという結論に到り、全員知恵を絞って絞って、絞りまくって……、

突如、ウィザードの状態が変化した。

『……………ん？』

少し呻いて、僅かに瞳が開いたのだ。  
一同呆然とするが、やがてウォーロックが真っ先に叫んだ。

『目え覚ましたぞ！？』

「や、やった！　ねえあなた、どこかおかしいトコとかない？」

『……………え？　いえ別に……………。というか、あなた達は……………？』

『まだ動いちゃ駄目よ。もう少し安静にしてなさい』

『いや、えっと、だから』

閑話休題。

スバル達は簡単に自己紹介を済ませた。

ウィザードの名前は《シルフ》というらしく、スバルとジャックの戦闘を遠目で確認し、興味本意で見物しに行ったところ、突如として意識が遠のいてしまったらしい。

自分達の戦闘のせいだと確定して四人は謝罪したが、シルフは「私が勝手に見物しに行つて勝手に倒れたんです。あなた方が謝る必要はありません」と、信じられないことに微笑みながら言つてのけた。

……とりあえず、物凄いお人好しだということだけは判つた。

『……………』

これでもう訊くことも言うこともない。いや、実際は一つだけ訊きたいことが残っているのだが、それを訊くのはかなり躊躇いがある。

そう、“五人”は思っていたのに、

「なあシルフ、お前オペレーターは？」

残りの一人の鳥がどストレートに訊いてしまった。

バギン！

『ゴツふう！！？』

コーヴァスがウォーロックとハープにシバかれた。シルフからかなりの距離をとり、小声で糾弾する。

（お前、マジでバツカじゃねえの！！？）

(訊いて良い事と悪い事があるでしょう!?)

(いや、まあ、そうだけども……。き、気になるじゃねえか……)

(なるけども!)

元宇宙人の三人がぎゃーぎゃー騒いでいるのを尻目に、人間の三人は大慌てで、

「ご、ゴメンねシルフ!」

「アイツには後でよく言い聞かせとくから!」

「だから今のは忘れて! ね?」

コーヴァスの失態の尻拭いをしていた。おそらく何か辛い事情があるんだろつから答えなくてもいいんだよ、そう言ったつもりでもあったのだが、

『いません』

『……え?』

『私、主に捨てられたので、オペレーターはいません』

伝わらなかったようで、シルフはコーヴァスの問いに馬鹿正直に答えてしまった。

しかし、答えたという事実には驚く暇もなく、その内容に驚かされた。

つまりスバルの予想通り、シルフははぐれウィザードだったと言  
うことなのだから。

「何で、そんな酷いこと……」

ミソラが反射的に洩らす。

『……………えっと』

「あ、ゴメン。答えなくて良いよ、忘れて」

また答えてしまいそうな雰囲気醸し出していたため、あらかじ  
め先手を打っておいた。

(……………ミソラちゃん)

シルフが少し居心地悪そうな様子を見せはじめたその時、ふとミ  
ソラの耳元でスバルは囁いた。

(何?)

(はぐれウィザードって、見つけたらどうすればいいんだっけ?)

(……………どうだったっけ。……………あ、サテラポリスに預ける、とかじゃ  
なかった?)

(……………サテラポリスか。……………なら、大丈夫だね)

(?)

その返答を聴き、一人で何かに納得した後、スバルはシルフに視線を移した。

「ねえ、シルフ」

『はい?』

「よかつたらただけどき、僕のウィザードになってみる気、ない?」

『え?』

スバルの突拍子もない発言に、全員哑然とする。「ち、ちよつと……」とミソラがいち早く立ち直って訊ねた。

「さっきの話からどうやったならそういう話になるの?」

「簡単だよ」

スバルは人差し指でミソラを差して、自分を差して、言った。

「サテラポリス遊撃隊」

「……あ」

ミソラが手を叩いた。

サテラポリス遊撃隊とは、二年前のメテオG事件の際に結成されたチームのことだ。

スバルとミソラはそこに所属している。

ディーラーをブツ潰すというレゾンの元結成されたチームなので、もはや名前しか残っていないようなチームなのだが、それでも一応、

二人はサテラポリスの一員なのだ。

『え……と?』

状況も会話の意味も何もかも判っていないシルフが、首を傾げて子犬みたいな表情をしている。それに短く謝罪したスバルは、もう一度訊ねた。

「まあとにかくそう言う訳なんだけど……、どうかな? なる気ない?」

『……いいんですか? 私なんか、全然役に立ちませんよ?』

「関係ないよそんなの」

ニコリと微笑みながら手を差し延べるスバル。その手を、シルフは、

『……なら、その……、よろしく、お願いします』

怖ず怖ずと、とった。

その日の深夜。

あの後シルフは、ミソラやジャックから「スバルは信用出来るから安心していい」という旨の言葉を聞かされた。

『……………』

家に帰ってきたスバルの両親、《あかね》《大吾》とも挨拶を交わして、星河家には快く迎え入れられた。

『……………』

もう深夜の二時を回っているため、スバル達は既に就寝している。シルフには寢床として、ハンターV.Gを与えられていたのだが……

『……………はあ、やつとか』

そう呟いて、シルフはハンターV.Gから出てきた。

『潜入、意外と楽しかったなー』

拳動も、喋り方も、先刻までと全く違い、フランクなものになっている。

演技だったのだ。

ムーの電波体、シルフィーの。

『それにしても、お人好しだよねえ、星河スバル。まだ序の口の段階だったのに、この展開まですっ飛ばせるなんて、ビックリだよ』

実はまだお涙頂戴なストーリーが数多く残っていたのだが、それを語るまでもなかった。シルフィーは小馬鹿にしながら彼の寢床ま

で移動する。

こんな子供が、アポロン様を？

シルフィーはくーくーと意外に可愛らしい寝息を立てながら眠るスバルの顔を覗き込みながら、思う。

隙だらけだなあ。このまま殺せるよ多分。そうすれば早いんじゃない……

と、スバルの首に手を当てる。しかし、やめた。

命令違反は、たとえこちらの利益になったとしても嚴重処罰。それは嫌だよねえ。あくまで私の任務は諜報だし、そういうのはバシた時だけにしよう。

首から手を離し、普通に覗き込む体勢になる。

それにしても隙だらけだ、と思ったその時、

『……ああ？ 何やってんだお前？』

『！？』

寝ぼけた声が響いた。ウォーロックの声だ。

しまった、アイツ床で寝てるんだった！

ハンターV.Gをシルフィーに奪われてしまったため、仕方なくそういうことになってしまっていたのだ。

『……お前、何でそんなとこにいんだよ？』

寝ぼけた状態でも、バトルウィザードとしての本能が働くのか、いたく不審がつているウォーロック。

『あ、えーと、その、……か、掛け布団がズレていたので直していいんです。風邪とか引いたら大変なので……』

シルフィーは適当に言い繕った。仕事柄、こういうことが得意なのだ。

ウォーロックは一応それを信じた様子だったが、

『……はあ。そこまでやんなくて良いんだぜ。んなもん放つときゃいいんだよ』

えー？ 自分のオペレーターの体調の心配とかしないんだこの人……。

そんな物言いに、流石にシルフィーも驚愕した。ウォーロックは大きく欠伸をし、

『早く寝ろ。明日早く起きて、その寝ぼすけ野郎を起こさなきゃなんねえんだからよ』

注意して、再び夢の世界に旅立った。

それを見届けてから、シルフィーは安堵の息をついた。

危なー、バレるかと思った……。

ここまで来てバレたらシャレにならない。

はあ、言う通り寝ますかねえ。

これ以上は危険だと判断した彼女は、スバルの元を離れた。  
ハンターV.Gの近くまで移動し、おもむろにスバルの方を振り返る。

そして、

にしても、寝ぼすけ野郎って……。

ますます、信じられない。

苦笑して、ハンターV.Gに戻った。

第8話・妖精（後書き）

話が脇道に反れる癖と、展開を急ぐ癖が出ました。

## 第9話：信頼

数日後。

「星河君、シルフちゃん借りるね」

「ああ、うん」

夕凧中学校の昼休み。

そういったやり取りの後、数名の女子に、シルフは連れていかれた。

「……シルフ人気だねえ」

『外見も中身も良いからだろ』

「お、ロック君がそんなこと言うなんて。珍しー」

そういう、人を褒めるといったことを滅多にしないウオーロックが、シルフの容姿まで褒めたことに対して、ミソラが感心する。そのすぐ傍で、スバルは昼食をとっていた。

『……シルフ、女子に好評よね』

そんな折、何故か妙に寂しそうな口調でハープが呟いた。

スバルは口の中の物を全て呑み込み、なんとなく会話にもちこんでみた。

「見た目完全な妖精さんだからね。女子のツボとか琴線とか興味とか、とにかくそういうのに上手くハマるんだよ、多分」

『……そう。やっぱり、ああいう感じの方が人気出るわよね……』

ハーブは窓ガラスに映っている自分の全身を見る。どこに出しても恥ずかしくない、見事な琴ボディだ。

スバルは慌てた様子で、

「……だ、大丈夫だよ！ ハーブだって女子に大人気だよ！」

『……ええそうね。一部だけど。しかもその一部って言うのも、琴部とかの娘でしょう。そりゃそうよ、私、琴だもの』

遂にハーブは、暗い表情で遠くを眺めながら、呪詛と聞き間違っような暗い感情を込めた言葉をブツブツブツと呟きはじめた。こうなった人はもう、自然に立ち直るのを待つしかない。

そんな訳で話し相手もなくなった彼は、再び弁当に手をつけはじめた。

それから約五分ほど経って、

「星河君」

「んー？」

昼食を済ませ、残った箱の処理をしている最中、スバルは女子に声をかけられた。さきほどシルフを借りていった、あの集団の中心にいた女子だった。

何の用か訊ねようと振り向くスバルだが、

「……って、アレ？ シルフは？」

借りられたはずのシルフの姿がなく、思わず全く違う質問をした。女子はポンツ、と手を叩きながら、言った。

「あゝ、うん。今それを言おうと思ってたんだ」

そのまま彼女は意味もなく手をくるくる回して、

「なんかねゝ、シルフちゃん、散歩してくるゝって言って、どこか行っちゃったんだ」

「散歩？」

「うん、散歩」

シルフが一人で校内を散歩しに行った。つまりはそういうことだった。

「……判った。ありがとう」

「いやいやゝ、どういたしまして」

スバルが礼を言うと、その女子はヒラヒラと手を振りながら、他の女子の輪に入ってしまった。

その会話を聞いていたらしいミソラが、少しトーンを落とした口調で呟いた。

「……心配だね」

「……うん」

そう、心配だ。シルフは一度ノイズに当てられている。この数日は特に何もなかったが、実際はいつ周波数に異常が出て倒れるか判ったものではないのだ。

「ロック」

『あいよ』

スバルが相棒の名前を呼び、たったそれだけで彼の言いたいことを理解したウオーロック。この辺りに絆の深さが窺える。

ウオーロックはシルフを搜索するために、窓から教室を飛び出た。

特別教室棟の屋上で、シルフィーは安堵の息を吐きながら、休息を楽しんでいた。

『……はあ、疲れた』

初めて学校に連れてこられた時からずっとこうだった。

スバルのクラスの内外問わず、ありとあらゆる女子たちにえらく気に入られ、色々と一緒に遊ばされる。

楽しくないことはないのだが、中学生レベルの遊びは何故か異様に疲れる。

シルフィーは深く溜め息をつき、グルリと一回だけ周囲を見渡した。見事に無人。下の階から声が聴こえるが、教員たちが中間テストとやらについて話しているだけなので、ぶっちゃけ気にならない。おそらく、誰にも気付かれることはないだろう。

『……良い機会だし、とりあえず報告しときますかねー』

ローブから通信機器を取り出し、慣れた様子で操作してディスプレイを出す。そこに映し出されたのは、驚くほどだらけた様子の上司の姿。

回線が繋がったことにも気付かず、杖をひたすらくるくるくる回している。

シルフィーは、呆れた様子で彼の名前を呼んだ。

『……メルクリウス様』

『……んあ？ あ、よう久しぶりだなシルフィー。何だ、どうした？』

ようやくこちらに気付いたメルクリウスが、気の抜けた返事をよこす。それにもシルフィーは呆れて、用件を告げる。

『……どうしたって、報告ですよ。星河スバルについてです』

『……む。よっしゃ待ってたぜ。早く聞かせろ』

『最初からそのつもりです』

メルクリウスの瞳によくやく真剣味が宿る。シルフィーは嘆息し、報告をはじめた。

『まず、星河スバルは電波変換して電波人間になれますね。その時の名前はシューティングスター・ロックマン』

『やっぱそつなのか』

『はい。……戦闘能力は上の下、場合によっては更に上。要するに相当強いです』

それからシルフィーは、この数日の間に調べ上げたことをメルクリウスに次々と伝え、やがて五、六分が経過した後よくやく全て伝え終えた。

『 以上です』

『ん、ご苦労様』

メルクリウスはそうやって彼女を労うと、今の報告の中から必要な物を選択する作業に入った。

『……………』

『……………？ どうしたんだシルフィー？ まだ何かあるのか？』

何故か回線を切らないで俯くシルフィーを、怪訝そうな目で眺め、彼は問う。

それに対して、シルフィーは歯切れ悪そうに、

『あ……、いえ、その……ですわね』

『……何か言いたいことがあるなら、言え』

『………はい』

そう言われ、シルフィーは頷いて深呼吸をした。しばらく眼をつぶりやがて開くと、意を決して、……この数日間ずっと抱いていた疑問を口にした。

『……本当に、彼がアポロン様の仇なんですか？』

『！っ。』

メルクリウスは驚愕した。まさかシルフィーからそんな言葉が出てくるとは思いもしなかったからだ。

そんな上司の様子に気付かぬまま、シルフィーは続ける。

『ここ数日一緒に行動していて、判りました。彼は物凄いお人好しなんです。害虫を殺すのすら躊躇するような、そんな人間なんです。そんな彼が、本当にアポロン様を殺せるんでしょうか……』

『………』

徐々に言葉尻がすぼんでいくシルフィーを見つめ、メルクリウスは気付く。

彼女は、星河スバルに少し信頼感を持ってしまったんだな、と。

視線を合わせないように眼をつぶったメルクリウスは、呟く。

『……シルフィー』

『……はい』

『ゼウスが言ったんだから、そのことに間違いはないんだよ』

『……そう、ですよね』

その言葉に、シルフィーの顔が少し曇る。

しかしそこで彼は『ただな』と付け加えた。シルフィーはそんな上司を怪訝そうに眺める。

そして、言ってあげた。

『星河スバルがアポロンを殺したのは、あれだ。仕方がなかったから……なんじゃないか？』

『えっ？』

『例えば、大切な何かを護るためとか、そういう理由で戦って、その結果殺してしまった。そういうことなんじゃないか？』

『……』

『それなら、そいつがやってても不思議じゃないよな』

『……そうですね』

シルフィーの表情の曇りが若干晴れる。どうやら、納得したようだった。

『……まだ、何かあるか？』

『いえ、ないです』

そう問うメルクリウスに即答するシルフィー。

『……では、任務に戻ります』

『よし、頑張れよ』

そしてそこで、回線を切った。

……護るため、か。

シルフィーはさきほど告げられた言葉を反芻する。

私の正体がバレて戦闘になったら、やっぱり何かを護るために私を……。

そう思った所で、ハツとして首を振った。  
そのことを悲しんでいる自分がいたのだ。

『ッ。……少し近くに居すぎたかもしれない』

シルフィーは苦笑して、溜め息をつく。

その時だった。

『おい』

『！？』

最近聞き慣れた声が、背後からかけられた。ウォーロックの声だ。

『……何でしょう』

もしかするとバレたかもしれないが、一応シルフというウィザードの演技をする。

ウォーロックは疑心に満ちた顔で問う。

『今、誰と話してた』

『誰とも。ただの独り言です』

まだ、大丈夫。その程度なら、まだスパイだとはバレないはず。

『報告って何だ』

『……何の事が分かりません』

『……アポロンってのは』

そこでウォーロックは一拍置いて、

『俺とスバルが倒した、アポロン・フレイムの事か？』

『……ッ！』

言い繕うのも限界だった。嘘をつくのも限界だった。

……もう、バレている。

『……てめえ、まさか……！』

『……本当、タイミングが良いってどうか』

シルフィーの周囲を風が包む。それに乗じて、騎士のような姿をした一体の電波体が召喚された。

『ソイツは！？』

ウォーロックの顔が驚愕に彩られる。その電波体に、見覚えがあったからだろう。

シルフィーは、その電波体のコアに触れながら、言い放つ。

『もう、本当に、最悪にタイミングが良すぎるよウォーロック！』

その瞬間、特別教室棟の屋上から、災害クラスの竜巻が発生した。

第9話・信頼（後書き）

修学旅行があるので、更新遅れます。

第10話：標的（前書き）

戦闘描写を書くのが好きです

## 第10話：標的

「うわっ……!？」

「きゃっ……!？」

シルフを捜して教室を出たスバルとミソラは、学校の中庭にたどり着いたところで突風に襲われた。

ミソラは制服のスカートを必死に抑え、スバルは偶然にも彼女から視線を外している。

やがて風が止み、スバルと「……見た？」「……何の話？」というお決まりのやり取りを終えたミソラは呟いた。

「……何、今の？」

『さあ。……でも、少なくとも自然風ではないわね。今日はそんなに風が強い日ではないはずだから』

ハープが答え、訝しげな表情になる二人。さきほどの突風について、更に思考を巡らせようとしたところで、

ズドオンッ!! という轟音が鳴り響き、近くの地面が爆砕して砂塵が舞った。それにより、全員の視界が奪われる。

「な、何!？」

『……電波体が、降ってきた?』

ミソラが慌て、ハーブは冷静に状況を説明する。そんな矢先、

『ぐうっ……!』

「……その声!」

呻き声が聴こえた。スバルが何かに気付いた様子だったが、再び突風が吹きすさび、それどころではなくなってしまう。

「きゃあ!?!」

「……ぐっ!」

今度の突風は、風力がさきほどとは比較にならないほど強力だった。下手な台風などよりもよっぽど強い。おかげで、まともに立つことも困難になっていた。

吹き飛ばされないように、扉や花壇に掴まる。

やがて突風が治まるが、スバル達はどうかその場に踏み留まっていられなかった。

さきほどまで舞っていた砂塵は、今の突風で吹き飛んでいる。

これであろうやく、降ってきた電波体の正体が判明する。

……だが、それはミソラとハーブの意見だ。

スバルにはとっくに正体など判っていて、既に彼の傍でしゃがみ込んでいた。

「ロックー!」

そう、その電波体の正体はウォーロックだったのだ。

身体中至る所をスタスタに切り裂かれ、両手の爪が根こそぎ折れている、満身創痍のウォーロックだったのだ。

「ロック君!？」

『ウォーロック!!!』

その尋常ではないレベルの大怪我に、ミソラはおろか、普段あれほど冷静なハーブですら、悲鳴に近い声を上げて駆け寄る。

『がふっ、は、あはあ………』

「ロック、ロック!？ くそ、何で。一体誰がこんな……っ!」

スバルはウォーロックを抱き抱えながら、呻くように呟いた。その表情は怒りと悲しみが混在して目茶苦茶になっている。ウォーロックはその様子を見て苦笑し、息も絶え絶えに、相棒の名前を呼んだ。

『……スバル』

「ロック!？ 喋っちゃダメだよ!! 安静にしてて」

そう懇願するように頼むも、彼はそれを無視して続ける。

『……アイツが、スパイだった。気をつける。アイツ、俺やお前を』

そこでウォーロックは咳込んだ。人間だったら吐血している場面だが、電波体のためそうはならない。

スバルはウォーロックの背中を摩りながら、確信を得る。彼が言う“アイツ”が、彼をこんな目に合わせたのだと。

その“アイツ”はきつと近くにいる。スバルは頻りに周囲に見回して、

その人物を視界に捉えた。

女子中学生の平均身長より少し高い背丈で、“長い緑色の髪、翡翠色の眼、身体をすっぽり覆うような、明らかに丈の長いローブを纏った女性”。

彼女は確実に電波人間で、このタイミングでここにいるということは、ウォーロックの言っていた“アイツ”は間違いなく彼女だ。しかし、怒りより先に疑問が、既視感が彼を襲った。

この電波人間を、どこかで見たことがあるような気がするのだ。“緑色の長髪”と“翡翠色の眼”を持ち、“ローブを纏っている”彼女を、どこかで見たことがあるような気がしてならぬ

「!?!」

そこで彼は、気付いてしまった。

彼女の特徴が、知り合いにもあまりにも酷似していたから。

その知り合いとは、つい最近出会ったはぐれウィザードの、

「シルフ……!?!」

そう、彼女はシルフに似ていた。姿形は人間なのだが、髪の色、眼の色、服装、その全てがあまりにもシルフに似すぎていた。

呆然と呟いたスバルに、シルフに似た電波人間は告げる。

『スバルさん。……いや、星河スバル。……私はシルフなんて名前じゃないよ。私の名はシルフィー、《シルフィー・ウィンド》』

「……………!!」

間違い、なかった。

後半喋り方がまるで違ったが、最初にスバルの名を呼んだ時のあの感じは、シルフと同一のものだった。

彼女は、シルフで間違いなかった。

『……………どうということなの?』

ハープが問うが、シルフィーは答える気がないのかだんまりを決め込む。

……………だから、

『……………そいつは』

こちら側で唯一事情を知っている、満身創痍のウォーロックが、代わりに答えた。

『ムーの電波体だ……………。電波変換の、際に、エランドを触媒にして、だから、間違いねえぜ……………』

『ムーの電波体!?!』

三人が驚愕する。

ムーの電波体。

それは、二年前のムー大陸事件の際に戦った敵のことだ。粒揃いで、スバル達も幾度となく苦しめられた。

『代弁ありがとう』

シルフィーはやや面倒くさそうに礼を言った。それがウォーロックの言葉を肯定する形になったため、スバルたちは再び驚く。そうして彼女は、スバルたちに殺意ある視線を向けた。

『諜報任務失敗。只今より防衛行動に移ります』

彼女がそう呟いたと思った次の瞬間、シルフィーの背後に突風が吹きすさび、彼女の姿が消えた。

「……………ッ！」

スバルは直感的に頭を下げた。下げた頭のすぐ上を、風切り音が通過する。再び直感的に後退すると、たった今まで彼がいた空間をシルフィーの脚が切り裂いた。

『……………へえ、人間の状態でもかわせるんだ』

シルフィーが感心したような声を上げ、風を纏った腕を突き出す。

『……………じゃ、これはどうかな？』

シルフィーは手を天に翳し、纏っている風を全て掌に集めた。やがて風の塊が精製される。

『エアブラスト』

「……………ッ！」

その風の塊が投げつけられる。スバルはウォーロックを抱き抱えてそれを回避するが、

『爆ぜろ』

シルフィーが呟くと同時に、風の塊が爆発した。今までとは比べ物にならない程の強風が吹きすさび、吹き飛ばされて校舎の壁に叩きつけられる。

「があっ!?!」

背中を強く打ち付けたため、肺の中の空気を無理矢理吐き出され、呼吸がまともに行えなくなる。

「あ、はっ…ぐあ」

『スバル……!』

「スバルくん!!」

苦しそうにうずくまるスバルに、ウォーロックとミソラが叫ぶ。そうしている間にも、シルフィーはスバルに接近していく。

『……ロックマンにならないと、私にすら劣るんだ……』

失望したように呟きつつ、人差し指に風を集め、圧縮する。その指を、スバルの額に突き付けて、

『……殺すのは心苦しいんだけど、ゴメン。あなたを殺すことが、私達の大願だから』

「ぐ……!!」

「スバルくん！？ くっそ……、トランスコード！ ハープ・ノート……！」

ミソラが慌てて電波変換するが、とてもじゃないが間に合いそうにない。

『じゃあね。……エアバレット』

別れの挨拶と共に、シルフィーの指から風の弾丸が放たれた。それはスバルの額を正確に撃ち抜く

……はずだったのだが。

『……！？』

校舎の壁が粉碎する。しかしそれだけだ。風の弾丸はスバルには命中しなかった。彼らがそこから消えていたからだ。

『……………！』

そこでシルフィーは何者かの気配を感じ、空を仰ぎ見た。嘆息し、スバルとウォーロックを脇に抱えている彼が、

「だらしねえな、スバル」

鳥のような風貌の電波人間      ジャック・コーヴァスが、そこに浮いていた。

「……ジャック」

「礼は後でいい。それより、アイツは……」

スバルの言葉を遮り、シルフィーを見ながらジャックは訊ねた。その表情はやや暗い。おそらく、もう薄々気付いているのだろう。だからスバルは、確信を与えた。

「……うん、シルフだよ」

「……やっぱ、な」

ジャックが苦い顔をする。

『……凄いなジャック。いつ助けたの？』

シルフィーがジャックを睨みつつ、訊ねる。それに対し彼は、実に簡潔に、

「つい今だよ。スピードには自信があるんでな」

『ふうん。なるほどね』

自分が気付けないほどの短い時間で彼らを救ったジャックに感心するシルフィー。地上に降りて、スバルとウォーロックを地面に降ろす彼を、シルフィーはより一層強く睨む。

ジャックはシルフィーと向かい合いながら、

「スバル、ウォーロック、お前らは休んでろ。その身体じゃ戦えねえ」

『……ああ？ 勝手に、決めつけんなよ』

「ロックの言うとおりだよ。大丈夫、ちゃんと、戦えるから……」

「休めつつつてんだ。その状態でいつも通りの力が出せる訳ねえだろ」

「『っ……』」

正論を言われ、言葉が詰まる二人。それと、割と長い付き合いなので、言外に彼がこう言っていることが判って、より一層詰まった。

スバルは知り合いと戦う時、たとえそれが敵であっても本気で戦えない事がある。

ジャックやミソラは、それを経験しているから判る。

だから、今もきつとそうだ。

相手が知り合いである《シルフ》だから、おそらくスバルは本気で戦えない。

そんな状態でなおかつ本調子が出なくては、確実に負ける。

だからジャックは休めと言ったのだ。

「……判った、しばらく頼むよ」

「おう。充分休んだら来いよ」

頷き、スバルとウォーロックは校舎に逃げ込もうとする。当然シルフィーが黙って見ているわけがない。

『逃がさない！ エアバレット！』

人差し指から風の弾丸をいくつも放たれる。しかしそれは、ジャックが全て翼で薙ぎ払う。

『邪魔すんな!』

「しねえわけにはいかねえだろ!」

更に弾丸が放たれるが、やはりジャックは全て薙ぎ払う。その間にスバルたちは完全に校舎内に入っていた。

『くそ、……エアブラスト!!』

シルフィーは瞬時に風の塊を精製し、投げつけた。「させるか!」と、ジャックは薙ぎ払おうとするが、

「マシンガンストリング!」

ハーブ・ノートの放った弦に絡め捕られ、引っ張られてそれは叶わなかった。

当然、ジャックは抗議する。

「おま……何を!?!」

「ちょっと黙って! ショックノート!」

そんなジャックを一喝し、風の塊に向かって音符を放つ。それが命中すると同時に、風の塊が爆発した。

暴風が吹きすさぶ。

「こつなるんじゃないかと思ったんだ」

「……………ッ!」

さきほど、あの風の塊はシルフィーの命令で爆ぜて暴風を撒き散らした。そんなものを外部から傷付けてしまえばどうなるか、もはや考えるまでもない。

ハーブ・ノートはジャックの隣に立つと宣言した。

「私もやるよ。スバルくんの休憩時間、なるべく稼ぎたいから」

「……………最初からそのつもりだったっつもの」

ハーブ・ノートとジャックは臨戦体勢をとる。シルフィーは嘆息し、頭を覆っていたフードを背中側に落とすと、

『……………あなた達を倒さないと、星河スバルのところには行けない、か。しょうがないね……………』

臨戦体勢をとる。

暫しの沈黙が流れ、崩れた壁の破片が地面に落ちた瞬間に、三人は戦闘を開始した。

第11話：風の精霊（前書き）

短めです

## 第11話：風の精霊

校舎に逃げ込んだスバルは、自身の治療も兼ねて保健室に入った。校医は既におらず、慌てて出ていったことが、しつちやかめつちやかになった室内から想像できた。それでもいくつか薬品や包帯を持っていったようで、その辺は尊敬に値する。

ウォーロックをベッドに寝かせると、スバルは床に散らばっているガーゼや包帯を出来るだけかき集め、さきほどのシルフィーの攻撃で軽く打った頭はかなり適当に巻く。

ウォーロックが、いつもの調子が嘘のような細かい声で文句を言った。

『……鐘がうるせえ』

「仕方ないよ、あの騒ぎだし」

スバルは嘆息する。

校内は現在、警報と校内放送で非常に喧しかった。

校舎の壁が崩壊するようなとんでもない事態なのだ。まあ当然だろう。

気にしてもどうしようもないので、無視してハンターV.Gを操作する。

「……とりあえず、回復させるよ」

ハンターV.G内に記録されているフォルダの中から、回復系のバトルカードを選択する。いくつかもある中で最も強力で効果のある、リカバリー300だ。

「よし、いくよロック」

ウォーロックは無言で頷き、一度ハンターV.Gに戻される。そこでスバルは、リカバリー300を使用した。

切り傷も、折れた爪も、徐々に癒えていく。しかしたった一枚だ。全快には遠く及ばず、依然ウォーロックは苦痛に顔を歪めている。

「もう一枚……」

二枚目、三枚目と使用するも、完治には至らない。しかしリカバリー300はもう尽きた。回復力のランクは多少下がるが、今度は200を使用するべきだろう。

「……早く、治れよ」

『……………』

外から響く爆発音が、彼らの焦燥感をより一層強くした。

「パルスソング！」

「グレイブクロー！」

『エアバレット！』

一方外では、三人の技が激突していた。  
常人なら卒倒してしまうような、耳にも身体にも悪いけたたましい爆音が鳴り響き、振動で校舎の窓ガラスがパリンパリン割れる。  
一旦距離をおいたジャックは、舌打ち混じりに愚痴った。

「……チツ！ 高ランクの連射性能ありで、しかも遠距離攻撃が可能で、その上であの威力と小回りの良さとか、もうほとんど反則だろあれ！？」

「……そうだね」

ハープ・ノートは同意し、シルフィーを見遣る。

ここまで、誰一人として傷を負っていない。二対一で戦っているはずなのに、シルフィーも負っていないのだ。

それほどまでに、彼女の戦闘能力は高いのだ。

『……集まれ』

すると、シルフィーが手を胸の前に突き出しながら呟いた。彼女の命令に従うかのように、その手に風が集まっている。  
やがてその風が、ある物質の形を成していった。

『エアリアルソード』

それは剣。

ウウウツ……、という怪音が鳴るその風の剣を、シルフィーは躊躇なく掴む。そのまま、疾風のような速度ジャックへと突進した。

「……」

勢いそのままに剣が振り下ろされる。どうにかその速度について  
いけたジャックは翼を防御に使うが、

ザンツ！！ と、翼が豆腐のように斬り裂かれてしまった。

「……………ぐっ！？」

呻くジャック。しかし息つく暇もなく、再び剣が振られた。彼は  
戦慄を覚え、普段あまり使用しない周波数変換でかなり後方まで逃  
走する。

「大丈夫かコーヴァス！？」

『大丈夫だ、心配ねえ。それより気を付ける！ あの剣、尋常じゃ  
ねえ切れ味だぞー！』

「判ってる！」

そうしている間に、こちらの居場所を察知したらしいシルフィー  
が再び突進してきた。とにかく、剣の届く範囲まで接近される前に  
どうにかしなければならぬ。

「グレイブクローー！！」

ジャックは精製できるだけ炎の爪を精製し、直線的に突っ込んで  
くるシルフィーの前方を全て塞ぐように飛ばした。しかし彼女はそ  
の悉くを斬り裂き、難無く突破する。この間、一度も減速していな  
い。

『……終わりだよ』

射程距離圏内にジャックを捉えたシルフィーは、そう呟いて容赦なく剣を振り下ろした。ジャックは技を出した直後であるため、避ける動作に移れない。

斬られる！ と思ったその瞬間、

「パルスソング！！」

ハーブ・ノートがギターから音波を放った。空気が振動し、校舎に反響して広範囲に音が広がる。

その結果、

『！？』

ジャックを斬り裂くはずだった風の剣が消滅した。呆然とした様子のシルフィーは、空振ってバランスを崩した無防備な体勢になる。これまた呆然としていたジャックはすぐさま我に返り、隙まみれになった彼女に向かって、

「グレイブクロー！！」

炎の爪を一つ放った。至近距離だったこともあり、発射直前に我に返ったシルフィーも、それに気付いた様子だったが回避行動まではとれず、直撃して吹っ飛ばされる。

『…………ぐっ』

呻いて空中で体勢を立て直したシルフィーを一瞥してから、ハーブ・ノートはジャックの隣へと跳んだ。

感心した様子の彼が、驚愕に彩られた表情で訊ねる。

「……凄えな、何した？」

「……あの剣ね、あのままの形を維持し続けるには空気の状態とか色々計算してしないと駄目なんじゃないかと思ったんだ。それなら、その計算が掻き乱されるくらい空気を振動させれば維持できなくなつて消滅する、って予想したんだけど……」

返答し、当たつてた、と親指を立てるミソラ。

「そうか。……ミソラ」

「何？」

「もし外れてたら、お前どうした？」

「……あなたのお墓の前で、思いきり泣き崩れてあげました」

「……」

ジャックはジト目でハープ・ノートを見る。

「……と、とりあえず！ 警戒する技が減つたんだから、このまま一気に行っちゃおうよ！」

「……おう」

ジャックはまだ若干納得がいつていないようだったが、とりあえずシルフィーに向き直る。彼女は、風を用いて宙に浮いていた。

シルフィーは、ハーブ・ノートを睨み付ける。

『……似たような能力の使い手がこっちにもいるけど、……あなたのはあの娘より面倒みたいだね、響ミソラ。状況に応じて波長を変えられるんだ』

「褒め言葉として受け取ってもいいの？」

「自由」

言葉を交わし、二人ともほぼ同時に身構える。

「パルスソングー！」

先行はハーブ・ノート。シルフィーは彼女の背後に回る形でそれを回避し、再び剣を精製しようとするが……

『……チッ』

やはり空気の振動で計算が狂うのか、剣の形を為さないまま霧散する。シルフィーは嘆息して、

『ホント面倒ッ！』

仕方なく使用する技を切り替えた。風を腕に纏わせ、人差し指をハーブ・ノートに向ける。

『エアバレットー！ー！』

ガトリングのように無数の風の弾丸を放つが、今度はジャックの翼で薙ぎ払われる。

『……くっ!』

これでシルフィーの技は封じた。

エアブラストは遠距離攻撃で破壊すればいい。エアバレットはジャックが薙ぎ払うし、エアリアルソードはハーブ・ノートの技で精製そのものを無効にできる。

「……どうするシルフ? どう考えても勝ち目ないよ?」

ハーブ・ノートが一応は臨戦体勢を崩さないまま告げる。シルフイーは溜め息をついて、

『……ホント面倒』

風を纏った。

「!?!?」

『これさ、あんまり使いたくないんだよ。スッゴい疲れるし、それに』

風が、徐々に増していく。

『まだ完成してないから』

やがて、シルフィーの纏う風がかつてないほど膨大な量に膨れ上

がった。それだけで既に凄まじい風力だが、

「「……………ッ!」「」

直感的に後退する二人だが、はっきり言ってもう手遅れだ。

『スリットウィンド』

その言葉とともに、膨大な量の風が一気に解き放たれた。

## 第12話：護るため

酷い惨状だった。

切り倒された木々がそこら中に転がり、校舎の壁はズタズタに切り裂かれ、コンクリートの地面は捲れ上がっている。

そんな中で、ハーブ・ノートとジャック・コーヴァスは膝を着いて肩で息をしていた。身体中傷だらけだ。

『どっつ？』

シルフィーは悠然と歩きながら呟いた。

『全方位に切断能力に特化した風の刃を放つ《スリットウィンド》。最近開発したばかりの技だから、まだ全然威力ないんだけど』

嘘、だろ。これで威力がないってのか!?

二人は驚愕し、啞然とする。それを尻目に、シルフィーは若干自嘲気味に自身の技の説明を続ける。

『それに、ほら。全方位技なのに上の方大して被害ないよね？ 完成してない証拠』

そこまで言って、シルフィーは手を前方に突き出した。

『……響ミソラがそうなってるんなら、邪魔される心配はないね』

集まれ、と呟いて風を手に集束させ、風の剣を生成し、ハーブ・ノートの首筋に合わせる。

「……………ッ!」

『ミソラ!』

ハーブ・ノートは息を呑み、ハーブが悲痛な声を上げる。シルフィーは意に介さず、冷淡に告げる。

『……………また邪魔されたらかなわないからね、あなたから先に消させてもらおう』

剣に力が入る。ハーブ・ノートは死を覚悟する。

……………その時だった。

「エドギリブレード!」

シルフィーの頭上から怒鳴るような声が聞こえた。見ると、右腕を刀に変換させたロックマンが、落ちる勢いを利用して剣を振り下ろしている。

『……………ッ!?!』

シルフィーは慌ててハーブ・ノートの首から剣を離し、防御体勢に移る。刀を防ぎ、持ち前の切れ味でそのまま斬り裂く。

刀身が宙を舞う中、ロックマンはしゃがんで着地し、間髪入れず立ち上がる。

「もう一枚!」

その勢いを利用して再び使用したエドギリブレードを振り上げた。

それも防御され、やはり斬り裂かれる。

ロックマンはそのままシルフィーの背後へ移動し、速やかに身を翻した。

「もう一枚!!」

再度エドギリブレードを使用し、そのままもう一度斬りかかる。

『同じことを何度も何度も!!』

シルフィーはそれも防御する……が、今度は何故か斬り裂くことができなかった。そのまま鏢競り合い状態になる。

エドギリブレードは連続して使うと威力の増すバトルカードだ。

それは硬度も上がるということで、三枚目であるこれは相当な硬度を有している。

鏢競り合い状態のまま、シルフィーは叫ぶ。

『おかえりなさい。探す手間が省けたよ!』

「それは、どうも!!」

ロックマンはシルフィーを突き飛ばし、ハープ・ノートとジャックを抱えて後退する。

地面に彼女達を降ろしたところで、二人が呟いた。

「……おかえり」

「充分、休めたか？」

その言葉に、シルフィーに向き直ったロックマンは小さく頷いた。横目に二人を見て、呟く。

「ありがとう、二人とも。あとは僕がやるよ」

『……………やってみなよ』

シルフィーは不機嫌そうに呟き、剣をこちらへ向けた。ロックマンも刀を構え、双方ともに臨戦体勢に入る。

静寂が生まれる。そして、

一瞬で互いの剣が交わり、金属音が辺りに響いた。再び鏖闘り合いになり、膠着状態に陥る。しかし今回はロックマンが一步引いたおかげで、それが崩れた。

『ッ!?!?』

よろめいたシルフィーに、すかさずロックマンは斬りかかる。彼女はとつさに回避するが、完全には回避できず、腕に若干の裂傷が走る。ロックマンは追撃をしかけようと剣を振り上げるが、

『嘗めんなッ!?!?』

シルフィーが体当たりし、ロックマンの体勢が崩された。当然追撃などできる訳もなく、逆に隙が生まれる。

『はッ!?!?』

そこをついてシルフィーは思い切り剣を振り下ろした。ロックマンは剣を盾にして回避しようとするが、今度は防御できずに斬り裂

かかれてしまい同時に胸を傷が走る。シルフィーは続けざまに風の弾丸を放った。

「がふっ……!?!」

直撃を喰らい、吹き飛ばされてしまおうロックマン。シルフィーはそれを追って、追撃をしかける。

『トドメだ!』

風の剣がロックマンの身体を斬り裂いた。絶叫がほとばしり、少々苦い表情をしつつもシルフィーは勝利を確信する。

しかし、

『!?!』

途端に、一刀両断されたはずのロックマンが別の姿に変化した。頭に木葉を乗せた狸のような姿に。

『ッ!!!』

ロックマンは、既にシルフィーの背後に移動していたのだ。

バトルカード・ヘンゲノジュツ。自身の身代わりを召喚して、相手の攻撃を回避するトリックカードを用いて、だ。

完全に不意をつかれたシルフィーは、回避も防御もできぬまま、剣により背を斬られた。

『……っあ!?!』

斬り裂かれた痛みには堪えつつ、周波数変換を用いて遠方へ移動す

る。だが、それを黙って見ているロックマンではなく、同じく周波数変換して追隨する。

『ッ！ エアブラスト！！』

とつさに風の塊を自身の前方に作るシルフィーだったが、それは失策だったとすぐ気付いた。

そこで爆発が起これば、シルフィーもただでは済まなくなる。

くそっ！

舌打ちし、風の塊を爆発しないように丁寧に解体する。その作業中にロックマンは追い付いてきた。

『え、エアバレット！！』

集中を乱さない程度の技で迎撃するも、容易くバスターで撃ち落とされてしまう。その直後によく作業が完了したのだが、面倒なことに、すぐさま周波数変換で遠方へ移動しなければならなかった。

ロックバスターにより張られた段幕から逃れなければならないからだ。

集まれ、集まれ！ 集まれ！！

移動した先で、間髪入れずに大量の風を集め、その身に纏う。ロックマンが追い付く前に、それを放った。

『スリットウインド!!』

先程のより小規模の風の刃が辺りに撒き散らされる。その内の一  
つが、丁度追い付いたロックマンの腕を掠める。

「うわッ!?!」

息つく暇もなく、無数の風の刃が襲いかかってくる。避けられる  
ほど隙間は見当たらない。流石に為す術がないかと思ったその時、  
突如ウォーロックがリアライズした。

『任せるスバル!!』

そう言っつて腕を振りかぶる彼の爪は、既に十数枚以上のリカバリ  
ーの効果により再生している。

『ビーストスイング!!』

腕を振り下ろし、風の刃を打ち落とす。さらに襲ってくる刃も、  
回避できない分だけを正確に狙って丁寧に打ち落とす。  
やがて風の刃が止んだその瞬間に、ウォーロックは叫んだ。

『今だ、行けスバル!』

「うん。……ライメイザン!!」

シルフィーへと駆けつつ、ロックマンは剣を構える。

「シルフ、終わりだ!!」

そのまま技の発動直後により隙が生まれたシルフィーに斬りかかる。

その完全に詰んだ状況で、彼女が思ったことは、

すみません、メルクリウス様。ここまでみたいです。

上司への、謝罪の言葉だった。

さよなら。

剣が、シルフィーに到達した。

その瞬間だった。

「!?!」

剣が空振った。シルフィーが忽然と消えたのだ。

『あつぶねえ、ギリギリセーフだな』

その瞬間に上方から聴こえる、スバル達“には”聞き覚えのない声。皆がそちらに視線を向ける。

そこには、シルフィーを抱きかかえた青年の姿があった。抱きかかえられた本人は、その青年を呆然と眺めている。

呆れたように、青年は呟いた。

『……んだよその顔。言っただろが、護るために出るって』

シルフィーを小突く青年。

『あいたツ!? な、何で叩くんですか!?!』

『信じてなかっただろ』

『…………え?』

『だからそのお仕置きだ』

『…………はい、すみません』

シルフィーが謝罪し俯く。スバル達はそのやりとりを、啞然とした表情で眺めていた。

「君、誰だ?」

いち早く我に帰ったロックマンが問う。青年は『んー?』と首を傾げ、ごく軽い感じで答えた。

『メルクリウスだ。《メルクリウス・アルケミー》。お前が殺した…………』

彼はそこで一旦言葉を切り、

『アポロン・フレイムの同胞。十二神将の一人だ』

「…………十二神将?」

青年　メルクリウスが発した聞き慣れない言葉に、ロックマン

は首を傾げる。

しかしメルクリウスは意に介さず、ロックマンを指差して告げる。

『星河スバル。一応伝えとくが、俺達十二神将の目的は、お前を倒してアポロンの仇を討つことだ』

「！」

『俺達のボスがまた誰かを送り込んでくるだろうから、気いつけるよ』

『……何でその仇の心配してるんですか？』

シルフィーのツツコミは軽く無視される。

その上、

『……じゃ、伝えることは伝えだし、帰るぞシルフィー』

『……え、え？ ちょ、ちよつと……』

いきなり話を切り上げて身を翻す。そんなメルクリウスのマイペースさ加減に誰も付いていけない。ロックマン達も、もはやただ呆然としているだけだ。

『……と』

しかしそこで、メルクリウスが再び身を翻した。

『星河スバル、もう一つ言っとく。……ありがとな』

「……………はあ？」

もはや、言動も意味すらも判らない。仇とか言っておきながら、何故礼など述べるのか。それ以前に何に対しての礼なのか一切判らない。

『そんじゃ今度こそ、帰るか』

全てをマイペースに進めて、メルクリウスはシルフィーを連れて消失した。周波数を追うことすらできない、完璧な移動だ。

あのおちゃらけた雰囲気似合わないその移動能力に、ロックマンは思わず冷や汗をかく。そうした後、

十二神将。

ついさきほど聞いた単語を反芻する。

アポロンの仇？

彼の言ったことは半分くらいしか理解できていない。しかし、一つだけはっきりしていることがあった。

つまり、この事態の原因は僕、なのか。

第12話・護るため（後書き）

グダグダ

### 第13話：会議

メルクリウスとシルフィーは、小まめに周波数変換しながら移動していた。

『メルクリウス様』

『ん？』

『さつき、何で星河スバルにお礼を言ったんですか？』

シルフィーがふと訊いた。

メルクリウスは面倒臭そうに答えた。

『…お前は見てなかったと思うけど。アイツな、剣を、斬る直前に刃を裏返して峰にしてたんだ』

『え？』

『お前を殺さないようにしてたんだよ。だからお礼を言った』

『……………ホントお人好し』

シルフィーは少し微笑む。

『悪い奴じゃねえよなあ……………つと、ほら着くぞ』

メルクリウスは会話を止め、前方の建造物を見上げた。

そこは、今生き残っているムーの電波体の住まいだ。

その回りを電波で作られた障壁が囲っている。

メルクリウスはその障壁の前に立つと、上を向いて叫んだ。

『メルクリウスとシルフィーです。開けてください！』

その瞬間、人が一人通れるくらいの隙間が電波障壁に空いた。

二人はそこを通り、その先の門に辿り着く。

そこに、一人の女性が立っていた。

『…一応ですが、確認させてもらいます』

その女性はそう言うとメルクリウスとシルフィーの手を握った。

一瞬の沈黙の後、

『…………結構です。おかえりなさい、メルクリウス、シルフィー。お疲れ様でした』

『あなたもお疲れ様です。アテナさん』

『…敬語を使うのはやめてください』

アテナと呼ばれた女性はムズ痒そうに言った。

『いやじゃないっすかー。あなたの方が格上なんだし』

メルクリウスはアテナの横を通り抜け、手をピラピラ振りながら門に入っていった。

シルフィーもペコツ…と頭を下げてから入っていった。

二人は大広間に辿り着いた。

この場所は十二神将が会議などを行う場所で、基本、十二神将以外の電波体は入れないが、

『…いってよシルフィー。入れ』

『は、はい!』

今回は特例でシルフィーも入れてもらった。

『……帰ったか』

二人が入ってすぐ、老人の音が響く。

十二神将の頭、ゼウスだ。

『座って待っている。まだ全員揃っておらんだ』

『はいはい』

メルクリウスはゼウスの真向かいに座った。  
そこがメルクリウスの席なのだ。

(…私はどうすればいいんでしょう?)

(席ないから立つとくしかないな)

(うー……)

シルフィーはうなだれる。

そうしている間に、何人が入ってきてそれぞれの席に座る。

そして最後にアテナが入ってきて全員揃った。

『揃ったようだな』

他の十二神将（+1）を見回して呟く。

『…では始めようか。メルクリウス』

『はいはい』

ゼウスに呼ばれて、手元の機械を操作する。

シルフィーに報告された内容を分かりやすく纏めた物を、

《送信》

すると、他のメンバーの機械へとその情報が送られた。

全員がそれを黙読する。

『……………ふむ、戦闘データがあるようだが…』

『ああ、コイツが正体バレちゃって、戦ったんです』

メルクリウスは親指でシルフィーを差す。

『…す、すみません』

『よい。…で、どうだった』

『え？』

『データでは分からない事もあるだろう。実際に戦ってみた感想を聞きたいのだ』

『は、はい！』

シルフィーは姿勢を正して、喋り出す。

『…っと。とにかく、戦い難い相手でした。攻撃後の隙を突くのが上手いし、時々搦め手も使ってくるから、自分のペースに全然持ち

込めなくて……はい』

『そうか……』

『……あと』

『?』

『そのデータが示す戦闘能力は、多分星河スバルの本当の戦闘能力ではないと思います』

『……どういうことだ?』

ゼウスが問う。

『……私は彼に近い場所にいました。それで多分、彼は私に仲間意識……とか、そういうものを持っていたと思うんです。だから、それは星河スバルの本気ではないと……思います』

シルフィーはおどおどしながら答えた。

ゼウスはふむ……、と呟き。

『ならば、もう一度調査する必要があるな。………ユノ』

『はい、ゼウス』

ゼウスは隣の…ユノという女性を呼んだ。

ユノはそれだけで用件を察したらしく、すぐさま手元の機械を操作しながら喋り出す。

『……残りの駒は、シルフィーを除けば三人。《候補》が二人、補佐官が一人』

『……《候補》を使うわけにはいかぬよな。…補佐官を使うか。…誰の補佐官だ』

『わたくしですわ』

ゼウスの問いにすぐさま一人の女性が答えた。

『ヴィーナスか。…となると、補佐官はあやつか。…大丈夫なのか？』

『大丈夫ですわ』

再び問うゼウスに、ヴィーナスと呼ばれた女性は軽く答えた。

『性格などに多少問題はありますが…、戦闘能力などは問題ありませんし、いけると思いますわよ』

ヴィーナスは笑みを浮かべながら喋り終えた。  
ゼウスは頷き、

『分かった。ではあやつに行かせよう。ヴィーナス、この後伝えて  
おいてくれ』

『分かりましたわ』

ヴィーナスは頷いた。

そうしてゼウスは全員の顔を眺めて、

『特に意見などはなさそうだな。』

…それではこれで終わりだ。部屋へ戻って休むといい』

手を叩いて会議を終わらせた。

『俺も行こうと思う』

自分の部屋（というレベルの大きさではない）に帰るなり、メルクリウスはそう言った。  
もちろんシルフィーは問うた。

『何ですか？』

『あいつには絶対道案内が必要だろ』

『それは分かりますけど、それならヴィーナス様が行くでしょう……』

『あいつがんなことすると思うか？』

『……………いえ』

思わなかった。

ヴィーナスは高飛車で高慢で、常に自分のことしか考えていない人物だ。そんな面倒なことはしないだろう。

『なら俺が行くしかねーだろ』

『…はい』

シルフィーは若干不機嫌そうな顔で肯定した。  
その様子を見たメルクリウスは、

『大丈夫だって。案内終わったらすぐ帰るし』

シルフィーの頭をポンポン叩きながらそう言った。

『……………いい加減キレますよ。その無自覚行動、無自覚言動』

『何が？』

『……………すみません。キレます』

『は？……っておいおい！何を　　！』

メルクリウスの部屋から凄まじい強風が吹いた。

第13話：会議（後書き）

書いててふと思いました。

俺は神様をナメてるんじゃないかと

## 第14話：緊急事態

教壇に立っている女子が皆に告げた。

「はいみんな。緊急事態だよ」

「水無月さん、緊迫感全然伝わんない」

ミソラがツッコむ。

今教壇に立っている女子は《水無月ツバメ》。スバル達のクラスの委員長だ。

セミロングの水色の髪を後ろで束ねている、身長の高い女子だ。

そのツバメの後ろの黒板にはデカデカとこう書いてあった。

《文化祭について》

また微妙に緊迫感に欠ける文字だ。

これがツバメだ。とんでもなく、ゆるゆるふわふわしている。

あのね…とツバメは続ける。

「私達1・Bの文化祭の出し物は喫茶店でした。そんで1・Fも喫茶店希望でした」

黒板に今言ったことを図で書いていく。

何故か1・Bが猫で1・Fがモグラだった。

「一学期の時は両方やればいいじゃん、ってなってたんだけどね」。最近になって「予算の関係でどっちか一つしか出来ないって話になってね」

ツバメは図の下に何か文字を書いて、言った。

「どっちか優秀な方を採用するって言われたんだ」

『『『『えー！』』』』

それは一番面倒なことだった。

どちらが優秀かなんて、判断する方のさじ加減だから、自分達で突き詰めるところまで突き詰める以外に生き残る方法がない。実に面倒な、ゴールが分からない状態。

「…というわけで」

『『『『んっ』』』』

「みんなコスプレしよ〜か〜」

『『『『はあ!?!?』』』』』

ツバメは突拍子もなくそう言った。

これには今まで静観していたスバルも流石にツッコんだ。

「待った、待った。今の流れでどうやったらそうなるんだよ」

「超自然的流れだよ〜」

「どの辺が自然なんだよ!?!」

スバルが叫ぶ。

ツバメは明らかにそれを聞き流していた。

「…ダメだこの娘」

スバルはツッコミをやめた。  
面倒なことこの上ないからだ。

ツバメはまた喋り出す。

「ま、とりあえず星河君は女装で〜」

「待てや〜ら」

折角ツッコミをやめたのに再びツッコむはめになった。  
思わず関西弁になるくらい、今ツッコミたかった。

「何で僕女装なんだよ！普通に男性用着させろよ！」

「え〜、星河君に男性用は似合わないよ〜。星河君はやっぱり女装だよ〜可愛いもん〜」

「あ、それ同感」

「ミソラちゃんは何でそこで同感するかなあ!？」

スバルは力が抜けて机に突っ伏した。

教室中からドンマイ…な雰囲気が漂ってくる。

「…響さんは何でも似合いそうだよね〜」

「まーねー」

会話が続く。

皆は同時に思った。

『コスプレで決定なのか…?』と。

しばらく経って、

「よし、じゃあ料理について〜」

ツバメはそう言った。

「あれ？焼きそばを作るんじゃないの？」

ミソラが訊いた。

確かに一学期、文化祭の細々したことを決める際、アンケートを取って出し物は焼きそばに決まっていた。

それなのに何故今話す必要があるのか。

「あ、もちろん焼きそばは作るよ〜。でもさ〜、店内で食べる気のない人にはちよつとあれじゃん〜」

「…なるほど」

全員納得した。つまりこう言いたいわけだ。  
「食べながら文化祭を回りたい人のために、持ち運び易いメニューも加えよう」と。

…喫茶店としては間違っている気もするが。誰も気にはしなかった。

「たこ焼きとかいいんじゃない？」

「オーソドックスすぎるから却下」

「林檎飴」

「夏祭りか」

「アイス！」

「十月の末にそれはないよ」

皆好き勝手に自分の要望を言い放つ。…が、悉く却下される。ツバメの琴線に触れる物がないのだ。

「星河君。君は何か要望ないの？」

「んー？」

机に突っ伏した状態から首だけを動かして、スバルはツバメを見る。  
何かを期待している目だ。

なら、ちよつと真面目に考えるか…と思った。

…持ち運び易い。

「ハンバーガー」

それがスバルの出した結論だった。（思考時間2秒）

「……………」

「……………」

無言。

これも琴線に触れなかったか…と思って、気付いた。

ツバメの目がやたらキラキラしている。

ツバメは呟く。

「…バーガー。来たよこれ…」

「…え、何が来たの？」

「バーガーだよ、焼きそばバーガーを作るんだよ〜！」

「焼きそば…バーガーあ？」

スバルが裏返った声を上げた。

何だそのポロツポロ零れそうな食品。

「いや〜もうナイスだよ〜本当に〜 流星河君〜ありがとう〜」

「ああうん、どうも」

スバルは確かハンバーガーを提案したハズだ。

「これなら勝てるよ〜！」

ツバメはニッコニコしていた。

三日後。

「勝ったあ〜！」

「マジでー!？」

まさか本当に勝つとは思わなかった。

第14話：緊急事態（後書き）

補足をいくつか…

シルフィー戦から一週間経過しています。

壊れた校舎などはリアルウェーブで補強されています。

第15話：買い物（前書き）

ミソラ視点です。

## 第15話：買い物

1 - B の出し物が喫茶店だと確定したため、1 - B の生徒はその週の日曜日に内装用のベニヤ板などを買いに行くことになった。

そして今がその日曜日だ。

ミソラは、スバルと他男子二名女子一名と共にスピカモールに来ていた。

「が、全員で別れて必要な物を買うに行く…と決めたため、今は一人だ。」

「うん。木工ボードってどこにあるんだろ？」

『さあ？とりあえずそれっぽい店に入って探しましょ』

「だねー」

ハープに言われた通り、それっぽい店を見つけて入る。

……。

「……ここ、工具店じゃん」

『ええ』

工具はミソラ達には関係ない。

「……百均とかだったら売ってるかなあ」

『そうねえ。行ってみればいいんじゃない？』

「どこにあるか知らないよ」

『地図見ればいいじゃない』

それもそうだ、とハンターV.Gを取り出し、調べる。

……そして。

「げっ……」

ミソラが目を丸くした。

『どっしたの？』

「…百均、こここの反対側だ…」

『あら』

この広いスピカモールでの反対側、…相当な距離を移動しなければ  
ならない。

ミソラが固まっている。

『…他の店を探す？』

「……………うん」

・  
・  
・  
・  
・

「木工ボンドって文具店にあるんだった。忘れてたよー」

『そうね』

ミソラ上機嫌で歩いている。そんな基本知識を忘れていたのは、芸能活動が忙しかったから…という事にしておきたい。

「あ、ここだ」

文具店に到着し、中に入る。意外と広いので探すのに苦労しそうだ。

「ボンド、ボンド…。あ、あつた！」

遠目にその姿を確認した。棚に一つだけ置いてある。

ラッキー、とその棚まで行き、手を伸ばす。  
すると、もう一つ手が伸びてきた。

「「!?!?」」

その手の主を見る。

長い金髪を二つに分けてそれをカールさせて…ドリルみたいな髪型  
になっている、ミソラの友人、

「ルナちゃん!?!?」

「ミソラちゃん?」

委員長こと白金ルナだった。

「何でルナちゃんがここに？」

「木工ボンドを買いに来たのよ。そういうあなたは？」

「木工ボンド買いに来ただけど……」

「……」

無言。

するとルナがおもむろに口を開いた。

「譲りなさい」

「何で!？」

それは容認できない。せつかくここまで来たのに何故譲れようか。

「何で?…そんなの、喫茶店があなたたちに奪われたから、他にも何も奪われたくないからよ!」

「え」

ルナの言葉にミソラが固まる。

そういえば、F組はルナのクラスだった。

ふん…と、ルナはその間に木工ボンドを持ってレジに向かっていた。

「…あ  
」

まだ良いとは言っていない、と言おうとしたが、…どう考えてもそんな雰囲気ではない。

結局その木工ボンドはルナが購入した。

・  
・  
・  
・  
・

結局、百均に行く事となった。

うんざりするような距離を進まなくてはならないのだが、何故かミソラは笑っていた。ハープも微妙に笑っている。

その理由は、先程興味本意で訊いた、どんな喫茶店をしようとしていたか、に対してのルナの返答を聞いたからだ。

《モグラ喫茶》

それがルナ達のクラスがやろうとしていた喫茶店だ。

なんというか、ルナにぴったりのネーミングだ。

ルナのドリルヘアーと彼女のウィザード《モード》（モグラ）から着想を得たのだろう。

「絶対ルナちゃんその名前の意味分かってなかったよねえ」

『そりゃそつよ』

分かってたら絶対そんな名前にはしない。

…と、そんな事を話している間に百均に辿り着いた。

「ボンドボンド…つと、…あった」

前方にはかなりの量の木工ボンドが置いてあった。

「…最初からここに来れば早かったかも」

『そつねえ…』

ミソラとハーブは溜め息をついた。

・  
・  
・  
・  
・

木工ポンドを五個ほど購入したミソラは、皆との集合場所へ向かう途中『あう!?!』という声を聞いてその声の方を向いていた。

ウィザードが仰向けで倒れているのが見える。

そのウィザードはゆっくりと立ち上がり、キョロキョロしながら動き出した。

キョロキョロ、ガン!、『あう!』、ドテッ、ムクリ、キョロキョロ、ガッ、ズテン!、『ひう!?!』。

…見てられなかった。

「だ、大丈夫!?!」

ミソラはうつ伏せで倒れているウィザードに駆け寄り、抱き起こした。

『うう…、だ、大丈夫です…』

ウィザードが呟く。

そのウィザードは体のほとんどを水色の衣の様なパーツで覆われた、金髪の女性型ウィザードだった。

ウィザードはミソラの腕から離れると、再びキョロキョロしだした。

…またコケそうだ。

「ねえ、さっきから何そんなにキョロキョロしてるの？」

『うう…。あ、主から頂いた大切な物を、な…なくしてしまっ…』

「探してるのかあ」

『…はい』

「……………」

一人にしたら、またコケたりぶつかったりするだろうなー、とミンソラは思った。

だから、

「…探すの手伝ってあげる」

一緒に探してあげようと思った。

『ええ！？』

ウィザードはかなり驚いていた。

『でも、見ず知らずの人に手伝ってもらうわけには……！』

「いーの。私が勝手に手伝うだけだから」

『そつ…ですか？』

そついうものですか？…と、ウィザードは首を傾げる。

「そういうもののなの。………あ、自己紹介しとくね。私は響ミソラ。で、こっちが私のウィザードのハープ」

『…あ、はい。ミソラさんに、ハープさん…ですか。えと…私の名前は………』

ウィザードはそこで一拍置いて、

『セイレーン…です』

名乗った。

「セイレーンかあ、よろしくー」

『よろしくー』

『よ、よろしくお願いします…』

おどおどしながらセイレーンが頭を下げる。

「あはは。…じゃ、探しに行こっか？」

『は、はい…』

そうしてミノラ、ハープ、セイレーンは歩き出した。

## 第16話：探し物

『 で、任務が何かは分かってるよな』

『 は、はい』

『 よろしい。…戦闘データは取れたらすぐに送ってくれ』

『 はい…』

『 …じゃ、死なねえように気を付けて、頑張れよ《セイレーン》』

『 は、はい！』

…それが一時間前、スピカモールの上空で行われた会話だ。

セイレーンはムーの電波体。十二神将<sup>ヴィーナス</sup>の部下だ。

（ふう…、任務…しかも戦闘…。戦うの嫌だよ…。逃げたい…。でも、そんなことしたらヴィーナス様に殺される…。それも嫌だ…。…、ってあれ！？チップ、星河スバルのデータが詰まったチップがない！？）

そんなわけで、セイレーンは途方にくれていた。

そこで、ミソラに助けられたのだ。

(いい人だなあ、ミソラさん…。本当…、こういう人が上司なら良かったのに…)

心の中で呟く。

ヴィーナスは、自分さえ良ければいいタイプの人物で、面倒事などはすぐにセイレーンに押し付けてくる。

そんな自分勝手なヴィーナスがセイレーンは大嫌いだった。

だから、ミソラのような優しい人物に憧れる。

「ーン、セイレーンってば」

『え、はい?』

そんなことを考えながら歩いてきたため、ミソラの呼び掛けに気付くのが遅れた。

『…な、なんでしょう?』

「あのさ、探し物って、どんなの?」

『ああ、はい』

そういえばまだ伝えていなかった。どんなものか知らずに探せるわけがない。

『チップです。2cmの正方形のチップ』

「うわ、見つかるかなそれ」

見つけるのは絶望的だ。小さすぎて見えない……、上に、踏み潰されて壊れている可能性もなきにしもあらず。

「うーん……。あ、ちょっと待ってて！」

ミソラはそう言つと走り出して前方の建物に入っていった。それは交番だった。

(……………)

2、3分経った頃だろうか、ミソラはとぼとぼと交番から出てきた。

『どづしたんですか？』

「うん、落とし物として届けられてないかなー……………って、思った

「ただけど…、なかった…」

『はあ……』

「地道に探すしかないかー」

『そうですね……』

・  
・  
・  
・

その後色々な所を探し回ったが、見つからなかった。  
歩き回って疲れたので。今は休憩中だ。

「ないね…」

『私が行動した範囲は大体回ったんですけど……』

「もー、どこだよー！、とミソラは叫んだ。

セイレーンはその様子を不思議そうに見ていた。

(こんなに本気で探してくれるなんて…)

ミソラを見詰めながら思う。本当に、優しい。

「…ん、どうしたのセイレーン？」

『あ、いえ、何も…』

手をパタパタ振って目を放す。

(…それにしても、本当にどこで落としたんだろう?)

セイレーンはこちらに来てからの自分の行動を思い返してみた。

ブツブツ呟きながら歩いて、気付いて、キョロキョロ、ガン！、ズ  
テン！

…へこんだ。

「…何してるの、ミソラちゃん？」

「あ、ルナちゃん!」

そうしてうなだれていると、誰かがミソラに話しかけてきた。  
セイレーンはその人物を見て……、

(ヴ、ヴィーナス様に雰囲気似てる！？)

辟易した。

ミソラは会話を続ける。

「この娘の落とし物探してるんだー」

「…誰？」

『…うあ、せ、セイレーン…です』

なんとか自己紹介だけはしてみた。…声はかなり上擦っているが。

「ふーん。…で、落とし物って？」

「2cmの正方形のチップだって」

「2cmの正方形のチップ…って」

ルナはポケットから何かを取り出して、ミソラに見せていた。

「もしかして、「コレ？」」

ルナの指の間でキラリと光る小さな物体。

それを見て、セイレーンのはああ！？と声を上げた。

『そそっ…それです！それ！それが私の探してた物です！』

セイレーンは目をキラキラさせながらゆっくりと近寄っていく。

「そう…。一応拾っておいて良かったわ。はい、もう落とさないようにね」

『はい！はい！ありがとうございます！』

セイレーンは受け取って握りしめ、何度もルナに頭を下げる。

どこがヴィーナスと似た雰囲気だ。全然違うじゃないか！と自分にツッコミを入れる。

「ちょ、恥ずかしいからやめて…って！ッ……じ、じゃあね！」

ルナは頬を紅潮させながら乱暴に手を振って去っていった。

今となつてはルナが女神に見える。

(…み、見つかったー！良かったー！！)

「良かったねセイレーン！」

『はい！ミソラさん達のおかげです！ありがとうございますー！』

「……………もー、ミソラ《さん》なんて、よそよそしいよー。ミソラでいいよミソラで」

『え？』

「私達、もう友達じゃん。それなのにさん付けはおかしいよ」

『…とも…だち？私とミソラさんが？』

「そーだよ。…ってまたさん付けするー」

友達。意味は知っている。それがどんなものかも。実際にできたこととはないが。

ほらー呼んでよー、とミソラが催促している。…だから、言う。

『えと…ミン…ラっ』

「あはは、よくできました！」

ミソラが笑いながら肩を組んできた。

(何か、すごい嬉しい…)

セイレーンも、微笑んだ。

・  
・  
・  
・  
・

あの後、セイレーンはミソラと別れた。

今は一人で路地裏にいる。

(本当に優しい人だった…)

この一時間弱の事を思い返す。

そしてふと、このままずっとあの人といれたら…と、そんな幻想を抱いてしまった。

(それは無理だな…)

任務を放棄してそうすれば、上がセイレーンを裁きにやって来るだろう。

そうならば自分だけではない、ミソラにも被害が及ぶ。

(それは嫌だなあ…)

《友達》を危険な目に遭わせるくらいなら、…その幻想は捨てる。

セイレーンは迷いなく任務の遂行を選べる。

『…じゃあ、やりますかねー』

星河スバルの姿もチップ内のデータで確認した。

引き連れている電波体の周波数も記憶した。

…近くにいます。

『エランド』

セイレーンが呟くと、どこからかエランドが現れた。

『…任務、開始…っと。  
…電波変換』

その場を、光が包んだ。

## 第17話：止める者

ミソラは皆と合流した。

さすがに皆疲れていたもので、何か飲み物買ってこよう…という話になり、男子三人が買いに行く事となった。

というわけで今この場には、ミソラともう一人の女子　《花菱キクリ》しかいない。

「……………」

特に会話はない。二人とも疲れているのだ。しかし、この空気に堪えきれなかったキクリがミソラに喋りかけた。

「ねえ、響さん」

「…何？」

「好きな人いる？」

「！」

ミソラが分かりやすいくらい動揺する。  
いるんだー、とキクリは一人頷く。

「もしかして、星河君かな？」

「!?!」

再びミソラは動揺する。顔を真っ赤にしながら、ち…違っよ!…と手をバタバタ振って否定するが、…どう考えてもそれは逆効果だ。

「星河君かな？」

「……………はい」

二度目にミソラは折れて頷いた。

「あはは、やっぱりねー。そうじゃないかと思ってたんだ」

凄くにこやかにキクリは続ける。

「…もう告白した？」

「し、…してない」

「…ふうん。じゃあ、今フリーなんだ、星河君」

「そうだと思うけど………って、え？」

キクリはいたずらっぽい笑みを浮かべている。

ミソラは今のセリフとその様子から、一つの不安を覚えた。まさか…

「花菱さん…もしかして」

ドオン！！

ミソラが何かを尋ねている途中、その爆発音は響いた。

「！！？」

スピカモール内が騒然とする。

「何、どうしたの！？」

『…ウィザードが…暴れてる？いや、でもこれは………』

ウィザードにしては強すぎる、とハーブが焦る。  
そうしている間にまた爆発音が鳴り響いた。

「……………花菱さん、逃げて」

「え…う、うん。…ひ、響さんは？」

「暴れてるヤツを止めてくる」

「……………うん、分かった」

頑張ってるね、と言ってキクリは駆け出した。(買ったものはキクリのウィザードが全て抱えている)

「……………よし、行くよハーブ」

『ええ』

ミソラがハンターV.Gを構える。

「トランスコード、ハーブ・ノート！」

電波変換しハーブ・ノートとなったミソラは、騒ぎの中心へと向かっていった。

・  
・  
・  
・  
・

少し時間は遡る。

スバルと他男子二名は、飲み物を買ったためにさっきの場所より少し遠い所まで来ていた。

「……………ちつ、メンドクせえな。何でこここんなに自販機少ねえんだよ」

不良っぽい男子 《雛森ゆたか》は毒づいた。

「知らないよ。作った人に訊けばいいじゃん」

ひょうきんそうな男子 《藤枝カイリ》は呟いた。

「……………いいからさっさと探そうよ」

スバルが呟く。

もう結構歩いたというのに、未だに自販機が見当たらないのだ。元からかなり疲れていた上にこれでは堪ったものではない。

というわけで、三人とも微妙に機嫌が悪かった。

「どーせあれだろ。自販機設置する費用が勿体ねえとかそんな理由で少ねえんだろ」

「「だろうね」「」

そんな感じで文句を言いまくっている時だった。

『お前ら止まれ！！』

突然ウォーロックが叫んだのだ。驚いて三人ともピタツ…と止まる。耳をつんざくような音が聴こえたのはその直後だった。

ドオン！！

と同時に、スバル達の後ろの地面が凄まじい音を起てて爆発した。三人とも呆然とする。

『呆けてる場合かスバル！電波変換だ！』

「……………え、う、うん！トランスコード、シューティングスター・ロックマン！！」

スバルは電波変換し、ロックマンとなる。

「雛森君、藤枝君！逃げて！！」

「お、おう」

「分かった」

ゆたかとカイリが急ぎ足で後方に去っていく。  
ロックマンはそれを見届けた後、腕を構えた。

（ロック、今の攻撃どっからきてた？）

（そこまでは分かんねえ）

「……………」

ロックマンは目を瞑って精神を集中させた。相手の周波数を捕捉しようとしているのだ。

「……………」

（ブレイクソング）

（捉えた！！）

耳をつんざくような音が鳴り響く。それと同時にロックマンは高く跳んだ。先程までロックマンがいた場所が爆発するのを尻目に、ロックマンは先程捕捉した敵に銃口を向けた。

「ロックバスター!!」

そこにいる敵に向かって銃弾を放つ。

『……………ッ!?!』

相手はそれをかわし、ロックマンを睨み付けた。

『見つかりましたか…!』

「…誰だ、お前は」

『…もう分かっているでしょう? ムーの電波体です。私はセイレーン、《セイレーン・インパルス》』

セイレーンと名乗る電波体は持っていた豎琴を構える。おそらく、あれが武器なのだろう。

(音の能力か…)

ロックマンは厄介そうだ…、と思った。音を扱う敵の恐ろしさは、身をもって知っている。

『さあ始めましょう、星河スバル』

「言われなくてもそうするぞ」

そう言って、ロックマンとセイレーンは戦闘を開始した。

・  
・  
・  
・  
・

ハープ・ノートは店の屋根を跳んで移動していた。逃げ惑う人々が邪魔だと感じたからだ。

(もうスバル君が戦ってるな…。相手は……誰?)

遠くの戦闘の気配を感じながら、思考する。

(また：ムーの電波体かな)

この前のシルフィーの件もあるし、その可能性が一番高い。

(…………急いじつ)

ハープ・ノートが速度を上げる。

『……………』

「……………どうしたの、ハープ？」

『…この周波数、いや、まさかね…』

「ハープ？」

『…何でもないわ。急ぎましょう』

ハープの様子に若干疑問が残るものの、とりあえずハープ・ノートは気にすることをやめた。

そうやって進んでいると、遂に戦闘の場へと辿り着いた。

『エコーノイズ！』

敵の電波体が技を放った。

ロックマンはそれをかわす…が、

「ぐああッ!？」

何かを腹部に喰らっていた。

『エコーノイズ!』

敵は同じ技を放つ。

ロックマンはなんとかかわすが…、今度は背中に何かを喰らっていた。

「かはッ…何だ、さっきから」

『かわしたらわけ分かんねえ方向から追撃が来やがる…』

ロックマンとウォーロックは肩で息をしていた。

『理解できませんか?』

敵の電波体がロックマンに歩み寄りながら言う。

『この技は』

「反響音」

敵の電波体が説明しようとした時に、ハーブ・ノートは割り込んだ。

「反響音だよね。壁とか地面に音を反響させて攻撃を当ててるんでしょ」

『……そうです。よく分かりましたね』

「これでも音の能力者だからね、それくら……い？」

自慢気に喋っていたハーブ・ノートの口が、敵と目が合った瞬間に止まった。その目は驚きで見開かれている。見ると、敵の電波体も驚いた様子でハーブ・ノートを見ていた。

「……うそ、まさか……」

長い金髪、水色の衣。その風貌には見覚えがあった。

「セイレーン……?」

『……ミソラ』

お互いに気付いた。見た目はほとんど違うのだが、何故だか分かった。

「……？ミソラちゃん、どういづこと？」

状況が理解できないロックマンが訊いてきた。

答える気はない。話せば長くなるし、そもそもそんな時間は今必要ない。後で済ませばいい。

だからハープ・ノートは言った。

「退いて、スバル君」

「え？」

「私が一人でやるから、スバル君は下がってて」

「いや……でも……」

「いいから……！」

ハープ・ノートは怒鳴った。

「お願い、お願いだから……ここは私一人でやらせて……！」

ハーブ・ノートが懇願する。その真剣な表情を見て、ロックマンは……折れた。

「分かった」

『スバル！？お前何言ってる……』

「ほらほらウォーロック。僕たちには人々を落ち着かせるという重大な任務があるんだから、行くよ」

『雑用じゃねえか!!』

ウォーロックが喚いているが、無視。

「……じゃ、頑張ってる」

「……うん」

そう言って、ロックマンは消えた。

見届けて、ハープ・ノートはセイレーンと向き合っ。

「……セイレーン」

『…はい』

「ムーの…電波体だったんだね」

『そちらこそ、星河スバルの仲間だったんですね』

「…うん」

一瞬沈黙が流れる。

『どいてください。私の任務は星河スバルと戦うことで、あなたと話すことはありません』

「……………嫌」

『…?』

「どかないよ。行かせないし、通ろうとすれば止める」

ハープ・ノートは一拍置き、ギターをセイレーンに向けて、宣言した。

「ムーの下らない任務なんか、絶対あなたにさせない。だから私はここにいるんだ」

第17話：止める者（後書き）

ストーリー上関係なさそうなキャラ多数

## 第18話：迎える者

『…戦うんですか？…友達…なのにな？』

「友達だから戦うの。友達を闇から救うのも友達の役目だから」

ハープ・ノートは真剣な表情で言い放つ。

それに対してセイレーンは、

『…そうですね。…なら、私は友達を危険に晒さないために、今あなたを無力化して星河スバルと戦います』

そう宣言した。

『ブレイクソング！』

セイレーンが攻撃を放つ。さっき見た感じ、ロックマンは耳に頼って避けていたようだったが、ハープ・ノートはそんなことをする必要はない。

「…ほっ」

最小限の動きでかわす。  
ハープ・ノートには音が《見える》。そのおかげで、セイレーンの音波攻撃を完璧によけられるのだ。

「…ッ！エコーノイズ！！」

セイレーンが先程見せた反響する音波攻撃をいくつも放つ。  
スピカモール内の店の壁や床に反響してハープ・ノートを襲う。  
…が、音が見える能力のおかげで、どこに攻撃が到達するかを把握していたため、軽くステップするだけで全てかわした。

「ブレイクソング！」

そこで破壊の音波を響かせ、ハープ・ノートを追撃する。

「…！！！」

本人やハープ・ノートには分からないことだが、今回のこの技は攻撃範囲が先程までと比べて桁違いに大きい。これではかわせない。  
だから、あえて回避行動はとらなかった。

「パルスソング！」

ハープ・ノートは技を放って迎え撃った。  
お互いの技がぶつかり、…特に被害も出ずにふっ…、と消えた。

『!?!?』

セイレーンが目を見開いた。当たり前だ。音の技同士がぶつかったのだ、凄まじい爆音が鳴り響いてもおかしくない。それなのに、何も起こらなかった。

混乱するセイレーンにハープ・ノートは告げる。

「…あなたの技に、全く同じ大きさで正反対の音調の技を当てたの」

プラマイゼロ…と、ハープ・ノートは呟いた。

『……簡単に言ってくれますね』

セイレーンはいっそ呆れた。

口で言うほどその作業は簡単じゃない。その時その時で変化する音に完璧に合わせた音を放つなど、セイレーンには出来ない。

音の能力者としての実力は、ハープ・ノートの方が格段に上なのだ。

『……………関係ない。…エコーノイズ!』

セイレーンは反響する音を乱射する。

スピカモールの至る所に反響し、ハープ・ノートに襲いかかる。

「……………、ショックノート!」

対するハープ・ノートはかわせる分は全てかわし、かわしきれない分をショックノートで相殺する。

『…ッ!』

セイレーンは攻撃を中断し、後方へ少し下がった。

このままでは消耗するのは自分だけだ。だから、少しキツイ選択をする。

『…よく考えれば、音以外があれば通りますね』

セイレーンは豎琴を構え、鳴らす。

今までと違い、音は前に進まずセイレーンの前に留まっていた。その音に何かが集まってくる。

「…水!？」

ハーブ・ノートが驚愕する。セイレーンの音に水…おそらく空気中の水分が集まって同化しているのだ。

(これはマズイかも…!)

『アクアインパルス!!』

水の波動が放たれる。規模が今までの技と全く違った。

「ッ!!パルスソング!!」

ハーブ・ノートが全力で技を放つ。音量も音調も調節していない。音以外の水が含まれている時点で先程の戦法は意味を為さなくなるからだ。

…技同士がぶつかり合い、凄まじい爆音を鳴らした。

・  
・  
・  
・  
・

衝突により発生した煙の中でセイレーンは佇んでいた。

(……………星河スバルを追わないと)

威力は抑えた。ハープ・ノートも迎撃していたみたいだし、致命傷にはなっていないだろう。

(すみません)

心の中で傷つけた事に謝罪すると、セイレーンは踵を返した。

…が。

『…!?!?』

セイレーンの体に糸が絡み付いてきた。身動きが取れない。

(ギターの弦?まさか…!)

首だけ動かして後ろを見る。

そこには、

「勝手に終わらせるなよー」

ほとんど傷のないハーブ・ノートがいた。

セイレーンは本気で驚愕した。

確かに威力は抑えたが、それでも相当な威力のはずだ。ここまで傷がないのはおかしい。

ハーブ・ノートはセイレーンの様子に気付いたのか、ギターを向けて喋りだした。

「あまり言めないで。本気を出せばあの程度は防げる」

ハーブ・ノートが歩み寄ってくる。弦は長さが調節されているので、依然キツく絞められている。

目の前まで来た。

「……………」

ハーブ・ノートが手を振り上げる。セイレーンは目を瞑った。

(……………!?)

…攻撃が来るものと思っていた。なのにハーブ・ノートは、

「……………セイレーン」

セイレーンを軽く抱いてきた。

今までで一番驚いた。もはや疑問以外なにも浮かんでこない。

『……………何を?』

「……………」

訊いてみるが、答えてくれない。というかそろそろ弦がキツイ。

セイレーンが色々と混乱している中、ハーブ・ノートは口を開いた。

「……………セイレーン。本当はどうなの?」

『……………?』

漠然としすぎた質問をされた。

ハープ・ノートは続ける。

「あなたは本当にスバル君と戦いたいと思ってるの？」

『！』

「確か任務だ…って言ったよね。戦いたって、本心ではないよね」

ハープ・ノートが訊いてくる。…この状態なら表情で気取られはしないだろう。

セイレーンは言った。

『本心ですよ。私達したつばは上司から与えられた任務を至上の喜びとして遂行しますから』

「嘘だね」

『ッ』

断言された。

ハープ・ノートはセイレーンに目を合わせるようにしてから、続ける。

「それなら、さっきの『友達を危険に晒さないため』…なんてセリフは出ないよ」

『…あ』

駄目だ…とセイレーンは思った。この人には全て見抜かれる。

「…どうなの？」

『……戦いたくないです』

「……」

『本当は、誰とも戦いたくないんです。任務も…戦闘任務はやりたくない…』

俯きながらセイレーンは続ける。

『…でも、やらなければ上に裁かれる…。それが嫌だから仕方なくやりました』

「…そう」

ハーブ・ノートは俯いたセイレーンを再び抱いた。

「セイレーン……。そんなに嫌なら辞めちゃえ、そこ」

『!?!?』

「それで、私と来よう」

ハープ・ノートは名案!とばかりにそう言った。  
だがそれは、セイレーンが先程捨てた幻想だ。

『…お断りします』

セイレーンの言葉にハープ・ノートは目を丸くした。

『……確かにさっき、言いました、戦いたくないと。…でも、今回は少し本心でもあるんです』

「……………」

ハープ・ノートはその言葉の意味をなんとなく理解した。

セイレーンは言った、『友達を危険に晒さないために戦う』と。

(…ああそつか。セイレーン、…そうしたら裁かれるんだ。で、…  
そのとばうちりで私を傷付けたくない…と)

自分だけが傷付く選択を取る、その気持ちはよくわかる。自分も昔  
似たような事があった。

「……………」

なら、言うことは決まっている。

「バーカ」

『は？』

いきなり貶されたセイレーンは目を丸くした。

「私に被害が及ぶとか気にしないでいいの。私だって戦えるんだし、  
どうにかできるよ」

『…でも』

「でもじゃない」

『痛ッ』

ハーブ・ノートはセイレーンを小突いた。

「そんな選択をして…あなたが一人で傷付くの見たくないよ。それだったら、私も一緒に…二人で傷付いた方がマシ」

ハーブ・ノートが電波変換を解き、響ミソラに戻る。

「だから私と来よう、セイレーン」

ミソラが手を差し伸べる。

…やっぱり優しい。最後に選択を自分に任せてくれた。

…心は決まった。

『……はい』

セイレーンはミソラの手を取った。



第18話・迎える者（後書き）

この系統は苦手だと感じる今日の頃

## 第19話：やるべき事

サテラポリス本部。

WAXA日本支部内にそれはある。

スピカモールの事件のすぐ後、サテラポリス遊撃隊メンバーである、スバルとミソラはそこへ呼ばれた。

今そこには二人以外に、黒髪ツンツン頭の少年 ジャックと、太った少年 牛島ゴン太もいる。

四人はそこである人物を待っていた。

『 『 …… 『 『

無言状態。ただ、好きで無言になっているわけではない。話すことを話し終わった結果がこれなのだ。スバル達としても、これは予想外だった。

ハッキリ言おう、スバル達を呼んだ本人が遅れているのだ。

『 『 …… 『 『

…そろそろ限界が来そうだ。

その時。

サクッ

そんな音が鳴り、四人は後ろを振り向いた。

「やー、ゴメンゴメン。遅れた！」

「……………はあ」

そこには、四人を呼んだ人物 《暁シドウ》がいた。傍らにジャックの姉 《クインティア》もいる。

『……………』

散々待たせといてそれが。しかもこれだけ遅れたのなら、もっと格好良く登場すべきなのに、サクッ…だ。カッとかコッとかではなくサクッだ。うまい棒をかじる音だ。緊迫感その他諸々をブチ壊された。

全員の冷たい視線を受けながら、シドウは切り出した。

「…じゃ、始めるか。何で呼ばれたかは分かってるよな」

「…まあ一応」

夕風中学校での事件、それと今日のスピカモールでの事件の事だろう。

「じゃあ話は早い。何があったかを話してくれ」

「はい」

スバルはポツポツと語り出した。

敵はムーの電波体だという事、シルフィーの事、セイレーンの事、…それと、相手の目的がスバルの殺害だということ。

「なるほどな。…で、そいつがセイレーンなのか」

『ひう』

頷いたシドウはミソラの傍らにいるセイレーンに視線を向ける。  
セイレーンはビクツツと、震えてミソラの後ろに隠れてしまった。

「……………何か、俺悪いことした？」

「いや、私以外に心を開いてないだけです」

「…そうか。…まあいいや」

ところで、とシドウはスバルに問う。

「アポロンって何だ？」

「…アポロン、ですか…」

どう話すべきか…とスバルは悩み、とりあえずウォーロックに訊いた。

「…どう説明しようか」

『そのまんま話せよ』

簡潔すぎる回答だ。

「…それしかないか。…みんな」

スバルは全員の顔を見回して、喋り出した。

「地球の危機は何回来たか分かる？」

「え？…三回だよね」

ミソラが戸惑い気味に答える。

F M星人の襲来、オリヒメのムー大陸を利用した世界征服、メテオ  
Gの衝突…だ。

202

「うん、そうだよ。一般に知られてるのは…ね」

「一般に…って、どういうことだ？」

ゴン太が問う。

「…うん。みんなは知らないだろうけど、もう一つあったんだよ。  
地球の危機が」

スバルは話した。ラ・ムーにより滅ぼされたパラレルワールドの事、アポロンの事を。

・  
・  
・  
・

「…なるほどなあ」

「そんなことがあったんだ…」

「…なあ、ジャック。パラレルワールドって何だ？」

「……………後にしろ」

シドウとミソラが感心している。ゴン太は空気を読まずに質問し、ジャックは呆れ気味にそれをかわした。

「……………ん？」

しばらくして、シドウが声を洩らした。

「どうしたんですか？」

「いや…な。スバルが倒したアポロンがパラレルワールドの住人なら…」

と呟いた辺りでセイレーンを見る。その動きでシドウが何を言いたいのか全員分かった。

セイレーンはビクビクしながら告げる。

『はい…。私も、そのパラレルワールドの住人です…』

・  
・  
・  
・  
・

ムーの電波体の根城。

『セイレーンとの回線が繋がらないわね』

アルテミスが機械のボタンをガチガチ押しまくりながら皆に言った。

『倒されましたの？…相変わらず役立たずですわ』

ヴィーナスがイライラしながら毒づく。

『そうじゃないっぽいぜ』

メルクリウスが機械の画面を見ながらヴィーナスに告げる。

『どづいつことですか？』

『セイレーンとの回線が繋がらないのは事実なんだが…、セイレーン自体の反応が消えてないんだ』

『…それは』

『裏切った…っーことだなア』

『…アレス様』

《アレス》と呼ばれた電波体は続ける。

『捕らえられたって可能性もあるにはあるけどよオ。ンなわけねエよなア。アイツならその時点で最も楽に死ぬる方法で死ぬるオしなア』

確かに…と、全員納得した。セイレーンの性格を考えればあり得な

いことではないからだ。

『…しかし、それはマズくありませんか？』

アテナが深刻な顔で呟いた。

『…そうね。既にこちらの情報がリークされているでしょうし』

ユノが機械を操作しながら、アテナの言葉に繋がった。

すると、だからよオ…と、アレスがゼウスに向かって喋り出した。

『もう調査とか悠長なこと言ってねエでさっさとやっちまおオぜ、オレ等十二神将でさア。ほれ、オレが出よオかア？オレが行けば全部終わ』

『まあ待たんか、アレス』

上機嫌に喋っていたアレスの言葉を老人の声が遮った。ゼウスとは違う声だ。

アレスは舌打ちし、声の主になんか文句を言う。

『ンだよ、ポセイドン。黙っとけよ、邪魔すンな』

《ポセイドン》と呼ばれた老人は、ハッ!…と笑いながら言った。

『黙るのはお主の方じやろう、アレス。確かに十二神将でやることに異論はない。…が、お主や儂 《五本指》まで出る必要はなからう』

そう言ってポセイドンはゼウス、ユノ、アテナを眺めた。

『…チツ。…で、アンタはどオしたいんだ、ゼウス』

アレスは不機嫌になりながら、ゼウスに訊いた。

『…それでいい。十二神将を出す』

一拍置いて、

『目的も少々変更だ。星河スバル及び反逆者セイレーンの排除』

『…誰を出しましょう』

『後に決める』

ゼウスは全員の顔を一瞥して、告げた。

『細かい事柄は私が決める。皆それまで待機している』

『『了解！』』』

・  
・  
・  
・  
・

一方、サテラポリス本部。

「どっやってここに来たんだ？」

『…パラレルワールド同士を繋ぐゲートを捕捉して通ってきました』

シドウがセイレーンに色々と訊いていた。

「捕捉方法は？」

『…分かりません。十二神将以下の電波体にはその方法が伝えられていないんです…』

「…そうか。分かった、ありがとう」

シドウは質問を止めた。これ以上の情報は望めないと判断したからだ。

敵の居場所が分からないのではどうしようもない…、と皆が思っていたその時、老人の声が響いた。

「じゃあ、当面の目的はそのパラレルワールドを繋ぐゲートの捕捉方法を見つけて出すことね」

皆で老人を見る。特徴的な髪型のお婆さん 《ヨイリー博士》だ。

「…出来るんですか？そんなこと」

スバルが問う。

「どうにかするわ。…アシッドちゃんも手伝ってちょうだいね」

『はい』

シドウのハンターV.Gから、彼のウィザード《アシッド》が現れる。それを眺めた後シドウは、スバル、ミソラ、ゴン太、ジャックに向

かって告げた。

「…ま、そういうわけだから…。お前たちは次の敵の襲撃に備えて待機だ。いつでも行けるようにしとけ」

『『『了解！』』』

戦いは激化していく。

第19話…やるべき事（後書き）

ぶっちゃけ、ここまではプロローグの延長みたいなものです。

本当の戦いはこれから！（打ち切り用語）

## 第20話：テスト前

中間テスト。

中学生以上の学生が受けることになるテストの事だ。

中一の一学期、初めての体験に戸惑いつつそれを受け、割と簡単に高得点が取れたため、

「あれ？これ次も出来んじゃない？」

という幻想を抱かせ、期末テストでその幻想を打ち碎かれる。よくあることだ。

一学期の期末テストの時点でそれなのだから、二学期の中間テストは…もちろん難しい。

今は、夕凧中学校の二学期中間テスト三日前の六限目社会の時間（自習）。

星河スバルは、響ミソラ・花菱キクリ・雛森ゆたか・藤枝カイリと共に一つの机を囲って話し込んでいた。議題は得意科目は何？

「理科」とスバル。「英語」とミソラ。「数学」とキクリ。「国語」とゆたか。「社会」とカイリ。

「…全員バラバラだね」

「「「「（じくり）」」」」

「…じゃあ、皆で足りないところを補っていいっつー!」

五人は手を重ね、叫んだ。

「「「「「おー!」」」」」

「喧しい!」

叫んだら、自習の見回りの先生（生徒指導の山崎先生）に怒鳴られた。

また怒られては堪らないので、声を潜めて会話を続ける。

「理科は今回僕は完璧だよ。なんせ、範囲が宇宙だから」

スバルが胸を張る。

宇宙はスバルの得意分野だ。昔とある理由で宇宙について学び、そのまま何だかんだで趣味になり、現在は宇宙オタクと呼べるレベルにまでなっている。これで点が取れないわけがない。

「心強いね。私は今回はまあまあかな。範囲がシャー口だし」

ミソラは若干控えめに呟いた。  
彼女は特にアイドルとして売っていた時期に何回か海外に行っていた。  
その際に一応翻訳機なしで喋れるようにはなったので、英語がそれなりに出来るらしい。

その後も、残りの三人が今回はどうか…と話して、一段落つく。  
…やがて重大な事に気付いた。

教え方が分からない事に。

「マズいね…」

「くっそ、盲点だった…」

「あー」

そうやって皆であたふたしている時、

「な〜にやってんの〜?」

このクラスの委員長、水無月ツバメが話しかけてきた。

「水無月さん…。今私達はテスト前の悪足掻きを敢行中なんだよ」

ミソラが状況を説明する。

「あゝ。…毎日コツコツやっとなかないからそういう事になるんだよ  
く？」

「「「「「「「「「「」

言い返す言葉もありませんとばかりに五人は視線を逸らす。

ツバメは、はあゝ…と溜め息をつき、

「助け船を出してやらん事もないぞ〜？」

五人に希望を与える言葉を口にした。

「「「「「マジッ!?!」「「「「「」

「うん。マジ」

五人は歓喜に震えた。

ツバメは委員長という役職や先程の発言から分かる通り、成績が良い。そんな人物の出す助け船に乗らないわけがない。

「あゝ、でも条件。私の言うことを一つ必ず聞いてくれる？」

「「「「「聞く、聞きます！」「」「」「」

もはや五人にプライドなどなかった。

「よろしい。…ん、はいコレ。要点が纏めてあるノート。私はもう必要ないし」

差し出された五冊のノートを受け取り、五人は大きく息を吸って、吸って、限界まで吸って……叫んだ。

「「「「「あつしたああー……ッ！」「」「」

「うわぁ！ちよ…恥ずかし」

「喧しいいいいいッ！」

再び自習の見回りの先生（生徒指導の山崎先生）に怒鳴られた。

・  
・  
・  
・  
・

一時間後。

五人は学校近くのビル街に来ていた。

ここにあるという、ゆたかの家で勉強会をしようという話になったからだ。

「お金持ちだったんだねえ、雛森君」

「……言わないでくれ」

ニヤニヤしながら呟くミソラから、ゆたかは気まずそうに目を逸らす。

引け目があるらしい。

「…にしても、水無月からノート借りれて良かったよなー」

かなり無理矢理だが、話題転換しようとしている。

しゃーない、と言わんばかりに他の四人は溜め息をついて、その話題に乗った。

「…ていうか、テンション上がってて勢いで了解しちゃったけど…。ボク等、ツバメさんの命令を一つ聞かないといけないんだよね…」

カイリがそう言うと、全員の顔が青ざめた。ツバメの事だ。とんでもない無理難題を吹っ掛けてくるに違いない。

「…あの後、水無月さん僕の方を見てニヤニヤしてたんだよなあ」

何やらされるんだろ…、とスバルが遠い目をした瞬間、全員が明らかに目を逸らした。

「ど、どうしたの？」

「いや、その…、御愁傷様…って思ってな」

「スバル君…頑張れ！」

「に、似合うと思うし…ね！」

「そ、そうだよ、スバル君ならきつと似合うし可愛いよ！」

何故だか知らないが、皆が必死に慰めたりフォローしたりしている。スバルはわけも分からず訊いた。

「え、いや、何？どうしたの本当。似合うって何！？」

その瞬間、全員があからさまに、しまった…、と言いたげな顔を  
した。ゆたかが慌てて喋り出す。

「いや…うん。星河…、お前はまだ知らない方がいい」

他の三人が頷く。

「はあ！？本当に何なの、ねえ！！」

『スバル…』

何かウォーロックまで出てきた。スバルの肩に手を置き、首を横に  
振っている。

「ロックも何か知ってんの！？」

明らかに当事者っぽい自分が完璧に仲間外れになっている事に憤り  
を感じるスバル。

(…あの、一体何の話をしているんですか?)

(…色々あるのよ。後で話すわ)

ミソラのハンターV G内でそんな会話が行われた。小声で話していたのだが、スバルには完璧に聞こえた。

「あああもうツ！何なんだよ！教え……………て、…よ？」

スバルは遂にキレて叫んだ。…のだが、それは途中で止まった。四人の後ろを見て呆然としている。

疑問に思い、全員で振り返り　その人物を見た。

人間が放つものとは思えない気配、只者ではない雰囲気を出し、全てを見通すかのような目をした少年。  
スバルやミソラと何度も対峙した人物。

古代ムー人の末裔、《ソロ》がそこにいた。

第20話：テスト前（後書き）

中間テストについては今までで一番力を入れて書きました。

## 第21話：末裔の者

「……………」

ソロはスバル達…正確にはスバルを見詰めながら佇んでいた。スバルはソロが何をしたいのかを察して、四人の前に出る。

「さ、先に行つてて！彼ね、最近会ってない僕の友人なんだ。ほら、色々話したい事もあるし、…雖森君の家には後で必ず行くから！」

結構無理のある言い方だったが、とりあえずは納得したようで、

「…おう分かった。…俺ん家までの地図後で送っとくな」

「…ちゃんと来てね」

「また後で…」

ゆたか、キクリ、カイリはスバルに手を振って急ぎ足で去っていった。

「…スバル君」

残ったミソラが心配そうに見てくる。

「…心配ないよ。ここは僕だけで十分！」

「……分かった」

ミソラは頷き、三人の後を追っていった。

四人の姿が見えなくなった辺りで、ソロが口を開いた。

「…俺と貴様が友人だと？…虫酸が走るな」

「…僕も言ってる結構微妙な気分になったよ」

ソロは鬱陶しそうな、スバルは本当に微妙そうな顔をする。

「…ふん。まあいい。…ついてこい、話がある」

・  
・  
・  
・  
・

二人は近くにあったオープンカフェの席に座っていた。  
二人のピリピリした雰囲気の中に入り、半泣き状態で注文を取って  
いったアルバイトの女子高生が去るのを確認した後、二人は話し出  
した。

「…星河スバル。貴様、最近ムーの電波体と戦っているらしいな」

「まあ…ね」

予想通りの質問をしてきた。

ソロはムー人の末裔だ。自分の同胞とも言える者達の事は少なから  
ず気になるのだろう。

「…シルフィー、セイレーン。どちらもムーの十二神将の補佐官と  
呼ばれる存在だ。何故そんな奴等と貴様が戦っている」

いや、そもそも…とソロは続ける。

「十二神将も補佐官も遙か昔に滅んだはずだ。何故奴等が存在して  
いる？」

説明が厄介だな…、とスバルは思った。パラレルワールドについて  
は、すぐに信じてはもらえない。シドウ達に話した時も、最初の方  
は半信半疑っぽかった。

仕方ないのでその辺は誤魔化し気味にして、戦っている理由を話した。

「アポロンを倒した…だと？貴様がか？」

「うん。…まあ、オーパーツとかノイズとかで力を底上げして…だけど」

「……………」

ソロが疑心に満ちた目を向けてくる。

ムーの電波体の中でも最高傑作と謳われていたアポロンを倒したと言っただ。にわかには信じられないのは分かる。

すると、突如スバルのハンターV Gからウォーロックが勝手に出てきて、ソロに絡みだした。

『おいおい。何疑ってたんだ。俺等はラ・ムーを倒してんだぜ？そいつが作ったヤツに負けるわけねえだろ』

チンピラみたいな絡みをソロは軽く無視した。  
言ってる事は…正しいのだが。

『無視しやがったなこの野郎…』

「まあまあ、ロック」

爆発寸前のウォーロックをスバルはたしなめる。  
その場をピリピリした雰囲気支配する。

その雰囲気の中に入って珈琲を置いて行ったアルバイトの女子高生を讚えたいなあ…とスバルは思う。

「…えーと。終わり？」

「…ああ」

ソロは珈琲を一気に飲み干し、立ち上がった。苦くないの？とはあえて言わない。

「…気をつけておけ。今の貴様では並の十二神将にすら勝てる見込みがない。無理に戦えば死ぬことになる、退くときは退け」

スバルはソロの言葉に目を丸くした。

「……心配してくれるの？」

「……俺との決着をつける前に死なれては困るんでな」

『…丸くなったモンだぜ』

ウォーロックが感心している。

「……ふん」

ソロが踵を返し、立ち去ろうとした…その時、

「『…!』」

ソロとウォーロックが震えた。

「どうしたの?」

『……近くにバカでけえ力を持ったヤツがいやがる…ッ!』

「…これは、………十二神将か」

「な!?!?」

スバルは驚愕した。またすぐに敵が来ることは予想していた。…が、ソロの言う補佐官の電波体が来ると思っていた。もう十二神将が出てくるとは予想すらしていない。

『…どーするよスバル。逃げるか？』

先程のソロの言葉通りなら、スバルは十二神将には勝てない。逃げるのが得策かも知れないが…。

「冗談じゃない、戦うよ。逃げたら相手が暴れだすかも知れないし、そうなったら堪んないよ」

『……へッ！それでこそスバルだ！』

スバルは珈琲を一気に飲み、噎せて、テーブルに代金を置いてからソロに話しかけた。

「ソロ、手伝って」

「……何だと？」

ソロが心底鬱陶しそうな顔をするが、スバルはそれを無視して続ける。

「手伝ってって言ったんだよ。僕に死なれちゃ困るんでしょ？君が一緒に戦ってくれれば、死ぬ確率は大分減ると思うけど」

「……………」

ソロはかなり渋っている。

スバルは仕方なくソロが望んでそんな事を条件として口にした。

「…これが終わったら、決着でも何でもつけてあげるから」

「……………まあいいだろう」

とりあえず了解してくれたようだ。

「じゃ、行くよ」

「…命令するな」

「トランスコード、シューティングスター・ロックマン！」

「…トランスコード、ブライ」

電波変換した二人は敵の元へと駆け出した。

第21話・末裔の者（後書き）

ソロに「トランスコード」ってずっと言わせなかったんで、言わせました。

第22話・豊穣の女神（前書き）

めちゃくちゃ長くなりました。

## 第22話：豊穡の女神

『ゼウス。アンタは何考えているんですか』

『……………』

『何でよりもよってアイツなんですか。アイツの能力じゃ、標的以外も巻き込む危険性があるのに……………！』

『だからこそだ』

『！？』

『…巻き込まれる人間を奴は必ず救おうとするだろう。そうすれば奴は消耗し、討てる確率が上がる』

『…助けられなかったヤツ等はどうなるんですか』

『……………尊い犠牲として消える』

『なん……………ッ！？』

『……………話は終わりか？なら下がれ』

『…ッそ！』

それが彼女が聞いたゼウスとメルクリウスの会話だ。

彼女は《セレス》。ムーの電波体、十二神将の一人だ。  
その黒衣の電波体は、この街の中で最も高いビルの上で目を瞑っていた。

(…巻き込む危険性がある…ねえ。メルクリウスの奴、何で人間の心配してる。相変わらず変わった奴だよ。…まあ、この場所だと想像以上に被害が出そうだが…)

心中で同僚を小馬鹿にしつつ、セレスは今いる場所の事を考える。  
ビル街。自分の能力が使用されれば、確実に百人は人間が死ぬであろう場所だ…と、セレスは苦笑する。

(…ま、それもゼウスの言う通り《尊い犠牲》って事で。悪いなーメルクリウス)

そう思った辺りで振り向いて目を開けた。

『…で、アンタは誰かな?』

その視線の先にいた人物に問いかける。

桃色を基調とした服装の金髪の少女だった。腕にはギターが抱えられている。一目で分かる。ただの人間ではない、電波人間だ。

その少女は顔を覆うバイザー越しにセレスを睨みながら名乗った。

「ハーブ・ノート。…そう言うあなたは？」

『《セレス・クエイク》』

逆に訊かれたので、セレスもさらっと名乗った。

『ハーブ・ノート…か。…で、何しに来たのかな？』

「…あなたを倒しに来た」

セレスが満面の笑みを浮かべる。

今何と言った？あなたを倒しに来た？

あの表情からして力の差は分かっている感じだ。それでもなお倒す  
と言いつ張った。面白い、本当に面白い。戦ってやりたい気分だ。

まあ無理だが。

『…私はアンタに用がないんで、戦うことは出来ないな。スマン』

「…は？」

セレスの言葉に、ハーブ・ノートが目を丸くして驚いている。

そう、戦ってやりたいのはやまやまなのだが、用がない。用がない相手とは戦わない主義なのだ。

うむ残念だ、とセレスは溜め息をつく。

「用…って、いや、私はあなたに用があるんだけど…」

ハーブ・ノートが困り顔で呟いている。

『…スマン。いくら私に用があっても、私が用がなかったら戦わないんだ。そういう主義なんだ』

セレスは手をヒラヒラさせながら言い放った。ハーブ・ノートが呆然としている。

『…ま、というわけで去れ。今の用事が終わったらアンタに用があるというところで戦ってやる』

「…あ、いやちょっと…」

その言葉にハーブ・ノートは戸惑っているようだ。

…さっさと終わらせてこの娘と戦いたいなあ…とセレスは思う。

そうやって溜め息をついた時だった。その声が聞こえたのは。

『セレス様』

『……おやあ？』

セレスが獰猛な笑みを浮かべる。その視線の先にいるのは、水色の衣を纏った金髪の電波人間。

セレスのターゲットの一人、セイレーン・インパルスだ。

『反逆者のセイレーンじゃないか。何？どうした？』

『……………』

セイレーンは黙っている。あちらは特に用がないようだ。

…そんなものは関係ない。

『…アンタには用があるんだよなあ、はは。…ってわけで死ね！！』

『……！』

セレスがそう叫ぶと、ビルの床を突き破って鳶が八本ほど現れた。それぞれの先端は槍の様に尖っている。

その鳶が全てセイレーンへ向かって加速した。

『ッ！』

セイレーンは一本、二本とかわし、いくつかを撃ち落とす。だが一本が、セイレーンの死角から襲いかかっていた。

セイレーンは気付いていない。これで任務一つ完了…と、セレスは思ったのだが…。

「シヨックノート！！」

その鳶が撃ち落とされた。攻撃主は、ハーブ・ノート。

『…ハーブ・ノート。何でセイレーンを庇うんだ？』

「そんなの、友達だからに決まってんじゃない」

セレスの問いに、ハーブ・ノートはキツパリと答えた。そのセリフで気付いた。セイレーンが裏切ったのはコイツが原因なのだ。

セレスの笑みの獰猛さが増した。ハーブ・ノートに告げる。

『喜べハープ・ノート。お前に用ができた。戦えるぞ』

・  
・  
・  
・  
・

ロックマンとブライは街中に無数にあるウェーブロードの内の一本の上を走っていた。

(…もう戦闘が始まってる。戦ってるのは……ミソラちゃん、それとセイレーンか)

ロックマンは走るスピードを上げた。

「…星河スバル、一応伝えておく。今来ている十二神将はおそらくセレス・クエイク。木属性で、《地》に関わる全てを操る能力を持っている」

ロックマンのすぐ後ろにいるブライがそう言った。

その内容や電波体の名前から、あまり想像したくない事が浮かんでくる。

《クエイク》で、《地》に関わる全てを操る能力。ロックマンは顔を青ざめた。

それに気付いたのか、ブライはああ、と呟いた後、告げた。

「奴は地震を自由に起こす能力も有している」

想像通りだった。

その能力は本気でマズい。このようなビル街でその能力を使えば、確実にビルが倒壊する。

(……………ここから早く離れさせるか…、倒さないといけない)

ロックマンは刺し違える覚悟で挑む事を決めた。

これ以上、自分のせいで危険に晒される人を増やしたくない。

・  
・  
・  
・  
・

セレスの戦闘能力は凄まじいものだった。

一撃必殺の威力を持った薦をいくつも操り、それで操っている本体が隙まみれかといえばそうではない。死角からの攻撃はどこからか現れた土で防御され、目に見えている攻撃はダンサー張りのステッ

プで軽々とかわされる。そしてその合間に反撃してくるのだ。

（　　）　　ッ！色んな事を同時に出来るとか…どんだけ余裕があるの！  
？）

ハープ・ノートはセレスの攻撃を避けながら思う。

出撃前にセイレーンに聞いた通りだった。十二神将は補佐官と呼ばれるシルフィーやセイレーンとは格が違う。攻撃後はシルフィーもセイレーンも隙ができていたのに、セレスには毛ほどの隙も見当たらない。

「セイレーン！」

『は、はい…』

ハープ・ノートが叫ぶとセイレーンが竖琴を鳴らした。何をすればいいのか、直感で分かったようだ。

耳をつんざくような音が響き、セレスの前の地面が爆発した。粉塵が舞い、セレスの姿が隠れる。

こちらからは見えないが、それはあちらからも見えないと言っただ。

しかしハープ・ノートは、わざわざ見る必要はない。聴けば相手はどこにいるのか分かる。

故に、セレスがどこにいるかは分かっている。

「マシンガンストリングー!!」

粉塵の向こうにいるセレスにギターの弦を伸ばした。『うつ!?!?』  
という声が聞こえたし、手応えもある。間違いなく捕らえた。

「シヨックノート!」

そのままシヨックノートを弦に乗せて放った。それは弦を伝い、セレスへと到達する。

『ぐああああ!?!』

粉塵の向こうからセレスの絶叫が聞こえてくる。攻撃が直撃したのだ。  
いける!と思い、追い撃ちをかけようとしたハープ・ノートだったが……。

『 なんてな』

直後に後ろから聞こえてきた声に硬直してしまった。粉塵の向こうで、《今も絶叫している》セレスの声だった。

「な…んで？」

理解できなかった。

セレスが後ろにいる。ならば粉塵の向こうにいるのは誰だ？

『…よおーく見てみる』

セレスがそう促した。言われるまでもない、既に粉塵の向こうを凝視している。

…見える影は間違いなくセレスだ。

…が、やがてビル風により粉塵が晴れ、それは姿を現した。

泥人形。泥により造られたセレスそっくりの人形がそこにはあった。

『《クレイマン》。私の身代わり用の技だ。滅多に使わないんだぞ  
』？

セレスが至極愉しそうに説明している。

(…ウンでしょ?)

ハーブ・ノートは愕然としていた。攻撃が全く通らない。これ程までに差があるのかと。

『…楽しかったよハーブ・ノート。一瞬でも私をヒヤツとさせた事を誇るといい』

ハーブ・ノートの前方に先端が槍のように尖った鳶が現れた。切っ先はハーブ・ノートに向いている。

『ミソラ!』

ハーブとセイレーンが叫んだ。避けると言いたいのだろうが、無理だ。この距離ではそれは叶わない。

『じゃあなハーブ・ノート。プラントランス』

鳶がハーブ・ノートに向かって動き出した。避ける動作も取れなかった。

何故なら、

「ブライナツクル！」

横から飛んできた拳型の闘気の塊がそれを弾き飛ばしたからだ。

「『……………は？』」

ハープ・ノートとセレスが間抜けな声を上げる。

同時に、

「バトルカード、ファイアバズーカ」

二人の後ろからそんな声も聞こえた。

「隙まみれじゃん」

ドバンツ！！という轟音が鳴り響き、セレスが凄まじい勢いで吹っ飛んでいく。

ハープ・ノートは呆然としている。

「や、大丈夫？ミソラちゃん」

「…………ふん」

ロックマンとブライがそこに立っていた。

「スバル君……！」

とソロ、とハープ・ノートは言った。

「間一髪だったね」

「うん、ありがとう。それに、ソロもありがとう」

ハープ・ノートはロックマンにお礼を言い、ブライには頭まで下げた。実質ハープ・ノートを救ったのはブライなのだ。

「…………ふん。勘違いするな。俺はセレスの隙を作るために攻撃しただけだ。貴様を助けたのではない」

「……って建前で助けたんだよね？ソロ」

「…………殺されたいか、星河スバル」

笑顔でそういうロックマンに、ブライは自分のウィザードへラプラ

ス」が变化した剣を向けた。

『……何くつちゃべってんだ』

そんなやり取りの中、後ろからセレスの音が響いた。

『…効いた、本当に効いたぞ星河スバル……！ 出てこい、クレイマン……！』

背中が焼け焦げているセレスは叫んで、無数の分身を造り出した。

「…身代わり用の技なんじゃないの？」

『攻撃にだって使えるに決まっているだろう』

セレスは腕を振って、クレイマンに命令した。

『ブツ潰せ。星河スバルとセイレーンを重点的にだ……！』

クレイマンが動き出し、ハーブ・ノート達に襲いかかる。  
ハズだった。

「……………は、あ？」

ハズだったのに、クレイマンは全て消し飛んでいた。突然立ち上った火柱に打ち砕かれたのだ。

「これは…！」

ハープ・ノートとロックマンがそれを見て笑みを浮かべた。この火柱に見覚えがあるからだ。

「…悪い、遅れた」

上空からそんな声が聞こえた。

そう、ここは夕凧中学校の近くのビル街なのだ。ならば当然、この騒ぎを聞き付けた学校内のサテラポリスメンバーがすぐに駆けつけてくる。

今ハープ・ノート達がいるビルの対面にあるビルの屋上に、ゴン太が電波変換した姿　オックス・ファイア、セレスの真上の空にジャック・コーヴァスがいた。

「ゴン太あ！コイツの周りにフレームタワー出せ！！」

「オツケー!!」

オックス・ファイアは言われた通り、セレスの周りに火柱を出した。セレスは身動きが取れない。

『…………ツ!?!』

「いきなり出てきて悪いんだけどさ。…まあ許せ」

ジャックは手に紫色の炎を纏わせながら、頭を下げた。

「ペインヘルフレイム」

そうしてジャックは、身動きの取れないセレスに容赦なく炎の雨を降らした。

### 第23話：護りたい

『はあ……はあ……！』

「……しごといな」

燃え盛る炎の中に、荒々しく息をしているセレスがいた。  
罵やら土やら泥やらで防御したらしいが、半分程度しか威力を殺せ  
なかつたようだ。相当なダメージを負っている。

『……セレス様、もうやめて下さい。6対1なんですよ？』

表情を失っているセレスにセイレーンは声をかけた。

『……んな。な……6……関……か』

セレスがぶつぶつ呟いている。声が小さすぎて誰も聞き取れなかつた。

「……もう君に勝ち目はないよ。だから」

『嘗めんなああああー！ーッ！ー！ー！』

もうやめろ。ロックマンのその言葉は、セレスの絶叫に欠き消された。

『何が6対1だ！勝ち目がないだ！？関係ねえんだよそんなモンは！！私は十二神将だ！テムエ等雑魚が6人揃ったところで、対等になんざなれねえ存在なんだよ！！！！』

今までと違う荒々しい口調で喚き散らすセレスは、両腕を思い切り振り上げ更に叫んだ。

『テムエ等全員に用ができたよ！ブツ潰す、ここら一帯ごとなあ！！』

両腕を振り下ろし、地に掌を付ける。  
震える！！と連呼するその姿に、ブライとセイレーンが戦慄した。

「早く止める！！」

『セレス様は地震を起こすつもりです！！』

「……な………ッ！？」「……」

全員が驚愕する。こんな場所で地震など起こされたら、確実に関係

のない人々が巻き込まれる。

セレスを止めるべく、全員が攻撃を仕掛けようとするが…、

『おっせえんだよ！！アースクエイク！！』

セレスが叫ぶと同時に、凄まじい揺れが襲ってきた。マグニチュードという言葉では説明出来ない規模の地震。耐えきれなくなったビルがどんどん傾いていく。

『ほらほら助けなくていいのかぁ？関係ない人間が大勢死ぬぞ！！』

そのセレスの言葉を誰も聞いていなかった。ブライ以外の全員は既にその場から消えていた。

・  
・  
・  
・  
・

結果として、人は誰も死ななかった。

ビルの倒壊はバトルカードで補強して防いだし、ビル内の人も路上の人も避難させた。

…その代償で、ロックマン達の体力はかなり削られていた。

「はぁ…はぁ…！」

『おー、お見事。頑張ったな』

前方からパチパチと拍手が聞こえてくる。見るとセレスが愉快そうな顔で立っていた。先程までの荒々しさは消えている。

『コイツも足止めとしてよく頑張った』

そう言うとロックマン達の方へ何か放られてきた。ドサツ…とロックマンの目の前に落とされたそれは…。

「ソロ…！？」

電波変換が解け、人間に戻ったソロだった。

一応生きてはいる様子だが動くことは多分、無理だ。

セレスは呆然とするロックマン達を一瞥し、鳶を二本呼び出した。

『…その牛と鳥だったな』

「ッ！やめ」

何をするつもりか分かったロックマンが制止の言葉をかけようとするが、間に合わなかった。

「「かは……！」」

セレスは鳶をフルスイングさせ、オックス・ファイアとジャック・コーヴァスを弾き飛ばした。10m以上ノーバウンドで吹っ飛び、ビルの壁に激突する。そこで人間の方も電液体の方も意識が途切れたのか、電波変換が解けてしまった。

「ゴン太……！ジャック……！」

ロックマンが呆然と呟く。

あっさりと、こつもあっさりと逆転されてしまった。

あの時、「やめる」なんて言ってる場合じゃなかったのだ。相手は十二神将、情けなどかけたらいけない存在なのだ。もっと非情になっただらば……と、後悔が押し寄せてきた。

『……星河スバル。アンタには絶望を与えてやる』

「…？」

セレスがそう言って、鳶を何本か出現させ、その内の一本でセイレーンを下から弾き飛ばした。

「セイレーン！！」

それを見たハーブ・ノートが倒れているセイレーンに駆け寄る。  
そのハーブ・ノートの背中を槍の様な鳶が貫こうと動き出したのを  
ロックマンは視界に捉えた。

「！！！！！！」

だから、ロックマンは……。

・  
・  
・  
・  
・

ハーブ・ノートがセイレーンを抱き上げた時、何か温かい物が身体に降りかかった。  
水だ。妙にドロツとした、鉄臭い水だ。

ハーブ・ノートはゆっくりと振り返り、絶句した。

右肩を蔭に貫かれ、おびただしい量の血液を流れ出しているロックマンの姿が目に入ったからだ。

あまりの光景に口が言葉をつむいでくれない。ただハーブ・ノートはそれを見ているしかなかった。

向こうの方では、意外そうな顔をしたセレスが佇んでいる。

「……………な」

やがて、血に濡れたロックマンの口が動いた。何を言っているのかは、近くにいるハーブ・ノートでさえ聞こえない。

『…何だって?』

聞き取れなかったセレスが訊き返す。

ロックマンはおそらく残っている力を全て使って、言った。

「この……娘に、だ……けは、……手を……出すな……！」

「……………!!」

『……………ほっ』

ハープ・ノートは目を見開き、セレスは感心したように笑みを浮かべた。鳶を一本ロックマンの首に巻き付け、持ち上げて宙吊り状態にする。

『なるほど。人間というのは面白いな』

セレスは不敵に笑いながらロックマンを締め上げていく。

「か……………はう……………」

「スバル…君…!」

まともに呼吸が出来ずに苦しむロックマンを、ハープ・ノートは呼ぶことしか出来なかった。

(まただ…。いつもこうだ。一緒に戦うとか言っておきながら、ちよっと敵が強くなっただけで足手まといになって…護られて…)

今までの経験がフラッシュバックする。

(何で私、こんなに弱いのかな？私だって、皆を…スバル君を護りたいのに…)

目尻に涙が浮かぶ。

「何で…私…！」

涙が零れて、腕の中のセイレーンに落ちる。

その時、セイレーンの腕がハーブ・ノートの上に巻き付いてきた。

『……………ミソラ』

「セイ…レーン？」

ハーブ・ノートは戸惑った。すぐ前にあるセイレーンの口が笑みの形を取っていたからだ。

セイレーンは力強く、言った。

『護りましょう』

微笑みと共に放たれたその言葉に一瞬キョトンとしてから、涙を拭

って、頷いた。

「…うん」

その時、二人を目映い光が包んだ。

第23話：護りたい（後書き）

セレスは女性です

## 第24話：歌姫

光の中で何が起こったのかは臆気にしか覚えていない。

…ただハッキリしているのは、…護れるだけの力を手に入れたという事。

・  
・  
・  
・  
・

セレスは自分の身に何が起きたのかしばらく理解出来なかった。

確か、ロックマンの首をへし折ろうと蔦で締め上げていたハズだ。

それなのに…

何故、地に伏してハーブ・ノートに足蹴にされているのか。

…いや、そもそも踏みつけている人物は本当にハーブ・ノートなのか？

《地面に届きそうなほど長い金髪で、薄桃色の羽衣を纏っている》  
その人物は本当にハーブ・ノートなのか？

セレスは疑うが、目だけで彼女の顔を見た時、それを決定付ける物を見つけた。

彼女のヘッドフォンの様な装備、その耳当て部分に、ハーブ・ノートのトレードマークのと同じ柄のハートが描かれているのだ。

…間違いなくハーブ・ノートだ。

しかしそれなら、一体彼女に何が起こったと言っただ。この姿、まるで《ハーブ・ノートとセイレーンが掛け合わされた》かの様に見える。

セレスはそれを訊ねようとしたが、その前にハーブ・ノートに蹴っ飛ばされた。

・  
・  
・  
・  
・

スバルは呆然としていた。

電波変換が解けた。肩に刺さっていた蔦が抜けて血が噴き出した。それらがどうでもよくなるくらいの光景を目の当たりにしていた。

何か光ったと思ったら、ハーブ・ノートの姿が変わった。驚くほど綺麗に…むしろ神々しいほどの姿に。

思わず自分が死にかけたというのも忘れてしまうくらい、スバルは彼女に見とれていた。

セレスを蹴っ飛ばすハーブ・ノートが見えた。しかし次の瞬間には自分の目の前にいた。全くバラバラの位置に倒れていたハズのソロ、ゴン太、ジャックを抱えてだ。

ハーブ・ノートは三人をスバルの近くに降ろすと、

「『ヒールソング』」

そう呟いて、スバルには理解出来ない言葉で唱い出した。

……………すると、

「……………傷が!?!」

ソロ、ゴン太、ジャックの打撲傷、スバルの肩の穴、それらが全て癒えていく。

やがて、そこに本当に傷が有ったことを疑うレベルにまで回復した。

「……………ミソラ……………ちゃん?」

スバルは呆然と名を呼ぶ。ハープ・ノートは背伸びをした後、スバルに言った。

「『大丈夫だから』」

何が?と訊こうとしたスバルだったが、それがつむがれる事はなかった。

ハープ・ノートの背後から、十数本の蔦が一斉に襲いかかって来たからだ。

ハーブ・ノートは気付いたようだが、見もせず、驚きもせず、慌てもせず、ただ佇んでいた。何かしたかと言えば、口を少し動かしただけだ。

…しかし、

バシユツ！と、それだけで薫が消滅した。

そう思った時には既にハーブ・ノートは消えていた。

(何だ、あの目?)

スバルは戦慄した。彼女が口を動かした直後、一瞬だが目を見た。

その目は、ゾツとするほど冷たかった。

・  
・  
・  
・  
・

『な……がッ!?!』

薫が消された事に驚く暇もなかった。いつの間にかハーブ・ノートは目の前にいて、セレスに上段蹴りを叩き込んでいた。

セレスは横に吹っ飛び、その先に一瞬で移動してきたハーブ・ノ

トに殴られた。  
吹っ飛んだ勢い+パンチ力で、凄まじい痛みがセレスを襲った。勝手にカウンターを成立させられたのだ。

『ぐく……つぶ！?』

地に手をついて土下座するような体勢になっていたセレスは、そのまま自身の最高の技、アースクエイクを行おうとして、震えると口を動かそうとした。  
しかしその前に、ハーブ・ノートに頭を踏みつけられて顔が地面にめり込み、口が動かなくなった。

(……何だ、コレは?この私がるで赤子のように……?)

焦燥感に駆られたセレスは最後の抵抗とばかりに、ありったけの葛やクレイマンを呼び出し、襲わせた。

しかし、それら全てはハーブ・ノートが何か言葉をつむいただけで消滅した。

(……そんな)

セレスは絶望した。力の差がありすぎる。全く歯が立たない。

『……なん…なんだアンタは？本当にハープ・ノートか？』

セレスは頭を動かし、なんとか喋れるような状態にしてから訊いた。

それにハープ・ノートは簡潔に答えた。

「『ハープ・ノートだよ。』ハープ・ノート ディーヴァスタイル」

ディーヴァスタイル。それがこの姿の名前らしい。

(ディーヴァ…歌姫か)

なるほどやはりそうか、とセレスは思った。

ハープ・ノートとセイレーンは音の能力者だ。その二人が何らかの理由で融合したのがこの姿なのだ。と。

(…はは。そうなたただけでこれほど差が出るのか)

セレスの十二神将としてのプライドが折られた。どうしようもない差を痛感した。

最後の力を振り絞り、セレスは鳶を一本呼び出した。それは動き出し、突き刺さった。

セレスの身体に。

(…最後のプライドだ。殺されるくらいなら、自ら死ぬ)

セレスの口が笑みの形を作る。

その様子を見て、ハーブ・ノートは足をどけた。スバルが戦慄した冷たい目は、いつもの目に戻っている。

ハーブ・ノートは敵に向ける物とは思えない、心配するような目を向けた。

「『…セレス』」

セレスは顔を上げてそれを見て、大声で笑いだした。

辺りにその声が響く。

笑いやめた後、残響すらも聞こえなくなったあたりで、セレスはハーブ・ノートに告げた。

『楽しかったぞ。ハープ・ノート』

「『…どうも』」

セレスは満足そうに微笑み、消滅した。

第24話：歌姫（後書き）

強くしすぎたかな？と思いました。

## 第25話：新たな力

セレスの消滅を見届けた後、ハーブ・ノートは何とも言えない高揚感に満たされて空を見上げた。

(……やった)

これがいつもスバルが感じているものか…と、微笑む。

(……それにしても)

ひとしきり感動した後、ハーブ・ノートは奇跡的に割れていないシヨウウィンドウにうつすらと映る自分の姿を眺めた。

(何だろう、これ？勢いでディーヴァスタイルとか言ったけど…?)

実は自分でもこれが何だかは分かっていない。

分かっている事は、セイレーンと融合した事。戦闘能力が異様に向上了事。

そして《感情の揺れが激しくなる事》。

最初はスバル達を護ろうとされていた。だがあの時、セレスが自分に

攻撃してきた時、その《護ろう》という思いが欠き消え、セレスを《打ちのめそう》という思いしか浮かばなくなった。

まったく、わけが分からない。

『ミンソラ』

「『……………何ハーブ？』」

『…ちよつとキツイ』

ハーブが現れてそう言った。

キツイとはこの、ディーヴァスタイル（仮称）でいる事だろうか。

まあ分からなくもない。ぶっちゃけ言つとミンソラもそろそろ限界だった。

「……………ふう」

電波変換を解いた。ハーブと一緒にセイレーンも現れて、触媒のエランドが倒れ込む。

「…二人とも大丈夫？」

『はい』

『大丈夫よ』

ミソラは溜め息をついた。…いつもより疲れる。だが、悪い疲れではない。むしろ心地よい。

「…ミソラちゃん」

そう思っていた時、後ろからスバルが声をかけてきた。

スバルは続ける。

「大丈夫？」

ミソラは一瞬キョトンとするが、すぐに微笑んで頷いた。

「大丈夫だよ」

・  
・  
・  
・  
・

スバル《ゴメン。今日は行けそうにない》  
ゆたか《おう。お疲れ様》  
キクリ《まあ仕方ないよね》  
カイリ《今日はゆっくり休んでて》

先程スバルが行ったメールのやり取り。

スバル達はサテラポリス本部に来ていた。  
今日の事件の報告に来たのだ。

「 というわけです」

サテラポリスのエース、暁シドウに全てを伝え終えたスバルはシドウから半歩遠ざかった。

シドウはううむ、と言って顎を押さえた。

「十二神将に、…ミソラの新しい変身・ディーヴァスタイルか…」

シドウはミソラに訊ねた。

「なあ、どうやってディーヴァスタイルっていつのになったんだ？」

「……え？あー、どうやって……って……」

訊かれたミソラはハープを見る。見られたハープはセイレーンにバトンタッチよ、と言わんばかりの視線を向けた。

『……あー、その……ですね』

セイレーンは何か言葉を探すように宙を眺めた後、こう言った。

『同調……だと思います』

「同調？」

首を傾げるシドウにセイレーンは続ける。

『はい。…ディーヴァスタイル？になる前に、私とミソラは…《護りたい》という想いを抱いていました。…それで、そうなったんだと思いますけど…』

「あー、なるほど」

シドウは納得した様だった。

「待ってくれ」

しかし、ジャックは納得していない様子だった。

「それだったらおかしい。それなら、二年前：俺と姉ちゃんも《夢を叶えたい》って想いで同調出来たハズだぜ？」

苦い顔をしながらジャックはクインティアを見る。

「…そうね。あなたの言う通りなら、私とジャックも融合して変身しているハズ」

クインティアが冷やかな目を向ける。

だって仮説ですもん…、とセイレーンはうなだれた。

「…ふん」

すると突然、今まで静観していたソロが鼻を鳴らした。

「ムーの力ならそれも可能かも知れないな」

「え？」

「…何でもない。……………帰らせてもらっぞぞ」

そんな言葉を残して、ソロは部屋を出ようとする……………が、その直前にミソラの方を見て止まった。

「…響ミソラだったな。…一応礼は言っておこう」

そう言って、今度こそソロは出ていった。

「……………」

皆ポカーンとしていた。色んな意味で。

『絶対アイツこの二年で丸くなったぜ』

「…そうだね」

ウォーロックは感心して、スバルは何か嬉しそうにしている。

まあそれより、とシドウはソロの残した言葉の意味を考える。

「ムーか。そうだな、キーは多分そこだ」

セイレーンはムーの電波体で、ジャックのウィザード、コーヴァスやクインティアのウィザード、《ヴァルゴ》はFM星の電波体だ。もしあの変身にムーの力が関係しているのなら、ジャックとクインティアが融合しなかった事も頷ける。

……誰もあえて、「ハープもFM星人じゃん」とは言わない。これ以上話をややこしくしたくないのだ。

しばしの沈黙の後、シドウは口を開いた。

「それについては後でじっくり考えるとして……」一拍置いて「名前決めようか」

……… 凄く気の抜ける提案をしてきた。クインティアが呆れ顔で問う。

「……そこ重要かしら」

「重要だろう。ちゃんとした呼び名ないと面倒だし」

まあ分からなくもない。電波人間同士の融合なんて長くて呼びにくい名前は確かに面倒だ。

「融合……は、使い古されてる感じだなあ」

ゴン太がおそらく昔の漫画を思い出しながら言った。

「融合……重ね合わせ……二重？」

ミノラがうんづん唸りながら呟く。その呟きを聞いたスバルがそれ、と手を叩いた。

「いいね、二重」

「え？」

「二重、《デュアル》だよ。電波人間の融合……言っちゃえば二重の電波変換。なら丁度いいと思うよ」

響きもいいし、とスバルは付け足した。

おお……という声が聞こえる。

シドウはかなり気に入った様子で、

「それいいなスバル。…よし、《デュアル》に決定！」

声高らかに叫んだ。

こうして、ミソラは新たな力デュアルを手に入れた。

## 第26話：ムーの神話

メルクリウスはゼウスの命令で、セレスと同時期にスバル達の世界に来ていた。調査に来たのだ。

だから、セレスが死ぬ瞬間も見た。助けたいとは思ったが、メルクリウスが助ける事によって彼女のプライドがどれほど傷付くかを考えてやめた。セレスにとって、助けられて死ぬのを免れるというのは逆に死よりも辛い事だ。前にそんな事を言っていた。なら助けない事が彼女にとって最大の助けになる。そう考えて助けには入らなかった。

当然、ハーブ・ノートとセイレーンの融合した姿も見た。その圧倒的な力も。

ハッキリ言って、アレは異常だ。おそらく十二神将の中で彼女と同等に戦える者はそういない。

メルクリウスでも、非常に分が悪い。

メルクリウスはそれらの情報を持ってムーの根城に帰り、大広間にてそれを報告した。

セレスの死亡、星河スバル以外の強敵の出現は、十二神将全員に衝撃を与えたようだった。

そんなわけで会議も終わり、メルクリウスは自分の部屋でくつろいでいた。

『…響ミソラとセイレーンがそんななっちゃうなんて…』

シルフィーがそう呟いた。

『…ま、誰も予想しなかったろうな。多分、本人達も』

メルクリウスが寝つ転がりながらシルフィーに言った。

『うーん…。…あ、そう言えば十二神将欠けちゃいましたけど、どうするんですか?』

『…ん?ああ、また《候補》から引き抜くんだろ。《バツカス》みたいにな』

その言葉にシルフィーは不平を洩らした。

『また《候補》なんですか?…うー、たまには補佐官からも引き抜きましょううよー』

『無理』

『即答!?!?』

シルフィーが目を丸くして驚いていた。メルクリウスは溜め息をつきつつ説明を始める。

『十二神将つてのは、ムーの電波体の中で《神クラス》って呼ばれてる存在だけがなれる役職だ。補佐官クラスのお前には絶対無理』

『補佐官クラスつて…私とつくにその域を出てますよ！修行しましたもん！何ですか？何が足りないって言うんですか！？』

シルフィーが憤慨している。…まあ、シルフィーの力が補佐官クラスの域を越えているのは認める、認めるが……。

『…《神クラス》つてのは、修行とかで到達するモンじゃないし、並がただ頑張りうと追い付けないんだ。《神クラス》は最初から決まってるんだ』

ここは事実を突きつけるところだ。

『《神クラス》の電波体は、ラ・ムーが最初に造った…《デウス・エクス・マキナ》とか呼ばれてる電波体が分裂して生まれた15体の電波体だ……つてのは知ってるよな？』

『知ってますけど、それ神話でしょう？。そんな曖昧なものを信じ

ると?』

『信じるよ。俺が存在しなくなるだろ』

ツッコミを入れてからメルクリウスは続けた。

『……その《デウス・エクス・マキナ》から生まれた俺達は、他の  
ムーの電波体とは一線を画す戦闘能力を持ってて』

『自画自賛ですか?』

『マジメに聞けや。……まあそんなわけで《神クラス》と《神クラ  
ス》以下との力の差は絶対的なんだ』

『めちゃくちゃはしりましたね』

『お前がマジメに聞かねえからだろうが!』

キレて叫んだがシルフィーは顔を背けて聞く耳持たず状態だった。  
どうやら拗ねているらしい。

…何この娘、相手にすんのめんどい…と、メルクリウスはうなだれ  
た。

『…で、誰を引き抜くんですか?』

とりあえず諦めたのか、そんなことを聞いてきた。

『あー、《候補》の二人…《ハデス》と《ペルセポネ》…どっちも捨てがたいんだよな！。二人ともハッキリ言っつて《五本指》に次ぐくらいの力持つてるし』

『……………』

『まあ、ペルセポネになるんじゃないか？ハデスはよく考えたら前の引き抜きの時も拒否』

『やめてー！ペルセちゃん持ってかないでー！』

『ペルセちゃん！？』

《神クラス》に対して凄い呼び方をしていた。

『…お前、ペルセポネと友達か何か？』

『友達？ハッ、笑わせないでください』

シルフィーは力を溜めて、言った。

『私と彼女は“ペルセちゃん”“フィーちゃん”と呼び合う仲……親友です!』

更に続く。

『私、一人でいて暇な時とかは大抵ペルセちゃんの部屋にいるんですよ!』

『はあ』

『…ふっ、まあ友達のいないメルクリウス様には分からない世界ですよね』

軽く馬鹿にされた。これは反論しないわけにはいかない。

『俺だっているわ友達ぐらい!』

『同僚の間違いでしょう』

『いるわ!』

『へえ、誰ですか?』

『アルテミスとか』

メルクリウスはとりあえず一番に思い付いた人物の名前を上げた…

…、ら、

『…………へえ』

シルフィーが物凄く冷たい目で見してきた。

『…何だよ？』

『…別に』

何で機嫌悪くなったんだ？、とメルクリウスは首を傾げた。

・  
・  
・  
・  
・

『…結局、引き抜くのは誰なんですか？』

まだ微妙に不機嫌なシルフィーが訊いてきた。

『ペルセポネになるんじゃないか？』

『鬼！悪魔！』

『俺に言うなよ。最終的に決めるのはゼウスなんだから』

『ゼウス様のバカーー！！』

シルフィーが絶叫した。

……その時、

『ほっ』

ひっ、とシルフィーの顔が引き吊った。聞き覚えのある老人の音が後ろから聞こえたからだ。

『ぜ、ぜぜぜぜっゼウス様？』

シルフィーはゆっくりと振り返りながら名を呼んだ。そこにいたのはもちろんゼウスだ。

『馬鹿…か』

『いや…え、…その…ですね…』

必死に弁明しようとするが、もう遅い。バツチリ聞かれた。

『……………』

『は、はっ…はは』

これは消される、と死を覚悟するシルフィーだったが、ゼウスはふむ…と呟いただけで罰を下さなかった。

『…お前の意見も尊重しよう。多少無理をしても、ハデスを十二神将に引き抜く』

『…あ、はあ。ありがとうございます』

え、何これお咎めなしって事？とシルフィーは混乱する。

そんなシルフィーを尻目にゼウスはメルクリウスを手招きした。

『…あ、はい』

部屋を出ていったゼウスに、メルクリウスは着いていった。

・  
・  
・  
・  
・

ゼウスにより伝えられた事柄に、メルクリウスは驚愕していた。

『次は、《ヘステイア》とバツカスを出そうと思う』

二人。次の任務は二人がかりでやるという事だった。

しかし驚いたのはそこではない。それが、二人がかりで星河スバルを倒そうという意味ではなかった事に驚いたのだ。

『厄介な施設を見つけたのでな。星河スバルの撃破と並行して破壊しようと思う』

訊くと、こちらの世界へのゲートを探し出そうとしている施設があるという。

アテナがゲートを捕捉した瞬間、一瞬サーチをかけられたらしい。

…納得は出来なかった。あくまで十二神将の目的は星河スバルを討つ事だ。いくらその施設が邪魔だろうと、破壊する必要はないではないか。やってしまえば、大勢の人間が死ぬ。

それを伝えたのだが、ゼウスはあっけらかんと言った。

『こちらに攻め込まれると困るだろう？そんなことがされる前に潰しておくのが最善とは思わないか？…なに、その時死ぬ人間達は私達の目的を遂行する上での…《尊い犠牲》というやつだ』

昔のゼウスならこんなことは言わなかった。必要ない犠牲は出さない、そういう人物だった。

最近、おかしい。

《尊い犠牲》など、ゼウスは絶対言わないはずなのに、最近よく口に出している。

…何か、変だ。

メルクリウスは去っていくゼウスの背中を眺めながらそう思った。

第26話：ムーの神話（後書き）

何だ？今日三つも更新したぞ？

どうしたんだ俺？

とりあえず風呂敷広げすぎた感があります

## 第27話：小さな不幸

中間テスト最終日、理科のテスト。

くスバルの場合く

(…コロナ。えーと、黒点…4000…。…プロミネンス…  
水星との距離　　って太陽！しつこい！僕への当て付けかコレ！  
?)

くミソラの場合く

(…夏の大三角形…、パス、パス、パス…。あ、《牡牛座を次  
の中から選んで記号で答えなさい》…牡牛座…オックス君だ！やつ  
た、分かる分かる！オックス君探せばいいんだ！はは　　あ？あ  
れ？オックス君どれ？)

そんな感じで中間テストは終わった。

・  
・  
・  
・  
・

放課後。

「スバル君、どうだった？テスト」

「できた…けど、精神的に疲れた」

「太陽いっぱいあったもんね」

スバルは疲れきった表情、ミソラはあーこりゃ終わったわ、な表情で帰路に着いていた。

「  
」

空気が重い。早急にこの空気を変えなければと、スバルは何か話題がないか思考した。

「……あ、ミソラちゃん前にコダマタウンに引っ越すって言ったよね。いつだったけ？」

「来週だよ？」

「来週!？」

そんなに日が迫っていたっけか?とスバルは慌てた。

夕凧中学に入学してすぐ、ミソラは引越す事になったと伝えてきた。

ミソラの住んでいるベイサイドシティから夕凧中学まではウェーブライナーを用いても一時間以上かかるのだ。それでは毎朝大変なので、夕凧中学まで十分程度で行ける上に仲のいい友達もいるコダマタウン(委員長の住んでいるマンション)に引越す事になったらしい。

「来週か……。やっべ、早く準備しないと……」

「?」

最後の方が小声になったので、ミソラは聞き取れなかった。首を傾げる。

とりあえず話題転換。

「ミソラちゃんこの後WAXA行くんだよね」

「そうだよ。ディーヴァスタイル見せて欲しいってさ」

四日ぶりの電波変換だー！とミソラは背伸びをした。

セレスの一件の後、ディーヴァスタイル（デュアル）という強大かつ未知の力を使ったミソラは電波変換を禁じられた。特に身体に異常はなかったらしいが、念のためらしい。

で、それが今日解禁されるのだ。

「へえー、頑張ってたね」

「あれ？来てくれないの？」

「僕もう見たし、それに何か…見たら自信なくしそうで…」

「あー……」

また空気が重くなった。

そしてその空気が変えられる事はなく、駅に着いて別れた。コダマタウンとWAXA日本支部は反対方向にあるのだ。

「バイバイ」

・  
・  
・  
・  
・

「……………何事？」

スバルは家に帰って開口一番そう言った。  
仕方のない事だ。鍋から泡が吹き出していて、キッチン全体にバチバチ電気が流れて火花が散っていれば大体そうなる。

「…何か突然コンロがショートしちゃって…」

スバルの母、あかねは慌てふためきながら状況を説明していた。  
いや、うん、それは、まあ……………

「十中八九ウイルスが原因だね。……………GO！ウォーロック！」

『はいよー！』

ウォーロックがコンロの電腦に入っていくた。

……………。

五分後。

『…ふう』

ウォーロックがいい汗かいたー！という顔で出てきた。

電波体なのだから汗かくもクソもないのだが。

「あ、おかえり。遅かったね」

『まあ、電腦内にビッシリとメットリオがいたからな』

うちのコンロに一体何があったのか。

「絶景だったろうね」

『絶景だったぜ』

ウォーロックがふう…と息を吐いて壁に寄りかかった。

『ちよい、休む』

そう言っただけ目を閉じた。……眠ったらしい。

……すると、

「……………何事だ？」

スバルの父、大吾が帰ってきて開口一番そう言った。

仕方のない事だ。泡まみれの鍋やまだ若干バチバチ鳴っているキッチン、壁に寄りかかって寝ているウォーロックを見たら大体そうなる。

状況説明は面倒だったので、はぐらかした。

「……って、父さん、今日随分早いんだね。仕事もう終わったの？」

スバルはまだ昼過ぎだというのに帰ってきた大吾に訊ねた。

「終わってはいないけどな。ヨイリー博士にたまには休みなさいと言われてな……」

「あーなるほど。……で、“アレ”は完成したの？」

「九割方な。もう少しだ」

「そっか。……お腹空いたね」

スバルはキッチンを眺めながら呟く。大吾は苦笑いし、あかねは唸りながら思考していた。

「うーん。……外食にしましょうか」

「それがいい」

そんなわけで、キッチンを一旦放置して三人は外へ出ていった。

・  
・  
・  
・

「……あー、え？」

『……?』

ミソラとセイレーンは非常に困っていた。  
何故かセイレーンがエラントと電波変換出来ないからだ。

「……………何コレぞーいうこと？」

『私にも何が何だか……………、……………あ』

セイレーンはエランダの体を隅から隅まで見渡して、何かに気付いたようだった。

「どうしたの？」

『……………核が、壊れてます』

「……………何で？」

セイレーンの言葉にミノラは戸惑っばかりだった。

『何でしようね、コレ。…何か過負荷がかかったような……………、……………あ』

またセイレーンは何かに気付いたようだった。しかし、流石にミノラでも今のセリフで分かった。

「……………デュアルのせいだ』」

つまり、ディーヴァスタイルの強大な力にエランドが耐えきれなかったという話だ。

「どうしたーミソラー？」

シドウがミソラー達とは離れた位置にあるベンチに座りながら訊いてきた。簡潔に答える。

「何かエランド壊れててセイレーンが電波変換出来ませーん」

「何い!?!」

シドウがえらく驚いていた。楽しみにしていたゲームをプレイ前に取り上げられた子供のような顔をしている。

見物していたシドウやその他の人々が寄ってくる。

「うーん残念。ディーヴァスタイル見れると思ったのに」

シドウが本当に残念そうな顔で呟いた。

「すみません。……ていうか、これどうすれば……」

「……直す以外にないよな。……構造とかさっぱりだけど」

ミソラとシドゥは溜め息をついた。見物していたWAXAの職員も溜め息をついていた。あー、こりやまた仕事増えるな、と。

……デュアルが戦力になるのはまだ先のようだ。

## 第28話：二人の神将

何か変だ…とスバルは思った。

ちゃんとしたレストランの食事なのに何か満足できない。多分、母であるあかねの方が厨房のスタッフより料理が上手いのが原因なのだろう。

「……夕飯までには是非とも直していただきたいのですが」

「任せろ」

「頼みますね大吾さん」

というわけで、家に帰ってきて早速大吾はキッチンの修理を始めた。  
…おそらくここにおいても役に立たないだろうから、スバルはもう一度外に出た。

・  
・  
・  
・  
・

「……ロック」

『あん？』

「踊って」

『おっ……っ……って、何でだ!?!』

さらっと言われたせいで、ウォーロックは一瞬了解しかけた。

「不満?じゃあ、踊りながら歌っても構わないから。ハイ!」

『不満なのはそこじゃねえよ!踊らねえし歌わねえよ!ハイじゃねえよ!何がしてえんだお前は!?!』

「暇潰し」

『さらっと言っなあああー!?!』

ウォーロックが絶叫する。ウォーロック弄りも結構暇潰しになるなあ、とスバルは思う。

『 気楽なものですね』

その時だ。その声が聞こえてきたのは。

『自分の命が狙われているという自覚はあるんですか?』

スバルとウォーロックは声のする方を向いた。そこには身の丈程の  
大刀を背負い、腰に酒瓶のような物をぶら下げている青年がいた。

『お前は……？』

『初めまして、ボクはムーの電波体、十二神将が一人、《バツカス・  
アンガー》。以後お見知りおきを』

・  
・  
・  
・  
・

WAXA日本支部内は騒然としていた。敵襲だ。

『気をつけて下さい……！十二神将です！』

セイレーンがそう叫び、皆が更に慌てた。それではサテラポリスの  
警備ウィザードとときではどうにもならないからだ。

(……シドウのアシッドは今使えない。ミソラちゃんは私達の切り  
札だし、セイレーンは戦えない)

クインティアが思考する。

(…てことは、今動けるのは私のみ)

そこに至った瞬間、クインティアはシドウに告げた。

「私が行って時間を稼ぐ、その間にエランドを修理して、シドウ」

「クインティア！？それは……」

「いいわね！」

シドウの返事を聞かず、クインティアは部屋を出ていった。

「……しゃーない、やるか」

出る直前、シドウのそんな声が聞こえた。

玄関に向かう途中、彼女のウィザード、ヴァルゴが出てきた。

『キャハハハ！やる気ねティアー!!』

「仕方なくよ」

高らかに笑うヴァルゴに冷たく返す。

『まーいいわ。戦えるんならそれでいい!』

ヴァルゴがそう叫んだ辺りで玄関を出た。その先に、

『……ありゃ、あなた一人? 嘗められたモンだね私も』

修道女と魔術師の中間くらいの服装の女性がいた。両手に杖を持っている。

『私はムーの電波体、十二神将が一人、《ヘスティア・ブレイズ》。ここを潰しに来たよ』

・  
・  
・  
・  
・

ロククマンとなったスバルはバツカスの攻撃をかわし続けていた。先程からこんな感じで攻撃が全くできない。

『速いですね、流石です!』

バツカスが大剣を横薙ぎに振るう。それをしゃがんでかわし、ようやく攻撃の機会を得た。

「そりゃどうも!」

ロックバスターを連続で放つ。それは全てバツカスに命中するが…

『…これがどうしたんですか?』

全く効いていなかった。

「…チャージなしだとやっぱキツいか」

ロックマンは呟いて距離を取った。あの大剣のリーチ外に出たのだ。…ただ、これでロックマンが有利になったかと言えばそうではない。ロックマンの主力バトルカードは全て接近戦用のカードだ。この距離で使えるカードは、補助や牽制用のカードしかない。こんなバカみたいなフォルダを組んだ事を今さら後悔した。

『どうしました？来ないのですか？』

バツカスが挑発してくるが、乗る必要はない。これからどうするかを考えるのが先だ。

『それならば…』

バツカスが剣を空に翳した。

『こちらから行きますよ』

『…』

ロックマンの顔が青ざめた。逆光でよく見えないが、おそらくあの剣は発光している。剣が発光。それが意味する事は一つ。

『エナジーブレイド』

遠距離攻撃。降り降ろされた剣から衝撃波が放たれ、地面を走ってまっすぐロックマンに向かって来る。ロックマンはかわさなかった。かわそうと思えばかわせたのだ。

理由は、今避ければ両親が中にいる自分の家に命中してしまうからだ。

「バトルカード、ヘビードーン！オーラ！」

ロックマンはまずヘビードーンで壁を造り、自分にオーラを張った。その作業の直後、衝撃波が到達した。

ヘビードーンが一瞬止めるがすぐに破壊され、オーラに激突する。ヒビが入るが力を込めて割れるのを防いだ。

「あああああー！ー！ー！ー！ー！」

衝撃波の軌道が上に逸れると同時にオーラが割れた。ふと空を見上げると雲が真っ二つになっていてゾツとした。

『……………流石』

バックスが目丸くして驚いていた。まさか避けないとは思わなかったし、軌道を逸らされるとも思っていなかったのだらう。

「……………バックス。場所、変えるぞ」

ロックマンは展望台の方を指差しながら言った。

『いいでしょう。どうやらここでは本気で戦ってもらえないようですし』

バツカスは頷いた。

その後、周波数変換で二人は展望台まで移動した。

・  
・  
・  
・  
・

電波変換してクイーン・ヴァルゴとなったクインティアは、ヘステイアとの戦闘を優位に進めていた。

クイーン・ヴァルゴの属性は水、対するヘステイアの属性は火。相性がいいのだ。

「…ハイドロドラゴン…！」

クイーン・ヴァルゴは杖を回して水の龍を呼び出し、ヘステイアに攻撃した。ヘステイアは両手の杖を十字になるように合わせて、そ

ここから炎を発生させる。

「ランパードフレイム!!」

その炎が巨大な壁を造り、水の龍を受け止める。そのまま水の龍は熱で蒸発して消えた。しかし息つく暇もなくクイーン・ヴァルゴの雨の攻撃がヘスティアを襲う。

『くっ…』

炎での防御は間に合わない。よってヘスティアはそれをバックステップでかわした。…その先に、

「…ハイドロドラゴン」

杖を回しているクイーン・ヴァルゴがいるとも知らず。

水の龍がヘスティアの背中に直撃し、ヘスティアを丸飲みにする。水の中からくぐもった悲鳴が聞こえてくる。

「……これで終わり……なわけないか」

クイーン・ヴァルゴがそう呟くと同時に、水の龍が破られてヘステイアが出てきた。

『……………はあ。やるじゃん』

「……………」

クイーン・ヴァルゴの顔が強張る。理由はヘステイアの身体。弱点属性の直撃を受けたというのに、大してダメージを負っていないのだ。

流石は十二神将、とクイーン・ヴァルゴは思わず感心した。

『…強いねあなた。戦闘能力は中の上、戦闘センスもあって、……多分頭も良いよね。羨ましいなあ』

ヘステイアがクイーン・ヴァルゴに羨望の眼差しを向けている。

『…私達の認識が間違ってたかな。強敵は星河スバルやハーブ・ノートだけじゃないね』

ヘステイアは右手に持っている杖をクイーン・ヴァルゴに向け、言い放った。

『…まあ、負ける気はないよ』

クイーン・ヴァルゴはその言葉を聞いてふっ、と鼻で笑った。

「…今まで防戦一方だったくせに、よくそんな事が言えるわね」

一拍おいて続ける。

「まず相性を考えなさい。私は水属性、あなたは火属性なのよ。分かる？…あなたは私には勝てない」

宣言されたヘスティアは、相性ねえ…と呟き、二つの杖を前に翳しそこに炎を灯した。

『ラピッドファイア』

その炎がいくつもの小さな炎に別れて銃弾の様に放たれた。クイーン・ヴァルゴは慌てもせず、水の防壁を張りそれを防いだ。

ヘスティアは特にリアクションも取らずに、一言バカだなあと呟いた。

そして、両手の杖を自分の両サイドで回転させた。端の方に炎がまとわりついている。

ヘスティアはその状態でクイーン・ヴァルゴを見つめ、言い放った。

『水VS火〓水の勝ちとか、本気で思ってたの？』

第28話：二人の神将（後書き）

酒の神と釜戸の女神降臨

## 第29話：大甘

ロックマンとバッカスは展望台の上のウェーブロードで戦闘を行っていた。オールレンジなバッカスにロックマンはかなり苦戦している。

『どうしましたあ!?!』

「何も、ない!?!」

振り降ろされた剣をかわしながら、ロックマンは叫んだ。それと同時にチャージしたロックバスターを放つ。バッカスは肩口にそれを喰らうが、たいしてダメージにならなかったのか怯むことなくすぐに反撃してきた。

横薙ぎに振るわれたその剣をジャンプしてかわしながら、バトルカードのマッドバルカンを放つ。  
しかしそれは“片手”で戻された剣の刀身に弾かれた。

「!?!」

ロックマンはバッカスと充分すぎるくらい距離を取り、腕を刀に変エドギリブレイド化させて身構えた。ロックマンの頬を汗が伝う。  
気付いたのだ、バッカスの微妙な変化に。

(アイツ、今まで両手で剣を振ってたのに、今片手で……！)

バツカスを見ると、あの身の丈程もある大剣を片手で軽々振り回していた。

片手で扱っている方がバツカスにはしっくり来ている。ロックマンは何故かそう思った。

『……やべえぞ』

ウォーロックが珍しく焦ったような声を上げた。もしあれがバツカスの本来の型なのだしたら、確かにかなりヤバイ。ロックマンは既に今までの両手で振り回す型に慣れてしまっている。ここでいきなり戦い方を変えられると、かなり戸惑う。

『エナジーブレード!!』

バツカスが剣を発光させて縦横無尽に振り回した。その一振り一振り毎で衝撃波が放たれる。…ここも違っていた。

大きさや威力などは両手時より落ちているが、数があまりにも多かった。いくらなんでもかわしきれない。

…ならば、

「…援護よろしく」

『おっ』

迫り来る衝撃波を前に、ロックマンとウォーロックはそれだけ言葉をかわすと、駆け出した。ウォーロックも現れて並走する。

そう、衝撃波の威力は落ちているのだ。

「…ッ！ほっ！」

かわす分はかわし、かわせない分はエドギリブレードで破壊する。その際にエドギリブレードも壊れるが、もう一度使用して呼び出す。その間に一瞬できる隙に襲ってくる衝撃波はウォーロックが爪で薙いで破壊する。

それを繰り返し、何とかバツカスの前まで辿り着いた。身体中にいくつもの傷を作っているが、気にする程のものではない。

ロックマンは走る勢いを利用してエドギリブレードで斬りかかった。ちなみにこれは四枚目、その威力、硬度はかなり上がっている。

『！！？……ちい！』

バツカスはまさか抜けて来るとは思っていなかったため、一瞬反応が遅れて中途半端な防衛行動を取ってしまった。剣を弾かれ、右肩から左腰まで一刀両断されたバツカスは呻き声を上げてロックマンから遠ざかった。必死に腰を押さえている。

『……はあ、はあ……、や、やってくれますね』

肩で息をして苦しそうにしているバツカスは、腰から落ちそうになっている酒瓶を手に持つと叫んだ。

『だが、それでこそ“コレ”を使う価値がある!!』

バツカスはそのまま酒瓶の蓋を開け、口に含んだ。中に詰められていたデータらしき物が水の様にバツカスの中に流れ込んでいく。

ロックマンにはその行為の意味するところが分からなかった。

やがて全て飲み干したバツカスが顔を上げた。そこでロックマンは戦慄した。

バツカスの目の色が紅く染まっていつているのだ。

本能的に危険を悟ったロックマンがロックバスターを放つが、全く効果がなかった。

バツカスの両目が真紅に彩られる。そしてバツカスは、咆哮した。

『がああああああー！ツ！』

・  
・  
・  
・  
・

『水VS火』水の勝ちとか本気で思ってたの？』とヘスティアは言った。なるほど、とクイーン・ヴァルゴは思った。火も勝つことがあるという事か。

……今がまさにそれだ。クイーン・ヴァルゴの水はヘスティアの火に全く通じなくなっていた。

『どう？二千度の炎は？凄いでしょ』

ヘスティアは先程自分の両サイドで杖を回して炎を発生させていた。ヘスティアはその炎を纏い、そのままの状態でクイーン・ヴァルゴと戦っている。

その炎をクイーン・ヴァルゴは消そうとしたが、その炎に近づいただけで、雨も龍も蒸発して消え去った。

ブレイズヴェール。その温度、二千度。

鉄すら融かす温度だ、水ごとき一瞬で消え去るのは分かりきっている。

だからと言って、諦めるわけにはいかない。

クイーン・ヴァルゴは巨大な水の塊を生成し、投げつける。技ではない、ただの塊を。

『……大甘』

ヘスティアは呟いて無造作に右腕を上げた。そこから炎が伸びて水の塊に衝突、少しかかって全て蒸発させた。

ヘスティアは不敵に笑いながら、

『…悪くないよ。大質量の攻撃だったら流石に一瞬では消しきれないからね、ダメージを与えられたかも知れないけど…残念。遠距離で対処しちやえばどうってない』

長々と説明しているが、クイーン・ヴァルゴはとつくに聞いていない。聞く必要がないのだ。クイーン・ヴァルゴはそれを試すために先程の行動をとったのだから。

(質量…遠距離はダメ。……なら)

クイーン・ヴァルゴは杖を回しハイドロドラゴンを出してヘスティアを狙った。

『…何回同じことするのかな?』

ヘスティアは呆れたと言わんばかりに炎を伸ばす。水の龍は蒸発して消えて、水蒸気を撒き散らす。向こう側が見えない。

そこでヘスティアは気付いた。クイーン・ヴァルゴの意図に。

(目眩まし…!)

ヘスティアは身構えた。あのクイーン・ヴァルゴの事だ、あらゆる手段を用いて自分にダメージを与えようとするだろう。しかし、対処しようにも、向こう側が見えないので何をしてくるかも分からない。

(……どう来る)

全方位に意識を巡らせて杖を構えたその時、動きがあった。

水蒸気の中から巨大な水の塊を纏ったクイーン・ヴァルゴが突進してきたのだ。かなりのスピードのため、どんどん距離が縮められていく。

「……って、あんだけ待たせといてただ突っ込むだけ!？」

ヘスティアは呆れて叫びつつも、炎を伸ばして水を蒸発させようとするが、

「……!」

なかなか蒸発しない。大質量の攻撃なら一瞬では消しきれない。ふと先程自分で言った言葉が浮かんできた。

やがて全て蒸発するが、その時既にクイーン・ヴァルゴは目の前にいた。その顔は苦痛に彩られているが、…ほんの僅かに笑みも見える。

それを訝るヘスティアだが、ある物を見つけてその意味に気付いた。クイーン・ヴァルゴの周りに水分が一切含まれていない光球が舞っている。

「…考えなかった?」

クイーン・ヴァルゴが呟く。

「私が、あなたみたいな高温の炎使い用の技を持つてるって」

ここへきてヘスティアの顔に、本当の、紛れもない焦りと恐怖が浮かんだ。水でなければブレイズヴェールで対処できないからだ。

「大甘はそつちよ。……ライトオブセイント!!」

ヘスティアを嘲てから、クイーン・ヴァルゴは光球を叩き付けた。

第29話：大甘（後書き）

クイン・ヴァルゴが妙に強いな…と。

### 第30話：双子座

失血するかも…と、ロックマンは思った。

そこまで深い傷は負っていないが、身体中至るところを斬られて血を流れさせているので、その危険は充分ある。

バツカスが変貌した。

あの大剣を片手でテニスラケットの様に振るし、スピードも段違いに上がった。身のこなしもまるで獣。…あの酒(?)を飲んでからだ。あれからバツカスが異常に強くなったし、

『あつははは！！どーしたどーしたあ！？防戦一方じゃねえか、ああ！？』

粗暴になった。先程までの丁寧な口調はなりを潜め、キレたウォーロックみたいになっている。

《バーサーカーモード》

ついさつきバツカスが口にした言葉だ。あの状態の事を指しているのだろう。なるほどピッタリだ、と必死に斬撃を避けながら思った。バーサーカー、狂戦士。今のバツカスにはピッタリの称号だ。

『エナジーブレード！！』

衝撃波が飛んでくる。前と同じ片手で振っているのに、威力は両手時より強そうだった。隙だらけになると分かってはいるが、仕方ない、と上方に周波数変換で移動する。そこにバツカスは突進してきた。縦に一回転して思い切り剣を振り降ろし、ロックマンに斬りかかる。

対するロックマンはオーラのカードで防御して直撃は防いだ。しかし、バレーボールの球の様に弾き落とされ、ウェーブロードを突き破り、展望台の地面に激突した。背中から落ちたため、呼吸がおかしくなる。

「ぐっ！げほっ…はっ…」

血ヘッドを吐きながらゆっくりと立ち上がる。しばらくしてバツカスが降りてきた。

『……お前、本当にアポンブツ倒したのか？』

「…じほっ！…さあ、どうだろうね」

言いつつロックマンはロックバスターを放つ。しかしバツカスには効果がない。

『………終いだ』

バツカスは剣を振りかぶる。避けなくてはならないと分かっているが、身体が言うことを聞いてくれない。ダメージが溜まっているのだ。

剣が振り降ろされる。ロックマンはそれをただ見ていることしかできなかった。

死ぬ…！そう思った時、

ゴインツ！と、バツカスの剣が何かに弾き飛ばされていた。

『……………はあ？』

呆然としているバツカスに《その人物》は攻撃を仕掛けていた。

「エレキソード！」

『ぐうあああああああッ！？』

《その人物》の腕が変型した剣により、…先程ロックマンが斬り裂いた部分をなぞるように斬られ、バツカスが絶叫した。そのままバツカスは蹴り飛ばされる。

ロックマンは《その人物》を呆然と見詰めていた。何故ここにいる？という疑問が真っ先に浮かんでくる。

《その人物》はゆっくりとロックマンの方へ振り向き、微笑みかけた。

「大丈夫？ スバル君」

「ツカサ…君!?!」

それはジェミニ・スパークW。スバルの友人《双葉ツカサ》だった。ツカサは辺りの惨状、それからのたうち回っているバツカスを見てからロックマンに訊ねた。

「…久しぶりに帰ってきたけど。……………何事？」

まあ当然の疑問だよな、とロックマンは説明しようとしたが、続いて聞こえてきた声に遮られた。

『どつでもいいじゃねえか、んなモンは』

声のする方を向くと、これまたジェミニ・スパークがいた。こちらはジェミニ・スパークB。二重人格者であるツカサのもう一つ的人格、《ヒカル》だ。

ヒカルは続ける。

『アイツが敵だったのは分かってんだ。とりあえずブツ倒しやあいじゃねえか』

話し聞くのはその後だ、とヒカルは腕を剣に変えた。ツカサも、それはそうだね、と構える。

「スバル君は休んでて」

「え?...いや、でも」

「いいから、大丈夫」

心配そうなスバルにツカサはそう言った。その声は妙に自信に溢れている。

「ああいう相手は、僕等にとっては鴨さ」

・  
・  
・  
・  
・

バツカスは痛みと痺れで意識が飛びそうになっている状態で、なんとか剣を拾って構えた。

（何だアイツら？誰だ？）

徐々にその状態から回復し、突然現れたあの二人組に疑問を抱いた。

星河スバルを助けたのならば、相手側の仲間ということなのだろう。しかし、今までの報告にはあの二人組の情報は全くなかったのだ。

（……………ともかく、強え）

バツカスの口許が上がり、獰猛な笑みの形を作る。

（面白え、面白えぞ！！）

脚に力を込めて、剣を振り回す。本気の戦闘体勢だ。

『面白えぞお前等あ！！』

バツカスは振り回していた剣を、目の前で十字を切るように振った。その軌跡が光つて、十字架型の光を作る。その中心に剣を突き立て、バツカスは叫んだ。

『クロスブレイド！！』

その十字架型の光は衝撃波として放たれ、ロックマンやジェミニ・スパーク達に向かって突き進んだ。

このクロスブレイドは、エナジーブレイドなどは格の違う、必殺技と呼べるレベルの技だ。並の相手なら一撃でケリのつく程の威力だが、あの者達ならおそらく防いだらう。そう思い、バツカスはその十字架の影に隠れるように走り出した。クロスブレイドを防いだ後にできる隙を狙って斬るつもりなのだ。

予想通り、十字架はジェミニ・スパーク二人のオーラによって防御された。両方とも徐々に薄れていき、同時に消滅した。その瞬間に相手に隙が生まれ、予定通りに斬りかかり、

『…！？』

驚愕した。今斬った二人がタヌキ型の物体に変化したのだ。シルフ

イーの報告にあつた、ヘンゲノジュツとかいうカードの能力だ。そう気付いた時には既に遅かった。

「そう来ると…」

『思ってたぜ!!』

背中を二人に深く斬られた。断末魔の悲鳴を上げ、バツカスはうつ伏せに倒れた。

(…そう来ると思ってたけど?)

バツカスは二人の言葉に戦慄した。読まれていたというのか。クロスブレイドという大技を使う事も、それを囮に使う事も。何だそれは？本当に会ったばかりの相手の行動を読むなど、洞察力が高いとかそんな次元の話ではない。最早それは異常だ。

『……終わらずが、文句はねえな?』

横目に、ヒカルが剣を振り上げるのが見えた。文句は有るが、言ったところでどうにもならない。それに、傷を負いすぎて身体は動かないし、バーサーカーモードを維持するための“酔い”も、もうすぐ醒める。気力体力共に尽き抵抗できないバツカスに、ヒカルは剣を振り降ろそうとして、

『 ……!?!?』

大きく後方に下がった。ヒカルのいた場所にくつつもの炎の弾丸が突き刺さる。

( ……これは )

バツカスは見覚えのあるそれに目を見開いた。そうしているうちに誰かが肩を貸してくる。

『 ……ほら、退却だよ』

ヘスティアだった。バツカス程ではないが、傷を負っている。

『 ……退却、ですか』

“酔い”が醒めていつもの丁寧な口調に戻ったバツカスは呟いた。そんな言葉が出てくるといふことな、ヘスティアも同様に負けたといふことだろう。

二人で苦笑しながら飛び去ろうとする。

「…待て！ロケットナックル！！」

そこへ、ツカサが腕を飛ばして攻撃してきた。体力的に限界を迎えているバツカスには対処できないが、ヘスティアにはできるらしく、杖を回した。

『ランパードフレイム』

巨大な炎の壁が生成され、腕を弾く。

その隙に二人は逃げ出した。

…屈辱ですよ、というバツカスの声が響いた。

第30話：双子座（後書き）

伏線も何も無しにツカサ登場させちまった

第31話・逃亡者（前書き）

長いです

### 第31話：逃亡者

あの後、クイーン・ヴァルゴとハープ・ノートがやってきた。十二神将のヘスティアという者を追ってきたらしい。さっきいきなり出てきたのがそのヘスティアだろうな、とスバルは思った。

聞いた話だと、クイーン・ヴァルゴに敗北したヘスティアが捨て身の攻撃を放とうとしていた時、ハープ・ノートが応援に駆けつけた。するとヘスティアは、顔色を変えて舌打ちし、捨て身の攻撃を目眩ましの技に変えて逃げ出したらしい。…ハープ・ノート（ディーヴァスタイル）が相手側にとつての脅威になっているという事が良く分かった。

スバルはこちらで起こった事をミソラとクインティアに伝えて、帰路に着いた。今はゆっくり休みだ方がいいという、クインティアの心遣いだ。

そうして二人と別れた後……………。

「なるほどね」

家のないツカサをスバルの家に泊めるといふ話になり、今はスバルの部屋で事情の説明をしているところだった。

頷いたツカサはニッコリと微笑み、

「スバル君、僕も一緒に戦うよ」

「……ほ、本当？」

「うん。…ヒカルもそれでいいよね？」

『ああ、構わないぜ。強えヤツと戦えるみてえだしな』

どこから聞こえてくるのか分からないが、ヒカルの声が聞こえてきた。色々面倒そうなのでスルー。

「ありがとう！ツカサ君と一緒になら心強いよ」

二人は握手を交わす。丁度その時、

「スバルー！ツカサ君ー！夕飯できたわよー！」

あかねが呼んできた。

「……だって、行くっか」

「うん」

ツカサが手を離し、部屋を出ていく。スバルも出ようとした…が、

ガララツ、と部屋の窓がひとりでに開き、驚いて立ち止まってしまった。

…いや、ひとりでに開いたのではない。何か荒々しい呼吸音が聞こえてくる。誰かが開けたのだ。

(……って、窓ってロフトの上なんだけど!?)

そんな高いところにある窓を誰が開けたんだ？とスバルは恐る恐る窓の方を見て、硬直した。

緑色の長髪に翡翠色の眼の、ローブを纏った中学生くらいの少女がそこにいた。

ウォーロックがハンターV.Gから出てきて唸り、異変に気付いたツカサが戻ってくる。全員の視線は、その少女に集まっていた。

やがてスバルは絞り出すように声を出した。

「…シルフ？」

そう、シルフもといシルフィーだった。かつてスバルの元に諜報員として潜り込んできたムーの電波体、十二神将メルクリウスの補佐官のシルフィーだった。

そのシルフィーが今、スバルの部屋の窓を開けてそこで荒々しく呼吸をしていた。

ウォーロックが臨戦体勢をとり、何となく事情を察したツカサがハンターV.Gを構える。スバルもとりあえずハンターV.Gを構えた。

「…何の、用だ？」

おそらく訊ねる必要はないだろうが、一応スバルは訊いてみた。窓枠に手をつけて肩で呼吸しているシルフィーは、そのままの状態で何かを呟いた。

『……………て』

「?」

声が小さくて聞き取れなかった。それが分かっているのか、シルフィーは顔を上げ、少し声を大きくしてもう一度言った。

… スバルが予想もしなかった言葉を。

『助けて……、星河スバル……！』

そう言ったシルフィーの顔は、泣き出す寸前の子供の様に歪んでいた。

・  
・  
・  
・  
・

少し時間は遡る。

『 上手いこと てるみたいだな』

『?』

シルフィーはメルクリウスが仕事で出かけて暇になってしまったので、いつも通りペルセポネの所へ遊びに行こうとしていた。そうやって曲がり角を曲がるうとした時、その先からそんな声が聞こえてきたのだ。……この声は、

(アレス様とポセイドン様?)

シルフィーは何となく行きにくい気がしたので、そのまま壁に張り付いた。そのせいか、会話が聞こえやすくなってしまった。

(う、うわ…ヤバッ！聞きちゃいけない)

そうやって慌てて耳を塞ごうとしたシルフィーだったが、

『メルクリウスやヴィーナスのような面倒な者には知られておらん』

ポセイドンのその言葉に、塞ごうと動いていた手が止まった。聞き捨てならない言葉が聞こえたからだ。

シルフィーは先程とは逆に聞き耳を立てる。

『ああ、知ったらアイツ等絶対エ反対するだろオしなア。なんせ…』  
『アレスは一拍置いて』自分自身が犠牲になるんだからなア』

(……………!?)

その言葉にシルフィーは目を見開いた。犠牲？どういう意味だ？

『今の星河スバル討伐任務も

…』

更に注意深く聞こうと思った矢先、アレスの口が止まった。ポセイドンが、どうした？と訊ねている。

『ああ、そオいやさア……………』

アレスが誰に向けているのか分からない言葉を発した。息を潜めて隠れていたシルフィーは一瞬寒気のような物を覚え、

『さっきからそこで聞いてるテメエは誰なんだっつー!!』

全速で逃げ出した。さっきまで自分がいた場所が、真空波で両断されてゾツとした。

そうしているうちに後方にアレスが現れた。シルフィーを視認してからポセイドンに向かって叫ぶ。

『ポセイドン!!シルフィーに聞かれた!!殺ンぞ!!』

『何だと!?!』

続いてポセイドンも現れた。

十二神将五本指の二人が追いかけてくる。時折、当たったら確実に致命傷になる攻撃が放たれてきて涙目になる。

(マズイマズイマズイマズイ!!!)

シルフィーは必死に思考する。どこに逃げる？ペルセポネの部屋、却下。メルクリウスの部屋、却下。…いやそもそも、この建物の中のどこに逃げようが無駄だろう。…ならば。

(外!!!)

出入口から外に出る、それなら大丈夫だ。…しかし、問題が一つ。

(アテナ様が防壁を開けてくれるか…!!!)

そこをどうにかしないといけない。…何か考えたいところだが…、そんな暇はない。

『待てコラア!!!』

『うひツ!?!』

真空波が飛んできた。体勢を低くしてかわすと、真空波が前方の柱

やら壁やらを軒並み斬り裂いていった。通路が崩壊する。  
ヤバい！と思ったがよく考えると……、

(ラッキーじゃん。逆に！)

出来うる限り速度を上げて崩落の中を突き抜ける。後方のアレス達は崩壊しきった通路で足止めを喰っていた。その隙に出入口を目標して走り出す。先程の懸念は一旦封印だ。

しばらく走って出入口の目前まで辿り着いた。もう少しでゴールなのだが、

ガン！！と天井を突き破ってアレスが現れた。憤怒の形相でシルフィーの方を睨んでくる。

『やってくれたなアオイ……』

『自分でやったんじゃないですか！！』

叫びながら小型の風の塊を生成し、アレスに投げつけた。アレスの顔の前でパン！と弾け、『ぶオ！？』とアレスが呻く。その隙にアレスを抜き出入口に到達、一気に通り過ぎる。アテナが目を瞬かせるのが横目に見えた。

一瞬後、アレスの怒鳴り声が響く。

『アテナ！！防壁を全力で展開しやがれ！！』

『！？…いや、しかし……！』

アテナが何か逡巡している。アレスはその意味が分からなかったようだ、シルフィーは分かった。

シルフィーの視線の先に、今まさに防壁に開いた穴を通り抜けようとしている、ヘステイアとバツカスの姿があったからだ。

チャンス！と、限界突破気味に速度を上げ、二人の横を通り抜ける。二人が目を丸くしたのが見えた。

(よし、出れた！)

ようやく外に出れた。これではらくは大丈夫だろうが、まだ足りない。そうここに来るまでに思った。……だから、

『ん？…あ！？』

ヘステイアの腰にぶら下がっていた機械を奪い取っていた。十二神将にだけ与えられている、《acquire》と呼ばれる、並行世界の間に存在する次元の断層を捕捉する装置を。

ヘステイアが物凄い顔で抗議しているが、無視して《acquir

e》を操作し、断層を捕捉する。すぐ近くだった。

そう、移動するのだ。世界を。それなら助かる可能性はグンと増す。

『ツイてないけど、ツイてる!』

そう叫んで、シルフィーは捕捉した断層をくぐった。

…世界を移動したその瞬間から、シルフィーはある一つの場所に向かって飛んでいた。こっちの世界で、最も信頼できる人物の元へ。

一時間ほどかかって、その人物の家まで辿り着いた。その人物の部屋まで飛び、悪いとは思ったが勝手に窓を開けた。

そして、いた。

しばらく後ろを向いていたが、ゆっくりとこちらを向いてきた。そしてその顔を見た途端、

緊張の糸が一気に切れた。

・  
・  
・  
・  
・

事情を聞いたスバルは、深刻な顔つきになっていた。そんな事を言  
つて自分達を騙し、また諜報活動をするつもりではないか？と思っ  
たからだ。

…しかし、

『お願い…助けて』

シルフィーが俯いて呟いた瞬間、その懸念は消えた。こんな表情を、  
こんな声を、演技などで出来るわけがない。

「…分かった。しばらくここにいていいよ」

『！…！』

シルフィーがバツ！と顔を上げた。泣きそうだった顔が歓喜に彩ら  
れている。

『ありがとう…！』

『いいのかよ。また騙されてるのかも知れねえんだぞ』

とりあえず夕飯を食べに降りたスバルにウォーロックはそう言った。

「いいよ。言ってることは本当っぽいし。…それに、万が一騙されてたとしても、その時はその時で対処する」

『むう』

スバルの言葉にウォーロックは引き下がる。そして、

『ほいほい信じすぎだろお前』

という呟きを残してハンターV.Gに入ってしまった。

「……信じすぎ…か。確かにそうかも」

スバルは呟いて、夕飯のカレーを口に運ぶ。辛い。

その時ツカサが、まあでもと呟いてからスバルにハッキリと言った。

「それがスバル君の良いところだよ」

その言葉に向かい側の席のあかねと大吾も同意する。

スバルはポリポリ頬を掻きながら、

「そうかな？」

と照れ気味に言った。

・  
・  
・  
・  
・

メルクリウスが戻った時、十二神将が全員ホールに集まっていた。何事かと訊ねると、アレスが口を開いた。

『テメエの部下のシルフィーが謀叛を起こした』

『……………は？』

聞くと、シルフィーはアレスに攻撃を仕掛けた上、ヘステイアの《acquire》を奪い取って星河スバル達の世界に逃亡したらしい。

そんなわけない、とメルクリウスは抗議したが、その瞬間を捉えた映像を見せられて何も言えなくなる。

何でだ何でだと考えているうちに、初老の人物ウルカヌスとメルクリウスに任務が与えられていた。

内容は《シルフィーの抹殺》。星河スバルやセイレーンよりも優先して殺せと言われた。

その後自分の部屋へと戻ったメルクリウスは、ポツリと一言呟いた。

何でだよ、と。

### 第32話：引っ越し

次の週の日曜日。

「コダマタウンへようこそ！」

パン！とクラッカーが鳴った。

今日はミソラがコダマタウンに引っ越して来る日、そのお祝いにルナの家でパーティーが開かれる事になっていた。

『……ねえ』

ミソラと仲の良い友人達がミソラに内緒で企画していたのだ。

『……ねえってば』

引っ越し作業が終わった後、ルナの家に来てとだけ言われたミソラは、扉を開けた直後にルナとその取り巻き（ゴン太とキザマロ）にそうやって歓迎された。

初めはキョトンとしていたミソラもやがて歓喜の表情を浮かべ、全力でお礼を言った。

『……無視すんなー』

そして今はパーティーの真っ最中なのだ。

『……スバル!』

「うわ!?!」

そういつたモノログを繰り返していたスバルの耳元でシルフィーが大声で名を呼んだ。ぼーっとしていた状態だったので非常に驚いた様子だった。

やがて声の主がシルフィーだと分かったスバルは、何なのかと訊ねた。

シルフィーは答える。

『……あのさ、本当に今更だけど、何で私ここにいるのかな?』

シルフィーの言葉にスバルは、何言ってるんだコイツ?みたいな顔をして首を傾げ、答えた。

「何でって、君が僕のウィザードだからでしょ?」

『うん、いつ私があなただのウィザードになったのかという疑問は一

旦那いとかとして、……それで何で私がここにいる理由になるの？ 私この町の住人じゃないのに』

シルフィーが部屋の中を眺めながら言った。

このパーティーはコダマタウンの住人によるミソラの歓迎会だ。この町の住人ではない自分がミソラを歓迎する側にいるのが不思議なのだろう。

そんな事を思っているシルフィーに、スバルは溜め息をついて言った。

「一週間以上ここに住んでる君はとっくにこの町の住人だよ。だからここにいるんだ。……あ、嫌ならあっち側に廻る？」

スバルはミソラの方を指差して言った。シルフィーは、あ、やだ面倒くさい、と断ってとりあえず引き下がった。

「この住人……か、と呟いて外を眺める。その顔は少し寂しそうだった。

スバルはその様子が気にはなったが、何も言わなかった。どこかの青獅子とは違って空気は読める方なのだ。

「なーにやってんのスバル君！」

「ッ！？」

うんうんと一人頷いているスバルの背中を誰かが思い切り叩いた。  
この声はミソラだ。

「一人だけ皆と外れて、本当に何やってるの？……私の歓迎してくれないんだ、酷い」

ミソラの顔が若干曇る。スバルは慌てた。

「えーと、ゴメン！そくだよね僕もちゃんとしないと！」

「……はは、冗談冗談、気にしてないよ。…そっちにはそっちの事情があるだろうし」

ミソラは手をパタパタ振って、シルフィーの方を見て、そう言った。  
そして、じゃあ終わったら来てね、と言ってルナの方へ歩いていった。

「……終わったら、ねえ」

何が？と呟いて、スバルはシルフィーを見詰めた。

・  
・  
・  
・  
・

メルクリウスとウルカヌスはスバル達の世界の空の雲の上にいた。シルフィーの抹殺が最優先事項になっているため、シルフィーの周波数を探っているのだ。

…その作業はこちらの世界に来てからの三日間ずっと行っていた。

（まあアイツもバカじゃないし、周波数隠すか変えるかしてるよな。……だんだんメンドくなってきたな。三日間よく耐えたよ俺。休もう）

『ウルカヌス。俺休むけどいいか？』

『構わない。これくらいは我一人で出来るしな』

『サンキュー』

メルクリウスは探査をやめ、雲の下に降りた。そしてすぐに見えて来た世界一高いと言われている山に降り立った。酷い吹雪で周りがほとんど見えなくて辟易する。

『どっかに洞窟とかないのか？』

メルクリウスは辺りを見回す。まあ、見える範囲にはない。しゃあない探すか、と歩き出す。

しばらく歩いたが、それらしい物はなかった。

『……………ええい、面倒くさい』

痺れを切らしたメルクリウスは、背負っている杖を持った。先端部分を球体型のコアが埋め込まれた菱形の物体で包まれ、コアから伸びた二本の紐が全体を螺旋状に巻いている、全体的に黒っぽい杖だ。

それを構えたメルクリウスは言葉をつむいだ。

『ケリユケイオン・モードランス』

その瞬間コアが輝き、菱形の前方二辺から白い電波のエネルギー体が飛び出してきた。鋭利なその形は、槍の矛先に似ている。

『貫け』

メルクリウスは少し跳んで、槍を地面に思い切り突き立てた。そし

て、

『エナジーフロウ』

地面が爆発した。吹き飛んだ岩が全て落ちたところで、できた穴を見る。青年一人が入るには十分な大きさだ。

『…やっつと』

メルクリウスはそこに入り、座り込んだ。壁に背を預け、目を瞑る。

(シルフィーが裏切った)

そこで、部下…いや元部下の事を考える。

(何が理由だ？確かにアイツ、アレスは好かないとか言ってたが、だからって危害を加えるような事はしないハズだろ)

メルクリウスは頭を押さえた。

『本当…何でだよ』

メルクリウスは絞り出す様に眩き、壁を叩いた。

ザラッ

『……………ん？』

その瞬間、上から妙な音が聞こえた。気になって見てみると、

『……………マジ？』

積もった雪が落ちてこようとしていた。大量に。

『……………』

その後、もちろん埋まった。

第32話・引越し（後書き）

本文とタイトルが合わないなあ、と思いました。

### 第33話…上司

『 セイレーン 』

『 はい? 』

動き回っている歓迎される側のセイレーンを歓迎する側のシルフィーが呼び止めた。

『 ……あなたさあ、何かもうすっかり慣れてるよね、こっちの生活に 』

『 ……あー、はい。そうですね 』

セイレーンが、それがどうした?みたいな顔で言った。

シルフィーはその顔、そして呼び止めるまでにセイレーンがしていた顔を思い返し、一つ訊ねてみた。

『 楽しい?こっちは 』

その質問にセイレーンは一瞬キョトンとして、すぐに笑みを浮かべて答えた。

『楽しいですよ。皆さん優しいですし、それに』

セイレーンはその場で一言言葉を区切り、フツと息を洩らしてから続けた。

『あの、ですわ口調のムカつく上司もいませんし』

シルフィーはゾツとした。何か、セイレーンが、怖い。

『高慢で面倒くさがりの上司から離れるだけで人生こんなに楽しくなるなんて思いませんでしたよ』

うふふ、と笑うセイレーンを見て、シルフィーは思わずミノラと話していたスバルを呼んでひそひそと話し始めた。

『ねえ、何かセイレーンの性格変わってるんだけど』

「…どんな風に？」

『いや、うん、そのね。昔からヴィー……上司への愚痴は言ってただけど……。何て言うか、あそこまで酷くはなかったんだよ』

シルフィーは未だ笑っている指差す。スバルは苦笑いして、

「…あー、あれだよ。ハープの影響だよ」

『あ、なるほど』

『どつという意味かしら?』

「『うひツ!?!』」

会話に本人が割り込んできて二人は後退った。ハープの顔が滅茶苦茶怖い。

『ねえ?どつという意味かしら二人共?』

「『あ、や、その、あはは』」

ハープからドス黒いオーラみたいな物が立ち上り、二人は青ざめた。

今までで一番のピンチかも知れない…!と二人は本気でそう思った。

・  
・  
・  
・  
・

探査を終えたウルカヌスは降りていった同僚を捜しに自分も山に降りていた。

『どこにいるメルクリウス』

『　　ッ！』

『…む、ここか』

しばらく捜し、立ち止まった時、足下からくぐもった人の声が聞こえてきた。声の感じ、周波数から同僚のメルクリウスだと判断したウルカヌスは、自分の武器である巨大な鎚を大きく振るい、地面を砕いた。

…やがて、

『ぐぼッ！？はあはあ』

瓦礫や雪の中からメルクリウスが這い出てきた。恨みが隠った目でウルカヌスを睨んでいる。

『お前な…、もう少しソフトに出来ねーのか？』

『…これが精一杯ソフトにやった結果だ』

あ、そう、とメルクリウスは立ち上がって泥や雪を払った。一回大きく背伸びをし、ウルカヌスに訊ねる。

『で、見つかったのか？』

『まあな。それらしい反応を見つけた。本人とは断定出来ぬがな』

ウルカヌスが方位的に東の方を見ながらそう言った。メルクリウスは頷き、

『そんだけ分かりや充分だ』

同じ方を見つめた。

(あの方角、日本か。……アイツのトコにいるのか？もしそうだとしたら、本格的に反逆者じゃねーか)

メルクリウスはこめかみを押さえた。部下が何でこんな事になっているのか不思議で仕方がない。

『……どうしたメルクリウス。行かんのか？』

『……ん、悪い、行くよ』

そんな様子のメルクリウスにウルカヌスは声をかけた。メルクリウスは謝罪してからこめかみから手を離し、飛行準備を始める。

その刹那、

トトトトトトトッ……

地響きと共に嫌な音が聞こえてきた。その方を見ると、

『……雪崩だな』

『……そうだな』

大量の雪が流れ落ちてきていた。凄い規模だ。

『……お前が乱暴に地面叩くからだぞ』

『すまない』

同僚を叱り、メルクリウスは雪崩と向き合った。

『はあ、メント』

『…行くか』

『そうだな』

二人は飛び去った。

その後ろで、今までそこになかったハズの巨大な岩の壁が雪崩を止めていた。

・  
・  
・  
・  
・

歓迎会はお開きになっていた。もう夜の十時過ぎだし、危険だから早く帰りなさいという、白金家母の命令だった。

『しかし星河スバルは従わず、家に帰らないで町を彷徨っている、と』

「はい実況どうもー、ウォーロックさん」

そう、ウォーロックの言う通りスバルは今、夜の町を彷徨っている。理由はない、ただ何となくだ。

『…寝坊助スバルが夜更かしをしようとしています』

『明日起きれなくても自業自得だからなー。俺は責任とらねえぞ』

「はいはい分かってますよ」

スバルと正ウィザードと仮ウィザードがそんな会話をしながら歩いていた。足は自然と展望台の方へ向かっている。

「…………シルフさ」

『ん？何？』

展望台へと続く石段を上がっている途中に、おもむろにスバルが口を開いた。

「…元の世界に帰りたいんでしょ」

『……バレてた？』

「うん」

お互いに頷く。シルフィーは、いや…ちょっと違うか、と呟いてから言い直した。

『…正確には、私の上司の所に帰りたい…かな』

「…メルクリウス？…の所に？」

『うん。後、メルクリウスで合ってるよ』

シルフィーは空を仰いだ。寂しそうな顔をしている。

スバルは直感で分かった。この娘にとって、メルクリウスは居場所なのだ。

二人は無言状態になり、そのまま展望台まで辿り着いた。バツカスに破壊された所は修理されている真つ最中だ。それを見て苦笑する。

しばらくして、望遠鏡を覗き込もうと動き出したスバルにウォーロツクは呆れ気味に訊ねた。

『その行為に意味はあんのか？』

「？」

『それ、大吾を捜すためにやってた行為だろ。大吾が帰ってきてる今、その行為に意味はあんのか？』

「意味か。まあ純粹に星空を楽しみたいっていうのがあるよ」

ウォーロックの質問に答えつつスバルは望遠鏡を覗き込み、何の気なしに西の空を見た。

「……………ん？」

途端、スバルは小さく声を上げた。

『あん？どうした？』

「いや、今チラツと何かが光ったような……………」

答えながらもう一度注意深く望遠鏡を見る。西の方の遠い空に、緑色の光と赤色の光が見えた。今度はハッキリとだ。

「何だアレ、こっちに向かってきてる？ねえウォーロック……ク？」

望遠鏡から目を離し、スバルがウォーロックに向き直った。そしてそれを見た。あのウォーロックが震えていた。隣のシルフィーも同様にだ。

ウォーロックが口を開く。心なしか声が震えている。

『…バカデケエカが二つ、近付いて来てやがる』

続いてシルフィーもウォーロック以上に震えた声で開いた。

『これ、…メルクリウス様とウルカヌス様……』

シルフィーの言葉にスバルはギョツとした。メルクリウス、シルフィーの上司。

(部下を始末に来たのか…！)

前に見た時はそんな事はしなさそうな奴に見えたが、このタイミングで現れたと言うことはそうなのだろう。

「…とりあえずここから離れよう」

スバルは二人にそう告げた。逃げるという意味と、この町を巻き込まないようにするという意味を持った言葉だった。それが分かっている二人はすぐに頷いた。

スバルはウォーロック、シルフィーはエランドと電波変換し、この場から離れた。

第33話…上司（後書き）

ハーブについては割愛します。

### 第34話：錬金術師

ロックマンとシルフィーは海上のウェーブロードを高速で進んでいた。とりあえず海の真ん中まで逃げれば関係ない人物に迷惑はかからないだろうという考えの元の行動だ。

そうやって進みながら、ロックマンはウォーロックに訊ねた。

「……………ロック、あの二人そんなに強いのか？」

『…ああ、セレスやバツカス以上の力を感じるぜ』

ウォーロックの声は相変わらず震えている。そこまでの力を持った奴らなのかと、ロックマンは呟いた。

その呟きが聞こえたシルフィーは震えた声で告げる。

『…あの二人は、十二神将内で五本指と呼ばれてる人達に次ぐ力を持つてるから……………』

それが一体どれほどの力なのかは知らないが、とりあえず今までの相手と同レベルだと思わない方がいいという事だろう。

三人はそこで一旦会話を切り上げ、逃げることに専念しようとした。

…その時、

『お前等、いつまで逃げ回るつもりだ？』

前方から青年の声が聞こえた。メルクリウスだ。

(……いつ、抜かれた？)

分からなかった。気配はまだ大分後ろの方にあつたはずだ。それなのに一瞬で抜いてきた。誰にも悟られずだ。

(……これは、本当にマズいな)

ロックマンの頬を汗が伝う。シルフィーは尋常じゃないほど震えている。

『……やっぱり、ソイツのトコロにいたのか』

『……………』

メルクリウスの言葉にシルフィーは無言で頷いた。

『…………はあ』

それを見て溜め息をつき、ロックマンを見詰め、やがて二人の後方を見る。

もう一人の十二神将、ウルカヌスがそこにいた。メルクリウスは咳くように名を呼ぶ。

『…………ウルカヌス』

『…………分かっている。お主はシルフィーと』

『いや、お前がシルフィーとやれ』

同僚の言葉に込められた意味を正確に読み取ったと思っていたウルカヌスは、目を見開いた。メルクリウスは続ける。

『…………俺だと殺せないかも知れないし、お前がやった方が確実だろ』

『…………いいのか？』

ウルカヌスの問いにメルクリウスは迷うことなく答える。

『構わない。……………それに』

メルクリウスは自分の杖、ケリュケイオンをロックマンに向けて、

『コイツにはちょっと用がある』

そう言った。

ウルカヌスは、まあそれなら、と承諾した。

『……………つーわけだ。やろうぜ星河スバル』

「……………ああ」

メルクリウスとロックマンの二人はどこかに消えた。

この場には今、ウルカヌスとシルフィーしかない。

『……………らしいぞ』

『……………予想はしてましたから、別に驚きはしませんよ』

ウルカヌスの言葉にシルフィーは特に動揺するわけでもなく、淡々と返した。

『……………そうか』

ウルカヌスはハンマーを肩に担ぎつつ呟く。

『……………始めるが、構わんか？』

『……………構いません』

『……………そうか』

《ウルカヌス・ボルケーノ》とシルフィー・ウインドの両名は臨戦体勢をとり、戦闘を開始した。

・  
・  
・  
・  
・

ウルカヌス達のいる場所から二キロ程離れた海上まで移動したロックマンとメルクリウスは、睨み合っていた。

『……久しぶり、か？』

「そうだね」

言葉を交わし、二人はお互いの武器を構えた。

『……あ、ちょっと待て』

「…は？」

緊張が高まってきた時にメルクリウスがいきなりそんなことを言った。おかげでロックマンは芸人張りにガクツと前のめりになってしまった。

「何？何なんだよ」

『あー、フェアじゃないなと思ってさ』

「はあ？」

首を傾げるロックマンにメルクリウスはほら、とジェスチャーを交えて説明を始めた。

『俺は過去の調査でお前の戦闘データを手に入れてる。だからお前が何をするのか大体分かる。でもお前には俺が何をするのかサツパリ分からない。これはフェアじゃないだろ』

それはまあ、とロックマンは頷いた。そして訊ねる。

「で、どうしたいの？」

『ああ。お前に、俺の能力について話しておこうと思っ』

メルクリウスは咳払いし、説明を始めた。

『……俺の能力は、物質の電波化及び電波構成の組み換えだ』

メルクリウスは言いつつウェーブロードから足を踏み出した。一瞬ギョツとしたロックマンだが、次に別の意味でギョツとした。

落ちない。何も無い空中にメルクリウスは立っていた。

『…分かるか？こうやって、空気を電波に変換して構成を組み換えて足場にしてるんだ』

メルクリウスはガンガン！と、空中を踏みまくる。確かに足場が形

成されている様だ。全く見えないが。

メルクリウスは大きく腕を広げ、得意気に言い放つ。

『俺はこの能力を、石を金に変えるっていうお前等人間の術に習って、錬金術 《アルケミー》って呼んでる』

言い終わると、メルクリウスは杖を前に突き出した。

『次にこの杖、《ケリュケイオン》についてだ』

杖を螺旋状に巻いている二本のコードを弄りつつ、話を続ける。

『コイツはな、俺の能力を最も生かせる最高の杖なんだよ』

「？」

『このコアから伸びたコードの先端、ここが俺が電波に変えた空気を勝手に吸収してコアに溜める。…それで俺が能力を発動して、言葉を発する』

その説明の後半辺りでケリュケイオンのコア部分が凄まじい光を放っていた。あまりにも眩しいため、ロックマンは目を半開き状態に

してなんとかそれを見ている。

そうしている内にメルクリウスは言った通り、言葉を発していた。

『ケリユケイオン・モードサイズ』

それと同時に、ケリユケイオンの先端を包んでいる菱形の物体の全ての辺から白いエネルギー体が飛び出してきた。

滑らかな曲線と良く斬れそうな刃を持ったその状態はまさにサイズ……鎌だった。

『……まあ、こんな感じでこの杖は武器に変わる』

メルクリウスは鎌へと変貌したケリユケイオンを肩に担いで、笑みを浮かべた。

『説明はこんぐらいでいいだろ。さあこれでフェアな戦いが出来るな』

「…そうだね」

メルクリウスは臨戦体勢をとった。対するロックマンも剣に変えていた腕を構える。

『……始めようか』

メルクリウスの眩きと共に、金属がぶつかり合う凄まじい音が響いた。

第34話：錬金術師（後書き）

鍛冶の神と商業の神の戦闘開始

### 第35話：食い違い

ウルカヌスは素早い移動が出来ない。

巨大なハンマーを持っているというのも一因だが、理由はそこじゃない。理由は、彼の戦闘スタイル。

《超遠距離砲撃型》

そのスタイルをとる彼の攻撃範囲は二十キロオーバー。

…よって、

(うわ…！)

二百メートル程度の距離しかとっていないシルフィーには容易にその攻撃が届く。

シルフィーはウルカヌスの攻撃、《キャノンボルケーノ》という火山弾をひたすら避けていた。二十キロ先まで届くこの攻撃は、二百メートルの距離だと凄まじい速さになる。おかげで時々避けきれずにかすってしまった。風で最大まで速度を上げているのにもかわらずだ。

(さっすが十二神将だね、普通じゃない)

火山弾をかわす。そのまま海に着弾して凄まじい高さの水柱を立て

た。

飛び上がった海水が降り注ぐ中、シルフィーは思考する。

(…あの人にダメージを負わせるには、切断タイプの攻撃を仕掛けるしかない…けど、準備する暇がない)

早速行き詰まった。

その時、ウルカヌスがあの巨大なハンマーを振り上げた。そこから無数の火山弾が空へと飛び上がり、見えなくなった。

(……何を?)

疑問に思ったシルフィーだが、次の瞬間にその疑問が吹き飛んだ。

無数の火山弾が、降り注いで来ていた。

《メテオレイン》

ウルカヌスの持つ、広域殲滅攻撃だ。

『…ッ!?!』

シルフィーは啞然とした。十二神将が補佐官に放つレベルの攻撃ではないだろう。

(ヤバイヤバイヤバイヤバイ!!!)

無数の火山弾が海に着弾し、同じ数の水柱を立てる。更には火山弾の持つ熱により水が蒸発、大量の水蒸気が辺りを覆った。

…やがてメテオレインが済み、一帯が水蒸気などの影響で霧がかかったようになっていた。

その中で、シルフィーは肩で息をしていた。

避けた。ちよくちよくかすったが一応避けた。本当に危なかった。

『……………前が見えない』

シルフィーは呼吸を整えてから辺りを見て呟いた。

本当に何も見えない。だが、シルフィーが見えないのだから、逆にウルカヌスも見えないだろう。

『……チャンス到来』

シルフィーは風の剣を作り、更にそれに周りの水蒸気などを吸収させた。即席の水属性の剣の完成だ。

それを構えて、シルフィーは辺りの周波数を探る。メテオレインのせいでかなり乱れているが、なんとかウルカヌスの周波数を探り当てた。

(よし！)

シルフィーは最大速度でそこに向かって飛んだ。接近戦に持ち込むつもりなのだ。

ウルカヌスは超遠距離砲撃型。近距離では得意の砲撃は放てないし、あの巨大なハンマーを振り回されたとしても多分避けられる。

シルフィーは数秒でウルカヌスの所まで辿り着き、剣を振った。直撃ルートだ。……しかし、

ザンツ！と、相手を斬るはずだった剣の方が斬られていた。少し遅れて右肩も一緒に斬られている事に気付いた。

『……………なっ!?!?』

シルフィーは慌てて距離をとった。一体何が起こった?何故自分が斬られている?疑問ばかりが浮かぶが、やがて霧が晴れて、ウルカヌスの姿がハッキリ見えた時、その答えを得た。

刀。ウルカヌスが刀を持っていた。

どこから出したのかはすぐに分かった。ハンマーだ。ハンマーの柄の部分にあの刀を収納出来そうなスペースが見える。

『…残念だったな』

ウルカヌスが微笑を浮かべながら呟いた。

『これでも鍛冶師なんぞでな、近距離戦用の武器はいくつか作って携帯している』

・  
・  
・  
・  
・

『ライフリッパ―!!』

メルクリウスが鎌を振るうと、刃型のエネルギー体が放たれた。それをロックマンは体勢を低くしてかわし、返す刀でロックバスターを放つ。しかし、銃弾はメルクリウスの鎌の一薙ぎで打ち消された。

「『……………』」

こんな感じで、まだどちらもクリーンヒットしていない。せいぜいお互いに浅い切り傷がある程度だ。

客観的に見れば互角に見えるかも知れないが、

(……………手加減されてるな)

ロックマンはそう思っていなかった。

先程までの戦闘に、《感知出来ない高速移動》や《アルケミー》といったメルクリウスの能力が一切使われていないからだ。アレ等を使えば、ロックマンを一方的に倒されるだろうに、何故使わないのか。

『な』

そんなことを考えている時、メルクリウスの口が微妙に動いた。何かを呟いたのだろうが、声が小さくて聞き取れない。

『お前がいなけりゃ

な』

メルクリウスが繰り返し呟いた。声が少し大きくなったのか、さっきより良く聞こえる。それでも後半部分はハッキリしない。

しかしそれも、三回目の呟きで聞こえるようになった。

『お前がいなけりゃ、アイツも謀叛なんて起こさなかっただろうな』

(……………謀叛?)

謀叛を起こした。それではまるで、シルフィーが自分から裏切った風に聞こえる。シルフィーは結果的に裏切った形になったただけだったはずだ。

話が食い違っている。どちらかが間違っているということだが、

(シルフの話は本当だって、WAXAで何度も《検査》して分かっている。…だとしたら)

そこでロックマンは気付いた。

(アイツ…騙されてるんだ！)

そうとしか考えられない。

シルフィーに聞いた通りの話をそのままメルクリウスに話せば、彼も裏切りかねない。そう考えた十二神将の上層部が事実をねじ曲げて伝えた。メルクリウスを味方に置くために、彼がシルフィーの始末に反対出来ないように。

(…伝えないと。このままだと二人とも不幸になるだけだ！！)

「メル  
」

そう決心したロックマンは、音もなく高速で目の前まで移動してきたメルクリウスが、ロックマンの首を刈ろうと鎌を振っている事にギリギリまで気付かなかった。

第35話・食い違い（後書き）

### 第36話：奥の手

『エアブラスト！』

シルフィーの作り出した風の塊が爆発し、突風を撒き散らした。ウルカヌスはそれをハンマーで防ぐ。その間にシルフィーはウルカヌスの背後に移動して風の剣で斬りかかるが、すぐに振り返ったウルカヌスの刀でまた斬り裂かれた。一緒に右二の腕も斬られる。

『エアバレット！』

『……むう！？』

シルフィーはそれに臆する事なく、左の人差し指から風の弾丸を放ち、ウルカヌスの顔に当てた。

ウルカヌスは少しよろめき、その隙にシルフィーは遠くに移動して風を集め始めた。ある技の準備をしているのだ。

（もうちょっと…！）

自身の最強の技、《スリットウインド》の準備を。

・  
・  
・  
・  
・

ロックマンはメルクリウスの鎌の一振りを大きく仰け反って避けた。  
…いや、右目の上を斬られているので避けたとは言えない。

その結果、バイザーが碎け散りロックオン機能を失った上に、斬られた箇所から血が流れ出て右目に入り視界が奪われてしまって、視覚的にかんりのハンデを背負う事になってしまった。

『…良い反応だ』

メルクリウスは二、三步後ろに下がると、鎌を天に掲げた。コアが輝く。

『ケリユケイオン・モードランス』

そして鎌の刃の形をとっていたエネルギー体が霧散し、菱形の物体の前方二辺から新たにエネルギー体が飛び出した。その形は槍。メルクリウスは槍となったケリユケイオンの切っ先をロックマンに向けてから、呟いた。

『…残念だよ。お前とは、もっと別の形で戦いたかったのに』

そう言ったメルクリウスの目は、とても寂しそうだった。

「…僕も、そう思うよ」

ロックマンは低いトーンで言った。

(…今は、話を聞いてくれそうにないな。…一回倒して、大人しくさせてからだ)

「ロック」

『おっ』

メルクリウスが槍で貫こうとしている間に、ロックマンとウォーロックは短く言葉を交わした。

そして、叫ぶ。

「バトルカード、ウォリアーブラッド!!!バスターマックス!!!」

.....

『…ほう、素晴らしいな』

ウルカヌスは素直に感心した。  
シルフィーが纏めている風の量が、その昔見た時より向上していたからだ。

ウルカヌスは微かに笑いながら、言った。

『ぶつけてみる。多少は届くかもしれないぞ？』

『最初から、そのつもりです！』

シルフィーは全身に纏った風を一度固めて、

『スリットウインド！！』

無数の風の刃に変えて一気に放った。全方位に放たれたそれらは、様々な軌道を描いてウルカヌスへと襲いかかっていった。

『……知っているか？』

ウルカヌスはハンマーを手離し、刀だけ持った状態で呟いた。

『良く斬れる刃は酷く脆いのだよ』

ウルカヌスは次々と襲いかかって来る風の刃を刀で斬り裂いていった。凄まじい速度で向かってくる刃を、それを上回る速度で動いて対処する。その異常な動きにシルフィーが焦っている。

(……そんな顔をしなくてもよからう。言った筈だ)

ウルカヌスは襲ってくる風の刃の一つに斬りかかり、

(良く斬れる刃は酷く脆い……と)

風の刃に砕かれた自分の刀を見て、薄く笑った。

直後、自身を守る術を失ったウルカヌスの身体を風の刃が斬り刻んでいった。

・  
・  
・  
・  
・

『……………は？』

メルクリウスは目を丸くして驚いていた。

彼はロックマンを貫こうと槍で突いていた。情を一切捨てた紛れもなく本気の力で。それなのに何故、

「……………」

槍はロックマンを貫いていないのだ？いや、貫くとかそんなレベルの話じゃない。刺さってすらいらないのだ。槍は、ロックマンの身体にかすり傷すらつけていなかった。

混乱するメルクリウスに、ロックマンは告げた。

「ウォリアーブラッド、使用者にスーパーアーマーの能力を付加させるバトルカードだよ。…合点がいった？貫けなかった事に」

ロックマンは片手で槍の先を掴んで握り潰すと、立ち上がって銃口をメルクリウスに向けた。

「…それと、もう一枚のカード、バスターマックスはね」

メルクリウスはその話を最後まで聞かなかった。本能的に危険を察知して既に後退を始めているからだ。

しかしロックマンはそんなのお構い無しに言葉を言い切って、

「僕のバスターの性能を限界値を越えて引き出すカードなんだよ」

ロックバスターを放った。それをメルクリウスはかわそうとしたが、

『…なん!?!』

圧倒的な弾幕が張られていてそれが叶わなかった。

ロックバスターの群れがメルクリウスを襲った。

第36話：奥の手（後書き）

ウォリアーブラッドの効果……合ってるかなあ

### 第37話：大馬鹿野郎

『本当に素晴らしいな、シルフィー』

『どうも』

倒れているウルカヌスはシルフィーに称賛の言葉を贈っていた。

『補佐官が十二神将を下すなど、長いムーの歴史の中でもお前が初だ、誇れ』

『誇れと言われましても……、裏切った身なので、誇る相手がいません』

シルフィーは頭を掻きながら言った。

『メルクリウスに対して誇ればよからう。…あちらも、そろそろ終わる頃だ』

ウルカヌスが遠くを見る。その先にはロックマンとメルクリウスがいるハズだ。

(……メルクリウス様、スバル)

シルフィーも、複雑な表情でそちらを向いた。

・  
・  
・  
・  
・

「そう簡単には終わらないか」

ロックマンは大した傷を負っていないメルクリウスを見て呟いた。

彼は避けることが不可能なあの弾幕を、空気を鋼鉄の性質を持った電波に変換して凌いだのだ。二、三発貫通した様子だったが、それもかする程度だったらしい。

ロックマンはウォリアーブラッドの副作用に顔を歪ませながら、

(…あまり長引かせるこっちが不利になる。早急に決着を着けないと)

腕を構えた。

メルクリウスもケリユケイオンを構えて臨戦態勢に入り、

『ケリュケイオン・モードクングニル』

ケリュケイオンを変化させた。

モードランスと同様に菱形の前方二辺からエネルギー体が飛び出し、更に残りの二辺からそれぞれエネルギー体が飛び出した。

中世の騎士が使っているような槍となったケリュケイオンから、かつてないほどの電波エネルギーが放たれている。

(本気モードってトコか)

お互いに準備万端、後は何か切っ掛けがあれば戦闘が始まるだろう。

「『……………』」

静寂が辺りを包む。

その時、ロックマンの頬を汗が伝い、顎から滴り落ち、

ぽちゃん

「『……!』」

二人の電波人間が一瞬で交差した。

・  
・  
・  
・  
・

……決着は着いた。

メルクリウスの槍がスーパーアーマーを破ってロックマンに突き立った刹那、ロックバスターがケリユケイオンを半ばから折り、そうして身を守る装備を失ったメルクリウスの腹にロックバスターを二発撃ち込んだロックマンの勝ちだった。

『……………くそ』

今はロックマンがマウントポジションを取って銃口を頭に突き付けている所だ。

(……………なんとか、倒したな)

代償は大きかったけど、と、青ざめた顔で思う。

…それはさておきだ。これでようやく話が聞かせられる。

「メルクリウス」

『…………ん？』

「話を聞いて欲しい」

・  
・  
・  
・  
・

シルフィーはウルカヌスを抱えて移動していた。ロックマン達の所に向かっているのだ。

その途中で、ウルカヌスが裏切った理由を訊ねて来たので、話した。

『…………そうか、アレス達が』

ウルカヌスは沈んだ表情で呟いた。

『嵌められたわけだな』

『……そうですね』

二人は一切視線を交わさずに言葉を交わす。

『すまなかつたな』

『……いいですよ、謝らなくて。貴方は悪くありませんし』

そして二人共無言になる。

視線が前方に固定される。

その先にはメルクリウスと彼に馬乗りになっているロックマンがいる。

・  
・  
・  
・  
・

『なん…だと？』

本当の事を聞かされたメルクリウスは、目を見開いて驚いていた。自分が騙されていると分かったからだ。

『……くそ、俺シルフィーに何て言ったら……!!』

メルクリウスが頭を抱えて苦悩する。その様子を見てロックマンは告げた。

「シルフなら許してくれるよ。事情を知ってるんだし」

『！』

確かにシルフィーなら許してくれそうな気がするが、それはそれではなくキツい気もする。と、メルクリウスは思う。

「…………ただね」

『？』

するとロックマンがぼそりと呟いて、

「僕は絶対に君を許さない」

メルクリウスの胸ぐらを掴んで、ずいっと顔を近づけてきた。鋭く睨んでくる。

「シルフは謀叛なんて馬鹿げた事は絶対にしない娘だ。ここ数日一緒に居ただけでそれが分かった。短い付き合いの僕でも分かるんだ」

ロックマンは胸ぐらを掴んだまま立ち上がり、メルクリウスの目を真っ直ぐ見て言い放つ。

「…なのに何で、長い間一緒に居た君は、他人に謀叛を起こしたって言われて、殺そうとするんだよ。長い間一緒に居たくせに、シルフがどんな娘か一番知ってるくせに」

『……………！』

メルクリウスの目が見開かれた。

ロックマンはそこで一拍置いて、それに、と続ける。

「もし、万が一、本当に謀叛を起こしていたとして、それで君があの娘を殺そうとするって所が一番許せない」

『……………え？』

「君にとってシルフって何だ？大切な部下なんだから！？だったらシルフが何をしてようと味方になるべきだろ！何で言われるままに殺そうとするんだよ！！味方になって、庇ってあげるべき君が、何で殺そうとするんだよ！！」

ロックマンの本気の怒りにメルクリウスは言葉を失う。反論が出来ない。

『スバル』

「……………」

その時、ウォーロックが現れた。二人はアイコンタクトし、直後にロックマンがメルクリウスを持ち上げてパツと手を離す。

「『この…………』」

そして、

「『大馬鹿野郎!!』」

二人同時にメルクリウスの顔面を殴った。

メルクリウスは少し吹っ飛んで仰向けに転がった。相当痛かったのか、目を瞑って鼻を押さえている。いきなり何すんだ、と抗議したいところだが、

(資格がねーな)

やめた。

目を瞑ったまま、先程のロックマンの言葉を反芻する。

(…馬鹿だな、確かに)

メルクリウスが苦笑した、その時、

『メルクリウス様』

『!?!』

聞き慣れた声が、聞こえてきた。

ついでに、ロックマンとウォーロックの言葉も聞こえてくる。

「『目を開けてみる』」と。

メルクリウスは目を開ける。心配そうな顔をしたシルフィーがそこにいた。

(……ああ)

自分を殺しに来ている上司を、シルフィーはいつもと変わらずに、

本気で心配している。

（本当に、大馬鹿野郎だ俺）

そんなシルフィーを見てメルクリウスは、自分自身が物凄く情けなくなつた。

### 第38話：汚い部分

『我は拠点に戻るよ』

『……何でだよ、一緒に来ようぜ』

『……いやいい。我にはやることがある』

『やること?』

『……《シルフィー抹殺の任務遂行中、星河スバル達の妨害を受け、我等は敗北した。我はどうか逃げ出したがメルクリウスは相手に捕らえられてしまった》と、伝えるのだよ』

『……おお』

『そうすればお前が罪に問われる事はないだろう?』

『……そうだな』

『……では、行ってくる』

『おう、頼んだ』

・  
・  
・  
・  
・

ウルカヌスは自分の世界に戻って、十二神将の拠点に向かっていた。戻る前の同僚との会話をおもいだしながら。

(……すまんなメルクリウス)

実は、彼に一つ伝えていない事がある。伝えなかったのには理由がある。もしそれを伝えてしまえば、俺も一緒にやるぜ！とか言いかねない内容だからだ。

…その内容は、

(五本指を我が全て消す)

そう思ったのは、メルクリウスやシルフィーの安全を確定させるため。

ウルカヌスと五本指にはかなり力に隔たりがあるが、不意討ちの全力攻撃ならやれないこともない。

そして、もし、それが終わっても我が生きていたならば

と、一つの未来を思い描いた時、

『……………?』

首を押さえつけられて地に伏していた。

いや、地ではないか。地は透き通って向こう側は見えない。

ウルカヌスは驚き過ぎて逆に冷静になった頭で状況を大体把握した。

一瞬地だと思ったこれは、最硬の電波障壁。<sup>アンギス</sup>首を押さえているのは、  
三叉の槍と軍剣。<sup>トライネンツァンデイクス</sup>

……………そこまで理解して、ウルカヌスはようやく焦りを覚えた。その  
三つの武器は……………

『……………よくやった』

…と、そこで老人の声が響いた。

そして、ウルカヌスは目を見開いた。

《ゼウス・ライトニング》

《ユノ・エンヴィー》

《マリリン・ポセイドン》

《アレス・ブレイカー》

《アテナ・ガーディアン》

十二神将五本指がその場に勢揃いしていたのだ。

『……………どういう事だ？』

わけが分からなかった。何故ここに五本指が、しかも全員いるんだ？

『答える義理はねエ……………が』

グラディウスで首を押さえているアレスが口を開く。

『まあいいか。どオセ誰にも知られる事はねエんだ。特別に教えといてやる』

その後の言葉を、同じく首を押さえているポセイドンが引き継ぐ。

『お主が儂等の《汚い部分》を知ってしまったからじゃよ』

『…』

汚い部分とはあの事か？

だとすれば、何故それを知っている？シルフィーにあの話聞いたのはあちらの世界なのに

『…………まさか』

ウルカヌスは、そこで一つの可能性に気付いた。

同時にクツクツと笑って押さえている二人が告げる。

『さっきまで俺等も行ってたんだよ、あっちの世界にさア』

『だから全て知っているのだ。貴様が真実を知った事も、メルクリウスが裏切った事もな』

続いてユノとアテナが告げる。

『…………その事を、他のメンバーに伝えられては困るのよ』

『ですから、始末に来ました』

そうして四人が話し終わり、最後にゼウスがしゃがんでウルカヌス

と視線を合わせた。

『……………すまん』

そうやって彼は謝罪し、手を伸ばしてくる。

( …… もし我が生きていたならば )

その最中、ウルカヌスは先程思い描いた未来をもう一度描いた。

( お前達と、共に行く )

それは、叶わなかった。

・  
・  
・  
・  
・

『……………どうですか、ゼウス様？』

『 ああ、《奪った》 』

『そりゃア良かった!』

『そうだな』

ゼウス、ユノ、アレスが言葉を交わす。

『……ところで皆様。目的の物は見つかりましたか?』

しばらくの沈黙が流れて、ふとアテナが皆に訊ねた。

『あア見つけたぜ。この俺の尽力で!』

『ハッ!何を言うか!ほとんど儂に任せきりだったではないか貴様は!』

アレスとポセイドンの言い合いが始まった。アテナはそうですかと頷き、ゼウスとユノを見る。

『……もちろん、見つけたわ』

『ただノイズが酷くてな、近寄れなかった』

『そうですか』

アテナは再び頷く。そこで、お前はどんなんだ？とゼウスが聞き返してきた。

アテナは溜め息をつき、

『目的の物は二つだけ、私が何か見つけているわけがないじゃないですか』

『だよなア』

『ハッ！役立たずめ』

そう返答したアテナに、アレスとポセイドンは蔑みを込めた目を向けた。

アテナは特にムツとするでもなく、もう一度溜め息をつく。

『……………ただ』

そして三拍ほど置いた後、そう言った。

『協力したいと仰る人物を連れてきました』

『協力したい者?』

ゼウスが訝しげな目を向けてくる。

アテナは、はい、と答えた後、パチンと指を鳴らした。…と同時にアテナの背後に何者かが現れた。

黒ずくめの、ブロンドの髪の毛の男が。

その人物を見て、他の四人は『コイツは……!』と目を見開く。

そしてその男は、深々と頭を下げて微笑混じりに挨拶した。

「ソッフ。よろしくお願いたします」

第38話：汚い部分（後書き）

本当は殺したくなかったんですけどね……

### 第39話：文化祭

10月29日。

この日は夕凧中学校の三日間ある文化祭の一日目だ。生徒も教員も既にカタツ苦しい勉強モードからお祭りモードに移行してはしゃいでいた。大勢の一般客も同様だ。

そんな、文化祭真っ最中の夕凧中学校の1・Bの教室（出し物はコスプレ喫茶）では、

「い、いらつしやいませー…」

とある人物が接客をしていた。

身長150cm前半程度の、茶色いセミロングの髪の毛のウェイトレス服の美少女だ。

《彼女》がお客をテーブルに案内する様を、クラスメイト達は、物凄くにやにやしながら眺めていた。

（…うう、何で《僕》がこんな事を）

《彼女》はテーブルに水を置いた後、そう思う。  
そして思い出す。五日前の事を。

・  
・  
・  
・  
・

1 - Bの教室はどよめいていた。教卓に、響ミソラと水無月ツバメに挟まれる形で、見知らぬ少女が立っていたからだ。

綺麗…とか可愛い…という声上がる。

確かにそうだ。今教卓に立っている少女は、美少女と言っても違和感がないくらい綺麗だった。

「…ね、ねえ。水無月さん、響さん、誰、その娘？」

クラス的女子がサイドの二人に問う。二人はニツと笑い、同時に答えた。

「「星河スバル君」」

……長い沈黙が流れた。

やがて、クラスのほとんどの人物が絶叫した。

『『『『ええええええええええ！？』』』』』

・  
・  
・  
・  
・

ツバメは何故かスバルを女装させたがっていた。もちろんスバルは断り続けていたのだが、ある日、ツバメはこんな事を言ってきたのだ。

「何でも言うこと聞いてくれるって、約束したよね」

した。ああ確かにした。中間テストの三日前にだ。そして、だからあの時友人達の様子がおかしかったのかとスバルは納得した。似合うとか、可愛いとか言ってきたあの時、皆気付いていたんだ。

スバルは十三年の人生の中で一番後悔した。あの時ツバメの助け船に乗らなければこんなことにはならなかった。

そうして、僕の女装が始まった。

夕風中学校の女子用制服や胸パッド、完璧にスバルの髪と同じ色のセミロングのカツラ等を着用して、格好は女子になった。ただ、顔がスバルのままだったので、

「うっん、まだだね」

ツバメはミソラを呼んできたのだ。

「あはは じゃ、ちょっと失礼するねスバル君」

ミソラは芸能界で過ごす間に会得したメイク技術を駆使してスバルをメイクしていった。絶妙な、まるでプロの様な手付きで。

そうして完成したのが、女版スバル（通称星野スバル）だ。

スバルは鏡を見てまず、「うっわー、誰この綺麗な娘？」と思った。しばらくして自分だと気付き、死にたくなった。

以下はクラスメイトの評価だ。

響ミソラ「すっごく可愛い!~!」

水無月ツバメ「うんうん〜思った通りだ〜」

雛森ゆたか「ああやべえ、一瞬惚れそうになった」

花菱キクリ「だ、抱き着きたい……！」

藤枝カイリ「ああ、そんなスバル君なら、好きになっても良いかも……」

続いてウィザード達の評価だ。

ウォーロック「（にやにや）似合っじゃねえか」

ハーブ「……アリね！」

セイレーン「（手を合わせて）素敵です……」

メルクリウス「（にやにや）良いじゃん」

シルフィー「凄ッ可愛い！何コレ！？スバル滅茶苦茶可愛いじゃん！うわーなんだろ！あはははは！……！」

シルフィーにえらく好評だった。

・  
・  
・  
・  
・

そんなわけで、美少女となったスバルは、文化祭当日の喫茶店で働いているのだった。

(……うー、バレる事はないとは言われたけどさあ。…不安だよ)

スバルは溜め息をつく。それと同時に、教室の扉が開いた。

スバルはすぐさま接客モードに移行して、

「いらっしやませー」

入ってきた二人の人物に笑いかけた。

笑いかけて、しばらく彼の動きが止まった。

入ってきた二人の人物とは、サテラポリスのエースである暁シドウとクインティアだった。

スバルはシドウと数秒視線を交差させた。すると、

「…………ふっ」

シドウが口の端を思い切り吊り上げた。隣のクインティアは顔を背けて口許を押さえている。笑いを堪えているらしい。

（気付かれたツ！？）

流石だな、とスバルは思った。何て鋭い人達なんだと尊敬した。

「…案内して下さらないのですか、綺麗なウエイトレスさん？」

「…くくッ」

あえて気付かないフリをするらしい。クインティアは既に堪える限界に達しているみたいだ。

「…………どどござー」

とんだ生き恥だ、とスバルは思った。



第39話：文化祭（後書き）

スバルの女装、実現

## 第40話：女装

「……ねえミソラちゃん」

「何？」

「……僕の制服はどこに行ったのかな？」

「え？……あれ、ないね」

「……」

「……私の貸そうか？」

「……女装を続けろって事？」

「Yes」

そういうわけで星河スバルは、休憩をもらったというのに、女装を解くことが出来なかった。

・  
・  
・  
・  
・

「……うう」

『何シケたツラしてんだ？折角の祭りなんだぜ、楽しめよ』

スバル（女版）とウォーロックは廊下を歩きながら会話していた。スバルの顔は当然の如く疲弊している。

「ウォーロックは良いさ、いつも通りなんだから。…僕はバレない様に気をつけないといけないんだよ？」

『良いじゃねえか、それも含めて楽しみゃあよ』

「無理です」

そう言いつつ角を曲がる……と、

「!?!」

「!」

丁度同じタイミングでこちらに曲がろうとしていた人物とぶつかりそうになった。スバルは咄嗟に身を捻らせてかわす。

「……とと」

二、三步ほどよろめいて進んだ後、小さく息を吐いてぶつかりそうになった人物を見る。  
ドリルみたいにカールした後ろ髪を持った、金髪の少女だった。

「……………うわぁ」

委員長こと白金ルナだ。

しばらく沈黙が流れた後、ふと我に返ったルナは慌てた様子でスバルに頭を下げてきた。

「じ、ごめんなさい！ちょっと考え事して……………！」

「あ、いや、いいです！いいです、そんなに謝らなくて！ば……………私も同じようなものだから！」

スバルも慌てて頭を下げる。一人称を『僕』にしかけて、更に慌てて言い直す。

「…そ、そうですか？」

「そうです…！」

ルナに敬語で、全力で謝罪されるといって、おそらく人生で二度とないであろうイベントを早急に終わらす。楽しみたいところだが、そうも言ってもらえない。

「そうですかー……って、あら？」

ルナはそう言って謝罪を止め、スバルの顔を見てきた。そこで、首を傾げる

「あの……、どこかで会った事ありませんか？」

(ヤバイ)

ルナが気付きかけている。これ以上いるとバレてしまうな、とスバルは思う。

「…いえ、今初めて会いましたけど」

とりあえず、顔を背けて答える。  
ルナは「そうですか」と呟いて、

「そうですね、すみませんでした！」

では失礼します、とルナはもう一回頭を下げ去っていった。  
スバルは適当に手を振ると、

「ウォーロック」

『あん？』

「女装、以外と良いかも知れない」

と言った。

・  
・  
・  
・  
・

メルクリウスは校舎の屋上で暇を持て余していた。祭りと言っても  
所詮人間の祭り、電波体のメルクリウスが楽しめる事は特にない。

(……さて、どうするか)

地上に広がる祭りの風景を眺めつつ、メルクリウスは考える。

星河スバルのウィザードになった（無理矢理なった。容量オーバーなんですけど）とスバルに言われた）メルクリウスは結構平和な暮らしをしていた。

あれ以来、十二神将は誰も来ないし。

（ウルカヌスは…）

そこで、あの日別れた同僚を思い出す。彼はどうなっただろうか。ちゃんと上手くやったのだろうか。

（…考えても仕方ないか）

メルクリウスは思考を止める。

すると、校内放送が流れた。

『お知らせします。只今、バトルウィザード大会の受付を行っております。参加を希望するウィザードの方は午前十時半までに受付をお願いします。受付所は』

その内容にメルクリウスは、

『前言撤回、楽しめる事あった』

すぐに受付所まで飛んで行った。

・  
・  
・  
・  
・

「星野」

「……………」

「おい、星野！」

「……………」

「…はあ、星河！」

「!？」

スバルはブーツとしながら歩いていると、突然後ろから声をかけられた。

最初に呼ばれていた星野というのは偽名だったので反応出来なかった。

「誰……って、なんだ雛森君か」

「なんだとは何だ」

声をかけてきたのはクラスメイトの雛森ゆたかだった。出し物関係でサラサラの少し長めの金髪を逆立てて黒いマントを羽織っている。

「何か用？」

スバルは歩く速度を落として隣り合わせになるようにしてから訊ねる。

「おう。…さつきバトルウィザード大会の放送があつたら？俺さ、《アイゼン》を出そうと思つてんだ」

「へえ」

ゆたかがテンション高めに喋り出す。

ちなみに、アイゼンというのは彼のウィザードの事だ。バトルウィザードで、全身が鋼鉄の様に硬い電波物質で構成されている。最近聞いた話によると、ゆたかの父親が色々な会社に働きかけて作らせた特注のウィザードらしい。

「…………で？」

スバルはそこで再び訊ねる。

すると突然ウォーロックが現れてこう言った。

『察しが悪いなスバル。つまり俺を出さねえかって言いたいんだろ』

「し」名答」

ゆたかが頷く。ああなるほど、とスバルは手を叩く。

自分のアイゼンとスバルのウォーロック、どちらが強いのか決めようという話なのだ。

「…出るよねウォーロックは」

『当たり前だ！』

即答。

「よっしゃ！楽しみだなアイゼン！」

『おーう』

ゆたかとアイゼンがそう言っただッポーズをする。

「じゃ、受付しに行こうぜ！」

「分かった」

スバルとゆたかは歩き出した。

・  
・  
・  
・  
・

「とじろでね」

「ん？」

「女装、もう慣れたのか？」

「うん。何か楽しくなってきた」

「そうか」



第40話：女装（後書き）

俺の小説のスバル。

ヤバイ方向に走りそうですね

第41話：戦争（前書き）

タイトル物騒ッスね

## 第41話：戦争

バトルウィザード大会は、基本人間が楽しむために行われる文化祭で、どうにかしてウィザードにも楽しませたいと思った人物が考えた案の一つだ。

これは特にバトルウィザードの事を考えた案で、オペレーターが文化祭の活動で手が離せない状態になった時、暇になるバトルウィザードの暇潰し……つまり、バトルウィザードの本業である戦闘をさせるものなのだ。

参加は自由、受付にオペレーターは必要なくウィザードだけで受付が出来る。

大会はトーナメント方式。一試合三分、決着が着かない場合は審判の判定で勝敗が決まる（ちなみに、あまりにも実力差がある場合は審判が試合を止める）。

更に、この大会でベスト3にまで上り詰めると景品（ウィザード強化アイテム）が貰えるらしい。

そんな大会にウォロックを出場させたスバルは、公開された対戦表を見て目を丸くしていた。

《1回戦・第7試合・ウォーロックVSメルクリウス》

まずメルクリウスが出場している事に驚いた。驚いたが、そこはまあ良いだろう。

…それでも1回戦でウォーロックと当たらなくてもいいだろうに。

「……………雛森君」

「ん？」

「ウォーロック、アイゼンと戦う前に消えるかも」

「!?!」

隣のゆたかにそう告げると、スバルは苦笑した。

(ウォーロック、適度に頑張りなよ)

・  
・  
・  
・  
・

『…テメエか』

『ああ、俺だ』

ウォーロックは選手用控え室で、メルクリウスを睨んでいた。

1回戦から強敵を相手に出来ることに喜びを感じる反面、物凄く複雑な気分だった。

『お手柔らかに頼むな』

メルクリウスが握手を求めて手を差し出してくるが、ウォーロックは『馴れ合いはしねえ』と言わんばかりにそれを払った。メルクリウスは肩を竦める。

そうしてウォーロックが踵を返すと、

『よおウォーロック』

『久しぶりだな』

『緊張してねえか、ウォーロックちゃん？』

同郷の三人（オックス、ジェミニ、コーヴァス）がいた。ウォーロックは露骨に嫌そうな顔をする。

『お前らも出んのかよ』

『おう、ゴン太が今手離せなくて暇してたからな』

『俺も似たようなモンだ』

面倒そうに訊ねるウォーロックにオックスとコーヴァスは答える。

『お前は？』

『ツカサが参加するか？と訊いてきたからな、とりあえず出てみた』

ジエミニも簡潔に答えた。それを聞いて、『そういえばアイツ今日本にいたんだっただな』と思う。

(……………っーか)

ウォーロックは控え室全体を見渡す。

(ムーやFM星の電波体を除くと大したヤツはいないな)

強そうなヤツと言えば、アイゼンくらいしかない。そう思った時だった。

『あ?』

ふと目に入った対戦表の最後のウィザード、その名前を見て、理解して、小さく声を上げた。

《アシッド》

『.....』

ウォーロックはしばらく静止した後、ポツリと呟いた。

絶対勝ち残る、と。

.....

「隣良いでしょっか?」

「あ、はい」

観覧席にいたスバルに誰かがそう訊ねてきた。別に問題はないよな、  
と思つて軽く了解したのだが、

「……つて」

その人物の顔を見てすぐさま後悔した。

「……どうしました？」

その人物とは、双葉ツカサだったのだ。

「あ、いえ、何も」

スバルは慌てて取り繕つて顔を背けた。

マズいなど、スバルは思う。ツカサはかなり鋭い人物だ、こんな女  
装くらいすぐ見破つてしまつたらうと危惧して、

「……ふふ」

ツカサが微笑んでいる事に気付いた。  
……これは最初から気付いていたな、と思う。だから隣良いでしょ  
うか？なんて訊いてきたのだ。

「…ツカサ君」

「あはは、やっぱりスバル君だ」

諦めてスバルは名前を呼んだ。ツカサはとても愉快そうに笑って、

「似合ってるね、女の子姿」

素直に感想を洩らしてきた。

「どーも」

スバルは適当にお礼を言って視線を反らす。慣れたつもりだったが、  
そう言われるとやはりまだ微妙に恥ずかしい。

そんなスバルの心情を察したのか、ツカサはすぐに話題を変えた。

「ウォーロック出てるんだよね」

「うん。…ていつか、君のジェミニも出てるじゃん」

「そうだね」

二人は改めて対戦表を見る。

よく見ると、結構な強者揃いだっただ。

ウォロックにメルクリウス、ジェミニ、オックス、コーヴァス、おまけにアシッド。

最早これは祭り事の一環などではなく、誰が地球上最強のウィザードなのかを決める《戦争》だと言っても過言ではないだろう。

二人はそれを考えて苦笑する。

そうして、バトルウィザード大会が始まった。

## 第42話：第1回戦

第1試合から第5試合までは退屈そのものだった。

いや、一生懸命やってるのは分かるし、観客も盛り上がってるからそれなりの戦いをしている様に見えるだろう。

…ただ、世界の危機というとんでもない事態を幾度となく見てきたスバルやツカサといった人物には、どうしてもその試合が《コミッククショー》みたいな物にしか見えなかったのだ。  
認識やら常識が一般からかなりズレてるなど、二人は感じた。

そして第6試合。

《ジェミニVS（名無しのウィザード）》

観客席の人々は啞然としていた。

開始三秒。ジェミニの電撃により対戦相手のウィザードが戦闘不能になったからだ。

そしてスバル達は別の意味で啞然としていた。

「……………堪え性ないなあ、ジエミニ」

「……………本当にね」

ツカサは試合前にジエミニに通信でこう言っていた。

「ジエミニ。あんまり簡単に終わらせるのもなんだし、ちょっと遊ぶ程度に力を抑えて戦ってね」

ジエミニはそれに了解したのだが、……………相手があまりにも弱すぎたためか、二秒で我慢の限界に達して一秒で相手を倒していた。

「……………あ、あれお前のウィザードなのか？ 凄えな」

スバルの隣のゆたかがツカサに訊ねる。ツカサはまあね、と苦笑い気味に頷いた。

そして、スバルが最も楽しみにしていた第7試合、

《ウォーロックVSメルクリウス》

その試合の開始を告げる鐘が鳴った。

・  
・  
・  
・  
・

(……何なんだろうなアイツのあの気合い)

メルクリウスは対戦相手のウォーロックを見てそう思った。

先ほど控え室で会話した時とは打って変わった本気モード。何か知らないが、目がやたらとキラキラしている。

(……何だろう、スッゲー嫌な予感がする)

メルクリウスは寒気を覚えた。今のウォーロックは危険だ、そう全神経が訴えている。

そんな事を考えているうちに、試合開始の鐘が鳴った。

『お　　おお!?!』

さあ戦闘体勢に入ろうか、と思ったメルクリウスが悲鳴を上げた。ウォーロックが、一瞬で目の前まで移動してきてビーストスイングを放っていたのだ。

『つとー!!』

メルクリウスはなんとかそれを避けるが、息つく暇もなく振った腕とは逆の腕を突き上げる様に振られた。ビーストスイングがメルクリウスの顎を狙う。

『……！ツアルケミー！！』

メルクリウスは咄嗟に能力を使い、顎周りの空気を固い物質に変換した。しかし、

ガギンツー！！

それをウォーロックは難なく突き破り、ビーストスイングを顎に命中させた。

『ぐぐぐ……』

メルクリウスは上方に吹っ飛んだ。その状態で、ウォーロックを見る。追い討ちをかけようと、飛び上がっているのが見えた。

『……っそ！ケリユケイオン！！モードサイズ！！』

メルクリウスはそれを許さず、空中で体勢を整えるとケリユケイオンを鎌に変化させて迎え撃った。

ギーン！！と刃と爪がぶつかり合い、二人は地に降り立ち、睨み合う。

そこで、観客席から歓声が上がった。高レベルな戦闘に会場が沸き立っている。

だが、メルクリウスにはそんなものは一切耳に入っていなかった。そんなもの、聞く余裕がない。

(…………マジかよ)

ケリユケイオンの刃が欠けていた。ただの電波体モードでの能力使用のため、結合力が弱くなっているのが脆いと言えば脆いのだが。……それにしただ。ウォーロックの爪は一切傷付いていないのに。

(動きに無駄がないんだ。最少の動きで、最高の攻撃を放ってくる)

ウォーロックのコンディションが最高なのだ。

(……ヤバいかもな)

メルクリウスは素直にそう思った。

・  
・  
・  
・  
・

「ウォーロック、凄い」

スバルは思わず言葉を洩らした。ムーの電波体十二神将を明らかに  
圧しているからだ。

「おいおい、星河。アイゼンと戦う前に消えるって、多分無いぜ?」

「……そうだね」

スバルは確かに、と頷く。

そして正直、ウォーロックに謝りたかった。メルクリウスとの試合と聞いて、ウォーロックが勝てるわけがないなと思ってしまったのだ。

「……………何か、お詫びしなきゃ」

スバルは静かにそう呟いた。

・  
・  
・  
・  
・

ウォーロックはノッていた。コンディションは最高、モチベーションは上がりまくっている。

その理由として、やはりアシッドが参加しているというのがあるだろう。

アシッドは彼にとってライバルみたいなものだ。そのライバルが参加して、しかもトーナメント表の感じからすると決勝でしか戦えないとなれば、それはモチベーションも上がると言うものだ。

『オラア！！』

ビーストスイングでメルクリウスを襲う。メルクリウスは鎌の刃でそれをいなすと自然な流れでパンチを繰り出してきた。ウォーロックはそれをモロに喰らうが、お構い無しにビーストスイングを放つ。メルクリウスの体を斜め一直線に切り裂き、逆の腕で殴り飛ばす。

『ぐっおー!!』

メルクリウスがよろめいて後退するが、その不安定な体勢で鎌を振るってきた。

それは、ウォーロックの肩を斬り裂いた。

『ぐっおー!!』

ウォーロックも後退する。

そうして再び睨み合う形になった。  
空気が重くなる。

『……』

その空気を読んだのか、観客も静まる。

シン……とした空気の中、ウォーロックは残り時間を確認する。  
残り十五秒。

おそらく次が最後の攻防になるだろうと、ウォーロックは力を溜める。メルクリウスも同様だ。

そして、残り三秒。

二人の影が交差した。

第7試合、勝者ウォーロック

第42話：第1回戦（後書き）

大会での、戦闘は短くしていきます。

第43話・第2回戦（前書き）

短くすると言ったそばから長くなりました。

## 第43話：第2回戦

『ありゃー、メルクリウス様負けちゃった』

「判定だけどね」

「!?!」

スバルは突然後ろから聞こえてきた声に驚いて振り向いた。ゴスロリ姿のミソラとシルフィーがいた。

「……シルフ、残念？」

スバルは思わず訊いた。シルフィーにとって尊敬する上司が敗れたのだ。気分的に複雑だろう。

しかし、

『んーん。別に?』

シルフィーはあっけらかんとそう言った。

『メルクリウス様が楽しそうだったからそれで良いよ』

「……そっか。……で、ミソラちゃんは何でここに居るの？仕事は？」

「ん？」

スバルはシルフィーの答えに頷いた後、続いてミソラに訊ねた。

「仕事は休憩貰った。ここに来たのは、まあ……」

ミソラの表情が曇る。何事か訊ねようとしたスバルだが、その前に彼女のウィザード（1）が口を開いた。

『ミソラはね、歌唱大会の参加を断られて暇だったからここに来たのよ』

ハープのその言葉に、ミソラはうう、と呻き、スバル達は驚いた。しかし、驚いたのは断られた事にはない。

「……ミソラちゃん（響）、出れると思ってたの（か）？」

「……」

休業しているとは言え、本物の歌手が祭りの、素人達の行う歌唱大会に出ようなどと思った事に驚いたのだ。

「…だ、だって私だって生徒なんだし、出る権利ぐらいあると思っ  
たし…」

ミソラが両手をわたわたと揺らして呟く。  
確かに言っている事は正しいと思う。思うが、

「……ミソラちゃんに出場されたら、確実に他の出場者のやる気な  
くなるし」

「うう……！」

出場する人々の多くは一位を、または一位が貰える賞品を狙っている。だが、本物の歌手が出場したら、「はあ？一位とかとれるわけねえし」とやる気を完全に失ってしまうだろう。確実にほとんどの人が辞退する。

大会運営側として、それは好ましくない。故に出場される事を断ったのだ。

「うう……」

呻くミソラは呟いた。歌いたかった、と。

スバル達は苦笑し、視線をバトルフィールドに戻す。丁度、第8試合が終了したところだった。

「あ。アイゼン勝ったね」

「当たり前だ」

スバルの言葉に、ゆたかが自慢気に言い放つ。俺のウィザードが負けるわけねーだろ、とゆたかは続けた。

「へえ、無傷か」

ツカサがバトルフィールドのアイゼンを見て呟いた。

ツカサの言う通り、アイゼンは無傷だった。

鋼鉄の電波物質で構成されているアイゼンに、相手の攻撃が全く効かなかったためだ。

相変わらずデタラメな硬度だよな、とスバルは思う。

一学期に一回だけ、ウォーロックとアイゼンは戦った事がある。その時もアイゼンはその硬度を遺憾なく発揮していた。

ウォーロックのビーストスイングが、自分のコピーやらクリムゾンやらを一撃で粉碎するあの破壊の爪の一撃が、全く通じなかったのだ。

(あの時のウォーロック、悔しそうだったなあ)

結局決着は着かず引き分けに終わったが、家に帰った後にウォーロックは物凄く悔しそうにこっぴどく呟いていた。

『引き分けなモンかよ』と。

スバルはその時初めて、ウォーロックが負けを認めたところを見た。

(……ま、頑張りなよウォーロック)

そこでスバルは回想を終え、対戦表を見る。

第7試合と第8試合の勝者は二回戦で当たる。

…つまり、

2回戦第4試合は、《ウォーロックVSアイゼン》

・  
・  
・  
・  
・

その後、1回戦の全試合（16試合）が終わった。  
残りのFM星人二人はもちろん勝ち残り、アシッドも当然勝ち残った。

そして十分の休憩を挟み、二回戦が始まる。

・  
・  
・  
・  
・

第1、第2試合の退屈な時間を乗り越え、第3試合。

それなりに強い相手にジェミニは終始楽しそうに遊び、残り時間三十秒になった辺りで全開、相手ウィザードを一撃の下に沈め、会場を再び啞然とさせた。

そして、第4試合。

『よお、アイゼン』

『おーっす、ウォーロック』

試合が始まるまでの短い間に、二人は互いに挨拶をした。しかしそれだけ、それからは全く言葉を発しようとしなない。

そして試合開始の鐘が鳴った時、二人はようやく口を開いた。

『いつかの決着、着けるか』

『…そうだな』

そう言って微笑み、戦闘を開始した。

・  
・  
・  
・  
・

アイゼンの驚異はその硬度ではない。真の驚異はアイゼンのウィザードとしての固有能力《結合能力操作》。アイゼンが意思を持って触れた電波物質の結合力を操る能力だ。

これを用いて砂の性質を持つ電波物質に触れて結合力を強めると砂が鋼鉄の様に硬くなるし、鋼鉄に触れて結合力を弱めると水みたいにドロドロになる。

つまりこの能力を発動中のアイゼンが電波体に触れると、その電波体の電波物質の結合力を操作されて防御力を失ってしまう。

…しかし、アイゼンはそれを相手には使わない。……そう、《相手には》。

『ビーストスイング!!』

ウォーロックが爪を薙いでアイゼンに攻撃する。しかし、アイゼンの身体は切り裂かれない。体表でギイン!と動きを止める。

『…効かんって、分からないか?』

アイゼンが嘲るように呟く。ウォーロックは舌打ちし、後退する。

(……本当に厄介だぜ、結合力操作ってのは)

相手には使わないその能力を、アイゼンは自分自身に使っている。自分の身体を構成する電波物質の結合力を極限まで強め、ただでさえ強固な身体を更に硬化させているのだ。

超硬度の鎧の身体。

強敵にしか使わないアイゼンのその状態を《ダイヤモンドボディ》と呼ぶ。

その名の通り、その状態のアイゼンはダイヤモンドの様に硬い。

(硬すぎて、爪が全く通らねえ)

ウォーロックが再び舌打ちする。

ジエミニの電撃やオックスの炎の様な、硬度が関係ない能力が自分にあればどうにか出来るだろうが、残念、ウォーロックには爪で攻撃する以外には攻撃能力を持っていない。能力と言えば、物質を電波に変換する能力しかない。

(まあ、意味ねえよなあ……)

ウォーロックは嘆息し、自分の能力が如何に戦闘に不向きか再確認した。

(OK分かった。やっぱり頼れんのは自分の肉体のみ)

ウォーロックは腕を構えてアイゼンを睨む。

あの装甲を貫けるかは分からないが、何かしなければどうにもならない。

『行くぜ、アイゼン!!』

ウォーロックは腹をくくってビーストスイングを放った。

・  
・  
・  
・  
・

(馬鹿か?)

アイゼンは呆れていた。自分の身体がどれだけ硬いかは理解している。ウォーロックの爪の威力では傷一つ付かない事も。それはウォーロックも理解している筈だ。

それでもなお、ウォーロックはビーストスイングを放ってきた。

ギーン!ギーン!と身体と爪がぶつかる音が響く。

だがそれだけ、傷は付かない。

『無駄だった』

アイゼンが拳を放ち、それがウォーロックの顔面を捉える。しかしウォーロックは怯まず再び腕を振りかぶる。

『またか』

アイゼンはまた呆れる。何度も同じ事を

ガシッ

『!?!?』

またビーストスイングが来る。そう思っていたアイゼンは、ウォーロックがとった行動に驚いた。顔面を掴んできたのだ。

『おおらあッ!?!』

そしてそのままアイゼンを振り回し、地面に叩きつける。意外と頑丈だった地面に激突し、相応の衝撃がアイゼンを襲った。

『ぐっ!?!』

呻くアイゼンは考えたな、と思う。確かにこれなら内部に衝撃が響く。

……だが、

『……致命的にはならない』

そう告げてアイゼンは右拳をウォーロックに叩きつけた。ウォーロックは手を離し、よろめいて後退する。

そんなウォーロックに、アイゼンは更に告げる。

『そんなものじゃ、判定でも勝てないぞ』

・  
・  
・  
・  
・

『判定？んなモン興味ねえよ』

アイゼンに告げられた言葉に、ウォーロックは少量の怒りを孕んだ言葉を返す。

『テメエは倒す。引き分けとかそういう中途半端なのはいらねえんだよ』

『…そうか』

アイゼンがニタリと笑う。アレはオペレーターのゆたかと同じ表情だ。面白い物を見つけた時の、愉快だなと思っている表情。

アイゼンはこれから本気で来る。

(…つてもなあ)

ウォーロックは思考する。

(爪は効かない、さっきのも大して効果なしか。…どうすっかな)

そこでウォーロックは自分の能力について考える。

物質の電波化。

(…待てよ)

そして、

(逆はどうだ?)

策を思い付いた。

・  
・  
・  
・  
・

『おおおオオオオオオツ!!』

ウォーロックが雄叫びを上げ、突進して来る。アイゼンはそれを迎え撃った。

ビーストスイングが放たれるが、アイゼンは姿勢を低くしてかわし反撃。ウォーロックはそれを受け止めて右腕を伸ばして来た。掴むつもりだ。

『させるか!』

だがアイゼンは右腕を払いのけ、拳を叩き込んだ。ウォーロックの顔面に直撃する。

…が、

『……決めたぜ』

吹っ飛ばさず、怯みもせず、ウォーロックは眩いていた。

そうやってアイゼンの腕を掴んでくる。

『まずは腕だ』

『！？』

意味は分からないが危険だと本能的に悟り、振り払おうとするが……

『…ッ！？ぐう…ああアアツ！？』

不意に、掴まれた腕に激痛が走った。ウォーロックの手を振り払い、腕を見る。

見た目異常はない。しかし、確かに異常はあった。

(腕の半ばが、電波じゃなくなってる!?)

アイゼンは驚愕した。今、何をした？

見るとウォーロックがニタニタと笑っている。

(ヤバい……!)

アイゼンが身構えた、その直後にウォーロックが突っ込んで来た。咄嗟に腕を交差させて防御体勢に入る。思わず、そうしてしまった。

『おおらアッ!~!』

ビーストスイングが放たれる。電波物質とただの物質と化した部分の間を狙って。

ガッ!

『ぐあああああああッ!~!~?』

アイゼンが絶叫する。激痛が走った。内部に直接響く感じの痛みだ。そうしている間にウォーロックが胴をガッチリ掴んでくる。

『がああああああッ!!!!!!』

再び激痛。先程と同じだ。胴体の一部が電波物質ではなくなっている。

危険だ、と後退するアイゼンにウォーロックは追い撃ちをかけた。

とにかく身体を硬化させようと自分自身に結合力操作を使用する……が、電波物質ではなくなった部分が全く硬化しない。当たり前だ、結合力操作は電波物質の結合力を操る能力なのだから。

ウォーロックが隙間を狙って攻撃してくる。硬化させはしたが、やはり身体の内側は脆い。簡単に傷が付く。

『あああああ!!』

アイゼンは死に物狂いで反撃、拳を打ち出す。カウンターを貰ったウォーロックは吹っ飛んで後ろに転がる。

『……………チッ!!』

そうして舌打ちし、構える。アイゼンも構えた。

『おオオオツ！！』

『あアアアツ！！』

ウォーロックの爪とアイゼンの拳が交差し、凄まじい音が鳴り響いた。

片方が倒れ、試合終了の鐘が鳴った。

第43話：第2回戦（後書き）

結合力についてのツッコミはなしでお願いします。マジで

## 第44話：第3回戦

「あー！くそっ！負けたあ！」

「残念だったねえ」

嘆くゆたかにスバルが意地悪そうに言葉を贈る。

調子に乗んなあ！と突っかかってくるゆたかを迎撃して、スバルは微笑む。

試合はウォーロックの勝利だった。普通の人間の目では理解出来ない現象を起こして、勝利したのだ。

「……っか。アイツどうやってアイゼンの装甲を破ったんだよ。アイツがあんなに痛がってるの初めて見たぞ」

復活したゆたかが、ブスツとした顔で問う。説明してやろうかとスバルが口を開きかけたその時、

『電波物質を変換したんだよ』

別の声が後ろから響いた。

『あ、メルクリウス様』

『おっす』

メルクリウスだった。先程ウォーロックに与えられた傷は完璧に治っている。

何よりだ、とスバルは思う。

「お疲れ」

『おっ』

スバルとメルクリウスが短いやり取りをする中、先程のメルクリウスの言葉を理解出来なかったメンバーが首を傾げていた。

「……………いやいや、メルクリウスさん？意味が良く……………」

そのメンバーを代表してミソラが問いかける。おおそうだったと、メルクリウスは頭を掻いた。

『…まあ、うん。電波物質を変換したって言うのはな、…つまり、電波をこれに変えたっつー事なんだ』

言いつつ客席を指差す。

未だに解らないメンバーのために、今度はスバルが説明し出す。

「つまりね、ウォーロックは電波物質を電波じゃない物質に変えたんだよ」

スバルの解りやすい説明で、ようやく解らずメンバーが理解した。更にスバルは続ける。

「……ウォーロックのAM星人としての能力《電波化》。その能力の逆再生をしたんだよ」

つまりこうだ。

ウォーロックは物質を電波に変換するプロセスを完璧に把握している。だから、電波が元の物質に戻るプロセスも自然と分かる。それを用いてアイゼンの、《鋼鉄の性質》を持つ身体を《鋼鉄》に戻すプロセスを逆算し、実行。アイゼンの身体の一部を電波でなくしたのだ。

「で、それによって生じた隙間に攻撃を叩き込んだ……ってわけだよ。OK?」

スバルは確認をとる。概ね理解した解らずメンバーは全員頷いた。

『……………それにしても』

…やがて、二回戦最後の試合（アシッドの試合）が終わった頃、唐突にハーブが口を開いた。

『ウォーロックに《逆算》って言葉、似合わないわね』

……………

それについては一同同意できた。

……………

スバル達は第三回戦の対戦表を見てとても苦い顔をしていた。

第三回戦第2試合《ジェミニVSウォーロック》

第三回戦第3試合《コーヴァスVSオックス》

「凄い戦いになるよね……」

「……そうだね」

呆然と呟くミソラにスバルは同じく呆然と返す。これはマズイ。そろそろ会場が持たなくなると思う。

今すぐやめた方が良く……そう思うスバル達だが、事情を知らない大会運営側はさっさとプログラムを進めてしまった。

第1試合が始まった。スバル達が名も知らぬウィザード達の試合だ。

「……スバル君。腹を決めよう」

「……そうだね、ツカサ君」

スバルとツカサがそうやって頷き合う。この長い試合の間に心を落ち着かようと決意する。

そうして第1試合は終わり、第2試合が始まった。

・  
・  
・  
・  
・

『おオらあッ！！』

『…………ふっ』

ウォーロックのビーストスイングがジェミニに放たれる。ジェミニはそれを難なく回避、カウンター気味に電撃を放った。しかしウォーロックも体勢を低くして回避、そのままの状態で拳を叩き込んだ。

『ぐぐ…………』

直撃を貰いかけるがなんとか身を捻らせ拳を受け流しダメージを軽減、そのまま電撃を放った。

『ぐあッ！』

エネルギーである電撃は流石に受け流すという事が出来ず、ウォーロックはそれをモロに喰らった。…が、

『おおあッ…………』

その状態でビーストスイング。ジェミニの身体を削り取った。

『ぐう……!!』

そうしてお互い距離をとり、睨み合う。ジェミニは痛み、ウォーロツクは痺れでしばらく動かなかった。

やがて、

『ジェミニサンダー!!』

ジェミニが先手を打ってきた。痺れが抜けないウォーロツクはその場を動くことが出来ない。このままでは直撃してしまうが、ウォーロツクは何故か笑っていた。そして、

『エリアイーター!!』

爪を思い切り地面に突っ立て抉り取り、前に撥ね飛ばして必殺の電撃を防御した。そしてそのままジェミニへと向かう攻撃となる。

ほら、壊れた！！と言う叫び声が聞こえてきたが無視だ。

『…チッ！！』

ジェミニは舌打ちして、飛んできた地面を横つ飛びにかわした。その先に既にウォーロックがいるとも知らずに。

『ビーストスイング！！』

『な……がああアアアッ！！』

ウォーロックの爪がジェミニを斬り裂く。絶叫するジェミニにウォーロックは拳を叩き込んだ。

『ぐあ！！』

ジェミニが吹っ飛んで地面を転がり、何メートルか転がったところで大きく跳ねて宙に浮いた。二つの顔が激痛に彩られている。

『くッ！……？ ウォーロックはどこだ！！』

痛みで閉じられていた目を開くと、地上にウォーロックの姿がない

ことに気付いた。慌てて捜そうとするが、その前に頭上から声が響いた。

『ここだあッ！！』

ジェミニの頭上に、腕を振りかぶったウォーロックの姿があった。いくらなんでも速すぎる。周波数変換が何かで即行で移動したのだろうか。

だがそんなことを思考している暇はない。ジェミニはすぐに迎撃した。

『ジェミニサンダー！！』

『うおおオツ！？』

必殺の電撃が飛ぶ。まさかの反撃にウォーロックは叫び、身を捻らせてギリギリ回避した。

そんな状態では攻撃する事は叶わず、仕方なくウォーロックは後退した。

『……チッ！やりやがる』

『当たり前だ。雷神を嘗めるな』

ウォーロックの言葉にジェミニは自慢げに返した。そしてニヤリと笑う。

『……………何笑ってやがる』

ウォーロックはその様子を見て、怪訝そうにジェミニに訊ねた。それに、ニヤリとした笑みのまま答えた。

『何、俺の勝ちだなと思うと嬉しくてつい……な』

はあ？とウォーロックが馬鹿らしそうな顔をするが、突如聞こえてきたゴロゴロ…という音によりその顔が一変、驚愕に彩られた。

空に、先程までなかった雷雲があった。

『広域殲滅型……………』

おそらく、先程放たれたジェミニサンダーで作ったのだろう。そう思い至った時にはもう遅かった。

『ちよ…待て待て待て！お前観客の事も考え』

『ジェミニサンダー!!』

ウォーロックが静止を呼び掛けるも虚しく、特大の落雷が会場に降り注いだ。

・  
・  
・  
・  
・

第2試合はジェミニの反則負けだった。

それはそうだ。あの雷は観客も襲ったのだから。メルクリウスが咄嗟に観客の頭上の空気を絶縁気体に変えていなかったら大惨事になっていただろう。

ちなみに試合としては勝ったウォーロックは、今現在スバルが治療中だ。電撃で黒焦げになっていたのだ。

女装スバルがウォーロックを介抱、ツカサがジェミニを説教する中、補修された試合会場ではコーヴァスとオックスが激戦を繰り広げていた。

炎の鳥と炎の牛との激突、会場はとても沸き立っていた。

……激突故に飛んでくる炎は、ムーの電波体の皆さんが絶賛対処中だ。

「凄いねー、ハーブ」

『そうねえ』

ミソラとハーブは皆のその様を微笑みながら眺めていた。

「『おー』」

ドオオン！という爆炎同士がぶつかり合う音が響く。それもやっぱり微笑みながら眺める。

「『……………』」

ふと、三つ隣を見てみた。ゆたかとアイゼンがコーヴァスとオックスの試合を真剣な眼差しで見ている。

こっのバトルマニアーと言ってみるが反応はなかった。

「……………ハーブ」

『なあにミソラ』

「……………平和だねえ」

『……………そうねえ』

『ブロロオオオーッ！』『キヤアアアアッ！…』という奇声が響く中、二人はそう呟いた。

第44話：第3回戦（後書き）

ジェミニのしゃべり方が合ってるか心配。

## 第45話：準決勝

結局、コーヴァスが試合に勝った。オックスも序盤は善戦したが、後半、地力の差が出てしまい負けてしまったのだ。

その後アシッドも勝利、大会は準決勝に進んだ。

そして、その準決勝第1試合。

『おらあアツ！！』

『じぶアアツ！！』

ウォーロックが一分程で相手ウィザードを撃破し、試合が終わった。

控え室。

『…………チツ、準決勝でいきなり齒応えがなくなりやがったぜ』

ウォーロックは不機嫌そうに呟いた。それはそうだ。メルクリウス、アイゼン、ジエミニと強敵続きだったというのに、準決勝でいきなり完全な格下との試合になったら大抵の人物は不機嫌になる。

ウォーロックは再び舌打ちして椅子へ座り、モニターを眺めた。

次は、アシッドとコーヴァスの試合だ。

『……負けんなよアシッド。テメエは俺が倒すんだからな』

ウォーロックはそれを見て、小者臭漂うセリフを吐いた。

・  
・  
・  
・  
・

『貴方と戦うのは初めてでしょうか』

『そーだなあ』

試合開始前の一時、アシッドとコーヴァスは向かい合って会話していた。二人に緊張はない。

『…お前、残念だったな』

『何が残念なのですか？』

挑発的なコーヴァスの言葉にアシッドはしれつと返す。コーヴァスはその返しを不快に思ったが、表には出さずいつもの調子で返した。

『お前はここで終わるからだよ』

『……………』

言われたアシッドは特に何も言わず、佇んでいた。その様子を見たコーヴァスは『ケケケ』と笑い、

『どーした、何も言えねえか？』

更に挑発した。

その後もコーヴァスは挑発し続けたが、試合開始直前になってアシッドがおもむろに口を開いた事で止まった。

『……………コーヴァス。弱い犬ほどよく吠える……………という言葉をご存じですか？』

『な ……！？』

最大限の挑発をされて青筋を立てたコーヴァスは何か言い返そうとするが、試合開始の鐘のせいでそれは叶わなかった。

・  
・  
・  
・  
・

「コーヴァスキレてるな」

「そうだねジャック君」

ミソラは後ろから突然聞こえてきた呟きに特に反応せず、更に振り向きもせずに淡々と返した。呟き主であるジャックは露骨に「もっと驚けよ」という顔をして会話を続ける。

「ありゃあ、相当ムカついてるな」

「アシッドに何か言われたのかな？」

いやそれはないか、と二人は首を振るが、アシッドとコーヴァスの試合に視線を固定しているスバルが一言言った。

「アシッドが挑発したんだよ」

「え？」

その内容に二人は目を丸くする。そんな二人の反応にスバルは呆れて、とりあえず言葉を続けた（視線は試合に固定）。

「…アシッド、一見そんな風に見えないけど、人の神経を逆撫でする天才だよ」

言いつつスバルは二年前の事を思い出した。

アシッドの余裕綽々とした態度に苛ついたウォーロックに、火に油を注ぐような言葉を放って、更に苛つかせていた。

それから、ウォーロックが突っかかる度にアシッドはそういった言葉を放ちまくって、ウォーロックを苛つかせまくっていた。

「……って言うか、二年もいて何でそれに気付かないの？」

「「あー……」」

二人が何も言い返せなくなっている。スバルはそれを放置して試合を見ることに集中する。

戦況は遠距離攻撃を持っているコーヴァスが有利だが……

「…どうなるかなあ」

スバルは心底楽しそうに呟いた。

・  
・  
・  
・  
・

『どーしたどーしたあ！！手も足も出ねえじゃねえかああ！？』

コーヴアスはアシッドに向かって叫びながら炎の爪を放っていた。アシッドはそれを避け接近しようとするが、また炎の爪が放たれてしまっただけが叶わない。

……試合開始後からこの調子で、既に一分経過していた。

『おいおい！弱い犬ほどよく吠えるんじゃないのかあ！？』

『…………ツ』

三つ同時に放たれる炎の爪。その内の一つがアシッドの肩を掠めた。それにより、アシッドのバランスが崩れる。コーヴアスはその隙を見逃さない。

『終わりだアシッド！！』

一瞬で巨大な炎の爪を生成し発射、凄まじい速度で真っ直ぐアシッドに向かう。

避けるタイミングを逃したアシッドは、棒立ち状態で炎の爪の到来を待っていた。

……そして、

『……解析、完了』

その一言と共に振るわれた腕に、炎の爪があっさり打ち消された。

『なん　　ッ!?!』

コーヴァスはあまりにもあっさり消された事に驚くが、その隙を突いて高速で接近してきたアシッドを見てすぐに平静を取り戻し、

『グレイブクロー!?!』

炎の爪を生成し放とうとする。しかしそれは出現と同時にアシッドの爪の一薙ぎで打ち消された。それによって生じた隙に、アシッドは追撃を仕掛ける。

『ギルティスラツシュー!!』

『ぐああああッ!!』

爪で斬り裂かれたコーヴァスは吹っ飛んで地面を転がり、地に伏して呻いた。

理解出来なかった。何であそこまであっさりと打ち消されたのか。

すると、まるでコーヴァスの心を読んだかのようなタイミングでアシッドが喋り出した。

『言ったでしょう、解析完了と。今、私の中にはあなたの戦闘データが全て揃っています』

アシッドはにじり寄りながら続ける。

『あの爪のどこをどの程度の力で攻撃すれば打ち消せるか、どれくらい時間で生成されるか、どのタイミングで生成するか、私には全て分かります』

なんだと…と、コーヴァスは驚愕と恐怖の入り混じった表情をした。ということとは、つまり……

(俺が何をしても……無駄だって言うのか?)

そう思い至った時、アシッドは目の前まで移動してきていた。

そして、宣言。

『終わりです、コーヴァス』

・  
・  
・  
・  
・

「っあー！負けたー！」

「一瞬で逆転されたね」

嘆きの声を上げるジャックにスバルはストレートに言い放った。ジャックは「そうだけど……」と少し悲しそうだった。それをツカサが宥める。

それを尻目にミソラは興奮気味にスバルに話しかけた。

「……これで決勝はロック君とアシッドだね！」

「そうだね。……やっとだ」

「やっと？」

スバルの返しにミソラは首を傾げた。何を指して《やっと》なのか分かっていない顔だ。

それを見て、スバルは説明を開始する。

「……二年前にね、ロックとアシッドのどっちが強いか決めようって戦う約束してたんだけど……ね」

「……あゝ」

その説明でミソラは理解した。

二年前の事件中にアシッドは消滅寸前にまでなった。すぐに修復されたとは言え、そんな病み上がり状態では満足に戦えはしない。それで結局延ばし延ばしになって今まで戦えなかったのだろう。……だから、《やっと》なのだ。

「ロック君、今頃凄く喜んでるだろうね」

「うん。それか、闘志に火が着きまくってるかも」

二人は笑いながら控え室の方を眺めた。

## 第46話：決勝戦

『……もうすぐだぜアシッド』

『そうですねウォーロック』

準決勝から決勝戦に移行するまでの休憩時間、その間にウォーロックとアシッドは言葉を交わしていた。  
交わす、と言ってもペラペラと世間話などをするわけではない。最低限の……それこそ戦闘前のライバル同士が交わす様な言葉しか発していない。

『……………』

やがて交わす言葉もなくなり、二人は黙り込んでお互いを見つめる。視線を合わせ、一瞬も逸らさない。

……そして、

『ウォーロック選手、アシッド選手、時間です』

呼ばれた。二人は頷き、会場に向かって移動する。その間にも視線

は逸らさない。そしてお互いの目には一つの決意があった。

『最初から本気で潰しにかかる』

そうして二人は入場した。

・  
・  
・  
・  
・

「あ、来た来た！ロックくん！！アシッドー！！頑張れー！！」

入場してきたウォーロックとアシッドを見て、ミソラが歓声を上げた。それに連られるように周りの観客が観客を上げ、やがて会場全体が凄まじい歓声に包まれた。

そんな中、スバルは身を乗り出してウォーロックを見詰める。そして思わず呟いた。

「ロック、絶対勝つんだよ」

…すると、まるでその呟きが聞こえたかのように、ウォーロックがスバルに親指を立ててきた。スバルも同じ様に返す。

「通じ合ってる感じだな」

「!?!?!」

そうして微笑んでいたスバルの耳に、若い男の声が響いた。かなり近い距離だったため、スバルはビクッと震えて即座に振り返った。そして、

ゴチン

「「あだあ!?!」」

近い距離だった事もあり、その男頭とスバルの頭がぶつかった。二人して踞る。

目尻に涙を浮かべながら頭を擦るスバルは、目の前の男に話しかけた。

「……………暁さん」

「おースバル……………痛たた……………」

その男は、アシッドのオペレーターである暁シドウだった。スバル

と同じ様に頭を擦りつつ、シドウは舞台に目を向ける。

「……いよいよだな」

「そうですね……」

二人は感慨深気に呟いた。二年前の約束が果たされる時が来たのだ、当たり前だろう。

しばらくしてウォーロックとアシッドが向き合った。準備万端いつでも行ける、そんな二人を見てシドウはスバルに告げる。

「……どっちが勝っても、恨みっこなしな」

「当たり前です」

スバルは頷いて視線を舞台に向けた。

それとほぼ同時に、歓声が止んでいき徐々に緊張が高まる。やがて会場全体が静まった時、

『それでは、バトルウィザード大会決勝戦、ウォーロックVSアシッド、開始！』

アナウンサーの言葉と共に試合開始を告げる鐘が鳴り、ウォーロックとアシッドの戦闘が始まった。

・  
・  
・  
・  
・

ウォーロックは速攻を仕掛けていた。試合序盤で打ち倒すためだ。アシッドの本当に怖い所は戦闘能力ではなく、その演算能力及び解析能力の高さだ。アシッドに下手に時間を与えれば動き、癖、技、その他諸々を解析され、対処法を見つけられてしまう。それによりコーヴァスは行動の全てを読まれ、負けたのだ。つまりそうになると、こちらの勝てる可能性が格段に低くなる。それだけは避けたいのだ。

故に、速攻。

対するアシッドはゆっくりと前に出て迎撃体勢に入っていた。いつもなら後退してしばらく相手の動きなどを観察、解析するのだが、ウォーロックにはそれは意味がないし、おそらく速攻を仕掛けて来るだろうと思っていたからあえて前に出たのだ。それに、ウォーロックの場合は直接手合わせした方が解析材料が増えるかも知れない。

そうだった考えを持った二人は、その後一瞬で交差した。

『ビーストスイング!!』

『ギルティスラッシュ!!』

お互いの爪がぶつかり合い、甲高い金属音を響かせる。更に二度三度と続ける内に、アシッドは自分爪に違和感を覚えた。

それが何なのか、高い演算能力を有するアシッドは一瞬で理解し、顔を強張らせた。しかしその時には既に遅かった。

バギン!と、右腕の爪の一本がウォーロックのビーストスイングに砕かれてしまった。

アシッドは目を見開いて後退し、今自分に起きた事を整理する。砕かれたのが爪だったので、そこまで痛みがなく、整理は滞りなく終了した。

(……電波化の逆流、そして繋ぎ目の破壊ですか……)

それはウォーロックが2回戦でアイゼンに行ったものと同じだった。ただ一つ違う所はアシッドはアイゼン程硬くないという所。故に脆く、簡単に砕かれてしまうのだ。

(……やりますね)

アシッドは思いつつ体勢を整えた。今ので大体理解した。

『こちらの番です!!』

そして飛び出し、爪を横薙ぎに振るう。ウォーロックはそれを受け止めようとしますが、

『!?!?』

直前で軌道が縦に変わり、頭に打ち下ろされた。続いて下から突き上げる様に爪が振るわれるが、ウォーロックはなんとかそれを避けて反撃に出る。しかしアシッドはそれ軽くかわして距離を取った。攻めるにも守るにも丁度良い距離をだ。

『……やっぱいけ好かねえ野郎だぜテムエは』

『誉め言葉として受けとります』

ウォーロックは体勢を立て直しつつ、毒づいた。

アシッドに気付かれたからだ。電波化の逆流が手首から先でしか行えない事を。

これでアシッドはこちらの爪に触れることをしなくなるだろう。攻撃を上手くかわし、カウンターを仕掛けて来るだろう。

(上等だ…。なら意地でも爪を当ててやる)

ウォーロックはカウンターにより凄まじいダメージを受けようが、一方的にやられようが、そんなもの関係ないとばかりに飛び出した。こちらは当てるだけで良いのだ。一発胴体部分に攻撃を命中させれば、それでウォーロックの勝ちが決まるのだから。

だから、迷わず突っ込める。

対するアシッドは、ウォーロックがそう来る事を読んでいた。しかし、やることは変わらない。

(一撃貰う前に決めれば良いのです)

そう思った。だから、迷わず突っ込んだ。

・  
・  
・  
・  
・

ウォーロックとアシッドは試合終了の鐘が鳴るまで、完全に互角の戦闘を繰り広げた。そして勝負は審判の判定に委ねられ、しばらくの沈黙の後に勝者の名が告げられた。

勝者は

第46話：決勝戦（後書き）

勝者がどっちなのかはあえて書かないことにしました。

## 第47話：初日の夜

バトルウィザード大会が終わった後、スバルは店の手伝いに行った。予定休憩時間を大幅にオーバーしていたので、そのまま一日目終了時刻まで缶詰状態にされていた。

そんなわけで午後九時。

「おやすみー」

「あ、おやすみー」

ミソラが教室でクラスメートの女子と談話している時、スバルと他男子数名がそう言って顔を覗かせていた。女子達が適当に言葉を返すと、そのまま男子達は向かい側の校舎（特別教室だけが設置されている校舎）へと歩いていった。正確に言うと、そのなるべく広いスペースを持った教室に向かった。

何故こんな時間にそんな所へ向かっているのかと言うと、寝るためだ。

文化祭中、許可を取った生徒は学校で寝泊まり出来る。

これは家から学校までの道のりが長い者のための措置で、電車通学者の多い夕凧中学校の生徒の過半数がこれを利用していった。その際、一号館を女子、二号館を男子が利用することになっていた。

ちなみに就寝時間は午後十時、それまでは自由にしているも良い。

「……んー、ちょっと散歩して来るね」

そんなわけで、ミソラは自由にすることにした。

「えー大丈夫ミソラちゃん？」

「野獣と化した男子に襲われるかもよー？」

「……そんなのに、この私が負けると思う？」

「「「思わない！」」」

「だよねー。じゃ、行ってきまーす！」

「「「行ってらっしやーい！」」」

クラスメイトとの軽いやり取りをした後、ミソラは教室を出た。

・  
・  
・  
・  
・

九時半。

ミソラは学校の屋上で夜空を見上げて星を見ていた。意味はない、なんとなくだ。

「……寒い。十月の末ってこんなに寒かったっけ？」

『さあ？知らないわ』

『…右に同じです』

ミソラは悴んだ手を擦ったりしながらワイザード二人に訊ねた。二人はただ首を横に振るだけだ。

「……まあ、いつか」

ミソラは「はーッ」と手に息を吹き掛けてから、下を眺めた。出し物の屋台等が建ち並んでいた。その周りに数名の生徒の姿が見える。明日はどうするかとか下らない世間話とかを話しているのだろう、楽しそうに笑っている。

その光景を目にしたミソラは、無意識に一言呟いていた。「平和だね」と。

その言葉でハープとセイレーンの表情が曇った。

ここ一週間あまり、十二神将達が襲って来なくなった。そのおかげでミソラ達は今平和に過ごしている。

……ただ、やはり不安なのだ。メルクリウスから聞く限り、十二神将の上層部は何を考えているのか分からない。この空白の時間の間に何か壮大な事を企んでいるかも知れない……とか、ついそんなことを考えてしまう。

(……せめて)

ミソラは屋台の周りの生徒達の笑顔を見ながら思う

いや、

(せめて来るにしても、文化祭の間だけは……絶対に来ないで欲しい)

願った。

そうして息を吐いた。その息は若干白い。

「……さて、戻ろっか」

『そうね。明日も朝早いことだし』

またしばらく星を眺めた後、ミソラは口を開いた。ハープはそれに同意する。

「だね。さあ寝よ寝よ！」

ミソラは片腕を天に掲げながらそう言って、屋上を後にした。

・  
・  
・  
・  
・

午後十一時。

夕風中学校の生徒が全員寝静まった頃にその二人は学校を訪れた。

二人の内の腰に酒瓶をぶら下げた方の男が、隣の黒を基調とした服装のブロンドの髪の人に訊ねた。

『……………本当に今日じゃなくて良いのですか？』

その男　　バツカスの問いに、もう一人の男は「ンフフ」と笑ってから答えた。

「ええ。時間的にも、状況的にも、明後日……この文化祭の最終日がベストなのです」

そこで男は言葉を区切り、「ンフフ」と口許を押さえて笑ってから再度バツカスに向かって言い放った。

「ロックマンを確実に葬るにはね」

男はまた口許を押さえて笑い出した。気味の悪い男だとバツカスは思う。

バツカスはそう思っている事を表に出さず、男に命令した。

『……そうですね。まあ、その辺は貴方に任せます。好きにきなさい』

「はい、バツカス様」

男は一礼すると姿を消した。ここ数日行っている、ある《準備》をしに行ったのだろう。

(……ロックマン、いや星河スバルを葬る絶好の機会……か)

一人になったバツカスは、ふと思った。

『……ボクとしては、今そちらはいつでも良いんですが』

そう呟いて、十数日前の事を思い出した。

自分を良いように痛ぶってくれたあの白黒の双子。その二人を思い浮かべて、バツカスは奥歯を噛み締める。

そうして、憎しみを込めた目、声色で呟いた。

『彼等を潰すのが、今のボクの最優先事項だ』

第47話：初日の夜（後書き）

男って誰だか分かりますよね、もちろん。

## 第48話：少女の失敗

10月30日、文化祭二日目。

現在時刻午前七時。場所、1 - Bの教室。

「……抵抗しないんだね」

「……まあ、諦めたって言うか、慣れたって言うか……ね」

「ふーん」

ミソラはそこでスバルをメイクアップしていた（ちなみに二人きり）。肌を白く見せたり睫毛を長く見せたりと、芸能界で得たメイク技術を用いてスバルを徐々に女子の顔へと変えていく。

「……」

「……」

やがて二人は無言になった。メイクの最終段階に移行したのだ。ここからは、僅かな顔の筋肉の動きが影響をもたらしてしまう。故に無言。

その状態で黙々と作業をしていたミソラは、一つ思った。

(……恥ずかしい)

メイク中のこの空気、今まではツバメやらゆたかやらが近くにおいて賑やかだったので気にならなかったのだが、二人きりの状態だと異様に気になった。

…しかも、

(……顔近い)

それが一番の原因だった。メイクの為とは言え、ミソラとスバルの顔はかなり接近していた。意中の相手の顔がこんなに近くにあって緊張しない者はいないと思う。

…それでも、今までは緊張しなかったのだが。

(……ふ、二人きりはダメだね。身体が持たない)

今度から誰かを一緒に連れてこようと誓い、メイクを終わらせた。

そしてどこかに失敗がないかを探すためにスバルの顔を眺めて、ふと視線が唇に止まり、その瞬間、“ある行動”を取りたくなった。

突然動きの止まったミソラに怪訝そうな視線を向けるスバルを尻目に、彼女は徐々にスバルに顔を近づけていき、

「!！」

ふと我に返って後ろに跳ねた。

「ダメでしょダメでしょダメでしょダメでしょダメでしょダメでしょ!！」

「ど、どうしたの?」

突然踞り頭を抱えて連呼するミソラの顔を、スバルは心配そうに覗き込む。その瞬間、「うひゃいッ!？」と叫び後退してポケットを漁り出した。

「ほ、ほほほッほらッ!!グロス!自分で塗って!」

「え?あ、うん」

ポケットから取り出したグロスをスバルに渡し、ミソラはシュバッ!と手を挙げ「じゃあね!」と教室を去っていった。

その後、顔を真っ赤にしながら「ダメでしょ私ーッ!！」と叫んで校内を爆走するミソラを、生徒達は目撃した。

・  
・  
・  
・  
・

午前十時。文化祭二日目が始まって一時間過ぎた時刻。

ミソラは焼きそばを作りながら、接客しているスバルを見ていた。最初の頃のぎこちなさは抜け、いたって普通に接客をしている。慣れた、と言うのはどうやら本当らしい。

あの感じがツポに入っていたミソラとしては残念極まりなかったが、まあ仕方ないだろう。

……それより、

「ッ!」

ミソラの頬が赤くなる。先程の事を思い出してしまったのだ。

（　　）　　ッ仕事!仕事しよう!（　　）

ミソラは慌てて視線を外し、焼きそばを作る事に集中する。  
いい感じに炒められていたので、ソースをかけてまた混ぜ返す。

その作業の間もミソラの顔は赤いままだったが、皆は熱で赤くなっていると思っっているため不思議がる事はなかった。

「よし、出来た！」

二、三十秒後、焼きそばを完成させて半分を紙皿に盛った。もう半分は当たり障りのない程度に焦がしてバンズに挟むつもりだ。

そうしてミソラが精密に焦がす作業をしている最中、接客係の生徒が出来上がった焼きそばを取りに来た。

「持ってくね」と言って皿を盆に乗せているその生徒に、ミソラは一瞬視線を向けて、

「……あ」

手元が狂った。焼きそばが微妙な感じに焦げ付いている。

「……あー」

火を止めて、とりあえず焼きそばを皿（紙皿ではない）に移す。本当、微妙な感じに焦げてしまった。昨日はこんな事なかったのに、ミソラはうなだれる。

（……全然集中出来ない）

ミソラはそうやって溜め息をつき、とりあえず作業を再開した。予定より焦げて固まった焼きそばをバンドに挟み、焼きそばバーガーを完成させ、それを立ちながら待っている客に渡した。

「サンキュー」と言って去っていく客に、ミソラは心の中で謝罪する。すみません、それ失敗作です……と。

「……はあ」

その後、新しい焼きそばを作る作業に入ったわけだが、また微妙に失敗した。ミソラは少し涙目だ。

（……ダメだ、全然ダメだ）

ミソラは頭を抱えて考える。そこで再びあの時の事を思い出して顔が赤くなった。今は鉄板の熱もないので顔が赤くなっていたら不審に思われる。だから顔を手で覆った。

「「「……?」「」」

逆に不審がられた事には気付かなかった。

・  
・  
・  
・  
・

それから約一時間。シフト的にミソラはフリー状態になった。ついでに、スバルも。

「ねえミソラちゃん」

「!!!?」

ルナのクラスを冷やかしに行こうと教室を出たミソラに、スバルが声をかけてきた。当然、ミソラは激しく動揺する。

「な、なななっ何かなあ?」

それを悟られまいと必死に平静を装って問おうとしたが、失敗。頬が紅潮し、声も上擦っていた。完全にテンパった状態だ。

その様子に「？」と首を傾げたスバルだったが、特に気にすることはなく問いに答えた。

「……そのさ、一緒に回らない？」

「!?!?!」

ミソラの動揺が増した。誘われた！嬉しい！そうは思うが何分タイミングが悪かった。こんな顔もまともに見れない状態で一緒に回ったら、どこかで確実に気絶する。

故に、本当に残念だが、本当は一緒に回りたいけど、

「……ごめん、ちょっと一人で回りたいんだ！」

断った。

断られたスバルは一瞬目を丸くして、呟く。

「？ そうなんだ？」

「うん」

「……そっか。分かった」

スバルは一瞬怪訝そうな視線をミソラに向けたが、その後すぐに小さく頷いて「じゃあね」と手を振って去っていった。

「……………はああ」

やがてスバルの姿が見えなくなり、振り返っていた手を下ろして盛大に溜め息をついた。

自業自得だ仕方ないと思おうとしたが、無理だった。

これは流石に、効いた。

第48話：少女の失敗（後書き）

途中で何書いてるか分からなくなりました

## 第49話：覚悟の違い

「……………」

ミソラを誘って断られたスバルは、一人で校内を歩き回っていた。  
正直、これは暇だ。

そんな感じで中庭に出た時、いきなりスバルが何かに気付いたとばかりに手を叩いた。そして咳く。

「僕、ミソラちゃんに避けられてるね」

『今頃気付いたのかよ』

すかさずウォーロックが突っ込むが、無視。

……………そう、朝から何か避けられていた。正確に言えばメイクの後くらいから。

もしかしてその時に何かしたんじゃないか？と思ったのだが、

(……………何かしたっけ?)

心当たりがなかった。あの時のスバルはされるがままだったし、動

かなかつたし、何かしたかと言えば喋った事くらいだ。  
ではその喋った時に何か避けられる様な事を口走ったんじゃないか  
とスバルは思い、自分の発言を思い返してみた。

……そして、

「あ  
」

一つ、可能性のある発言を思い出した。

「慣れた  
」

女装をする事に抵抗しないのは何故か訊かれた時に、スバルはそう  
答えていた。

そしてミソラはこれを変な風に解釈したんじゃないだろうか。

「……それなら納得だ  
」

スバルがうんうん頷く。その様子を見たウォーロックは溜め息をつ  
き、若干呆れが混じった口調でスバルに言った。

『……お前がどういふ結論に至ったのかは知らねえけどよ、それは

『多分違うぜ』

「え？」

スバルが目丸くする。ウォーロックは気にせず続ける。

『ミソラがお前を見た時どんな顔をしてたか覚えてるか？』

「え？うーん……、何か、恥ずかしそうだった？」

言われてスバルはその瞬間のミソラの表情を思い出し、そこから読み取れる感情を言ってみた。ウォーロックは頷き、

『だよな？じゃ、何でそんな顔をしたと思う？』

「それは……」

さっぱり分からない。スバルの記憶に、ミソラがそんなに恥ずかしがる様な出来事はなかった。ただメイクしていただけだったし。

そうしてスバルはしばらく考えるが、結局分からず首を傾げ唸り出した。その様子にウォーロックは呆れる。

『……ダメだなお前は』

「は？」

・  
・  
・  
・

『んー、やっぱりミソラってスバルを避けてるよね』

「え？いや、その……」

『そうですよ！何ですか？』

「えっと、ね」

『折角のチャンスだったのに、ねえ？』

「……………うう」

先程の出来事を目撃したシルフィー、セイレーン、ハーブに言われてミソラが極限までへこむ。顔は真っ赤だ。そうしてミソラは、聞き取りづらい音量で呟いた。

「…だって、スバル君の顔、恥ずかしくて見れないんだもん……」

そんな小さな声でもしっかり聞き取れる音の能力持ちの二人が疑問を投げ掛ける。シルフィーは別のベクトルで疑問に思った。

「それは……」

事情説明。

「何だそんなことなんだ？」

「そんなこと!？」

「……だって未遂ですし」

「それだったら昔やった「だーれだ？」の方がよっぽど恥ずかしいわよ」

結構悩んでいたというのに、散々な言われようだった。ミソラはもちろん抗議する。

「……あ、あなた達には分かんないだろうけど、未遂でも相当なんだよ？なのにそんなことってな」

「分かるよ」

「!?!」

抗議を続けるミソラの言葉が、シルフィーによって途切れた。シルフィーは続ける。

『私だってキス未遂はしたし、相当恥ずかしかったのは分かるよ？』

「『『!?!?』』」

衝撃発言だった。ミソラばかりか、ハープにセイレーンまで驚いている。シルフィーは気にせず、語りを続行。

『……でもさあ。顔を見たら恥ずかしくて一緒にいるの無理!……にはならなかったよ?』

「えーと、訊きたいことは色々あるけど、とりあえず……それはシルフィーの神経が図太いからじゃ……」

ミソラは沸き上がる好奇心を抑えながら言ってみた。するとシルフィーは何をバカな……と言わんばかりの顔で返してくる。

『私の二倍は神経の太い人が何を言うか』

「私そんなに太いの?」

自分に向けられた評価にミソラはただただ驚いた。……しかし、それが真実だと言うのなら、

「……何で私こんなに恥ずかしくての？」

そつだ。同じ行動をして自分より症状の軽いシルフィーより神経が太いと言うのなら、何故自分はそのシルフィーより症状が重いのか？ その問いに、シルフィーは答える。

『覚悟だよ』

「覚悟？」

『そつ覚悟、本当にしようって言う覚悟の違いだよ』

シルフィーはミソラを指差しながら続ける。

『私は最初からしようと思って行動したけど、あなたは軽はずみで行動したじゃん。それが羞恥度の違いを出してるんだよ』

「『『『おおー』』」

シルフィーの弁に一同感心した。それと同時に何か論点がズレてきたなとも思う。シルフィー自身もそう思ったのか、コホンと一つ咳払いして人差し指を立てた。

『……ま、要するに、本当にしたいんならさっさと告白してしまえ  
って事だよ』

「今の流れでどうやったらその結論になるの!？」

多分自分にも向けている言葉をシルフィーは声高らかに言い放った。もちろんミソラは突っ込むが、残りの二人はそうでもなかった。

『……そうですね、告白しちゃいましょうよミソラさん!』

「は?」

『同感ね。丁度この学校には、文化祭最終日の夜に告白すると必ず成功するという言い伝えがあることだし……』

「絶対今作つたよねそれ」

『そうでもないわよ。二年生の松本さんはそれを実行して彼氏をゲットしたんだから』

「誰!？」

全く面識のない人物を引き合いに出されてミソラは色々混乱する。  
……というかそもそも何故告白する方向に話が進んでいるのか、そこが疑問だ。

『……あら、告白嫌なの？』

「嫌じゃないけど。……顔も見れないのに告白とか無理でしょ」

そんなミソラの言葉を聞き、シルフィーは『だから覚悟……』と呆れ気味に呟いた。

・  
・  
・  
・  
・

「なーにしてんの星河君！」

「うぐツ！？」

中庭のベンチに座ってたこ焼きを頬張っていたスバルは、突然後ろから背中を押され、噎せた。押した本人はふざけたテンションから一転して、咳き込むスバルの背中を心配そうに擦っていた。

やがて咳は治まり、互いに溜め息をついて視線を合わせた。押したのは、花菱キクリだった。

「ごめんね星河君」

「……いや、いいよ別に」

謝るキクリに普通ならここで嫌味の一つぐらい言おうものだが、そこはスバルだ、言わずにあっさり許した。  
キクリは若干やりきれなさそうな顔になるが、とりあえずはとスバルの隣に座る。そうして改めて質問。

「何してんの星河君？」

「一人寂しくたこ焼き食べてます」

「そんなの見れば分かるよ。何でそんなことしてるのかって訊いてるんだよ」

「それは……」

事情説明。

「……………んう？」

説明を受けたキクリが妙に可愛い声を出して首を傾げ、その行動に

スバルも首を傾げた。

「……どうしたの？」

「え、いやー。……何で折角のチャンスを逃したりしたんだらう」

「？」

スバルの問いに、キクリは小声で返事をする。スバルはそれを聞き取れなくて再度首を傾げた。そうしてキクリはそれをはぐらかすように手を顔の前でパタパタ振りつつ質問。

「うううん！？つつつまり今暇なんだよね？」

「あ、うん、そうだけど……」

その質問にスバルはまたまた首を傾げ、とりあえず答えた。するとキクリは「そっかそっかぁ……」と若干微笑みながら呟いて、宣言。

「じゃ一緒に廻ろっか」

「……うえ？」

誘われた。スバルは一瞬困惑するが、すぐに戻り「いいけど」と頷

いた。そうしてキクリはすごぶる嬉しそうに笑い、「じゃ決定ー！」  
と言ってベンチを立った。釣られるようにスバルも立ち上がる。

「……じゃあ早速廻りますか」

「あ、待った」

「？」

そうしてスバルは歩き出そうとしたのだが、誘った本人から制止がかかった。何事かと思っしてそちらを向くと、

「それ」

キクリはスバルの服……つまり女装の為に着た女物の服を指を指していた。そして一言。

「雰囲気が出ないから着替えてね」

「雰囲気？」

「ッ！そこはいいから早く着替える！」

スバルはまたもはぐらかされて何か釈然としなかったが、とりあえ

ずは着替える事にした。

キクリが喜びと安堵が混じったような表情をしている理由は、スバルにはさっぱり分からなかった。

第49話：覚悟の違い（後書き）

年明け前に更新出来ました。結構ギリギリですね。

では、

良い御年を。または明けましておめでとございませう。

第50話：少女達（前書き）

長いこと放置してたのに内容は薄いです。

ご注意ください

## 第50話：少女達

「どういう事が説明して欲しいわね」

スバルは今現在ちょっとしたピンチを迎えていた。

キクリに言われてスバルは女装を解いた。その、解いた場所が悪かった。

教室に男用の服（制服がまたなかったなので男用のコスプレ衣装・中華系）を取りに行き、そこから出て体育館裏で着替えていたのだが、どうもそれ等の一連の行動を見られていた様なのだ。

……つまりは目撃者である“ルナ”に、女装をしていた事がバレたのだ。一番バレてはならないルナに。

「あー、その……クラスの出し物の関係で女装してました」

「それは分かってるわよ。今訊いてるのは」

何故あの時私に正体を明かさなかったか、というルナの言葉を聞きつつ、どう説明すべきだろうか、スバルは真剣に考える。

……どう言っても説教モードに入るのは確実。ならば、なるべく怒りが少なくなる言葉を返せば良いと結論付けたが、

「委員長が僕に敬語で話すのが面白くてつい……、あ……」

慌てすぎたせいで真逆の事を言ってしまった。そしてそれを聞いた瞬間ルナの表情が消え失せ、

「……良い度胸ね」

物凄くドスの効いた声を発しながら歩み寄ってきた。

(……さあ、どうする星河スバル?)

壁に背を預け、ルナの無表情の威圧を真正面から受けながら、スバルは打開策的なモノを探す。

「……貴方ごときに敬語を使うなんて、末代までの恥なんだけど」

その間にもルナは距離を縮めてくる。僕に敬語で話すのがそんなに恥なの!??と普段なら突っ込んでいるのだが、今そんな事したら殺されそうな気がする。

(……どうしよう……どうしよう……)

スバルは悩む。悩みに悩んで、……一つ打開策を見付けた。かなりリスクが伴う策だが、そうも言っていない。

「……から」

その、確実に何かを失いそうな策を、スバルは口にした。

「……な、何でも言うこと聞きますから許して戴けないでしょうか？」

「………！」

その言葉を聞き、ルナは動きを止めた。そして何かを思考する。スバルはそれをビクビク震えながら眺めていた。

そして、

「……分かったわ」

それで許してもらえた。そうしてスバルはホッとした様子でルナの顔を見て、……ギョツとした。ルナが、悪戯をしようとするワルガキの様な顔をしていたからだ。

「……何でも、よねえ？」

「……はい」

スバルは嫌な予感をビシビシ感じた。ああやはり何かを失うんだと半ば諦めた様に（心で）呟いた。

「……じゃあ」

ルナが口を開く。何かを言おうとする。スバルはどんな衝撃が来ても堪えられるように身構えた……のだが、

「……これから、私と二人で文化祭を廻るわよ」

「……え？」

スバルはキョトンとして首を傾げた。

……そんな事でいいの？もっととんでもない罰やら要求やらをしてくると思っていたのに。

「……それでいいの？」

「それでいいわよ」

スバルは拍子抜けした様子でその言葉を聞いていた。

(ああ、何だ。良かった……凄く軽い。文化祭一緒に廻る………  
って)

そして、そこで忘れていた事を思い出した。

(……僕これから花菱さんと廻らないといけないんじゃないじゃなかったっけ?)

そうだった。今のルナとのやり取りですっかり忘れていた。これはマズイかも知れない。

「……あー」

「何？文句があるの？」

「……ありません」

ルナの気迫に圧されて言えなかった。こんな時気の弱い自分が恨めしくなる……と、スバルは思う。

「さあ。行くわよ」

「……うー」

ルナが中庭側に進み、スバルに早く来るよう促した。スバルはどうするか迷いながらとりあえず着いていき、

「はいちよつと待ったー」

声を聞いた。

「何？」

その声はスバルが待たせていたキクリの声だった。

「残念ながら、星河君は私と廻ることになってるんだよ」

「……なんですって？」

ルナはキクリの言葉を聞き、スバルに確認を取った。スバルは頷く。するとルナの機嫌が目に見えて悪くなっていった。それをスバルは恐ろしそうに、キクリは面白そうに眺めている。

「……なんなのよ」

やがてルナが非常に低い声で呟いた。そしてそのままこの場を去ろうとするが、

「あ、ちょっとちょっと」

「……？」

その前にキクリに止められた。何事かとルナが振り返ろうとすると、その前に肩を組まれた。顔と顔が非常に近い状態、その状態でキクリは小声で訊ねる。

「……星河君と廻りたい？」

「……廻りたいわよ」

そのルナの言葉に、キクリはそっかそっかとしてルナの肩を叩き、話を出した。

「……私ね、12時から喫茶店の当番なの。しかもその後二時間は軟禁状態になるんだよね」

「…………だから？」

「私は午前中しか星河君と廻れない」

「ッ！…………それってつまり」

「そう、午後はあなたの番。…………ちなみに星河君の当番の時間は3時からだから、結構余裕あるよ」

良い情報を聞いたルナの機嫌が目に見えて良くなっていく。

「ただし、抜け駆け的行為は厳禁。OK？」

「…………分かったわ」

それについては元からするつもりはない。“もう一人”となるべく対等でありたいからだ。

「よう」

返答を聞いたキクリはルナと向かい合う形になり、言い放った。

「午前は私、午後はあなたで星河君を使い潰してあげよう！」

「そうねー!」

二人の少女がそうやって気合を入れる中、スバルは「使い潰すってなんだろう」と震えていた。

・  
・  
・  
・  
・

告白云々の話を終えた後、ミソラはなんとなく中庭に出ていた。何かをしに来たとかではなく出てきただけ。よってミソラは何をするわけでもなくただ突っ立っていた。

「……………凄く暇」

『自業自得よね』

ミソラの呟きにハープがツッコミを入れる。それは分かっているの  
でミソラは特にコメントはしなかった。

「……………あれやるっ」

流石にこれ以上何もしないで貴重な文化祭の時間を消費するのは損

だなど思ったのか、ミソラは目についた店に歩み寄っていった。

『射的屋』

夏祭りか、とツツコミたくなる衝動に駆られるが抑え込み、代金を払って銃と弾（×3）を貰った。

「……………」

ミソラは銃を構え、耳の長い二足歩行の犬みたいなぬいぐるみに狙いを定めた。息を殺し、精神を集中させ、狩人の様な目付きになって引き金を引く。

ポコンッ

一発命中。店員が落ちたそのぬいぐるみをミソラに渡してくる。ミソラはそれを受け取って横に置いてから二つ目の弾を銃に込めた。

次の狙いは頭にハサミがついた赤っぱい人形のぬいぐるみだ。これも先程のぬいぐるみと同様に一発命中で落ちた。

ミソラは店員からそれを受け取り横に置き、最後の弾を込めて次の標的を探するために店内を見回した。そして十秒ほど探し、ある一つの物に目が止まった。

青いボディ、所々に走る黄色いライン、赤いバイザーを持った人形。今、ミソラを悩ませている少年の変身した姿の人形だった。

「……………」

ミソラは今までとは比べ物にならない程の集中力で銃を構えた。絶対に捕る、絶対に捕ると心で呟き、狙いを完全に定めて引き金を引こうとした……その瞬間、

「あ」

キス未遂の事を思い出して手元が狂って照準がズレた。結果、弾は外れて店の壁に命中した。

「……あー、残念だったね。三発とも当たったら景品が出ただけだよ」

店員がそう言うってくる。ミソラは「あはは、集中切れちゃいました」と返して二つのぬいぐるみを持った。そしてそのまま去ろうとしたのだが、

「店員さん、私達やりまーす」

「あいさー」

聞き慣れた声が聞こえて立ち止まってしまった。思わずそちらを見ると、キクリと……スバルがいた。

「……ッ!!」

そうやってスバルを視認したミソラは一瞬で頬が紅潮した。動悸がして、拳動がおかしくなる。そんな状態で動かないミソラに、スバル達の分の銃を運んでいた店員が声をかけてきた。

「あれ、まだやるの?」

余計な事を!とミソラは叫ぼうとしたが時既に遅し、店員に釣られてスバル達もこちらを向いてしまった。

「あ、ミソラちゃん」

スバルが声をかけてくる。ミソラはまともに反応出来ず、しばらくおろおろした後にとりあえず右手を上げた。

「……響さん、顔真つ赤だね。何で?」

「あう……!!」

次いでキクリが問いかけてきた。そこを訊ねられると返答に困るミ

ソラは何も言わずに俯いた。ただ、視線はスバル（の主）に向いている。  
その行動で何かを納得したようで、キクリはスバルとミソラを交互に見た。

……そして、

「星河君、私の分もやっというて」

「え？」

「ちなみに狙いはあの青い人形」

「青……って僕じゃん!？」

スバルが驚きの声を上げる中、キクリは俯くミソラの肩を叩いた。  
ミソラが顔を上げると、そこには「少し話しようか?」と言いたげな表情のキクリがいた。

「はい、come on」

「え?ちよ…ッ!？」

キクリはミソラの手を引いてスバルから遠ざかるように歩き出した。  
ミソラはいきなりの事に動揺してよろけるが、なんとか体勢を立て直してそれに着いていった。



## 第51話：好きだから

「あ、もしかして君がロックマン？……ゴメンね？勝手に人形なんて作っちゃって」

「あ、いえいえ！むしろ作っていただいております！」

そんなスバルと的屋の店員の会話を尻目に、キクリはミノラに訊ねた。

「星河君に何かされたの？」

「さ、されてないよ……」

「じゃあ逆に、何かしたの？」

「……してはいないよ」

「じゃあしかけたんだね？」

「……」

「凶星か」

キクリお得意の質問攻めにより、速攻で何かをしかけた事がバレてしまった。前もそうだったが、何故こんなに人の秘密（主に恋愛関係）を暴くのが上手いのが不思議だ。

(……次は、どんな質問が来る……)

これ以上の事(具体的な事「キス未遂」)を知られてはならないと思  
ったミソラは、何を言われても狼狽えないように、答える際に余計  
な事を口走ってしまわないように身構えた。

……しかし、

「……まあ、詳しくは訊かないけど」

「え?」

ミソラの予想に反して質問は来なかった。安心すると同時に少し拍  
子抜けしたミソラは呆然とした様子でキクリを眺める。

「……何その顔。もしかして訊いてほしいの?」

「え、いや……」

「響さんが言いたいんだつたら訊くよ。星河君に何をしようとした  
の? って」

言いつつキクリは人差し指を唇に当てる。その仕草から「コイツ、  
勘づいているな」と気付いたミソラは、思い切り首を横に振って答  
える気がないことを示した。薄々分かってるなら、わざわざ言う必  
要はない。

「……そっか。ならいいや」

対するキクリはあっさり引き下がった。こっちはこっちで薄々気付いているのだから、わざわざ訊く必要もない。

「「……………」」

そうして数秒無言で見詰め合い、ほぼ同じタイミングで的屋の方を向いた。

そちらではスバルがかなり複雑な表情でロックマン人形を狙っており、それを店員が愉快そうに見ていた。

「……………響さん」

やがてキクリがミノラの名を呼んだ。

「何？」

「何かしかけた事を自分で恥ずかしかって星河君を避けてたら、その際に誰かが星河君を取っちゃっよ」

ミソラが訊ねると、キクリはそう忠告してきた。目をぱちくりさせるミソラにキクリは続ける。

「だから私は見ての通り文化祭回ろつって誘ったし、響さんが星河君を避けてるって事は知らないけど……白金さんも誘った」

「んえ!？」

キクリの言葉にミソラは思い切り動揺した。キクリがスバルと回っているのは……まあ、気付いていたから対処できたが、ルナがスバルを誘ったというのは完全に不意打ちだった。そうやって慌てふためくミソラにキクリは更に告げる。

「……あなたがこのまま恥ずかしくて何もしないで手をこまねいているんだったら、私は容赦なく星河君をもらう。私は……」

キクリはそこで一旦言葉を切り、今まで見た中でも最上位に位置するくらいに真剣な表情になって、宣言した。

「星河君が大好きだから」

・  
・  
・  
・  
・

スバルは弾丸を全て当てたようだった。その的屋では全弾命中させると賞品が出ると、ミソラは先ほど聞いた。だからだろうか、小柄とはいえ、とりあえず身長が150cmを越えているスバルより大きなぬいぐるみが手渡されているのは。

「大きい……ですね」

「賞品だからね。……あー、ところで、よかつたらなんだけど、サインとか……書いてもらえるかな？」

「サイン？」

困り果ててぬいぐるみを横に並び立たせるスバルに、店員がサインを迫っている。人形を作るぐらいだから、おそらくあの人はロックマンのファンなのだろう。

「いや、書くのはいいんですけど……今まで書いたことないし……」

「お、じゃあ私が一番か。ならなおさら書いてほしい　ていうか書いてください」

「……ロックマン名義か星河スバル名義、どちらが良いですか？」

「両方」

ビックリの注文だ、と言わんばかりにスバルが目を見開いている。それを遠くから眺めているミソラはクスクス笑っていた。

「……じゃあ、もうすぐ終わりそうだから私は行くよ」

やがて、同じように笑っていたキクリがスバルの方へと歩き出した。ミソラはそれを無言で眺める。

「……あ、そうだ」

すると突然、キクリがミソラの方を向いた。何事かと思うミソラにキクリは言う。

「私と白金さんは抜け駆けっぱい行為厳禁ってなってるけど、響さんには何も無いからね」

「？」

キクリの言葉の意味がいまいち分からないミソラは首を傾げる。それを気にせずキクリは「じゃっ」と手を振って、今度こそスバルの方に歩いていった。

「あ、おかえり花菱さん。ミソラちゃんと何話してたの？」

「ん？ 星河君の女装、明日もつとパワーアップさせようか？って話してた」

「……………やめてくれないかな本当に」

キクリの言葉（嘘）でスバルがげんなりした表情になる。それを気にせずキクリは「早く行こう早く行こう」と急かしていた。スバルは何か言いたそうだったが結局は従い、150cmオーバーの巨大ぬいぐるみを背負って先行するキクリに着いていった。

「……………ねえハーブ」

『何？』

そうして一人残されたミソラは自身のウィザードに話しかける。

「さっきまでの花菱さんのセリフを」

『……………』

「私に『早く行動しろ』って言ってるように聞こえたんだけど」

『その通りでしょ』

ハープが肯定する。

……そう、そんな風に聞こえた。少なくともミソラには聞こえた。

「あなたがこのまま恥ずかしくて何もしないで……」の件は、「私に行動されなくなったらさっさと行動しろ」と言っているように聞こえた。

最後のセリフは、「ミソラがスバルに何をしようが構わない」と言っているように（今思うと）聞こえた。

……要は、

「花菱さんなりの激励かな、さっきの」

『そうね』

わざわざライバルとも言える人物に自分が不利になるようなことを言う理由が分からないが、それを覚悟の上でさっきのセリフを言ったのならば……、

「何もしなかったら、失礼だよなあ」

そう、ミソラは思った。



## 第51話：好きだから（後書き）

なんと、アクセス数が50000を越えました。

50話以上送ってやっとかよwwwと思った方はどうぞ笑い飛ばしてください。

まあとにかく、

皆さんありがとうございました、そしてこれからもよろしくお願ひします！

と、言いたい訳です。

はい、そんな感じで報告終わりです。

喜びが隠しきれない黒星でした。

## 第52話：損な性格

星河君はモテる。

でもそれは一般的な“モテる”からはかなり外れている。寄せられている好意の大多数が“恋”や“憧れ”ではなく“敬い”だからだ。

彼は地球を何度も救ったロックマンというヒーローだ。そのヒーローを尊敬する多くの女子はその“敬い”を“恋”と勘違いして彼に好意を振り撒く（全く気付いてくれないが）。

何故そんなことが判るのかと言うと、私も最初はそうだったからだ。現に、小学生五年生の終わり頃から今の中学校に入学してから一、二ヶ月くらいまでは、私はその“敬い”を“恋”だと勘違いして彼に好意を向けていた。

しかしその“敬い”が本当の“恋”に変わる時は来た。

彼は、通っていた小学校で酷いイジメを受けたせいで、他人とコミユニケーションを取ることを極端に避けていた藤枝君を、今みたいな明るい性格に変えた。

彼は、荒れまくっていてほとんど学校に来ず、繁華街とかで高校生や大人達と喧嘩ばかりしていた雛森君を、今みたいな思いやりもある、滅多な事では喧嘩もしないような人に変えた。

その時は、ああやっぱり星河くんは凄いなあ、と結局尊敬が先行し

て“恋”には至らなかった。

……切っ掛けは五月の終盤。

陸上部に所属している私は、顧問の先生から「この部が創設されて以来、君ほどの才能の持ち主が現れたことはない」と言われていた。「全国大会出場……いや、もしかすれば優勝も狙えるかも知れない」と言われていた。

おそらくかなり誇張されていたのだろうが、正直、悪い気はしなかった。

だから、頑張ってみようかなと思って、練習した。全国に出てみたいから、ひたすら練習した。先生や先輩達からの期待も、若干混じっている妬みも全部背負って、練習し続けた。

でも、やがて練習のし過ぎで身体にガタが来てしまった。

ある日、少し調子が悪いからと練習を早めに切り上げ、早く家に帰って休みたいからと普段は使わない歩道橋を昇って、バランスを崩して落ちた。

死んだと思った。絶対に死んだと思った。でも、死んでなかった。それどころかほとんど怪我すらしていなかった。

星河君が助けてくれたからだ。

その時、気持ちは尊敬が先行していた。

でも次の瞬間にその尊敬は心配へと移行した。

私が怪我しなかった代わりに、星河君が大怪我をした。落ちてきた私を受け止めた衝撃で思い切り地面に叩きつけられて、頭から凄量の血を流していたのだ。

通行人がすぐに救急車を呼んでくれて、それに同乗した私は、意識を失った星河君の、

「大丈夫？」

という寝言に心底呆れた。自分の心配をすべきこの状況で、意識を失ってなお他人の心配するか？ と。

何でそんなことが出来るのだろうか、不思議で仕方がなかった。

星河君は病院に送られ、頭を何十針か縫って、しばらく入院することになった。

……そしてその星河君の入院生活二日目のことだ。

私は彼の病室を訪れた。謝ったり、冗談に起こったり、最終的に落ちた理由を話したりした。そして色んな事を言われた。結構落ち込まされたけど、励みになったりもした。

そして、最後に言われたあの言葉は、今でも私の励みになるし、支えになっている。

「……目標を決めて、そこに向かってひたすら突き進めることの方が、中途半端な使命感で戦って世界を救うことなんかよりずっと凄いと僕は思うよ」

その台詞を聞いて、私はめちゃくちゃ照れた。その隙をつくように、彼はもう一つ私に言った。

私が無意識にずっと望んでいて、でも誰も言ってくれなかった言葉。

……その瞬間だった。私の、ロックマンの星河スバルへの“敬い”が、星河スバルっていう男の子への“恋”に変わったのは。

・  
・  
・  
・  
・

「んー、随分買ったねえ」

「……（随分買わされたなあ）」

アクセサリーやらキーホルダー及びぬいぐるみ多数が入った袋を抱えながら、キクリはベンチに座っていた。その隣には自分より大きなぬいぐるみを背負って歩いたり、キクリに奢らされたりして精神的にも体力的にも疲れはてたスバルが肩で息をしながら座っている。

「楽しかったね」

「……そうだね」

既に終了ムードの二人。それもそうだ。現在時刻は11時40分。キクリの仕事の時間まで残り20分しかないのだから。

「……本当、楽しい時間って早く過ぎるよね」

キクリが寂しそうに呟く。スバルは息を整えていたため、それにコメントが出来なかった。

「……星河君」

「……何？」

少しの間沈黙が流れ、ふとキクリがスバルの名を呼んだ。何かと訊ねるスバルに、キクリは言う。

「最後に何か買って欲しいなあ」

「……」

スバルはあからさまに「またかよ」といった顔になってうなだれた。しかしそんな顔をしてもちやんと「何が欲しいの？」と訊ねるところがスバルらしかった。

そして訊ねられたキクリは「んうー？」と唸り、少しだけ考える様

な素振りを見せてからそれを告げた。

「星河君の選んだ物が欲しいかなあ」

「……………」

スバルはあからさまに「また面倒な注文をしてくる……………」と言いたげな顔でうなだれた。  
しかし結局ゆっくり立ち上がって何を買おうか思索しながら歩き出す辺りがスバルらしかった。

・  
・  
・  
・  
・

数分後、スバルが帰ってきた。手には小さな紙袋がぶら下がっている。

「お帰りー」

「……………ただいま」

キクリが軽い調子で右手を上げて迎える。スバルは依然として疲れただ様子だったが、一応袋を持っていない方の手を上げた。

「……はい」

「ん、ありがとう」

そうして再びベンチに座ったスバルは、一回大きく深呼吸してから紙袋を差し出した。キクリはそれを微笑みながら受け取る。

「さーて、何かなあー……………」

そうして受け取ったキクリは速攻で紙袋を開封、中身を掌に乗せ、呆然とした。

「菊の髪飾り……………花菱さんにピッタリかなーって思ったんだけど……………」

そう、中身は菊の髪飾りだった。

(……………センスは良いと思うんだけど……………)

キクリだから菊の髪飾り。安直だった。安直にも程があった。

おそらくキクリに似合う物を買ってやろうと思ったスバルが必死に考えて選んだ一品なのだろうが……、嬉しいと同時に何か妙にガツカリすると、キクリは感じた。

「……あ、あれ？ 気に入らなかった？」

キクリの表情や沈黙を不安に思ったのか、スバルがそう訊ねてくる。気に入らなかったという訳ではないので、キクリは否定のために首を横に振り、笑った。

「んーん、逆。むしろ凄く気に入った」

「あ……、そっか、良かったあ」

スバルが安堵の息を吐く。

……気に入ったのは事実だ。それに自分のためにスバルが悩んで買ってくれた物なのだし、気に入らない訳がなかった。

「……じゃあ、もう心残りもないし……、ここで開きにしようか？」

「あ、うん」

やがて11時55分、要するに残り時間五分になり、「若干名残惜

しいけど、仕事も大事だから」と自分に言い聞かせつつキクリはそう言った。  
そうしてベンチから立ち上がり、アクセサリー類が入った袋を手に提げて歩き出した。スバルも再び巨大ぬいぐるみを背負いながら並行して歩く。

「午後は白金さんとだねー。楽しみ？」

「…………正直、怖い」

キクリの問いにスバルは正直な心情を吐露する。それを聞いたキクリは、呆れた様に溜め息をついた。

(…………本当にこの人は…………)

もう本当呆れるしかない。ルナが何でわざわざ一緒に回れなんて言ったのかを、全然理解していないのだから。

「…………星河君」

そんなだから、

「あなたはもつと…………」

自分が不利になるようなセリフを、

「周りの自分に対する好意に敏感になるべきだと思っ

キクリは自分で言ってしまうのだ。

「……………好意に、敏感になる？」

スバルが首を傾げる。どうやらピンと来ていないようだ。

「そうだよ。そんなんじゃ、色んな人を傷付ける羽目になるよ？」

「????？」

まだピンと来ないらしい。

これは呆れを通り越して段々ライラしてきたが、まあスバルが理解するのは無理か……………と思い、大きく溜め息をついた。

「……………まあいいよ。後は自分で考えて」

「え、ちよつと待」

これ以上話していたら決定的に自分が不利になるような言葉を、感情の赴くままに言い放ってしまいそうだと思ったキクリは、制止を呼び掛けるスバルを無視して走った。

「……私、損な性格だなあ……」

そんなキクリの眩きは、誰の耳にも届かなかった。

第52話：損な性格（後書き）

色々な描写を省く羽目になりました。

第53話・苦手（前書き）

ひっそびちの更新で「じゃこま」  
そして実にhard workです。

待ってた方（いるのかな？）ごめんなさい

## 第53話：苦手

1 - Bの喫茶店の当番には、十分間だけ休憩時間が与えられている。その時間を、ミソラは窓の外を見る事だけに使っていた。

理由は、窓の外にルナとスバルが見えるからだ。

「ほら、早く来なさい！」

ルナがそう叫びつつスバルの手を引っ張っている。1 - Bの教室は三階にあり、距離は結構あるのだが、良く通るルナの声はしっかりと届いていた。

「……ルナちゃん、楽しそう」

『楽しいでしょうね。なんせ、想い人と一緒に文化祭回りをしてるんだから』

ミソラの弦きを聞き、ハープは冷静にそう言った。ミソラは「そうだね」と、視線をルナ達に固定した状態で呟いた。

「ちよ、委員長！？ 痛い痛い！」

スバルの抗議の音が聞こえる。それにミソラと同じく休憩していた生徒が反応するが、「まあ別にいいか」といった表情で自分の休

憩時間を再開した。

『スバルのあの表情、本気で迷惑がってる感じだね』

『でも少し楽しそうにも見えますよ?』

シルフィーとセイレーンが引つ張られるスバルを見ながらそんな会話をする。ミソラは特にコメントはしない。

……と。

『……ミソラ、悔しいんですよ?』

ハーブがやはり冷静に訊ねてきた。ミソラは返事をせず、ただゆつくりと頷く。

『そうよね。あなたがもう少し精神的に強かったら、今頃あなたがあの場所にいたはずだね』

「そうだね」

返事をし、ミソラが立ち上がる。そして大きく背伸び。

「すっごく悔しいよ。……だからこそ、次はどんなに恥ずかしくて

も、ちゃんと言おうって気になれる」

『……そ。ならいいわ』

ハーブが冷静な、かつ安心したような言葉を放つ。ミノラは頷き、歩き出す。

『どこ行くの？』

シルフィーが問う。ミノラは右手をひらひら振りながら、振り向かず告げた。

「もう少しで休憩終わりだし、今のうちにお手洗い行ってきまーす」

もう少し金銭感覚の齟齬を考慮した注文をすればよかったかしら？と、泣きそうな顔で財布の中身を確認しているスバルを見ながら、ルナは思った。お嬢様育ちのルナは、一般より金銭感覚が緩い。最近それに対する自粛や自重も覚えたが、それでもなお相当なものだ。

……そしてその調子で、あれ買って、あれやろう、などと注文さ

れまくったスバルがどうなるかは、聞くまでもないだろう。

「……あー、ごめんなさい。ついいつもの調子で……」

気まずい雰囲気には堪えられなかったルナが謝罪する。対するスバルは、気にしないで、と財布を懐にしまった。そして別の話題を提示してくる。

「ほら、それよりさ。もう二時半過ぎちゃったよ。僕三時から当番だし、あと三十分くらいしかないんだ」

「……あ、もうそんな時間なの？」

「うん。……で、どうしたい？ 何かするにしても次が最後になると思うけど……」

そうねえ……、とルナは腕を組んで考え込む。正直行きたいところはあらかた行ったし、買いたい物も特にない。こうなると残っているのは、校内の各クラスの出し物くらいしか

「あ

あった。行きたいところ。スバルに悪いと思って、無意識のうち候補から外していた出し物。3-Dが「死ぬほど頑張って作りま

したあー！！ 絶対面白いですよっ！！』と豪語していた、あの出し物。

「……………決まった？」

「ええ、決まったわ」

どこ？ とスバルが訊ねてくる。それに対しルナは、……………ニヤリと笑いながら告げる。

「3-Dの」

「……………僕に対するイジメでしょうか？ 完全にイジメだよねコレ？ やだなー、イジメ。格好悪いよー、イジメって。イジメ反対」

「人聞きの悪いこと言わないで欲しいわね」

スバルが真っ青な顔でぶつぶつ呟いている。ルナは呆れ気味に返しつつ、逃げようとするスバルの襟首を掴んで引っ張る。

「だってそうじゃん！！ 分かってるでしょ、僕がそういうの苦手だって！！ 分かった上で行こうって提案したんでしょ！？ イジメじゃん！！ 完璧に！！」

「……はあ。変わらないわね、あなたは」

喚くスバルを問答無用で引きずり回すルナ。呆れた表情をしているが、その口許は明らかに笑みの形をとっていた。

スバルがここまで嫌がるのには理由がある。

ルナが提案した行き先が、スバルが最も苦手とするタイプの出し物だったからだ。

それは

「……着いたわよ」

「……着いちゃったよ」

3・Dの『“超”お化け屋敷』。古今東西あらゆるお化けをリアルウェアプを使って再現した、夕風中学校の歴史上最高かつ、今年の文化祭で一番人気の出し物である。

二人は一度も行っていないので詳細は知らないが、クラスメイトによると、『マジヤバイ』の一言に尽きる出来らしい。

『超リアルで超怖い。でもやっぱり超楽しい』、そんな出来らしい。

そんなお化け屋敷に今から二人は挑む訳だが、

「ねえもうホントやめよう？ 絶対楽しくないよ。怖いだけだよ。恐怖しか与えてくれないよ。ここより楽しいところ絶対あるって。やめようよホント。やめようやめようやめよう？」

近寄るのも嫌だという様子で駄々をこねまくるスバル。勢いに任せてかなり失礼なことを口走り、受付の男子生徒の口を引きつらせる。それにも気付かず、ひたすら入ることを拒否する。

「黙りなさい」

「はう……」

ルナの冷たい一言に、拒否の言葉を抑えられる。彼女はその隙にちやっちやと受付を済ませてしまった。

「五分ほど待つてください」

「はい。……にしても、本当に変わらないわね。あなたのお化け嫌い」

ルナの言葉にスバルは震える。

……そう、スバルはお化けの類、要するに科学的に説明のつかない

い存在が大の苦手だ。

二年前にみんなでホラー映画を見に行った時もそうだし、この前ウォーロックが興味津々に見ていた、井戸から長い髪の女性が這い上がってきてテレビから出てくる、二百年前の伝説のホラー映画なんてガチで泣きそうになった。

それはスバルの友人たちにとっては周知の事実だし、みんなそのところはかなり配慮して接してきているのだが、

「楽しみよねえ」

今日のルナには、その配慮が一切見られない。

「……もう、あれだよ。委員長一人で楽しんでくればいいよ。僕は外で待ってるから」

「何言ってるのよ。こういうのは一人で入るものでしょ。……それに、もう受付済ませてるし。この私の奢りで!!」

そこまでさせといて今更やめるわないわよね、とルナは言うが、君が勝手にやったんだし、とか、さっきまで人に散々奢らせたんだからチャラだろ、とかスバルは思う。思うだけだ。言ったら殺される。

「男でしょ？ 覚悟を決めなさい、星河スバル君 あ、前の組入った」

「……………」

覚悟なんかできるか。お化けなんか覚悟してる暇があったら十二神将と死ぬ気で戦う覚悟をするわ。……………うわ、こんな時に嫌なこと思い出した。byスバル

この人、独り言祭りだわ。ぶっちゃけ気持ち悪い。byルナ

二人ともそんなことを（一人は生で一人は心で）呟く。そうしながらとりあえず入り口のカーテン前に立つ。

「……………前の人達、凄かったわよね」

「？」

「見てないの？ 凄くガツシリした体格の男の人と、凄くチャラチャラした女の人」

「……………確かに凄いね」

「でしょう？ きつとあなたと違って、お化け屋敷程度じゃ全然怖がらな」

ルナが心底楽しそうに語ったその時である。防音設備が整っていて、中の音を一切シャットアウトすると言われている『“超”お化け屋敷』から、その声が聴こえてきたのは。

『うおオオオオオオオオああああああああああアアアアアアアアアアアアアアアアツ?!?!?!?!?!?!?』

『いやああああああああああああアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツ?!?!?!?!?!?!?』

「「「「「?!?!?!?!?!?!?!?」「」「」「」

その場にいた全員が、驚きで目を見開いた。ざわざわとどよめきが広がる。

「……僕と違って、何?」

「……何でもないわ」

事ここに至って、ルナは後悔し出した。

第54話・予想（前書き）

ミソラがテンション高いです

## 第54話：予想

「うわー、凄い列」

お手洗いを済ませたミソラは、教室に帰る途中に発見した長蛇の列を眺めて、思わず呟いた。

ミソラは好奇心からその列をたどり、『“超”お化け屋敷』という文字がプリントされたカーテンを下げている、一つの教室を発見する。

そこでミソラは、なるほどなあ、と頷いた。

『“超”お化け屋敷』。

ネーミングセンスはともかくとして、一般客に手渡されるアンケート用紙の『どれが一番面白かった？』の欄に、十人中七人がその名を書き込むほどに人気の、3・Dの出し物だ。

「うん。……これは、ウチが一位は無理かな……」

ひどく残念そうにミソラは呟く。

担任の話によると、初日の『コスプレ喫茶』のアンケート結果はかなり芳しかったとのことだが、おそらくここには及んでいないだろう。

なんせまず、客足が圧倒的に違う。

「やっぱ、三年生は凄いね、うん」

それを再確認して、とても清々しい表情で頷くミソラ。ちなみに、ハーブもセイレーンもないので、今までのとは完全に独り言である。

「勝つためには、何かもつと策を練らなきゃならないね。後で水無



(……、スバルくと……)

そう思い、改めて文化祭デートに誘う決意を固めるミソラ。  
そうやってスバルのことを考えたからだろう。最前列の二人に視線が向いたのは。

(……。。。。。え？ スバルくと……ルナちゃん？)

そう、いたのである。今日誘って明日一緒に行こうと決めていた想い人が、別の女性と隣り合って。

(ちょ、いつの間にかここまで来てたの！？ ていうか、うわっ！  
お化け屋敷？ お化け屋敷入るの？ 被るじゃん私！？)

ミソラは、おそらくあの二人はお化け屋敷に行かないだろうと思っ  
ていた。

なんせスバルはお化け嫌いなのだ。ルナがその辺を考慮して絶対  
に行かないだろうと思っっていた。

(……はっ！？ まさか、定番のアレをやるつもりなのかルナちゃん！？  
お化け屋敷で『きゃー、怖いー』って言って抱き着くあれを！！)

この上なくベタなことをやる気だねルナちゃん！ と感心すると  
同時に果てしなく戦々恐々とするミソラ。  
ぶっちゃけそれ、ルナちゃんのキャラじゃないよね？ と呆れも  
するが、

彼女はここで新たな可能性に気付く。

(……待てよ。スバルくんはお化け嫌いだ。たぶんルナちゃんより先にダウンする。……そうか、ルナちゃん、そうなんだね!? あなたは逆にスバルくんを抱き着いてもらおうとしているんだね!?)

くっそ、考えたなルナちゃん! とミソラは再び感心した。

男が怖がって女に抱き着くなど、情けないと呆れてしまっだろう。普通なら。

だがそれが想い人だった場合はそうとも限らない。

なんせ、その怖がったという事実を脳内で削除すれば、好きな人に思い切り抱きしめられているという嬉しい状況に早変わりするのだから。

……まあ、

(あの二人も、もう中学生だもんね。そこまではならないでしょ)

一気に冷めた様子で今度こそ踵を返すミソラ。脳内のスイッチを、どんな風にスバルを誘うかに切り替えて、自分の教室へと歩いていく。

……この時、彼女は忘れていた。

さきほどの、あの叫び声のことを。

……そして彼女は、ついにもう一つの可能性の存在に気が付かなかった。

さきほどの予想二つが、両方とも的中するという最悪の可能性に。

## 第55話：お化け屋敷

前の組がグロッキー状態で出てきた。

「……………」

思わず無言になるスバルとルナ。スバルは既に青ざめた顔をしており、ルナは完全に硬直している。

「…………委員長」

「…………何？」

やがてスバルが口を開いた。ルナは表情一つ変えずに聞き返す。

「…………やめない？」

「嫌よ」

スバルの提案にルナは即行で反対する。そこでついに、スバルが声を荒げた。

「何言つてんの委員長！？ 今の見たよね！？ 腰砕けてたよあの人達？ あんなナリしてるのに！」

「聞きなさいスバルくん」

「あの人達であれだよ？ 僕らなんか行ったら死ぬって！！」

「聞きなさいって言ってるわよね？」

「なにこじ？ 本当になんなのさ」

「聞け」

「……………はい」

スバルはルナのドスの利いた声で叫びを中断させられた。ルナはスバルの双肩に手を置き、諭すように喋りだす。

「スバルくん、冷静になりなさい。確かにさつき、あの人達の叫び声が聴こえた。そしてあんなになって出てきた。…………でもよく考えてみなさい？ あの人以上の人達の声はまったく聴こえなかったし、フラフラになって出てきたりもしてなかった。…………これがどういう意味が分かる？」

「…………あの人達が、特別臆病だった？」

「そう、その通り！ あの人は見かけ倒しの臆病者だったの！ つまりはそこまで怖くないのよこじは！」

ドーン！ という擬音が鳴り響きそんなポーズで、ルナはそう宣言する。

当たり前だが、それを聞いた店員は凄まじく引き攣った表情をしている。

「…………そ、そっか。…………そうだよ、所詮学生が作ったものだしね、うん。…………そう思ったら、ちょっと勇氣出てきたかも」

「そう、そうよ！ 作ったのはただの学生！ その道のプロとか、

賢い大人達とか、そんな凄い人達じゃないのよ！」

ルナは無駄にハイテンションに熱弁を奮う。

ちなみにスバルは気付いていないが、今までの言葉は全て、自分にそう言い聞かせるためにも発されていた。

まあ要するにルナも入るのが怖いのである。

しかし、入りたくないのだが、白金ルナとしてのプライドが邪魔して「やめよう」とも言えない。

よって、無理矢理スバルを鼓舞させるか、自分を何かもっとうらしい理屈で納得させようと思った訳である。

……そして、その二つは見事に成功した。

「準備が整いました。どうぞ中へ」

「行くわよスバルくん！」

「オツケー委員長！」

テンションを上げに上げ、精神的なドーピング状態でお化け屋敷に突入する二人。

やがて店員がドアを閉め、カーテンを閉めた。

……その直後のことである。

「おい、聞こえてるかお前ら」

お化け屋敷前の椅子に座り直した店員が、ハンターV.Gで中のクラスメイトに連絡をとったのは。

「今入っていった二人組いるだろ？ ……そう、ウチの一年生のカ  
ツプルらしき奴らだ」

スバル達が入っていった列の一番前に出た一般客は気付く。店員  
のこめかみに青筋が浮かび上がっていることに。

「そいつらには手加減はいらない。全力でかかれ。 ……何で？ ん  
なもん決まってるんだろ」

クラスメイトの問いに、店員は呆れ気味に、それでも怒気を孕ま  
せて答えた。

「俺らの努力の結晶を侮辱しやがったそいつらに、本当の恐怖を味  
わわせてやるんだよ」

……ご愁傷様。

列に並んでいた客全員がほぼ同時にそう思った。

「……暗いわね」

「そうだね。懐中電灯とかないのかな？」

二人はお化け屋敷の中をちまちまと歩いている。暗いからである。足元に何かがあるのか分からないのだ。そんな状態でずんずん先に進むほど、この二人は馬鹿ではない。……決して、ビビっているとかなではないのだ。

「……？ 明かりが見えるわね」

ふとルナが前方を指差してそう言った。サイドに注意を向けていたスバルもそちらを向き、「本当だ」と頷く。

「何か置いてあるわね。……何かしら」

「うーん、……あ、懐中電灯じゃない？ あれ」

歩きながら明かりの辺りを注視していたスバルがそう答えた。言われてみればと、ルナは頷く。

やがて明かりの側まで行って見てみると、確かに懐中電灯だった。

「これで照らせてってことかな」

「それ以外に用途はないでしょ。……ほら、早く点けなさい」

「オッケー」

言われて手に取り、スイッチを入れるスバル。若干心許ない感じだが、ないよりはマシというレベルの明かりが点いた。

「うん、よし。それじゃ行こうか」

「ええ」

懐中電灯で前方を照らし、二人は歩みを進めた。

「……………」

その、直後である。

その物体が視界に入ったのは。

「……………」

ボロボロになった布製の服を身に纏い、身体の節々に大きめの傷が入った、その物体。

「……………」

濁ったピンク色の肉があらわになり、所々が黒ずんだような色をしていて、眼球周りの肉が腐り落ちて眼球をぶら下げている、その物体。

「……………」

ああ多分、人間が死んでそのまんま放置されたらこんな感じになるんだろうな……………」と思わされるような、その物体。

「ひあ」

作り物だ。リアルウェーブで補強されたただの人間だ。そんな考  
えも吹っ飛んだ。

必死に行った精神的ドーピングも、無駄だった。

人間の根元的恐怖の底を突かれては、どうしようもないのだ。

そう、それほどまでに、

『うおおあああ』

その死体は精巧に、リアルに、作られていた。

「ぎゃああああああああああああアアアアアアアアア  
アアアアアアツ!?!?!?!?!」

八モった絶叫が鳴り響き、二人はほぼ同時にお互いに抱き着いた。

第55話：お化け屋敷（後書き）

駄目だ、ゾンビがどんな感じなのかうまく描写できない

## 第56話：本当の恐怖

「!?」

ミソラが震えた。

「どうしたの〜?」

彼女のそんな様子に目ざとく気付いたツバメが一言訊ねた。ミソラは首を傾げつつ答える。

「えっと、何か……凄く嫌な予感がして……」

「そっか〜、不思議だね〜。あ、焼きそばできたよ〜、八番テーブルに持ってって響さん」

「うん、分かった」

言われた通り焼きそばを運ぶミソラ。

今のは多分気のせいだ、そう自分に言い聞かせて彼女は仕事に集中する。

嫌な予感は決して気のせいではなかったのだが。

スバルもルナも腰が砕けそうだった。

お化け屋敷が与えてくる恐怖が、自分の許容範囲を明らかに超越したものだ。だからである。

まさかここまで凄まじいものだとは思わなかった、それが二人が叫んで抱き合う中で唯一冷静に思考できた言葉だ。

「ああああああああああああああああああッ!?」

思考能力が失われ、ついでに言語能力も失ってひたすら震える二人。それでも視線は目の前の死体ソッピに釘付けだった。

『うおおおお』

死体ソッピ（に模した生徒）が追い撃ちをかけるように呻き声を上げる。それに対して二人は……、

「ひぎゃあああああああッ!?」

全力で叫んで逃走した。

……ただし、奥へと。

それから二人は本当に叫び通しだった。

逃走後一発目に発見したのは、何もメイクしていない一見普通のカップルだった。

それに二人は安心してしまった。ああ、自分達以外の客なんだ、と。

……このお化け屋敷が、同時に二組以上入れないものだということを忘れて。

結果、そうやって心の余裕が生まれた二人に、そのカップルに模した生徒は攻撃をしかけた。

男の方が突然奇妙な声を上げ、隣の女の首筋に噛み付いたのである。

噛み付かれた女は「きゃああっ！」と叫び、やがて男と同じ様に奇妙な声を上げ、男とほぼ同時にスバル達の方を向いた。

そしてスバル達が見たものは、目が血の様に紅く染まり、犬歯が異常に発達したカップルの姿だった。

……これが吸血鬼系のステージだと気付く前に、二人は「ひゃあああああああッ!?」と叫んで逃げていった。

次に見たものは光景だけで既にアウトなものだった。

首無し騎士デユラハンと食人鬼ゲールの戦闘だったのである。

二人は既にここで叫びまくっていたのだが、そこで更にヤバいものを見てしまった。

まず、首無し騎士デユラハンの腕や胸。

そこには鎧の砕けた部分があり、その奥には食人鬼ゲールに喰いちぎられたと思しき跡があり、その更に奥には鮮血を撒き散らす肉があった。凄惨な光景である。

次に食人鬼ゲールの身体。

光景的には首無し騎士デユラハンの噛み傷が切り傷に変わったようなものだ

った。

問題はその傷が出来る瞬間を見てしまったことである。

首無し騎士デュラハンの剣が食人鬼ゲールの身体を切り裂く瞬間を。

そこで限界を迎えた二人は「ひひやあああああああッ!?」と叫び散らして逃げ出したのだが、その後の食人鬼ゲールが首無し騎士デュラハンの首を奪って喰らい始めるシーンを見ずに済んだのは、ある意味幸運だったと言える。

その後二人は、もう描写するのも憚られるほどの光景を十三回も目の当たりにし、「お前ら、喉枯れるぞ」というほど叫び散らして、前の組以上のグロッキー状態でお化け屋敷を出た。

その先で待っていたのは、「どうだ、これが本当の恐怖だ。思い知ったか」と言いたげな顔で微笑む店員と、「ほんとご愁傷様……」という雰囲気漂う客達の姿だった。

## 第57話：深み

「……………凄かったね」

「……………そうね」

グッタリした様子で壁に寄り掛かるスバルとルナ。血の気が完全に失せた顔をしており、1%足りとも楽しめなかったというのが、言わなくても分かる。それほどまでにアブノーマルな光景を目の当たりにしたのだろう。

「……………」

「……………」

無言。

華やかな文化祭の雰囲気似つかわしくない無言状態だった。……………ただ、その無言の理由は、二人一緒ではなかった。

スバルは単純に『恐かった。怖かったじゃなくて恐かった。マジで』と、先ほどの恐怖を思い出している無言だ。

が、ルナはそうではない。

その理由は、

（だ、抱き合っちゃった！ 私、スバルちゃんと抱き合っちゃった！  
！ しかも、な、何回も！！）

お化け屋敷で脅かされる度にスバルと抱き合ったことによる羞恥

心だった。

良く見てみると、青かった顔もいつの間にか真っ赤に染まっている。

余程恥ずかしかったのか、嬉しかったのか。

(悟られてはダメ、悟られてはダメ、悟られてはダメ)

どちらにせよ、スバルにはバレないようにしないといけない。キクリから抜け駆けは禁止されている(抱き合ったのはとりあえずノールカン)のだ。これが悟られると、スバルに何かしらの変化が訪れるような、そんな気がするし、その変化によって、自分の衝動の抑制が効かなくなる気がする。

それゆえルナは、見られないようにと必死に顔を俯けたのだが、

「い、委員長大丈夫!? 気分悪くなった!？」

スバルは、自分も決して大丈夫ではなくせに、大慌てな様子でルナの心配を شدした。表情は真剣そのもので、本気で心配しているのがよく分かる。

それを、視線を少し上に向けて見たルナは、

「~~~~~ツ!!」

顔から火が出そうだった。即行で視線を外す。何故かスバルの顔を直視できない。

(!?!?!?)

……これはルナも気付いていないことだが、先ほどのお化け屋敷、最初の死体ソレヒの辺りから恐怖で常に鼓動が速くなっており、その状態

でスバルと密着していたものだから吊り橋効果的なものがなんやらかんやらで

まあ要するに、前より余計に惚れたのである。

(……マズい、何かマズい。このままここにいるのは非常にマズい気がする！ どうしよう！)

茹蛸の様に真っ赤に染まった顔を隠しながら思考するルナ。どうするべきかは……一瞬で決まった。

「だ、大丈夫よ！ ……それより、ほら、時間大丈夫なの？ 三時から仕事なんでしょ？ あと5分くらいしかないわよ」

非常に名残惜しいが、今ここで解散するのだ。

「え？ あ、そっか。……すっかり忘れてた」

言われて、少しキョトンとした様子で呟くスバル。そのことは恐怖で頭からすっ飛んでいたようだ。

「てことは、もうお開きかあ。……何か名残惜しいね」

「そ、そうね」

ルナは顔を背けながら投げやりに言い放った。いつも通りの若干不機嫌そうな口調で言っているが、内心は『名残惜しいって思ってくれてて本当に嬉しい！』とお祭り騒ぎである。

「じゃあ、まあ。……お開きってことで」

「ええ、お開き……」

スバル視点で何故かあらぬ方向を向いているルナに、彼はそう告げた。ルナもいつも通り……より少し寂しそうな声で返す。

……多分、ルール違反だろうけれども、さっき自分が仕事について言わなければ、もう少し長い時間スバルといられただろう。そこが少し残念だ。そう思いながら、ルナは踵を返す。

その時だった。

「……楽しかったよ委員長」

突然スバルがそう言ったのは。

「楽しかった。最後はちょっと……まあ、あれだったけど、とにかく楽しかった。また機会があつたら一緒に回ろうね」

「~~~~ツ！ はいはい分かったわよ！ 機会があつたらね！

もういいから早く行きなさい！」

「了解」

言われて、少し微笑みながら去っていくスバル。ルナはその姿が完全に見えなくなるまで待って……壁に寄り掛かった。

「……最後の最後に、なんてこと言つたのよ」

顔を俯ける。が、もはやそれでは隠しきれないほど顔は紅い。

それが分かっているのか、手も使って必死に隠そうとする……や

はり隠しきれないが。

「あー、もう……」

どンドン深みに嵌まっていく……。  
その言葉は声にはならなかった。

第57話：深み（後書き）

一挙に二話更新してみたり

## 第58話：異変

夕風中文化祭、二日目終了ー！ 一般のお客様方、最終日である明日も是非お越しになってくださいねー！ それでは、さようならー！

……と、そんなテンション高めな放送が流れる午後七時、その内容通り文化祭の二日目は終了した。

一般の客はあらかた帰宅し、後片付けの当番にあたっていない、家の近い生徒もちらほら学校を後にしている。

そんな中、中庭にえらく上機嫌に喋りまくる、青いウィザードがいた。

「で、スバルと委員長の奴がそりやもう叫びまくってよ、…  
…まあ詳細は言わねえけど、すんげえ取り乱してて面白いのなんの  
って  
」

「ちよ、ロック！」

スバルの情けない話を笑い話のように話すウォーロック。お化け屋敷の話だが、何に驚かされたのかを隠したり、驚かされた結果どうなったのかを少し曖昧にしたりと、まだ行っていない者や近くで聞いているミソラに配慮している。ウォーロックだっていい加減、その辺の機微を理解し始めているのだ。

「そんなに凄かったのね。スバルくんは……まあ当たり前として、ルナちゃんまで取り乱すなんて」

「おうよ。……まあ、仕方ないっちゃ仕方ない感じだったけどな。

……なんせ、この俺から見ても相当ヤバかったからな、あそこはよ  
『それは確かにヤバいわね』

ハーブとウォーロックの会話が続く。

スバルはもう耳を塞いで『あー、きーこーえーなーいー』と知らないフリをしており、ミソラは神妙な面持ちで話を聞いている。他のウィザード達は、目を輝かせて聞いているのが一人と腹を抱えて笑っているのが二人。

よって、中庭はとても騒がしかった。  
と。

「こら！ 何してるのよあなた達！ 用のない生徒は帰るか校舎に入るかしなさいって言われてるでしょ！」

スバル達の耳に、聞き慣れた声が響いた。白金ルナのものである。

「あ、ゴメンゴメン委員長。すぐ退散するよ」

全員を代表してスバルがそう告げる。その直後であった、

「~~~~~ッ！ そ、それなら早くしなさいよ！ それじゃあ  
ね！」

彼女の頬がうつすらと紅く染まり、拳動が明らかにおかしくなったのは。

いつもなら、本当に退散するまで居座って何かしら命令し始めるところなのだが、今回は何か囁し立てるように言葉を並べて、早々に立ち去ってしまった。

「……どうしたんだろう？」

それにスバルが首を傾げる。後ろでは大体の事情を把握しているウォーロックが半笑いで顔を逸らしており、他数名が『何かあったな』顔で呆れた表情をしており、ミソラが非常に険しい表情で固まっていた。

「白金さん」

「？」

あの場を即行で離れて遠くに逃げたルナは、背後から声をかけられた。振り返ってみると、昼間の文化祭デートを行っきっかけになった人物が手を大きく振りながら駆け寄ってくるのが見えた。

「花菱さん」

「やつほー、どうだった？ 昼間楽しかった？」

ほとんど言葉を交わさないでいきなりその話題に持っていくキラ。意表を突かれたルナは一瞬キョトンとして、やがて頬を真っ赤に染めた。

「ま、まあ、楽しかったと言えば楽しかったわね！」

ルナは何かをこまかすような大声で返事をする。キクリは『そっか』と頷き、……いきなりルナの肩を組んだ。

「!？」

「(よかったねー。……でも、楽しかったただじゃないよねー、絶対。それだったらさっきのあの反応はおかしいもん)」

キクリがルナ以外には絶対に聞こえない音量で囁く。どうやら先ほどの出来事を見ていたようだ。

「(えつと……そ、それは、その……)」

「あー良い良い言わなくても。詮索したい訳じゃないからね。……うん、なんであれ、白金さんが楽しかったんならそれでいいんだ」

「え？」

意外だ、と言わんばかりに目を見開くルナ。

キクリがスバルに好意を持っているというのは、朝のあの出来事から分かっている。

そんな彼女が、ルナとスバルの間に楽しかった以外の何かがあると察しているのに『よかったね』と、事もなげに言うとは。

……何か、おかしい。

「……あの、花菱さん？ あなたもスバルくんが好きなんじゃないの？」

気が付いたらルナはそう訊ねていた。キクリは一瞬何事かと思っ

たようだが、すぐに微笑を浮かべてこう答えた。

「うん、好きだよ。むしろ大好き」

「……なら、なんでよかったなんて」

大好き、という言葉に少し怯んだルナだったが、すぐさま立て直してまた訊ねた。

キクリは『あぁなんだ、そんなこと』と呟き、……感情の全く籠っていない目をルナに向けて、返答した。

「私が一番後だから」

瞬間、ゾクリと、ルナの身体を悪寒という言葉では説明できない何かが走り抜けた。

同時に彼女は気付く。キクリの様子が明らかにおかしいと。

「……花菱さん？」

ルナは思わず名を呼んだ。……が、

「うん。本当、楽しかったんならそれでいいんだよ！ それ以上の何かがあったんだとしても！ だって白金さんは星河くんが好きなんだから！」

キクリがいつもの笑顔でからかうようにそう言い放った。目も先ほどの感情がないものでもなく、凄く生き生きしたものになっている。

ルナはしばし呆然としていたが、やがてキクリが何を言ったのか

理解し、声を荒げた。

「……な！？　ちよ、そんなこと大声で言わないでよ！」

「あははは！　いいじゃん、事実なんだしさ！」

「だ・か・ら！　そういうこと言うなああああー！！」

「わー、怒ったあ。ヤバいね、逃げよう。……それじゃ、バイバイ  
白金さん！」

「あ、こら逃げ　走るの早ッ！？」

怒鳴るが、キクリは意に介さず『スタコラ』とか『ギューン』という擬音が合いそうな走り方と速度で逃げ去っていく。やがてその姿は校舎の影に隠れて見えなくなった。

「~~~~~ッ！　なんなのよあなたはあああッ！」

心配して損した、そんな意味が籠められた怒声が、学校中に響いた。

校舎の屋上。

二人の少女のやり取りがよく見える場所。その二人はそこにいた。

『今の少女……いいですね、素晴らしい』

「そうですね。……『素材』としては充分過ぎるほどに」

二人は、走り去っていく少女を眺めながら、その言葉をかわした。

## 第59話：誘う時

ルナが叫ぶ数分前。

『（何かあったわね）』

『（あったよね、絶対）』

『（ありましたよね）』

『（……まあ、あったと言えばあったな）』

ウォーロックとハーブ及び他二名の女性型ウィザードは小声で話していた。

ちなみに、メルクリウスは蚊帳の外である。

『（つーか、あったからさっきの話、少しはしよったんじゃねえか。……流石の俺も、ミソラがスバルに……まあ、なんだ、特別な感情を抱いてるってことぐらいいい加減分かるからよ）』

『（成長したわねあなた、昔とは大違い。……それは置いといて、……具体的には何があったの？）』

あえて少し突っ込んだ質問を試みるハーブ。ウォーロックはしばし逡巡したが、『口外すんなよ』と前置きした上で、更に小声になつて告げた。

『（抱き合った）』

『『『(……………は?)』』』

目を見開いて硬直する三人。ウォーロックは続ける。

『(……………お前らが思ってる抱き合っただじゃねえぞ? お化け屋敷の恐怖で抱き合っただ。……………まあ、スバルの奴は気付いてねえのか気にしてねえのか分かんねえが、少なくとも委員長の奴は気付いてすんげえ意識してる)』

その説明に納得した三人は『あ、なるほど』と、安心して(していいのかどうかは疑問だが)硬直を解いた。

『(……………なるほど、それであるの反応)』

『(それはそうなりますよね……………)』

シルフィーとセイレーンが口々に呟く。ウォーロックとハープは苦々しい顔で頷いていた。

突然だが、ここで一つ確認だ。

響ミソラはシンガーだ。

そして職業柄か、素でも非常に耳がいい。

要するに何が言いたいのかというと、

(抱き合っただ!?)

ウォーロック達の会話はミソラに丸聞こえだったということだ。

ハープならここで失敗した! と、先ほど自分が質問したことに

後悔するだろう。

それはそうだ。恋敵が想い人と抱き合ったという情報は、絶対に知られてはならないことだから。

まあただ、幸運なことに、

(こつしちやいられない！)

今回は上手いように転がってくれるのだが。

「スバルくん！」

「ん、何？」

ミソラがスバルを呼んだ。スバルは一拍ほど置いてから振り向いて訊ねる。

「えっと、……あのね」

昼間は無理だった。これみよがしに来客が多くて忙しかったし、……スバルはすぐに女装させられるし、正直、誘う雰囲気じゃなかった。

だが、今は違う。

邪魔者もいない、雰囲気的にも問題ない。そして、これから別々

の棟に別れなければならないので、タイミング的には今しかない。

「その、……明日」

浮かぶ羞恥心とかは、シルフィーの言っていた覚悟で消し去る。自分自主という障害も、今はもうごく小さいものになった。そうしてミソラは、その言葉を口にした。

「……明日！ 私と」

『！ みんな、退散するわよ』

ハープがふとそんなことを言った。

『あ？ なんで？』

背後の光景が見えていないウォーロックがそう訊ねる。ハープは返答代わりに後ろを見るよう促した。

『ん？ なるほどな』

最近その辺の機微が理解し始めたと言語するウォーロックも、納得して去り行く準備をする。

シルフィーとセイレーンは、とっくに去る準備が出来ていた。

そんな中、

『え、なんでだよ。お前から自分のオペレーター放っていくのかよ？』

ミスター鈍感のメルクリウスが、全く空気の読めていない言葉を吐き出した。

『いいんですよメルクリウス様！ むしろ今は放っておくべきなんですって！』

ミスター鈍感の一番の被害者であるシルフィーが『この馬鹿が！』と言いたげな、上司に向けるに相応しくない表情をしながら告げる。しかしメルクリウスは『いや、でもなあ……』と渋る。

そんな状況を見兼ねたのが、ウォーロックはメルクリウスの背後に回り込み、

『ビーストスイング！』

『ぐぶはあッ！？』

メルクリウスの脳天目掛けて思い切り爪（みねうち状態）を振り下ろした。油断していたメルクリウスはそれをまともに喰らい、人間でいうところの気絶をした。

『これで大丈夫だろ。　　つーかコイツ、スバルと同タイプのヤツだったんだな』

『そつだよ。……私の苦勞、分かるでしょ？』

『いいから、早く行くわよ!』

『『『了解』』』

ハーブの号令で速やかにこの場を退散するウィザードたち。

ハーブによると、しばらくして女子部屋に来たミソラは表情は、かなり晴れ晴れしいものだったとか。

第59話・誘う時（後書き）

長かった。

二日目は本当に長かった。

次からは二日目です

## 第60話：ダンス（前書き）

一ヶ月振りくらいの更新です。三ページです。久しぶりに書いたのでちょっとキャラクターの喋り方とか違つかもしれませんが、ご了承ください。

それではごちそう

## 第60話：ダンス

「十一時くらいまで働いてくれたら、星河くんと響さんは文化祭終了までオフシフトにしてあげる。」

とツバメがのたまったため、スバルとミソラは八時から十一時までの三時間、死に物狂いで働き通した。

途中、ツバメが客足を増やすためと、「『ご主人様』とか言ってみちゃう？」と提案してきて、しかも実行させられて、ミソラは大したことなかったようだがスバルは精神的に病む寸前にまで心を痛めつけられた（後にある程度回復した）。  
そういったことがあった後の午前十一時十分。

「待った？」

「いや、今来たところ」

「テンプレな台詞だねえ」

スバルとミソラは正面玄関にいた。

これからデート（ミソラの気分的にはだが）なのだ。

ミソラはスバルの周囲を一回りしてから正面に立ち、

「じゃあ早速行こっか」

「わ、ちよっ………！」

手を握って引っ張っていった。

一発目にお化け屋敷に行かされた。

「はあ……はあ……」

「あははははっ、楽しかったあ！」

壁に手をついて呼吸を荒げるスバルを尻目に、跳び回りそうな勢いではしゃぐミソラ。3-Dの生徒に目をつけられているスバルが来たということ、お化け屋敷の仕掛人も最高レベルの恐怖を提供したはずなのだが、ミソラにとっては楽しかった程度のものだったらしい。

おかげで、仕掛人達は少し自信を失ったようだった。

「……すごいねミソラちゃん。あれを楽しめる余裕があるなんて……」

グロッキー状態で訊ねる。二度目の体験のため、耐性ができて昨日よりはマシだが、やはりキツイものキツイ。

ミソラはあっけらかんとした様子で、

「余裕も何も、お化け屋敷って楽しむためにあるものでしょ？ だったら楽しまなきゃ損だよ。……いやー、ここが大人気な理由が分かった気がしたねえ」

「……………」

そんな風に言われると、恐怖で抱き着いた自分が本気で情けなくなる。そんなことを思いつつ、スバルは壁から離れて体勢を立て直す。

「……………じゃあ、次行こうか」

「うん、どこ行く?」

「お任せします」

「……………こういう時は基本、男の子がリードするものだよ?」

「……………えー」

スバルが難色を示すと、ジーツと見詰められた。そのままの状態です三十秒ほど経過し、スバルは折れた。

「……………分かった」

「やった!」

片腕を突き上げて喜ぶミソラ。それを横目に見ながら、スバルはどこに行くかを思索し、

「じゃあ……………」

ミソラの機嫌が非常に悪くなった。

1ーFの物品バザーに行こうと言ってからずっとこうだった。

「……どうしたのさ、本当に」

「別に、なーんにも？」

訊ねても、これだ。凄まじく素っ気ないのだ。そうこうしている内に1ーFにたどり着いた。

「いらっしや スバルとミソラじゃねえか」

「やあジャック。頑張ってる？」

軽く手を挙げて何となく訊ねるスバル。ジャックは「頑張ってるけど……」と呟いてから、

「何だよ、冷やかしか？」

「まさか、純粹に客として来たんだよ」

「ふうん、何でまたここに？」

スバルは一拍の間を置いて、

「いや、こういう時は基本男がリードするものらしいからさ、色々

考えてここにした。女の子って買い物とか好きだし」

「リードって……」

聞いて、ジャックはミソラを眺めた。依然不機嫌そうに顔を背ける彼女に、何かを察して彼は言う。

「スバル。お前がミソラをリードするんだったらさ、ここには絶対来ない方がよかつたんだよ」

「……え、物品バザーってアウトだった？ ……そうだね、豪奢なものとかほとんどないもんね」

「ちよつと失礼だなそれ。……違う、お前がミソラをリードする場合の話だ」

「？」

意味が分からずに首を傾げるスバル。  
と、

「あら、何してるのジャック　って……」

「げっ」

「あ、委員長」

「……………」

教室の奥より、白金ルナがやって来た。

「見せつけに来るなんて、少し驚いたわ」

「行くとコスバルくん任せたらこうなったんだよ。私は行かないようにしようと思ってただけど……」

ルナの言葉に、申し訳なさそうに返すミソラ。「まあいいわ」と彼女は眩き、

「で、楽しんでる?」

「そりゃあ楽しむよ。もうお化け屋敷も行ってきた」

「……………ッ!? そ、そう!」

瞬間、ルナの顔が真っ青になる。思い出したくない記憶が呼び起こされたようだ。

「……………まあ、楽しんでるならいいわ。……………それより」

ルナは記憶を吹っ飛ばすがごとく首を振り、文化祭のパンフレットを取り出した。プログラムの『最終日・後夜祭』の項目を指差し、訊ねる。

「じゃ、出るの？」

「……？ どういうこと？」

首を傾げるミソラに、ルナは少し呆れた様子だった。溜め息をつき、パンフレットを手渡す。

「プログラム、よく見なさい」

言われて、『最終日・後夜祭』の項目を眺める。

一般のお客様を交えた催しものを行います。一年生から三年生、他の学校の方、一般のお客様問わず、一芸なり歌なり披露なさってください（飛び入り可）。なお、この催しの前にフォークダンスを行いますので、参加を希望する方は午後五時までに申請を

「フォークダンス!？」

思わずミソラは叫んだ。教室内にいる全ての人物の視線が一斉に集まり、恥ずかしそうに身を縮める。

「……知らなかったのね」

「……うん、全然」

呆れたように呟くルナに、ミソラはそう返す。

「……初日も二日目も誘ってないから、てっきりこれを狙って最終日に誘うつもりなんじゃないかと思ってただけ……」

「いや、全然」

勢いよく否定する。フォークダンスがあることなど知らなかったし、初日も二日目も諸々の事情で誘えなかっただけなのだ。

「……フォークダンスかあ」

ミソラはうつとりした表情で呟いた。自分とスバルが踊る姿を想像して、頬を赤らめる。

「出たいなあ……」

「出ればいいじゃない」

「え!？」

ルナから褒められたことに驚きを隠せない。こういう時は普通、『絶対出ちゃ駄目だからね』とか言う場面だろうに。  
思わずミソラは訊ねた。

「……いいの?」

「いいも何も、今日はあなたの好きにすればいいんだから、私が何を言おうが関係ないでしょ? 私だって昨日、結構好き勝手やったんだから」

「……そういうものかな?」

「そういうものなの」

言いつつ、パンフレットを返してもらおうルナ。表情が少し曇っ

た感じだが、そこは指摘しないことにした。

ルナはいつもの毅然とした状態に戻り、

「……それより、せっかく来たんだから何か買っていきなさいよ」

「スバルくん」

「何？」

1ーFを出て校内散策を始めた矢先、ミソラはふと名前を呼んだ。

「後夜祭に、何かがあるか知ってる？」

「……、……、……何か、催しもの」

全く知らないらしい。まあそれがスバルだと妙な納得をし、ミソラは続ける。

「うん、そうだね、催しものだね。……その前に何かがあるか知ってる？」

「……いや、知らない」

「フォークダンス」

かなり強調して告げる。スバルは一瞬だけ呆然として、

「……それが、どうしたの？」

「一緒に出ない？ 男女ペアじゃないと参加申請できないんだよね」

「え？ ……でも、僕踊れないよ？」

「安心して、私も踊れないから」

「駄目じゃん」

半笑いでスバルが告げると、ミソラもクスクス笑う。ミソラは「だからさ」と呟いて、

「踊れないもの同士、一緒に踊っちゃおうって話だよ。分かんないなら、周りの人達の真似をすればいいだけの話だし」

「そう？」

僅かに首を傾げるスバル。しばしの間思案していた様子だったが、やがてゆっくり頷く。

「いいよ、出ようか」

「やった！ じゃあ、早速参加申請行こうよ！」

「え、今から？ それ締め切りいつなの？」

「午後五時」

「ええっ！？ 五時間以上も後じゃん！？ いくらなんでも早過ぎない？」

「いいの。思い立ったが吉日、何事も早い内がいいんだから」

「いや、だからって 痛っ！ ちょっ、痛い、引っ張らないでっ  
て！」

スバルの手を握って走り出すミソラ。抗議の声が上がるがお構いなしだ。

もう彼女は、後夜祭でスバルと踊ることしか頭になかったのである。

第61話：英国紳士（前書き）

タイトル適当にもほどがある。

そう自分にツッコみたい。

## 第61話：英国紳士

「最終日なだけあって、すごい活気だねえ」

花菱キクリは焼きそばの材料を手に提げながら独り言を呟いた。どの生徒も非常に熱を入れて活動をしており、一般客の数も前日より増している気がする。この分だと、後夜祭の盛り上がりは例年の比ではなくなりそうだ。

そう思いつつ何となく中庭の方に視線を向けると、

「あれ、こっちだけ受け受付って」

「知らないよ。パンフレットは？」

「持ってないけど……」

「どうしよう、誰かに借りる？」

「うーん」

手を繋いでそんな会話をしている、スバルとミソラを目に捉えた。

(……あー、楽しんでるなあ。……受付ってことは、もしかして後夜祭のフォークダンスに出るのかな?)

思いつつ、何故か、勢いで、スバルとミソラが踊っているシーンを想像する。

途端。

『ドクン』

「っ」

心臓が鳴った。頭の中を変な、妙にドロドロした衝動……いや、感情が駆け巡る。

( また来た…… )

昨日の昼辺りからずっとこうだった。スバルが他の女子と仲良さ気に会話したりしているのを見ると、必ずこうなる。

何となく、『嫉妬』という感情だというのは分かる。テレビとか本とかで良く出てくる感情だと。

ただ、何か違う気がするのだ。もっと、更に黒くてドロドロした、自分でも不快になるくらいの何かなのだ。  
と、

( 引いた )

消えた。視界からスバル達を外したからかもしれない。

( 何なんだろう、これ )

疑問が浮かぶ。そんな状態で歩いてしまったからだろうか、誰かにぶつかってしまった。

「あっ、っ、ごめんなさい！」

「……ああ、いえいえ。お気になさらず。前方を見ていなかった私

にも問題はあるのですから」

そうやって人当たりの良さそうな笑みを浮かべている人物に何度も謝りつつ、キクリはその姿を一望した。

黒を基調とした服に身を纏った、いかにも『紳士』といった風貌の男だった。シルクハットのような帽子の下には、ブロンドの長髪が見えている。

彫りの深い顔立ちから察するに、外国人……だろうか？

「……どうかいたしましたか？」

「え？ あ、いえ！ 何も……」

そうやって呆然とした様子で思考していると、その紳士が心配そうに訊ねてきた。慌ててキクリは首を振った。

「そうですか。それはよかったです」

また人当たりの良さそうな笑みを浮かべる紳士。キクリは頷きつつも『流暢な二ホン語だなあ』とか考えていた。

すると紳士は手をおもむろにキクリの頭に置いてこう言った。

「礼儀がなっていますね。その歳で素晴らしいです。あなたのような方がいれば、この国も安泰でしょう」

「え？ あ、は、はい！ ありがとうございます……」

突然のことにつらたえるキクリ。紳士は「失礼」と呟き、悠然と歩き出す。キクリはその姿を呆然と見ていた。

(何か、凄い。漫画とかでしか見たことないよ、ああいう人)

少し感動した様子だった。

……そんな様子だったから、気が付かなかったのだろう。

さきほどの紳士が、自分の頭に手を置く際、歩き去る際、不気味に微笑んでいたことに。

受付は生徒会室にあった。

偶然前を通りかかったキザマロとゴン太にパンフレットを借りたり、今度は『生徒会室ってどこだっけ?』状態になったりして随分時間を喰ってしまった感じだが、それでも早過ぎるくらいの時間に受付に行った。

とりあえず、今日七組目だそうだ。

「もっと気の早い人達が十二人もいるとはね」

「ほらね、やっぱり私達は早過ぎじゃなかったんだよ」

そんな会話を行いつつ中庭を歩き回る二人。この二人はかなり有名なため、「あ、見て見て、星河くんだ」だの「見るよ、ミソラちゃんだぜ」だのと至るところから声上がる。もう慣れたので二人

とも全く気にしていないが。

「……どうする？ 射的とかは混んでるし、屋台とかはそれ以上に混んでるけど」

「並んじゃおうよ。並んで待つのが祭の醍醐味だよ」

「それはなんとなく分かる」

肯定しつつ、『ならリンゴ飴の屋台に並ぼう』と提案するスバル。ミソラも賛成し、二、三十人はいそうな列の最後尾に並ぶ。そんな折であった。

「おー、スバルにミソラじゃないか。何だ、デートか？」

背後から聞き慣れた声が響いた。

「暁さん」

「え、その、……そう見えますか？」

「見える見える」

サテラポリスのエース、暁シドウが微笑ましそうな表情でそこに立っていた。……一人で。

スバルはキョトンとした様子で、

「……えっと、一人でどうしたんですか？ こーリンゴ飴の屋台ですよ？ うまい棒は校内の駄菓子屋にありますよ？」

「さらっと一人でとか言わない。……ていつか、お前俺がうまい棒しか食べないかと思ってない？」

「まあ」

「そうなのかよ」

愕然とするシドウ。冷静に考えればそんなことないと分かるはずなのだが、普段目の前であまりにも食べ過ぎているから、こんな誤解が生まれたのだろうか。

シドウは必死に弁明する。

「お前な、うまい棒だけ食べて生きていくとか　そりゃあできれば嬉しいけど　普通に考えて無理だろ。だから俺は普通の食べ物も食べます」

「そうなんですか」

そうなんです、とシドウは呟いた。そのやり取りを微笑み混じりに眺めていたミソラはふと訊ねる。

「それにしても、何で一人なんですか？　クインティアさんは？」

途端、シドウの顔が若干曇った。

「……クインティア、な。うん。ジャックの様子見に行った」

何故か愛称の『ティア』で呼ばないシドウ。しかしスバルはその変化に気が付かない。

「そんなんですか。あー、入れ違いだったんだね僕たち」

「そうみたいだね……。何かありました？」

「いや、別に？」

訳知り顔のミソラが訊ねると、シドウは即座に否定した。早過ぎる否定が逆に「何かあったこと」を肯定するということを、彼はしらない。

「そうですか。……。まあ私達が口を挟むことではないですよ。とりあえず頑張ってください」

「？ 頑張ってください」

「……。何かこう、胸にチクツとくる言い方だな。……。まあ、ありがとう」

若干沈んだ表情のシドウは、「じゃあ、邪魔しちゃ悪いから」と去っていった。

「……暁さん、どうしたんだろうっね？」

「ちゅあ？」

ミソラはとりあえずしらばっくれた。

第61話：英国紳士（後書き）

何があつたかはご想像にお任せ

## 第62話：後夜祭

『皆様、たった今、夕凧中学校の文化祭が終了致しました。しかし、まだ後夜祭が残っています。まだ満足できていない、体力が有り余っている……そういう方は是非残って楽しんでいってください。つきましては』

来た来た来た来た来たあつ！

現在時刻午後六時。文化祭が終わり、後夜祭が始まるつかという時、ミソラは（脳内で）踊りまくっていた。待ちに待った時がやってきたのだ。当然だろう。

スバルくとフォークダンスだ！

後夜祭の初めに行われるこのフォークダンスは、毎年エントリー数が五十組を超えるほど人気のある催しだ。

グラウンドの中心で燃え盛る炎の周りに、各組がそれぞれの組の邪魔にならないように散在して踊るのだが、やはり素人の数が多く、しかもエントリー数も多いため、大体三分を過ぎた辺りで互いの組が邪魔しあってグダグダになるのが通例だ。

エントリーしていない人達は、そのグダグダ感を見て面白がったり、その中でも上手く踊れている組を眺めて感心したりするので、エントリーしている人もしていない人もしつかりと楽しめるようになっていく。

ミソラは（おそらくグダグダになる方になるだろうが）そのフォークダンスを全力で（色々な意味で）楽しもうとしている。

そんな彼女の気持ち伝わっているのか、スバルも結構やる気だった。

「ミソラちゃん、さっきネットでフォークダンスの動画落としたんだけどさ、見る？」

「あ、見る見る」

訊かれて、即座に近寄ってスバルのハンターV Gを覗き込んだ。すぐに動画が再生され、外国のパーティーらしき映像が流れる。やがて司会者の合図と同時にダンスが始まり、何十組といる男女の中の一組がズームされた。実になめらかな動作で踊っている。

「へえ、こんな風にやるんだね」

「うん。……それと、凄い密着してるね」

呟いて、自分で頬を赤らめるミソラ。次いで、動画の二人組が自分とスバルだった場合を考え、更に赤くなる。

五分ほど経って、動画が終了した。直後、校内にアナウンスが流れる。フォークダンスがもう少しで始まるらしい。

「……じゃ、行くっか」

「へっ」

『はじめてください』

他の生徒達より一段高い位置に佇む文化部部长がそう告げると同時に、コミカルさとノスタルジックさが混在したような妙な曲が流れはじめる。エントリーした全七十三組（過去最高記録だそうだ）は、『選曲ミスだろ』とツツコミたくなる衝動をなんとか抑え、踊りはじめる。はじめて踊る組やあまり踊れない組は、数名のダンス上級者らしき人物の踊り方を真似てどうにかそれっぽく踊っていた。ミソラ達もその内の一組だった。

「……やっぱ、あんな付け焼き刃じゃどうにもなんなかったね」

「うん。ていうか、喋らずにあの人達の真似しよう。結構キツイ」

「了解」

言われてミソラは、ちらりと視線を横に向ける。そこで踊っているダンス上級者らしき女性の動きを、日ごろのバトルで鍛えている動体視力と学習能力を用いて瞬時にトレースし、実践する。スバルも同様に、男性の動きをトレースして実践している。おかげで意外と上手くできてはいるが、精神的にはもう結構キていた。

これ後何分くらい続くの……ってうわっ!?

一瞬別のことを考え、トレースが遅れた。結果、しっかりとトレースしていたスバルに不意打ち気味に引っ張られ、その胸板に激突する。

「ボーツとしない」

「ゴメン」

短く謝罪し、素早く動きを合わせる。やがて、手を繋いで前進したりスバルの手を軸にして回ったり、何にせよ、ダンスはパートナー同士が特に密着する段階に移行した。

この段階になった途端、周りの明らかに素人の組がグダグダになっていった。他の組とぶつかったり、収拾がつかないようになりと、脱落者が続出する。そんな中でミソラ達は生き残り、どうにか踊れている。もうかなりいっぱいいっぱいだが。

うわ、顔近っ！

踊っている過程で互いの顔が最も接近する段階に入った。少しでも前に傾けばくっつきそうな距離。瞬間に昨日の朝の事を思い出し、頬が紅潮する。

……しかし、昨日のように逃げ出したくはならなかった。

ちよっとキツイけど、……ずっと続いたらいいのになあ、この時間。

……あ、いや、でもやっぱり終わってほしいかも。

終わったら、言いたいことがあるし。

「痛っ」

「あ、ゴメン」

集中を欠いたため、スバルの足を踏んでしまった。

「はあ。自分で提案しといてなんだけど……やっぱり妬けるわね」

ルナは溜め息をつきながら、グダグダになりつつある催しを眺めていた。

正確には、ミソラとスバルをだが。

まあ、お似合いって言えばお似合いよね。認めたくはないけど。

ならばそんなこと思わなければいいだろうという話だが、あの光景を見ると、思わざるを得なかった。

そのくらい、あの二人は合っている。

何か事件がある度いつも隣にいたのよね、あの子。そのせいかしら。

常々戦う力はいらないとか思ってるけど、その点については素直に羨ましいわ。

苦笑するルナ。一瞬オヒュカスと電波変換した時のことを思い出し、首を振って頭から追い出す。あれはいい。格好が結構恥ずかしい。

しかもあの姿になった自分はスバル多大な迷惑をかけていたのだ。もしももう一度なれるチャンスがあるうが、絶対になりはしない。

それに、今はモードがいる。

ま、いいわ。とりあえず羨ましいってことで……………？

と、思考状態から脱して意識をグラウンドに向けたルナは、思わず首を傾げた。

フォークダンスの会場に、一人の女生徒が歩いていくのが見えただからだ。

暗くて良く見えないが、あのシルエットは

「花菱さん？」

フォークダンスは佳境に入っている。ミソラの想いも、それに比例するかのよう<sup>に</sup>高まっていく。

そうだ、言うんだ。ダンスが終わったら。

残り、約二十秒。

スバルさんに、言うんだ。

残り、約十五秒。

好きだって。

残り、約十秒。

「……花菱さん？」

そうやって一大決心をした瞬間、スバルが他の女子の名前を呟いた。一瞬ムツとするミソラだったが、次いで気付く。自分達の目の前に、花菱キクリが立っていた。

残り、約七秒。

何？ 何か様子がおかしい？

いつもはハキハキとした雰囲気の子が、妙に大人しい。いや、暗い？ とにかく、いつもと違っていた。俯いているし、何かあったのだろうか。……というか、何故彼女がここにいるのだろうか。気になりつつも踊り続ける自分達が少し笑える。

残り、約五秒。

どうしたんだろう？

だんだん心配になってきた。スバルも同じことを思っているのか、ちらちらと視線を向けている。どうしたのかと訊ねるべきだろうか？ 告白が後回しになってしまふのが少し悔しい。

残り、約三秒。

そこでキクリが顔を上げた。瞬間、二人揃ってギョツとする。彼女の瞳には、全く光が宿っていなかった。

残り、約一秒。

キクリが、悲壮感溢れる声で呟いた。

「私、何かもうダメだ」

直後、キクリを中心にして電波エネルギーの奔流が起こった。

第62話：後夜祭（後書き）

凄く展開を急いだ感がありますね。

次回からはお待ちかね（？）、バトルパートです。

第63話：人手（前書き）

読む前に一つ注意。

文章ひどいです

### 第63話：人手

二人が踊っているのを見ていたら、鼓動が酷く速くなった。頭の中は、あのドス黒い感情に支配されている気がする。そうしていたら、声が聴こえてきたんだ。

『いいの？ これで？』

何が？

私は思わず訊き返した。答えが返ってくるとは思わなかったけど、反射的にだ。

一応、返答はあった。

『あなた、あの男の子が好きなんでしょう？ あのままだと、あの女の子に取られてしまうわよ？』

……別に、構わないよ。

『嘘ね』

いやに早く返答がきた。私はそのどこから聴こえてくるのかも判らない『声』に対して、大きく反論する。

嘘じゃないよ！ 響さんなら別にいいかなっていつつも思ってたし、文句はないもん！

『なら、この感情は何なのかしら？』

そう返された瞬間、私の反論は止まった。『声』は続ける。

『本当に構わないと思っっているなら、本当にあの女の子ならいいと思っっているなら、この感情が　しかもこんなに強くなってあなたの中にあるわけないわよね？　それはつまり、あなたの本心は全くそう思っていないということよね？』

反論が、全くできない。

『素直になりなさい。認めなさい。想いをむりやり抑制しないで解き放って、その想いが赴くままに行動しなさい』

そう告げられて以降、『声』は聴こえなくなった。私は最後の言葉を反芻する。

解き放って、赴くままに。

気がついたら身体が動いていた。向かう先はおそらくダンスの会場。あの二人の踊っている場所。私は、見覚えのない生徒達の制止を無視し、歩を進める。

ダメだって。邪魔しちゃいけない。

思うが、歩みは止まらない。

いいんだよ。響さんなら、諦めだつてつくし！

やはり、歩みは止まらない。

やがて倒れ込んでいるペアを掻き分けて二人の前に立った。当然、

二人共キョトンとしている。でもダンスはやめない。そして身体が、顔が、凄く近い。

私は俯いた。頭の中が真っ黒になる。葛藤が生まれる。邪魔しちゃいけない。邪魔したい。正反対の思いが渦巻いている。

流れている妙な曲がもうすぐ終わりそうだ。そうやってこの時間が終わりに近づくにつれ、私の頭の中はますます黒くなっていく。

……もう、限界だった。

響さん。

私は顔を上げた。二人が驚いている。きっと、私今凄くひどい表情をしているんだ。

星河くん。

曲が、終わる。

「私、何かもうだめだ」

瞬間、私の意識は吹っ飛んだ。

「ッ!? 花菱さん!?!」

「どっつしたの!?!」

風が吹き荒れる。砂塵が舞う。悲鳴が飛び交う。そんな中、その中心と言ってもいい位置にいたスバルとミソラは、この騒ぎの正に中心に向かって叫んでいた。  
つまり、花菱キクリに。

おかしい話だった。

この騒ぎの元凶は膨大な電波エネルギーだ。発生源はキクリだ。しかし、彼女にはこんな それこそ十二神将クラスの電波エネルギーを操る術はないはずだ。キクリは、電波変換能力を持たないただの人間なのだから。

しかし、現に今、キクリからは異常なほどの電波エネルギーが生じている。

どうなっているのか、答えはとても簡単だった。

十二神将が、また何かしたんだ……！

そう心中で呟いた時には、スバル達は電波エネルギーが生み出した突風により吹き飛ばされていた。

『おいおいどうなってんだよこりゃあ……！』

ウォーロックは騒ぎから少し離れた位置で呆然と呟いていた。自身のオペレーター達が踊っているはずのグラウンドから膨大な

電波エネルギーが発生しているのだ、無理はない。

すぐさまスバルの元へ駆け付けようとするウォーロックだったが、その直前で気付いてしまった。

周囲に、何十何百もの数の電波ウイルスがのさばっている。

……いや、周囲だけではない。ウイルスの反応が学校全体に現れている。

『！？ どっから沸いて来やがった！』

臨戦体勢をとる。同時に数体のウイルスからの攻撃が一斉に飛んできた。地を這う衝撃を飛んでかわし、それを狙っていたかのように放たれるキャノンを爪で弾き落とす。その刹那、数十体もの鳥形ウイルスによる突進攻撃が彼を襲った。攻撃が終わった直後のため、反応は出来るが行動ができない。

やられる！ そう思った直後、

ウォーロックの周囲に火柱が立ち、鳥形に限らずその場にいた全ての電波ウイルスを焼き尽くしていた。

『……これは』

「よお、無事かウォーロック？」

次いで聴こえる男の声。火柱が消え、彼の眼前に現れたのは、真っ赤な身体 of 巨大な電波人間。

ゴン太とオックスが電波変換した姿である、オックス・ファイアだ。

「……ゴン太か」

「おっ」

軽く返事をするオックス・ファイア。ウォーロックは小さく礼を述べてから、

「……訊いても無駄だったのは判っちゃいるが一応訊く。……何が起きてやる？」

「判んねえ」

予想通りの返答だった。落胆するウォーロックだったが、数秒の後にオックス・ファイアが口を開いた。

「……判んねえが、中心は間違いなくあのグラウンドだ。行ってみれば判るかも」

『……だわな』

腰に手を当てるウォーロック。

グラウンドはスバルやミソラが参加したフォーケダダンスを行っている場所だ。ならば当然、彼らもそこにいるはず。

ちっ、しくったな。

後悔が押し寄せる。自分がここにいるのだから、当然スバルは電波変換ができない。この状況でそれは非常に危険だ。ミソラに気を使ってハンターV Gから離れたのが災いした。ハープもどこかで後悔していることだろう。

『……行くっきゃねえな』

小さく呟く。するとオックス・ファイアが両拳を合わせて、

「援護するぜ」

『おう、頼む』

ここは素直に了承した。正直、電波変換をしていない自分は多対一や遠距離戦闘に向いていない。その点、オックス・ファイアはその両方の戦闘が得意だし、慣れている。頼まない手はなかった。

グラウンドに視線を向ける。距離は大体百五十から二百メートル。そこまで離れているわけでもないが、混乱しきった生徒達や、おびただしい数の電波ウイルスが邪魔をして簡単にたどり着けそうもない。

しかし、険しい道の上ではあるが、進まないわけにはいかない。腹を括ったウォーロックは臨戦体勢をとりながら、叫ぶ。

『行くぜ！』

突風により吹き飛ばされ、天高く放り出されたスバルとミソラ。よく見てみると、百人近い数のフォークダンス参加者も一緒に飛んでいた。

……まずい。

救い出そうとして、電波変換するためにハンターV Gを構えるスバル。しかし直後に気がついた。ウォーロックがいない。

こんな時にどこ行ってるんだよ、バカ！

心中で相棒を非難しながらミソラに視線を向けるスバル。彼女もハーブがいないらしく、電波変換する様子がなかった。

「……どうするミソラちゃん!？」

「どうするって言われてもね……」

電波変換ができないのであれば、はっきり言って自分達はただの人間だ。この事態をどうにかする力などない。

そうしているうちに、重力に従ってどんどん落ちていく。このままだと自分達を含め、大勢の人が命を落としてしまう。

地上との距離が二十メートルまで縮まる。流石に死を覚悟したスバルは強く目をつぶり、

直後、強風と、ベッドに飛び込んだかのような柔らかい衝撃を感じた。

「？」

事態が飲み込めずに呆然とするスバル。ミソラや他の人たちも同様だ。やがて我に返った彼らは、自分達が置かれている状況を理解してぎょっとした。

空中に、浮いている。

「な、何だあ!?!」

近くにいた男が素っ頓狂な声を上げる。何なのかはこちらが訊きたいところだ。これは一体どうなっているのだ? 空中に浮いている……いや違う、ふかふかのベッドに寝っ転がっているような感覚がある。何故そんな感覚をなにもないはずの空中で感じるのだろうか。これではまるで、空気がクッションに変化したようでは

あ。

と、そこまで思考したスバルは、一つの結論にたどり着いた。

もしかして。 いたのだ、知り合いに。空気をクッションに変化させるという離れ業を行える者が一人。

元十二神将。錬金術アルケミーの使い手。

その名前は、

『よっ』

『スバル、ミソラ、大丈夫?』

「メルクリウス!」

あとシルフ、と付け加えるスバルたち。そのついでのような扱いに彼女は憤慨したが、メルクリウスに諫められて騒ぐのをやめる。

メルクリウスは溜め息をつきながら、

『いやあ、危なかったな。吹っ飛んでいくのこイツが見てなかった

「ら助けには来れなかった」

「ま、二人のことはダンスが始まってから遠くですうーっつと見てましたし、見逃すはずはありませんよ」

アハハっ、とシルフィーが笑う。ずっと見られていたという台詞に何かうすら寒いものを感じる二人だったが、とりあえずは礼を述べた。体勢を立て直す傍らで下方へ視線を向ける。砂塵にまみれて、グラウンドの状態は全く確認できない。

「……一つ訊くけど、メルクリウス、これ、どうなってるか判る？」

「……ああ」

問われて、メルクリウスが頷く。それはつまり、やはりこの事態は十二神将が関係しているということだ。

「……じゃあもう一つ。何か良い対処法はない？ 僕の友達が巻き込まれてるみたいなんだ」

「……ないことはないが……！？」

途端、メルクリウスが慌てた様子で顔を上げた。酷く苦々しい表情で、何故か学校の外に視線を向けている。何事か訊ねようとするとスバルだったが、その前にメルクリウスが口を開いた。

「……ヤバいな。アイツら、マジで一般人を巻き添えにしても任務を遂行する気らしい」

「？ どういう……」

『学校の外周、見てみる』

促され、訝しがりながらも眺めるスバル。瞬間に、身体が硬直する。隣では、同じように“ソレ”を見たミソラが信じられないといった表情で呆然としていた。

「……なんだよ、アレ」

スバルは思わず誰となしに訊ねた。問いに答える者はいない。一般人はともかく、ミソラやムーの電波体の二人は、スバルが答えを知っているのを知っているし、事実その通りだからだ。だから、答える必要はない。

返答がなくとも、スバルには答えが導き出せる。

「……何なんだよ。あのエランダの軍勢は……！」

正確には、戦闘用に特化エランダだ。

学校の外周に、おびただしい数のエランダが佇んでいた。

総勢……何体いるのだろうか？ 数える気が起きない。少なくとも、百や二百では足りないことは確かだ。

『……圧倒的に人手が足りてませんね。アイツらもそうですけど、……こちらはもう既に対処が始まっていますが、校内にも相当数のウィルスがいますし、それに』

『これを行った元凶もどつかにいる……と。……どうするスバル？』

「………何で僕に訊くのさ？」

不意打ち気味に訊ねられ、若干困惑した様子で返すスバル。するとメルクリウスはあっけらかんと、

『ぶつちやけ俺らバカだからさ。この最悪な状況を打破する案なんざ浮かばねえんだ』

「……………ああそつか」

『一緒にしないでくださいよ！ 納得しないでくださいよ！』

シルフィーが憤慨した様子で抗議するが、全員無視した。

どうするか、ね。

思考しつつ、学校全体を見回すスバル。すると校内の一角から火柱が上がるのを目にした。あれはおそらく、オックス・ファイアのものだろう。

ゴン太がもう対処し始めてる。多分暁さん辺りから指示をもらったんだろうけど……………助かるな。ゴン太の能力なら、ウイルスだけをピンポイントで狙える。

少し安心する。そしておそらく、ここからは全く見えないが、ジヤックやクインティアもどこかで対処に当たっているのだろう。これなら、校内はまず安全だ。

……………問題は、エランドだよな。

次いで外周に視線を向ける。数が多いのももちろん問題ではあるが、それよりも、一体一体の強さが電波ウイルスより数段強いのが

問題なのだ。いずれ来るであろうサテラポリスの警備ウィザードはまず敵わない。

となるとやはりあちらにも、……最低でも四人は人数を割かなければならないのだが、ここでこちらの人手不足の問題が浮上してくる。

自分やミソラはウィザードが手持ちにいないため電波変換が行えない。指揮に当たっているであろうシドウは、……まだ電波変換を行える状態ではないし、ゴン太やジャックたちも手を離せないだろう。

そうになると、現在動けるのは、ここにいるメルクリウスとシルフィーだけということになる。ツカサもいてくれれば心強いのだが、今日来ているのかどうかの確認はとれていない。

マズイな。

本当に人手が足りない。しかもこれは、自分とミソラが明らかに足を引っ張っている状態だ。

十二神将もどこかにいるかもしれないのに。

このままでは、何もできない。

どうすればー！

## 第64話：打開策

『エコーノイズ！』

セイレーンの持つ豎琴から音波が放たれた。その音波は周囲の様々な物質に衝突、反射し、彼女たちを囲む電波ウイルスに襲いかかる。そうして内部を超高速で振動させられたウイルスたちは、悲鳴を上げることすら叶わず消滅した。

『お疲れ様』

『……結構疲れますね。一般の方に当たらないよう計算して反射させるのって』

『そうね。……意外に不便よね、音の能力って』

セイレーンの傍らに浮いているハープがうんざりしたように呟く。周囲に散在していた一般人達に校舎の中へ避難するよう促し、やがて身体を大きく伸ばしているセイレーンに向かって一言訊ねる。

『調子はどつ？』

『すごくる良いです。コアにも異常はありませんし、完璧です』

『そつ』

安心したように目をつぶるハープ。正直不安だったのだ。

セイレーンが触媒にしているエランドは、《デュアル》の際に故障している。構造を把握しているメルクリウスが一応修理してくれ

だが、一度壊れたというのはかなりの不安要素だ。故に何か不具合がないか心配していたのだが、どうやら大丈夫そうだった。

ハープは目を開けて、

『それにしても、何が起きているのかしらね』

『判りませんが……あの人たちが関係しているのは間違いありませんね』

セイレーンの声が小さくなる。既に離反したとはいえ、元々は自分もあちら側だったのだ。申し訳ない気分になっているのだろう。そんな彼女に、ハープは頭突きをかました。

『あ痛っ』

突然の出来事に困惑して目を白黒させるセイレーン。ハープは呆れたような声で、

『いい加減切り替えなさい。あなたはもう私たちの仲間なの。ムーの奴らが何をしようが、あなたが気に病む必要はないの』

判った？　と言いつつ踵を返すハープ。セイレーンはしばしその後ろ姿を眺めて、やがて力強く返事をした。

『……それより、早くミソラに合流しないといけないわね』

『そうですね。場所はグラウンドで間違いないんですけど　　と』

セイレーンがハープを抱き抱えて高く跳躍する。直後、つい今ま

で自分たちがいた場所が砲弾によって爆破された。ウイルスからの遠距離攻撃だ。

『……ウイルスが多すぎて、中々進めないんですよ』

『ええ。それに、肝心のグラウンドも砂埃まみれで状態が見えないし』

言葉を交わしつつ、地面に着地する。周囲にはいつの間にもやたらと勢のウイルスがひしめいていた。

コイツらも、一体どうやってこんなに大量発生しているのよ溜め息をつくハープ。セイレーンも珍しくゲソツとした表情になっている。

早くミソラのところに行かなきゃならないっていうのに……！

「アシッド、頼む！」

『了解！』

アシッドの爪が一度に数体のウイルスを切り裂き消滅させる。それを眺めながらシドウは、こんな非常時に電波変換をできない自分

にとてつもない歯痒さを感じていた。

シドウも元々は電波変換ができた。いや、今はもうできないというわけではないのだが、やろうと思えばもちろんできるのだが、身体がついていかないのだ。

それというのも、二年前のディーラーのアジトで起きた事件が原因だった。

あの日シドウは、本来なら電波体にも人体にも悪影響を与えるノイズを制御装置も使用せずに無理矢理その身に宿し（正確には宿らされたのだが）、ジョーカーの自爆に巻き込まれた。それだけならまだ良かったのだが、決定的なのは、ジョーカーの自爆の影響でノイズまみれになったアジトに長時間生身の状態で放置されていたという事だった。

その結果身体に異常をきたし、電波変換できない状態になってしまった。

その程度はあまりに酷く、退院後に一度電波変換を試してみたのだが、直後に意識不明になり再び入院することとなった。

ようするに、シドウはもう戦えないのだ。サテラポリスやWAXAの者たちはどうにかしようと思行錯誤を重ねているようだが、成功した試しはない。

まったく。無茶はするもんじゃないなあ。

アシッドに指揮を出しつつ自嘲する。今や自分にできるのは作戦指揮をとることだけだ。

……しかしそれも、この状況では全くできていない。

『シドウ、後ろ！』

「……」

アシッドの叫びに反応しシドウは横に跳ぶ。直後、真横を鳥形のウイルスが突っ切った。アシッドはそれを撃退し、シドウに駆け寄る。

『無事ですか！？』

「ああ無傷だよ。……それにしても、とんでもない数だよなコイツら」

『はい。……それと、どうやら学校の外にも何かいるようです。総数は……555』

「何でぞろ目なのかっていうのはこの際置いておくとして、……ヤバいな。校内にもウイルスが四桁単位でいるだろうに」

絶対的に人手が足りていない。こちらの戦闘メンバーの数など、両手の指で数えても余りが出る程度しかないのに、敵は千体以上それに、おそらく十二神将もどこかにいるだろう。

数で圧してくるとか、狡い手を……！ どうすりゃいいんだ。

最良の指揮というものが浮かばない。校内のウイルス、校外の何か、十二神将、これらに対処する術がまるで浮かばない。

アシッドがウイルスを消滅させる。自分は一般人を避難させる。そうしながら対処法をひたすら思考し、

ハンターV.Gにメールが届いた。

ハーブとセイレーンは最大の危機を迎えていた。

一般人もろともウイルスに囲まれてしまったのだ。これでは下手に避けることも攻撃もできない。さらに、

「ね、ねえ、どうしたのよ。あんな奴ら早く倒してよ」

『なら、引つ張らないでくれるかしら！』

錯乱した一般人たちが邪魔をして身動きすらとれないのだ。このままでは、ウイルスが一斉に攻撃でもしてきた場合に対処が

『ヤバ………!!』

そういう嫌な予感みたいなのはほぼ100%の確率で的中するもので、メットリオが一斉に鶴橋を振り上げたのだ。すぐにシヨックウェーブがくる。いくら一発一発の威力が弱いとはいえ、数十体から同時に攻撃されれば一たまりもない。

「あああつ！ は、早く何とかしてよおつ！」

『だったら手を離しなさいって！ こら、抱き着くな！』

一般人がより一層錯乱する。しがみつかれてもう口しか動かさせない。

マズイ、やられる！

メットリオの鶴橋が振り下ろされる。地面に当たれば衝撃波が放たれて自分達を吹っ飛ばしてしまう。

流石のハープも死を覚悟した

その時である。

「バトルカード、ワイドソード！」

自分達を取り囲んでいた電波ウイルスが軒並み一刀両断された。

『……………？』

呆然とする一同。すると、メットリオのデータの残骸を掻き分けるようにして、彼らが現れた。

「よっ、響のウィザード」

雛森ゆたかとウィザード、アイゼン。二人が若干恥ずかしそうに立っていた。

ゆたかは何か興奮した様子で、

「……………なあなあアイゼン。今の俺達ちよっとカッコよくね？」

『そつだなご主人。ヒーローっぽい登場だった』

ひゃっほう！ と、ゆたかは今にも踊りだしそんな勢いではしゃいでいる。それをやや拍子抜けした様子で見っていたハープは、困惑気味に訊ねる。

『……何であなたたちが？』

「ん？ はは、俺達だけじゃないぜ。周りよく見てみるよ」

促され、視線をぐるっと一周させる。確かに、他に十組ほどの人間とウィザードがいた。

「他の場所にもいるぜ。藤枝や、初日のバトルウィザード大会に出場してたやつとかさ」

『……何で？ 危険なのに』

意味が判らないとでも言いたげな表情で再び訊ねるハープ。それに対しゆたかは、胸を張って答えた。

「人手が足りてないんだろ？ だったら手伝うだろ普通。ただのウィルスくらいなら、ただのバトルウィザードでも相手できるしな」

「なるほどな。その発想はなかった」

メールの内容を確認したシドウは、感心半分呆れ半分といった様子で呟いた。

差出人は星河スバル。

こんな時に一体何事かと思ったが、その内容を見て目から鱗が落

ちた。

『バトルウィザード持ちのオペレーターに手伝ってもらいましょう』

それは確かに名案だった。

元々ウィザード……特にバトルウィザードは、こういうウィルスが引き起こした事態を収束させることを第一の目的として設定し、制作されたのだから。

これなら校内の対処がすごい楽になるし、校外の何かとか十  
二神将にも人員を割ける！

早速ジャックに連絡を入れる。校外の対処に回るよう告げて、次の連絡相手を考える。ゴン太はウィルスの駆逐に最適な能力を持っているのでそのままにしておくとして……

「……アイツか」

かなり気まずい空気になりそうだが、……今はそんなことは言っていない。シドウは腹を括り、彼女に連絡を入れる。

『……何？』

いつになく冷たいクインティアの声に若干怯むシドウ。しかしすぐに立て直して用件を告げた。

クインティアは意味が判らないといった声色で、

『……何で？ 一般の人達を見捨てろって言うの？』

「いや、だから。一般の人の中でバトルウィザード持ちの人にも協

力してもらったよ。それなら人手も足りるし」

『サテラポリスが、護るべき一般人に協力を仰ぐの？』

痛いところをつかれた。

シドウは思わず黙り、クインティアは呆れた声で続ける。

『……確かに良い案だとは思っわ。対処もかなり楽になるでしょうね。でも、いくらウイルス相手と言ってもこの数なのよ？ 降りかかる危険が増すことになるわ。それでいいの？』

「……いいわけあるか」

『なら』

「でもそう言っていられる段階はとっくに過ぎてる」

澱みなく告げると、今度はクインティアの方が黙った。

「そんなの俺だって嫌だし、スバルだって、他の奴らだって嫌に決まってる。でももうそれしか手段は残っていないんだ。それに……」

僅かに視線を横に向ける。誰かからの連絡を受けたとおぼしき生徒とウィザードの数组がウイルスを攻撃していた。

「……ここはアイツらの学校だ。アイツらだって自分達の手で護りたいと思ってるだろ」

『……でも』

クインティアの声から未だ躊躇いの色が窺える。シドウは溜め息をつくと半笑いの状態で、

「……お前なんだかんだで優しいしな、一般人はほっとけないよなよし、判った。お前はそのまま校内の対策に当たっといってくれ。校外の奴には俺とアシッドが対処する」

『……はあ！？ いや、ちょっと……』

その提案は予想外だったのか、キャラに合わない高い声を出すクインティア。シドウは気にせず、次の言葉を述べる。

「おいおい何だその反応？ 俺のアシッドは普通のバトルウィザードより何倍も強いんだぞ？ 負けるわけないさ」

『いや、そうじゃなくて……』

「あ、もしかして俺の心配してくれてる？ やっぱ優しいな、ティア」

『なんつ……！』

「そんじゃ、そつちも頑張れ」

怯ませた隙に通信を切る。このまま話してはいつまで経っても終わらない。

ふと振り返ると、周囲のウィルスを全て撃破したらしいアシッドが、呆れた様子で控えていた。

アシッドはやはり呆れた様子で、

『あまり、過度な期待を抱かないようにしていただけですか？』

「ははは、期待っつーか信頼だよ」

シドウが申し訳なさ半分で笑いつつ告げる。それに対してアシッドが少し照れくさそうにしていると、おもむろに裏門の方を向いた。

「ま、とりあえず行こうぜ。あんだだけ見栄張ったんだからちゃんとやらないと」

『私は巻き込まれた感じですけどねど』

「それ言うなよ」

「上手く、いつてるみたいだね」

上空から校内全体を見渡しながらスバルは呟いた。

自分が立案した『一般人にも手伝ってもらおう』によって、この絶望的な状況が少しでもマシになったことを誇らしく思う反面、こんなことに巻き込んでしまった上に手伝わせてしまっていることを申し訳なく思っている様子だった。

「それでもやっぱり足りてないよ。早く私達も電波変換しないと…」

…」

「……早く来いよロック達……」

慌てた様子で校内を見下ろすスバル。校舎や人やウイルスが邪魔してそれらしき姿は確認できない。連絡を入れた何名かに、ウォーロックかハーブを見かけたら自分達の居場所を伝えるよう頼んでいるが、どうなっているのだろうか。

落胆するスバルとミソラ。そんな二人に、百人以上の人間を風だけで校舎の屋上に運ぶという荒業な任務を見事完遂したシルフィーが訊ねた。

『……はあ、はあ、……ねえ、本当にメルクリウス様をエランドの方に送っちゃって良かったの？ ぶっちゃけ、あなた達の護衛役ならメルクリウス様の方が適任だと思うんだけど……』

そう、シルフィーのいう通り、メルクリウスはエランド討伐の役割を与えられていた。

元は十二神将だけあって実力は折り紙つきで、電波変換のできないスバル達を十二神将が襲ってきた場合の護衛役としては申し分ないはずなのだが、何故かスバルはその任につかせた。

二人は遠い目をしながら、

「うん、まあ、確かに適任なんだけど……適任すぎて逆に怖いっていうか……」

「もしここで十二神将同士の戦闘なんて起こったら、私達ひとたりもないし……」

『あー……』

非常に説得力のある説明だった。

「……にしても、グラウンドの砂塵、全然晴れないね」

『……もしかしたら、見えないけど、あそこにもウィルスがいるのかも。それで暴れまくってるから次々と舞い上がって晴れない』

「花菱さん、大丈夫かな」

スバルが心底心配そうな表情で呟く。シルフィーは少しムツとしたようだったが、ミソラはここで嫉妬するほど心は狭くない。同じように心配している。

シルフィーは心底呆れた様子で、

『……心配なら、私が晴らそうか？』

「頼むよ」

『めっちゃ早い返答ですね。いいけどさ』

言いつつ、顔の半分以上を覆い隠しているフードをとった。現れたまだあどけなさの抜けない子供のような顔を下方に向け、目を細める。

両手を同じく下方へ向け、周囲の空気を集束させる。そしてそれが一定の量集まったところで、

一気に、解き放つ。

ゴウツー！と、台風クラスの暴風が撒き散らされた。スバルとミソラは、メルクリウスが作った空気のクッションから落ちないよ

う必死にしがみつく。

手加減が欲しかった！

叫ぼうとするが、風が強すぎて声にならない。

やがて風が止み、心臓がかつてない速度で鼓動を打っている二人は、全く同タイミングで怒鳴った。

「殺す気か！！」

「……………」

しかしシルフィーが何の反応も示さない。無視かよ！ と憤慨しそうになる二人だったが、直後に気付く。シルフィーの表情が、不安と焦燥と恐怖の入り混じったものになっていた。

「？」「」

視線を下方に向けたまま硬直するシルフィーにつられるようにして俯く二人。

……………結果、それを見た。

「何、あれ…………？」

ミソラが呆然と呟いた。スバルには答えることはできない。シルフィーならば判るかもしれないが、あちらもあちらで自失している様子だ。

……………予想通り、かなりの数の電波ウイルスがいた。砂塵が晴れない理由はやはりウイルスだったのだ。

しかし三人ともそれに驚いたわけではない。

彼らが呆然とするほど驚いたのは、あの、ウイルスなどより遙かに巨大な物体を見たからに他ならない。

つい数分前までスバルとミソラが踊っていた場所。グラウンドの中央。花菱キクりに異変が起きた地点。そこに、本来ならキクリが佇んでいなければおかしい場所に、それは出現していた。

「……………何なんだよ」

校舎一つ分はありそうな規模の薔薇が、月の光を浴びて不気味に輝いていた。

## 第65話：栄養源（前書き）

活動報告にも書きましたが、文字数約一万です。気をつけて下さい。

それと、10万PV越えました。ありがとうございます！

## 第65話：栄養源

『敵に回すと堪んねえなコイツら』

メルクリウスは鎌の形態へと変化したケリユケイオンを構えつつ  
呟いた。

スバルに言われて外周のエランド達の相手をする事になったの  
だが、如何せん数が多い上に全体中途半端に強いため、ハツキリ言  
って苦戦していた。

曲がりなりにも元十二神将なんだぜ、俺。こんな雑兵ごとき  
にこの様はないだろ。

自らを奮い立たせるために心中でそんなことを呟く。しかしそこ  
で、彼はあることに気が付いた。

そうだ、俺、十二神将じゃん。

エランドから光線が放たれる。メルクリウスはそれをかわして適  
当に反撃を加えながら思考する。

そもそもコイツら、俺達の命令で動く便利な駒みたいな奴ら  
だったんだよな。……てことはつまり。

空気を足場に変換して佇むメルクリウス。自分の推測が正しけれ  
ば、エランドの脅威は確実に取り除ける。

そして彼は、その博打のごとき作戦を開始した。

『活動を止めるエランド！』

直後、辺り一面にひしめいていたエランドが一斉に停止した。見せる相手もいないのに、腰に手を当てる誇らしげに胸を張る。作戦は成功だった。

メルクリウスは、既に抜けたとはいえ十二神将だ。大した知能を持ち合わせていないエランドにとって、未だに彼は絶対的な権力を持った上司と認識されているだろう。

ならば簡単だ。上司が命令すれば、部下が従うのは自明の理。結果として、活動を止めろという命令を遂行したエランドは、その機能を停止させたのである。

上手いこといったな。この調子で外周全部回るか？

それなら、人手不足のサテラポリス達も大助かりだろう。

メルクリウスは一応命令が行き届いていない個体がないか確認して、飛び立つ。

……はずだった。

『 ツ！？ 』

切り裂かれる左腕。咄嗟に引いたため切断には至っていないが、三分の程度の深い傷になっている。慌てて振り返ると、そこには信じられない光景が広がっていた。

忠実に命令を遂行するあのエランドが、十二神将の命令に背いて活動を再開していたのだ。

メルクリウスはただ混乱する。

おい嘘だろ。何で聞かない。俺の命令だけをピンポイントで聞かなくさせるような複雑なプログラム、エランドには組み込めないはずだろ。

技術者として、それだけは自信を持って言える。そもそもエランドは、まだムーの民が健在だった頃から現在に到るまで自分がメンテナンスし続けてきたのだ。構造も理論も何もかも、理解し尽くしている。

だからこそエランドの限界も知っているし、プログラムの追加だって簡単なもの以外は実質不可能なものも知っている。ならば、これは一体どうなっている？

『くっそ……！ ライフリッパー！』

飛び掛かってくるエランド十数体を迎撃しながら、ひたすら考える。何か、何かカラクリがあるはずなのだ。

『ッ！？』

その隙に一体のエランドが彼の背中にしがみついた。振り払おうともがくも叶わず、やがてエランドのコアが小刻みに点滅を始める。この点滅パターンの意味を当然彼は熟知している。

『自爆プログラム！？』

そしてだからこそ、焦燥するのだ。

この自爆プログラムは、スバル討伐の任務が課せられた際にゼウスの命でメルクリウスが追加した、エランドの新プログラムだ。

このプログラムは非常に簡単で、かつ軽いデータ量しかないので、容易に組み込むことができた。

しかし簡単なプログラムだというなら威力も大したことはないのでは？　と思うだろうが、それは大きな間違いだ。

自爆は、身体中に流れる電波エネルギーを全てコアに集束し凝縮して、一気に解き放つことで行使できる。実験を兼ねて一度改造したウイルスで試してみたが、そこには驚くべき結果が弾き出されていた。

なんと、アテナが最初期に創り上げた電波障壁（現在のものと比較すると硬度自体はあまり大したことはないが、それでも相当な防御力を誇る）を粉碎したのだ。電波ウイルス程度の少量のエネルギーで、だ。

ならばウイルスより遥かに強力なエランドが自爆すればどうなるか、実験するまでもなかった。

『こりやマズイな……』

これは、本当に命の危険がある。何せ至近距離どころか密着した状態での爆発だ。いくらメルクリウスでもただでは済まない。

どうにかこの拘束から抜け出そうとさきほどにも増して必死にもがくが、やはりエランドは離れない。異常な力だ。人間で言うのなら火事場のバカ力というやつだろうか。

自爆の時間はもう迫ってきている。それでももがき続けるメルクリウスだったが、そこで、“ソレ”を視界に捉えた。

エランドの頭頂部、特に装飾も強化もしていない部分、強いて特徴を言うならば、人工知能が搭載された人間で言うなら脳に当たる機能に直結する部分に、見慣れない模様がある。

見方によれば星にも見える、そんな烙印のような模様が

『ッ』

そこからの行動は迅速だった。

斬られた左腕を無理矢理動かし、自身の背中に宛がう。そこでアルケミーを発動し、激痛を覚悟で背中の一部を犠牲にして太め棘を生成、エランドを刺し貫いた。

エランドは自爆前に破壊され爆発し、密着状態だったため相応の衝撃がメルクリウスを襲うがどうにか耐え、更に上空に上がった。

『ケリュケイオン・モードグングニル！』

次いで、ケリュケイオンを最強形態であるグングニルにモードチェンジし、足場に変換した空気に立つ。そのまま足場に立たせる形で固定したケリュケイオンの矛先にエネルギーを集中させた。

『……これで街が壊れても、アイツらのせいってことにすりゃ俺は咎められねえよな』

さらっととんでもないことを言っただけ、片手でケリュケイオンを振りかぶる。そして、

『オーデインズレイド！！』

思い切り、ケリュケイオンを投擲した。

……音がしなかったような、そんな錯覚さえあった。それほどまでに強大な威力を持ったそれは、エランド数十体と、……学校の外壁や木々や更には道路までもを巻き込んで大爆発を巻き起こした。

『うわ、我ながらとんでもねえ威力』

自分でやっておいてゾツとするメルクリウス。見ると、ケリュケイオンを中心に半径三十m弱のクレーターができていた。これでも

割とセーブした方なのだが、まだ強かっただろうか。とりあえず、スバル達にバレたら折檻は必至だ。

……しかし、申し訳なくは思うのだが、ハッキリ言ってそんなことは気にしてられない。地上に降りてケリユケイオンを回収したメルクリウスは心底そう思う。

足元に転がるエランドの頭部、正確には頭頂部の烙印を眺め、表情が変わった。

### 上位命令印。

上位命令印とは、十二神将の中でも『五本指』しか使用することの出来ない烙印のことで、エランドが敵に洗脳された場合のことを想定して、何にしても命令の遂行を優先させるよう、人工知能に細工するためのものだ。

烙印が刻まれている間は、たとえ刻んだ本人である『五本指』であろうと命令は聞かず、刻まれる際に組み込まれたプログラムの通りにしか動かない。故に、さきほどメルクリウスの命令を聞かなかったのだ（ちなみにさきほど止まったのは、上司からの命令を拒否するまでのラグのようなものだ）。

この烙印を解けるのはもちろん『五本指』のみ。当然、ただの十二神将であるメルクリウスには解くことは出来ない。

『……………』

そして、だ。この烙印が刻まれているということは、こちらにあって最悪の展開も予想されるということだった。

『五本指』が、来ているのかもしれない。

そうなれば、まず勝ち目はない。

ゼウスやアテナは……まあないにしても、アレスやポセイドン、  
ユノは来ている可能性がある。そしてその三人の實力は、……ハッ  
キリ言つて、《ディーヴァスタイル》になったハープ・ノートより  
上だ。当然、メルクリウスよりも。

『……………』

だが、来ているにしても一人だろう。そして一人ならば、ポリシ  
ーに反するが不意打ちで倒せないこともない。

かなりのリスクがあるが、やるしかない。スバルに相手させるわ  
けにはいけない。

そう決意したメルクリウスは、探索のため飛び立った。

グラウンドに現れた巨大な薔薇を見た瞬間、スバル達は絶句した。  
完全に規格外のサイズの薔薇に対する驚愕や、突然現れたことに  
対する戸惑いが心を支配しているからだ。当然だ。この状況なら、  
誰でも大方同じような反応をするだろう。

……あの薔薇が何なのか知らない者に限つての話だが。

「シルフ!？」

不意にミソラが叫んだ。完全に薔薇に気を取られていたスバルは  
その声に驚き、反射的にシルフィーに視線を向ける。そこで、彼は

目を見開いた。

あの気の強いシルフィーが、一目見て判るほどに震えている。メルクリウスが襲来したあの時以上の、異常な震えだった。スバルは彼女の肩に手を置きつつ落ち着くよう促した。……しかし、触つてみて改めて判る。逆にこちらの方が不安になるほど凄まじい震えだ。やがて震えは治まり、ゆっくりとした動作で首だけ振り返ったシルフィーは、驚くほど小さい声で信じられない一言を呟いた。

『……逃げよう』

スバル達は思わず言葉を失った。何を言われたのか、理解するのに時間が必要だった。

「……何で、逃げるの？」

ミソラが訊ねると、口にするのも恐ろしいといった様子で、

『《五本指》が、来てるんだ』

「……ッ!?!」

《五本指》という者が何なのか、簡単にはいえ聞かされていた二人は、絶句しながら硬直した。それはこちら側の現時点の戦力では到底敵わない相手が来ているということで、その事実は二人にかなりの衝撃を与えてくる。シルフィーがそう提案するのも頷ける話だった。

『……あの薔薇、No.2のユノ様のものだよ。前にメルクリウス様に聞いたことがある。ユノ様は、感情を喰って成長する薔薇の種

を相手に植え付けて、やがて成長しきった薔薇からエネルギーを取り出して自らの力を高めるって』

「……何、それ？　それで感情を吸収された人はどうなっちゃうの？」

『……感情を全て失って人形みたいになるか、最悪死ぬって……』

陰惨過ぎてもはやゾツとすらしな話だった。だがそれが本当だとすれば、眼下に広がるあの薔薇の“栄養源”として誰かが利用されているということになる。つまりだ。アレをそのまま放っておいたら、その誰かがシルフィーの言ったような状態になってしまうということだ。

「シルフ、逃げちゃだめだよ！　助けなきや」

『無理なんだよ！！』

ミソラが懇願するように叫ぶも、シルフィーはそれ以上の声量で怒鳴るように言った。

『判ってるよ、判ってるんだよ助けなきやいけないことくらい。でも記録にあったんだ、ああなつて助かった事例は一切ないって。無理矢理助け出しても、“むしろそのままにしておいた方がマシな結果になる”って！』

「……で、でも」

自分の中にある葛藤に苦しみつつ告げるシルフィーに、何か反論しようとする言葉を探すミソラ。しかし、何一つ見つからない。今

ので判らされたのだ、もう助からないと。もう諦めるしかない。  
……ミソラ“は”。

「行くよシルフ」

微塵の躊躇いもなくスバルが言い放った。シルフィーは暫し呆然とし、やがて信じられないといった様子で、

『行くよって、私の話聞いてなかったの!?!』

「聞いてたよ」

『もしユノ様が近くにいたら、……今の電波変換が出来ない状態で行ったら確実に殺されるんだよ!?!』

「判ってる」

『なら』

「花菱さんが」

説得を試みるシルフィーだが、遮るようにその名を呟かれ沈黙する。その様子を一瞬だけ眺めたスバルは、薔薇を見下げつつ酷く辛そうな表情で続けた。

「花菱さんが、あの薔薇の成長に利用されているかもしれないんだ。見捨てる訳にはいかないよ」

『ッ!?!?』

「……やっぱり、そうなの？」

シルフィーの表情が驚愕に染まった。ミソラも薄々気付いてはいたようだが、やはり驚いた様子で訊ねる。

スバルは「うん」と頷き、

「ミソラちゃんも見たでしょ、こうなる前、花菱さんから電波エネルギーが溢れ出てたの。間違いないよ」

「……うん、そうだね。……シルフ」

呆然としているシルフィーに、ミソラは頭を下げる。

「お願い。花菱さんは友達なんだ、絶対助けたい。だから手伝ってほしい」

続いてスバルも頭を垂れる。

「頼むよ」

二人に低頭され、『う……』と怯んだ様子のシルフィー。また新しい葛藤が生まれる。

キクリはスバルやミソラの友人で、自分がスパイとしてこちらに来た時やこちら側に組した後も色々よくしてもらった。……もしかしたら、シルフィーにとっても彼女は友人なのかもしれない。しかし、その友人はもちろん助けたいが、そうするとユノとまみえることになる。『補佐官』風情が彼女に挑むなど、愚行を通り越してもはや自殺行為だ。どう転がっても間違いなく殺される。

『……………』

二人は依然として頭を下げている。正直シルフィーは逃げたい。殺されたくないから逃げたい。まだ生きていたいから逃げ去りたい。……しかし、ここまでされたらいくらなんでも揺らぐし、友人の頼みを無下に断るほど彼女は落ちぶれてはいなかった。

『……はあ、判ったよ』

「「「」」」

大きく溜め息をつきつつ了承するシルフィー。歓喜の表情を浮かべる二人に対し、『ただし』と前置きしつつ言う。

『さつきも言った通り、元通りで助かった例はないよ。それに、近くにはユノ様がいるかもしれない。それでも構わないの？』

「「構わない」」

臆面の欠片もなく即答する二人。シルフィーは『まったくコイツらは……』と呆れたように呟き、両手を差し延べる。掴まれという合図だ。

二人が手を取り、双方とも強く握ったのを確認したシルフィーは、一つ忠告する。

『結構スピード出すから、振り落とされないでね』

夕風中学校のグラウンドに咲き誇る薔薇の傍らに、その二人は佇んでいた。

一人はバツカス・アンガー。もう一人はユノ・エンヴィー。どちらも十二神将の一員だ。

この事態の元凶と目されている者達ではあるが、自分達は何もせず、ウイルスやエランド、“十二神将に新しくできた部下”に任せただけで成り行きを傍観している。

ふと、ユノが薔薇に視線を向け、呟いた。

『……良い具合に育っているわね。想像より遥かに早い』

『そうですね。今回の“素材”となったのは、あなたと最も相性の良い類の人間でしたから』

『……嫉妬心エンヴィーに心を支配された人間。ふふ、確かに相性は最高ね』

ユノは前髪を掻き上げつつ微笑んだ。

眼前に広がる薔薇を生み出したのは彼女の十八番技、《エモーションドレイン》。

人間でも、電波体でも、とにかく感情を持った生命体の脳に、自身の電波エネルギーを加工して生成した種を植え付け、対象の感情を栄養源として成長しきった薔薇からそのエネルギーを吸収し、それを自分のエネルギーとして身体に蓄積させる。そういった技だ。

実際にはもう一つの用途もあるのだが、それはゼウス以外には教えていない。

ユノは薔薇から視線を外し、バツカスに訊ねた。

『あなたは行かなくていいの？ 例の双子の電波人間、この敷地の

どこかにいるんでしょう？ 捜さないの？』

『……“彼”に任せてあるので。発見したらボクに知らせるよう言  
つてありますし』

『へえ、そう』

自分で訊いておいて特に興味なさそうな様子で返す。暇潰しをし  
たかっただけで、実際はどうでもよかったのだ。

ふと、かなり大きめの電波エネルギーの持ち主が近付いてくるの  
を感じた。

『これは……』

バツカスが少し懐かしげに呟く。ユノも似たような感情を抱きは  
したが、両名とも特に感動はなかった。

現れたのは裏切り者シルフィーと、二人の人間だった。各々が地  
面に降り立ち、二人の人間が騒ぎだす。どうやらシルフィーを糾弾  
しているようだった。

『……星河スバル』

二人の人間の内、少年の方を見たバツカスが小さく呟いた。確か  
にそうだ。前回見た時より若干髪が伸びた感じだが間違いない。な  
らばもう一人の方は響ミソラだろうか。

『……電波変換していないわね』

『そうですね。大方この騒ぎでウィザードと離れ離れになってしま

ったのでしょっ

今なら一捻りに潰せそうですね、と大剣に手をかけるバツカス。確かに彼の言う通りだが、

『……やめなさい』

あえてユノはそれをしなかった。バツカスはいたく驚いた様子で訊ねる。

『……何故？』

『私達をここまで苦戦させてきた相手なのよ？ そんなに呆気なく殺してしまったら面白くないし、少し悔しいじゃない』

……興味湧かない時にはとことん無関心なくせに興味湧いたらこれだよ、そんな言葉がバツカスのうんざりとした様子の顔に書いてある。まあその通りだ。彼女の場合、興味とその他諸々の感情が完全に比例しているのだ。

だから、ユノにとって興味の塊みたいな存在であるスバルには、極上の屈辱感や悲壮感を味わってもらってから死んでくれないと困るのだ。

そんなことを思考している間に、どうやらあちらはこちらに気が付いたようだった。

『……いたよ』

スバル達がひとしきり文句を言った直後、シルフィーは絶望感を孕んだ口調でそう呟いた。

彼女の視線を追うと、二人の電波人間が佇んでいるのが確認できた。片方の綺麗な感じの女性がおそらくユノ・エンヴィー。そしてもう片方の青年は

「バツカス!？」

『……だね』

シルフィーが肯定する。しかし別に確認してもらうまでもなかった。忘れる訳がない。何せスバルは彼と一度会っているし、……ツカサが来なければこちらが敗北していたような勝負を繰り広げたのだから。

「……二人。バツカスはただの十二神将なんだよね？」

『うん。でも』

「強いよね、判ってる」

その確認も必要なかった。身に染みて判っている。

そうしていると、一人だけ櫃の外に置かれていたミソラが思わず発言した。

「け、結局どうするの？ あれじゃあ、とてもじゃないけど花菱さ

んの方を優先するなんて無理だよ？」

『……………うん。だからそれを今考え』

『……………何をゴチャゴチャと話しているのかしら』

「『！？』」

気が付くと、背後にユノが立っていた。彼女達からは一度も視線を外していないはずなのに動いたことすら感知出来なかった。スバル達は大きく距離をとって身構えた。

『……………お久しぶりです、ユノ様』

シルフィーが戦々恐々とした様子で挨拶をする。それを意外に思ったのか、ユノは一瞬呆然と彼女を眺めて、やがてうっすらと気味の悪い笑みを浮かべた。

『……………まだ、私のこと様付けで呼んでくれるのね』

『……………約一万年分の癖はそう簡単に抜けませんので』

『そう。私はてつきり、呼び捨てや『アイツら』とか、そういう口汚い感じで呼ばれてると思っていたから、意外だったわ』

それはむしろセイレーンの方だが、今は言うべき時ではない。  
一拍置いて、ユノが訊ねる。

『……………それで、あなた達は何をしにこの場所に来たのかしら？ 私達がいることくらい容易に予想出来たはずだけど？』

『うちのオペレーターが、あなたの栄養源にされた友達をどうしても助けたいって聞かないので、仕方なく来ました』

またもや意外そうな表情を浮かべるユノ。大方、シルフィーがメルクリウス以外の誰かの頼みを聞いたことに驚いたとか、そういう感じなのだろう。

そこで声は途切れ、その一連の会話を傍聴していたスバルとミソラに、彼女は声をかけた。

『初めまして、私はユノ・エンヴィー。おそらくもう聞き及んではいると思うけど、十二神将の『五本指』が一人よ』

その挨拶に、二人は自分の名前だけを告げることで返した。ユノは肩を竦め、何やら手招きを始める。その意味が一瞬理解出来なかったスバル達だが、直後、目の前にバツカスが現れたことにより、彼を呼ぶ合図だと気付く。

バツカスの視線は、シルフィーでもミソラでもましてやユノでもなく、ただスバルだけをまっすぐ射抜いていた。

「……何だよ」

不機嫌そうに視線を重ねるスバル。バツカスは重ねられたまま『なんでもありません』と返し、ふと、思い付いたように訊ねる。

『……あの双子の電波人間はどこです？』

「!?!」

『判りませんか？ あの時、ボクを撃退した彼らですよ。あなたは

……確かツカサと呼んでいましたね』

予想外の問いに困惑する。何故彼の居場所を訊くのか、目的は自分じゃないのか、とにかく今のバツカスは訳が判らなかった。

『……知らないのですか。それとも庇っているのですか。……まあどちらにせよ、現在部下に搜索させているので構わないのですが』

『何で、そんなことを訊く？』

スバルは語尾を遮る形で問い返した。

「君達は、僕を殺したいんじゃないかったのか？」

『……簡単な話ですよ』

問われたバツカスは大きく腕を広げた。肩から腰にかけて走る、五、六十？クラスの“斬痕”がスバルの目に入る。それに、彼は違和感を覚えた。

傷が、残ってる？

バツカスは電波体だ。電波人間になるのに用いるのも、エランドという電波体だ。スバル達とは違い、人間としての要素を一切持っていないのだ。

だからおかしいのだ。スバルには人間としての要素があるから傷が残ることがある。しかし端から端まで電波で構成されているバツカスに残ることはまずありえない。確かあの傷はスバルが付けたものだが、何故残っているのか。

そんな疑問を察したかのようなタイミングで、バツカスが言葉を続けた。

『あなたに付けられたこの傷は、本来消え去るはずでした。しかし、あの双子がこの傷をなぞるように、雷撃を付加した剣で斬り裂いた。そのせいでボクの身体を構成していた電波が修復不可能なまで壊されてしまいましたね、拳句がこれです』

バツカスは硬く拳を握りながら、“静かに激怒する”。

『残ってしまったのですよ、ボクの敗北の証がね。十二神将として、これほどの屈辱はありません』

「……だから、その証を付けたツカサくんを殺したいって？」

『……名答です』

とても個人的で、しかし理解できる理由だった。自分の過去の汚点を消し去りたいという、そういうことなのだから。

妙に、人間味に溢れた奴だった。

「……ツカサくんは、来ているかどうかも判らないよ。連絡とってないから知らないけどさ」

『来ていますよ』

「何を根拠に？」

『武人の勘です。それに、ほら、ちょうど“彼”も帰って来ましたしね、間違いありません』

彼？ という言葉は声にはならなかった。  
何故なら、その“彼”は既に背後にいたのだから。

「!？」

気配に気付いて振り返るスバル達。結果目にした“彼”に、スバルとミソラは驚き、呆然とする。

「お前……」

「ソッフ、覚えていてくれたのか。光栄だよ、ロックマン」

黒を基調としたマジシャンのような服装に、中途半端に長いステッキ。そして、ブロンドの髪。

二年前に二度も戦い、そして二年前に姿を消して以来、表舞台に顔を出さなくなった第一級犯罪者。

「地獄から舞い戻って来たよ」

《ハイド》もとい、《ファントム・ブラック》が、そこに佇んでいた。

## 第66話：復讐

オックス・ファイアがバテた。

ウィルスの方が多すぎて、殲滅する前にエネルギー切れを起こしてしまったのだ。

数百体ものウィルスを相手にしたのだから当然と言えば当然なのだが、状況的には非常によろしくない。ウォーロックは早くスバルの元にたどり着かなければならないのだから。

有志で協力してくれる一般生徒のおかげでさきほどと比較すれば幾分かマシになったが、それでもやはりペースは落ちてきている。

残りは約二十mってところか。

エリアイーターで地面を抉り取りつつ、ウォーロックは確認する。今日ほど妙に広くて無駄に入り組んだ構造のこの学校を恨めしく思ったことはない。

とにかく、突き当たりを曲がればあとは一直線だ。

「吹っ……飛べ！」

抉った地面を前方のウィルスの集団に向けて投擲する。動きの遅い者及び設置型は回避出来ずにそのまま押し潰され、ギリギリ避けたウィルスも一般のウィザードの追い討ちにより消滅。それにより道が開け、ようやく前進することが叶った。

この場にいる一般人の中でリーダーのような立ち振る舞いを見せていた藤枝カイリが、ウォーロックと並走しながら呟く。

「スバルくん、無事かな」

『……さあな。まあ、嫌な予感とか全然しねえし、無事だとは思っただけどよ』

「……ていうかそもそも、どうして君がスバルくんと離れて行動していたかが僕としては疑問だなあ」

『……じゃあねえだろ。アイツの邪魔したくねえし』

どういうこと？ とカイリが首を傾げる。ウォーロックは適当にはぐらかし、前方に視線を向けた。あの角を曲がらなければグラウンドには辿り着けないのだが、

『……藤枝、あの突き当たりへヒードン落としてくれ』

「え？ でもそんなことしたら……」

『いいから、俺に考えがある』

言われて、渋々ヒードンを使用するカイリ。彼のウィザードが落下地点を指定し、ウォーロックの指示通り突き当たりに落とす。その結果として、グラウンドに続く道を塞ぐ羽目になった。

「……凄く理解に苦しむんだけど、何のつもりかなこれは？」

『まあ見てろって。……おいゴン太！』

「な、何だ？」

ウォーロックの呼びかけに荒く呼吸をしつつ応えるオックス・フアイア。手招きされ、よろよろと彼の傍に寄る。

……そこで、鬼のような注文をされるとも知らずに。

『最後に一仕事頼むぜ。こっからグラウンドまで全力でヘビードーンを押しやってくれ。車のような勢いでな』

「は？」

『で、藤枝はこっから一直線上にいる人間やウィザード達に退避するよう伝えてきてくれ。迅速にな』

「え？」

はいゴー、とカイリの襟首を掴んでヘビードーンの上に移動させるウォーロック。カイリもオックス・ファイアも呆然とするが、再度促されて我に返る。カイリは反対側に降りて「そこから退いてくださーい！」と叫びながら走っていった。

「……何するんだ？」

『……ザコつつつても、いちいち相手してたら身体がいくらあっても足りねえよな？ だから一掃しちまおうって話』

「いや、意味がよく判らない」

いいから、と呟きつつヘビードーンに座り込むウォーロック。約二十m先のグラウンドを細目で眺め、……舌打ち。

「どっした？」

『……なんでもねえ。台本通りにしか動けねえいけ好かねえクソ野

郎が目に入ったただけだ』

「!?!? それって……」

その“クソ野郎”に心当たりのあったオックス・ファイアが驚きの声を上げる。

『ああアイツだ。けど気にすんな。お前は言われた通りこいつを押し。……列車のような勢いでな』

「ハードル上がったぜ!?!」

そんな批難めいたを台詞をガン無視し、ウォーロックは前方を見据た。カイリが手を振っている。直線上にはもうウィルスしかない。

アイツ程度のやつでも、いくらなんでも生身じゃ無理だ。急がねえと。

背後のオックス・ファイアに合図を送る。彼がヘビードーンをガツチリ掴んだのを確認すると、ウォーロックは叫んだ。

『押しゴン太! ウェーブライナーのような勢いでな!』

「ハードルどんどん上がるなあ!?!」

ファントム・ブラックという予想の斜め上に行く人物の登場に困惑するスバル達。ウイルスの歩行音以外の物音が消えた中、おもむるにバツカスが口を開いた。

「……………どうでした？」

「いました。菜園近くのプールです」

「……………よくやりました」

その返答に満足したらしく、口の端を釣り上げて踵を返すバツカス。さきほどの彼の言葉から、ファントム・ブラックが示した場所にツカサがいるのだと瞬時に理解したスバルは、すぐさまバツカスを止めにかかるが、

「ぐっ……………！？」

ファントム・ブラックに拘束され、それは叶わなかった。その間にバツカスは、こちらに一瞥もくれることなく飛び去っていく。叫んで止まるよう促しても、一言も耳に入っていない様子で、やがてそのまま姿が見えなくなった。

「復讐の邪魔をしてはいけないよロックマン」

「うる、さい、離せよ。大体、何でお前が出てくるんだよ」

拘束を解こうともがきながら訊ねるスバル。対するファントム・ブラックは薄気味悪い笑い声を上げながら、囁くように、告げた。

「だから、復讐だよ」

直後、右肩に鋭い痛みが走った。彼のステッキがスバルの肩口を僅かに裂いていたのだ。流れ出た血液がスバルの白い制服を真っ赤に染め上げる。その様子を呆然と眺めていたミソラがやがて悲鳴を上げた。

「スバルくん!？」

『このっ!』

途端、シルフィーが高速で殴り掛かった。……が、命中の直前でファントム・ブラックの姿が掻き消え、拳が空を切る。そのまま体勢を崩したシルフィーは、支えを失って同じく体勢を崩したスバルともつれるようにして地面に倒れ込んだ。ミソラが心配そうに駆け寄る。

いつの間にか後方で浮遊していたファントム・ブラックが、小さく笑った。

「ソッフ、残念でしたねシルフィー様」

言われて、酷く不機嫌そうに立ち上がるシルフィー。素早く砂を払い、妙に懐かしげな表情で苛立ち気味に呟いた。

『なーるほど。その風貌、能力、陰気な感じ、あなたファントムだね。私達の次元ではとっくに全滅してるからこっちの次元の個体か。どっちの奴でもそのウザったさは変わらない訳だ』

『何だと!?!』

瞬間、ファントム・ブラックの隣にいかにも『幽霊』といった風情の電波体が現れた。青筋のようなものが顔面部分に走り、恨めしげな視線をシルフィーに向けている。あれがファントムなのだろう。とりあえず、スバルは顔を真っ青にしてそっぽを向いた。

『黙って聞いていれば、調子に乗るなよ！』

『乗ってるのはそつちじゃん。姑息な手段考えたり出たり消えたりするしか能がないくせに』

『なん』

「まあ落ち着け、ファントム」

シルフィーに神経を逆なでされて激昂するファントムを、ファントム・ブラックが宥めた。

『いや、しかしハイド……』

「いいから」

そこでファントムは頭をガツシリ掴まれ、強引に顔を引き寄せられた。眼前に、あまりにも無表情過ぎるファントム・ブラックの顔が広がる。

ファントム・ブラックは、あまり抑揚のない口調で命令した。

「黙れ」

』

『…』

冷たく鋭いその声に、ファントムは一言『すまない』と謝罪し、閉口する。心なしか、顔色が悪くなったように見える。

「すみませんねシルフィー様」

『……いやいや気にしてないよ』

表面上笑ってみせるシルフィーだが内心は真逆だった。今のファントム・ブラックの表情、何かうすら寒いものを感じた。

どうやらスバルへの復讐のために来たそうだが、その行動の引き金となっている憎悪が並々ならぬものだということが、嫌でも理解できた。

ウォーロックがいないせいでスバルは完全に丸腰だ。コイツの相手なんか出来るわけがない。

その事実を再確認したシルフィーは、『集まれ』と呟いて右手に風を集束、風の剣に変換させて構えた。

この場で戦闘が行えるのは自分だけ。スバルを護れるのも自分だけ。ならばやることは一つである。

『……それよりさ、スバルとじゃなくて私と闘ろっよ』

ようやく辿り着いたグラウンド（正確には前広場）で、危うくハープはヘビードーンに轢き殺されるところだった。  
気がついて引っ張ってくれたセイレーンにはひたすら感謝だ。

「……大丈夫ですか？」

訊ねられ、相槌を打つ。ハープは乱れた呼吸を調えながら、今の一瞬で感じた二つの電波エネルギーの持ち主に怒声を飛ばした。

「ウォーロック！ オックス！ そういうことするなら前方に誰かいないか確認してからにしないさい！」

「したよ！ オメエがいきなり出て来たんだろっが！」

階段から転がり落ちていくヘビードーン（とオックス・ファイアの元から離れつつ、ウォーロックが叫んだ。反省の色がまるで見られない。日常生活の方ではいくらか落ち着いていた気がしたのだが、やはり戦闘になると気性が荒くなってこんな感じになる。ハープは大きめの溜め息をつきながら、

「……で、お互いようやくここまで来れた訳だけど、あの二人がどこにいるかとか分かってるの？」

「……ああ」

頷きつつウォーロックはグラウンドに視線を移した。巨大な薔薇の根元付近。そこに、十二神将らしき人物やファントム・ブラックと対面する形で、スバルとミソラはいる。シルフィーも一緒のようだ。

『分は、……相当悪いぜありゃ』

『……………』

ウォーロックの言う通りだった。

シルフィーなら、ファントム・ブラックを相手にしても負けることはまずないだろう。だからそちらは問題ではない。問題はもう一人の、十二神将らしき人物だ。

十二神将の実力は身に沁みて知っている。

セレスの時など、《デュアル》なんていう詳細不明な妙な能力が発現していなければ、間違いなく全滅していたはずなのだ。それほどの相手だ。

そして、判る。

あの十二神将は、明らかにセレスよりも強い。

それどころか、メルクリウスよりも強いかもしれない。

『……………』

ならば、非常にあれはマズイ。もし仮に、シルフィーがファントム・ブラックを瞬殺できたとして、あれとは勝負にならない。

……シルフィーじゃなくても、勝負になる者がこちらにいるとは思えないが。

『……………急ぐわよウォーロック』

『言われなくてもそのつもりだ』

だからって行かないわけにはいかない。あの場には自分たちのオペレーターもいるのだ。シルフィーが顕在のうちに合流して、さっさと電波変換して、ファントム・ブラックも速攻で倒して、それが

ら多対一である十二神将と闘おう。それなら、散り散りになった勝機もいくらか手繰り寄せることも可能だろう。そう思い、ハーブ達はグラウンドを駆けた。

第66話：復讐（後書き）

話進まねええつ！

## 第67話：決戦の狼煙

慢心は確かにあった。

自分はシルフィーで、十二神将の次に創られた補佐官のシルフィーで、構造が複雑すぎてもう二度と創ることは不可能だろうと言われたシルフィーだから、いくらでも量産できるファントムぐらい余裕だと。

それにしたって、

「っ」

これは、どういうことだろうか。こちらの攻撃はまるで当たらない。あちらの攻撃はかする程度とはいえ毎回当たる。反撃しようにも姿が消えてしまって叶わない。完全に手玉に取られていた。

「おやおやどうしましたシルフィー様。まだ始まったばかりですよ？」

ファントム・ブラックが小馬鹿にするような笑みを浮かべながら訊ねてくるが、無視して剣を構えなおす。隙を見せてはいけない。今の手合わせで判ったことだが、このファントムは他のファントムとは別格の強さを持っている。一瞬の隙が命取りになるような、そんな強さだ。

それがスバルへの復讐心から来るものなのか、人間の方のバトルセンスが高いからなのかは定かではないが、どちらにしろ、

「……いいオペレーターじゃんソイツ。千人に一人くらいの逸材だよ」

「おや、お褒めにいただき光荣でございます」

本当に光荣に思っているのか判別できない表情でうやうやしく頭を垂れるファントム・ブラック。その間に攻撃でもしてやるうかと思っただが、その状態でも一切の隙がない。

本当、いいオペレーターだよ。優秀すぎる。

これは予定外だ。サクツと倒して、スバル達がキクリを救う時間を稼ぐためにユノを挑発しようと思っていたのに。時間がかかりそうだ。

……………。

ってそうだ！ ユノ様が残ってるのに何で私コイツとだけ闘ってんの？

横目でスバル達の安否を確認するシルフィー。こちらに集中していて気が配っていなかったが、まさかもうやられたりはしていないだろうか？

……………だがそれも杞憂で済んだようだった。スバル達は無事だ。それどころか傷一つついていない。

そもそも、ユノが動いた形跡すらない

『え？』

彼女はそれに違和感を覚えた。何故動かない。何故スバル達に襲いかからない。ターゲットが目の前にいて、何故任務を遂行しない。彼女は一体何を考えて…………

「おや、よそ見とは余裕ですなシルフィー様」

途端に耳元で囁かれるその言葉。いつの間にかファントム・ブラックが密着しそうな距離まで迫ってきていた。

しまった……！

あちらに気を取られすぎて、あまりにも大きすぎる隙を作ってしまった。ファントム・ブラックは既に杖を振るっていて、もはやかわせるタイミングではない。

それに対し、シルフィーは……。

バツカスは菜園の近くにあるというプールに向かっていた。そこに、復讐の対象がいるようなのだ。

白と黒の、双子の電波人間。

星河スバルがツカサと呼んだ人物。

『……………』

あの時の屈辱は、忘れることが出来ない。

スバルとの戦闘で消耗していて、不意打ちされて、相手の手の内が一切不明の状態で闘って、そしてその相手が異様に戦闘慣れしている。そういうのは気にしていない。昔あった戦争の時もそういうことは多々あった。

負けたのだって構わない。問題は、負けた証が残ったことだ。

《神クラス》、《十二神将候補》として生まれて、“ある特殊な調整を二、三千年も受け続けて強化された”ある意味ムーの電波体の中で最も特異な存在であるバツカスにとって、それはあまりにも堪え難い事実だった。

アポロンの代わりに十二神将に加入して、たった二年程度という短い間でもしっかりと培われた誇りが、名が、汚された。それはもう、今すぐにも死んでしまいたいぐらいの屈辱だった。

『……………』

胸の傷をなぞる。反対の手を、身体に損傷が出来るほど強く握る。次いで、背負っていた大剣を取って構え、適当に左右に振る。それだけで真空波が生まれ、延長線にあつた建物の頭が斬れて、吹っ飛ぶ。

そこに避難していたらしい人間の悲鳴を聞き流しながら、腰に手をやる。そこにあるのは、この前も持ってきた《バーサーカーモード》に形態変化するための酒瓶数本と“もう一つ”。

『……………今回は万全の状態です。不意打ちもさせない。あなたについての情報もある程度は手に入れている。抜かりはありません。だから今度は』

バツカスは剣を背負いつつ、

『 負けませんよ』

シルフィーはファントム・ブラックの攻撃をあえて避けなかった。もう避けられないからというのももちろんだが、一つ考えがあったから、一発くらいは喰らってやるうと思っていたのだ。

『ッー！』

杖が、肩口に滑り込むように食い込んだ。激痛が走るが、気合いで耐え、両断されるのを防ぐために腕を掴んで止める。ファントム・ブラックが勝ち誇ったような笑みを浮かべるが、鼻で笑ってやった。訝しげな表情を浮かべる彼を尻目に、こちらもつつすら笑う。

ちゃんと杖の感触がある。ちゃんと掴めている。ちゃんと触れている。つまり、

今、実体がある！

シルフィーはファントム・ブラックの鳩尾に向けて膝蹴りを放った。自分や彼女の身体が死角になっていて視認が出来なかったのか、面白いようにその蹴りは命中した。

「うがつ……！？」

呻き声を上げつつファントム・ブラックが後退する。杖も手から離れ、武器がなくなった彼に、実体をなくされる前に追撃を放った。片手で風の剣を振るい、一刀両断しようとするが、相手もかなり場数を踏んでいる。視覚情報に頼らず直感を信じて大きくスウエーし、直撃を防ぐ。

直後、鮮血が撒き散らされた。見ると、額から右目を經由して顎

までが切り裂かれている。

「ぐっ！？ う、ううううああああああああああああアアアアアアアアアアッ！？」

ファントム・ブラックの絶叫が迸った。うずくまりながら右目……いや、右目“だった”場所を押さえている。もうそこには何もないだろう。斬った感触で判った。斬れて、割れて、弾けた感触が剣から伝わってきた。

「ああ……ぐ、……き、貴様……！」

怨念の籠った視線と共に搾り出すように呟いた。それにシルフィーはあくまで軽い調子で、

『ゴメーン、隻眼になっちゃったね。でもそれも恰好良いよ？ ほら、あの、独眼竜……伊達政宗？ だかなんだかみたいで。眼帯着けたらの話だけど』

それにより相手の怨念はより強まったようだが気にしている暇はない。こちらだって表面上はヘラヘラした様子で取り繕っているが、肩を裂かれて左腕が動かないのだ。悟られるなどは言わないが、激痛から来る動揺だけは見せたくない。

シルフィーは杖を引っこ抜いて放り投げ、ローブの一部を破って肩にくくりつけて固定すると、再び剣を構えた。

ファントム・ブラックは依然うずくまって呻いている。今がチャンスだ。痛みと焦りとショックで正常な判断が下せないはずの今が、能力もまともに発動出来なさそうな今が、止めをさす絶好のチャンスだ。

そうしてシルフィーは駆け出そうとして、



言つて、また高笑いする。

……一体、何を言っているのだこの男は。シナリオ？ 進める？  
意味が判らない。

『……何が、言いたいの？』

訊ねると、ファントム・ブラックは血に塗れた顔を歪めながら、  
一つ、言つた。

「……私がユノ様より賜つた力が最大限に発揮出来るというだけで  
すよ」

刹那、反射的にダッキングすると、頭の上を何かが通り抜けた。  
それがファントム・ブラックの脚だと認識するより先に、シルフィー  
は風を利用して大きく後退する。直後、今まで彼女がいた場所に  
ファントム・ブラックの踵落としが突き刺さり、軽く地割れが起こ  
つた。

………？ ………！？ 何、動きが段違いに……

混乱するが、その暇もない。地面に転がった杖を即座に拾つたフ  
アントム・ブラックが、信じられない速度で襲いかかってきたから  
だ。

杖が縦に振られ、それを何とか剣でいなしてすかさず上段蹴りを  
叩き込む。しかしヒットの直前でファントム・ブラックの姿が掻き  
消えて蹴りが空を切つた。再び反射的にダッキングすると、シルフ  
イーの首があつた部分をとつてもない速度で杖が裂いていく。寿命  
が縮まつた思いをしたシルフィーが後方に蹴りを繰り出すと、ガ  
ドされはしたが今度は当たり、ファントム・ブラックは大きく飛び  
のいた。

『……………！？』

疑問などはこの際無視して、今まで以上に集中して剣を構える。突然相手の実力が跳ね上がったのだ。それこそ、気を抜く暇もないほどだ。

……補佐官クラスを大きく越えたとされる自分より、更に強く。

『……………どうなってる？』

思わず訊ねた。するとそれにはすぐに返事があった。明らかなく、余裕の現れだった。

「言ったでしょう？ ユノ様から賜った力ですよ。怒りや、それに関連する感情が高ぶることにより、それに比例して使用者の身体能力を上昇させる、《セブンスレッドリーシンス・憤怒<sup>ライズ</sup>》」

それに、ファントム・ブラックが事もなげに言っただけのけたその言葉に、シルフィーはかつてないほどの戦慄を覚えた。

つまりは、彼はユノの技を身に宿して、尚且つそれを操っているということなのだ。……否、明らかに身にあまる力だ、操れるわけがない。制御の大半は、おそらく、あちらで微動だにしないユノが行っているのだ。

……そちらの方が、より一層厄介なのだ。

こりゃあmazuiかも。

本当に分が悪くなってきた。とてもではないが、シルフィーの手に負える相手ではなくなったのだ。

今はまだなんとかついていけるレベルだが、怒りや憎しみは時が経つにつれて増大するものだ。その内視認すら困難になるだろう。

『……はは』

こういう時、人間なら喉が渴いたり、冷や汗をかいたりするものなのだろうか。

とにかく、ヤバい。

「……さあ、終わらせましょうか!?!」

ファントム・ブラックが真つすぐこちらに向かってくる。直線的な動きのため、先程の攻防より断然速い。エアレットを数十発放つが、当たらないし杖に遮られて届かない。

やがてシルフィーの目の前に彼が立ち、杖を振り下ろした。さっきの戦法はもう通用しないし、風の剣ではいなすことは出来てもガードまでは出来ない。避ける暇は、当然ない。

そうして杖がシルフィーの頭頂部に到達する。

……寸前のことだった。

『ビーストスイング!?!』

蒼い獣の爪の一撃が、ファントム・ブラックを襲ったのだ。

潰された右目側、つまり死角になっっている位置からきた攻撃に彼は一瞬反応が遅れ、まともにそれを喰らってしまう。小さい呻き声と共に地面に叩き着けられ何度もバウンドして吹っ飛んでいく様を眺めつつ、蒼い獣　ウォーロックと、背後から現れたハープ、セイレーンは、同時に叫んだ。

『お待たせ!?!(です!?!)』





第68話：決戦？（前書き）

この話からようやく本番です

## 第68話：決戦？

「ロック！」

シルフィーとファントム・ブラックの戦闘に割り込んできた自分のウィザードの姿を視界に捉えると同時に、スバルは叫んでいた。隣ではミソラが同じようにハープの名前を呼んでいる。それに反応した二人がこちらに来ようとするが、

「！？ 二人とも危ない！」

ミソラがそんな悲鳴のような声を上げていた。一瞬何事かと思っただけ、すぐに気付く。

ファントム・ブラックが、高速で二人に接近しはじめていたのだ。目的は、電波変換の妨害だろう。

「させてたまるか！」

ファントム・ブラックの怒気を孕んだ声が辺りに響き渡る。しかし、ウォーロックとハープは振り返りもせず一心不乱にこちらに戻ってこようとする。

端から見ればそれはあまりにも愚かな行為だが、そんな行為が出来るほど彼女を信頼しているからこそ、二人はそうしているのだ。

『エアブラスト！』

「ぐう！？」

シルフィーが援護してくれると判っているから。

ファントム・ブラックが暴風に煽られて体勢を崩した。その際にシルフィーは踵落としを叩き込み、彼の動きを止める。そうして生まれた時間を利用し、ついに二人のウィザードはオペレーターのもとへとどり着いた。

「ロック……」

『何だよスバル？』

「遅すぎ」

『……悪い』

これに関しては、ウォーロックには抗議のしようがないようだった。そもそも、彼らがスバル達の元を離れなければ、こんなにヒヤヒヤすることもなかったのだから。

ていうか何で離れたんだよ？ と疑問に思うスバル。恋愛事とか、その辺の機微とかに異常なほど鈍感な彼にとって、ウォーロック達の気遣いはまるで理解不能なようだった。

「……まあいいよ。とりあえず、早くハンターV.Gに戻って」

『おつよー！』

叫ぶと、ウォーロックの身体がブレて霧散し、ハンターV.Gに吸収されていく。隣でも同じようにハープが吸収されていっていた。準備は、出来た。

「……いくよ、ミソラちゃん」

「うん、スバルくん」

両名ともハンターV.Gを構えた。視界の端には、不敵な笑みを浮かべながら何故か全く身動きをとらないユノがいて、まっすぐ見た先には再びシルフィーとの戦闘を始めたファントム・ブラックがいて、……校内校外到るところに敵がいて、背後にはその犠牲になった大事な友達がいる。

こんな戦いは、早急に、終わらせなければならぬ。

犠牲になったキクリを救い出して、これから犠牲になるかもしれない人々も救い出す。ファントム・ブラックも、ユノ・エンヴィーも、バツカス・アングーも、そこらにひしめくウィルスもエランドも全て、倒す。

その決意を胸に、

「トランスコード！」

彼らは、そう叫んだ。

裏門側にひしめくエランドを相手にしていたシドウとアシッドだったが、電波変換している時とは違ってオペレーターが無防備になることが足枷になり、十分近く戦闘を続けたにも関わらず未だに十体も倒せていなかった。

そもそも、アシッドが特別なウィザードだと言っても、実際の實力はエランドと大差ないのだ。一体倒すのにもかなりの労力が必要

となり、その上でシドウを護らなければならぬため、アシッドはもはや自由に動けていない。

自分を囲んでいた数体を薙ぎ倒した刹那、シドウの声が上がった。

「アシッド！」

『……何です？』

呼ばれ、用件を訊ねる。そうして返ってきた答えは、とてもじゃないが正気の沙汰とは思えなかった。

「戻ってこい！ 電波変換するぞ！」

『なっ……！？ 何を言っているのですか貴方は！？』

アシッドは驚愕の声を上げた。それはそうだ。彼はもうまともに電波変換が出来ない上、しても長期間入院するほどに身体を壊してしまうような状態なのだ。それをどうにかするためにWAXAが星河大吾が試行錯誤を重ねているが、まだどうにもできていない。

それなのに、電波変換？

『馬鹿も休み休み言ってください！ 死ぬつもりですか！？』

「そんなつもりはないよ。俺は戦況を変えたいだけなんだ」

シドウは一拍置いて、

「……それに、電波変換したって即座に異常が出る訳じゃない。前と同じなら、四、五秒は問題ないんだ。だったらその間に全て済ま

せれば無問題だ」

『しかし……!』

「いいから、戻ってこい」

強い口調で命令され、反論が出来なくなる。絶対に駄目だと言いたいのには、やめろと言うべきなのに、

彼の目を見たら、その全てが発言出来なくなる。

『……微かにでも異常を感じたら、無理矢理にでも解きます。それでも良いですか?』

「……了解」

アシッドの言葉を受け入れ、相棒が戻ってきたハンターV.Gを構えるシドウ。あとは一言「トランスコード」と叫べば、彼はアシッド・エースへと電波変換する。

「……………」

正直、恐怖がない訳じゃない。

前回の四、五秒なんて、たまたまその時のコンディションが四、五秒保てるレベルだったからという話で、今回もそのくらい保てるとは限らない。

もっと長く持つかもしれないし、電波変換した瞬間にアウトかもしれないのだ。

……………しかし、

まあ、そんなこと言ってる場合じゃないんだが。

そんなことは百も承知。元々そのリスクを背負うつもりで提案したのだから。

「……………じゃ、行くぜ」

『……………』

アシッドからの返答はない。まだ躊躇いがあるのだろう。当たり前の話だが。

「……………」

そうしてシドウが、

「トランス」

それを口にする、

直前だった。

ガッン！ と、後頭部に打撃を喰らったのだ。

「ぐっ……………!!?」

気絶するほどの威力ではなかったものの、脳が軽く揺れ、意思とは関係なしに身体が崩れていく。

マズった。

おそらく、いつの間にかエランドが背後に移動していたのだろう。それで今不意打ちを喰らった、と。

本当にマズイ。脳が揺れてまともに立てすらない状態で、敵に囲まれたこの状況、死亡フラグが乱立したような場面だ。

くそ、戦況を変えることすら叶わないってか？

無念以外の何物でもない事実。そのことに打ちひしがれながら倒れ込むシドウだったが、

寸前で、誰かがその身体を支えてくれた。

「……………」

赤っぽくかつ青っぽいどこかの王族のような身なりの、まだ若干少女らしさが残った女性。

クインティアが。

「……………ティア？」

何しに来たんだ？ そうシドウは訊ねようとした。

しかし、それは彼女の怒声により声にはならなかった。

「馬鹿シドウ！」

「……………え〜」

開口一番に大声でけなされて一瞬キョトンとする。こちらは立つのも辛いような状態だというのに、それは如何なものだろうか？

……結局その言葉も発されることはなく、クインティアの声が辺りに響き渡る。

「馬鹿よ、本当に馬鹿よあなたは！ 何電波変換なんてしようとしているのよ！ 自分が今どんな身体になっているのかまだ理解していないの！？」

「……理解してるよ。した上で、しようとしてるんだ」

言いつつ、その口ぶりから自分を殴ったのが彼女だということに気付く。通りでまだ生きている訳だ。

抗議は、今はしない。

「大丈夫さ。計算上三秒くらいなら自由に動けるし発作も起きない。それで、三秒もありゃウイングブレードで二、三十体は」

「嘘付けよ」

途端、まだ声変わりの途中といった感じの少年の声が聴こえてきた。同時に炎の爪が飛来しエランドが数体消滅する。これは、

「……ジャックか」

名前を口にすると、「おう」と軽く返事がかえってきた。

「……で、嘘って？」

「計算上は四、五秒持つところだよ。いくら俺でも判るぜ。そんなもん計算できるもんじゃない」

ジャックのその言葉に一瞬詰まるシドウ。それにより嘘だということ肯定した形になり、諦めたように溜め息をつく。

「……で、そうだとして、お前はどつする気だ？」

「止める。下手すりゃ死ぬってのにそんなことさせられる訳ねーだろ」

珍しく、ジャックが気遣うような台詞を言ったことに少し驚く。

それはもう……理由は判らないが確か嫌われていたはずの自分に対してそんなことを言ってくれて、妙に嬉しくなる。

……ただ、

「……出来ない相談だよ」

それと、電波変換を止めるかどうかは別の問題だった。

クインティアもジャックも驚いた様子で、

「何言ってるのよ!? 本当に死ぬつもりなの!？」

「だーから、死なねえって。それにすぐ解くって言ってんだろ？」

安全だって」

「安全な訳ないでしょう!」

クインティアらしからぬ、絶叫するような否定の音が響く。シドウはたじろぎ言葉を失う。

「貴方の状態はサテラポリスのドクターから聞いている。ノイズの多い場所に長時間いると身体に異常が出ることも知ってる。……貴方

がさつき言った四、五秒が、あの時の、万全の状態で電波変換した時の結果だつていうのも知ってる！　じゃあ今が安全な訳ないでしょう！　ノイズまみれの戦場においても身体に異常が出始めてるはずだし、疲労もあるからまったく万全じゃないでしょう！？　それで電波変換なんてしたら、きつとすぐに……」

クインティアの語尾が震える。鼻をすする音が聴こえる。それを意外に思った矢先、彼女はシドウにゆっくり抱き着いてきた。

「……ティア？」

「私は、もう体験してる……」

震える声で、クインティアが呟く。

「アジトの爆発で貴方が死んだと思った時の喪失感とか、貴方が倒れた時に感じた恐怖とか、私はもう体験してる。……もう嫌なの、あんな気持ちを味わうのは。……だから」

お願い、と、最後にクインティアは消え入りそうな声で言い、涙を流した。シドウが彼女のそれに呆然としていると、ジャックも歩きながら呟く。

「暁、お前言ったよな。「いつか俺のこと兄貴って呼ばせてやるよ」って。ぶっちゃけあれは吐き気がした」

「……………おい」

「でもね」

シドウの抗議を遮り、ジャックは続ける。

「もう、本当、吐き気するし虫酸が走るけどさ、覚悟は出来てるんだ。吐き気するし虫酸が走るけど」

「……それ、何で二回も言っただよ」

「大事なことだからな。……それはいいんだよ。まあ、要するにだ」

そこでジャックは振り返り、言った。

「俺がせっかく決めた覚悟を無駄にするな。別れたりするな、死んだりするな。生きて、俺の覚悟を試させる」

そのままジャックは飛んだ。手に紫炎を纏わせ、それを降らしてエランドを撃破していく。

「……………」

視線を、泣いてるクインティアに向ける。そこでシドウは微笑み、頭を撫でた。

「……了解。しないよ」

「！」

クインティアが顔を上げる。慌てて涙を拭う姿を笑いながら眺め、二人一緒に立ち上がる。

そして、「じゃあさ」と切り出した。

「代わりにここはお前らがやってくれ。俺は遠方で、アシッドに護られながら指示出すから」

「……うん、了解」

「任せろ」

言われ、姉弟は本格的にエランドとの戦闘体勢に入る。  
その様子を離れながら見たシドウは、恥ずかしそうに呟いた。

「……俺、愛されてるなあ」

『今更、気付くのが遅すぎます。馬鹿ですか』

「………違うない」

シルフィーもそろそろ限界だった。

ファントム・ブラックは先ほどの妨害を妨害されて頭に来たらしく、一層身体能力が向上していて、こちらは肩の傷が原因でバランスの悪い動きしか出来ない。

既に相手は若干手に負えない強さになっているというのに、このハンデはマズすぎた。

セイレーンも加勢しようとしているらしいが、彼女の戦闘能力ではもっと手に負えない。

『エアバレット!』

相手の死角から風の弾丸を放つが、能力で実体をなくして姿が消え、外れた弾丸はまっすぐ誰もいない方向へと飛んでいった。

何処だ？

ここに来て姿が見えなくなったことに戦慄を覚えた。今までは目に見えていたから対処出来ていたのだ。見えなければ、例えば背後から攻撃なんてされれば避けることすら

『!?!』

と、そこで背後から殺気を感じたシルフィーは振り返った。しかし誰もいない。それどころか、殺気すらも感じられず、

彼女はすぐに、自身の失態に気が付いた。

「引っ掛かりましたね」

背後から聴こえるファントム・ブラックの声。そして杖が空を裂く音。

そう、引っ掛かったのだ。先ほどの殺気(囿)に。もうどうにも出来ない。戦闘の構えは既に前方に向けたものになっており、後方にはまるで対処出来ない状態になっている。

避けられないし、受け止められない。もはや直撃するしか選択肢のないこの状況で、

『ブレイクソング!』

しかし、そんな声と、耳をつんざくような音が響いた。発生源はセイレーン。彼女が竖琴を掻き鳴らしたことにより発生した衝撃波としか思えないような音が、ピンポイントでファントム・ブラックを狙っているのだ。

「ちっ！？」

そこで彼は攻撃を中断し、瞬時に実体を消した。姿も徐々に薄れてゆき、もう攻撃が当たらないはずの状態になり、

「じっ！？ あああああああああああああアアアアアッ！？」

ブレイクソングが直撃し、絶叫を上げながら地面を転がっていった。

『……………あれ？』

思わずシルフィーは間抜けな声を上げてしまった。それはそうだろう。どんな攻撃もすり抜ける実体ゼロの状態のファントム・ブラックに、攻撃を当てられたのだから。

自分の隣に気遣わしげな表情で移動してきたセイレーンに、彼女は訊ねた。

『……………ねえ、今何したの？』

するとセイレーンは意外そうな表情で、

『何って、普通に音を鳴らしただけですよ？』

『……へえ？』

もう本当に普通に簡潔過ぎる返答に、声というよりもはや音といった感じのものが口から洩れる。普通に音を鳴らしただけですよって、要するにいつも通りにやっただけってことで、それはシルフィーがいくらやっても無駄だったことであって、まあ、何て言うか、つまり、あれだ、

『それで、何で当てられるんだよー』

『……あ、もしかしてまだ判ってないんですか？』

『……何か、馬鹿って言われてるみたいで胸に突き刺さるねそれ』

遠方で呻いているファントム・ブラックから視線を外さずにうなだれるという器用な行動をとるシルフィー。

セイレーンは『ふふん』と誇らしげに微笑みながら、豎琴を撫でた。

『要するにですね、音だから、実体があるかどうかとか関係ないんですよ』

セイレーン曰く、ファントム・ブラックは実体を消したとしても、五感などの基本的な機能は消えていないのだそうだ。そうでないと、消えた後に正確にシルフィーの背後を取ることなど不可能だから、と。

そこで、セイレーンのような音の能力者の出番だ。

電波エネルギーを触媒に生成された音は、強力過ぎると視認できなくなってしまうが、それでも主は音だ。身体を消して衝撃波を避けても、聴力が音を拾って内部にダメージを与えてしまう。

これだけは彼も防ぎようがない。故に、ファントムの実体を消す能力は音を攻撃に使用するタイプの能力に弱いということなのだ。

『……はあ。それじゃつまり、最初からあなたがやっつけばよかったんじゃない』

『無茶言わないでくださいよ。あんな反則みたいな動き、私は着いていけません』

言葉を交わしつつ、ファントム・ブラックに視線を向ける。怒り心頭といった表情をしていた。

……また強くなっちゃったか。

だが、まあ、もう大丈夫だろう。こちらにはセイレーンがいる。奴への対策ができたのだ。

……しかし、この場面でセイレーンは、とんでもないことを口にした。

『……でもですね、こっちにも弱点はあるんですよ』

『はあ！？』

突如行われた衝撃的なカミングアウト。セイレーンは申し訳なさそうな表情で、

『……ほら、その。確かにダメージは与えられますが、それは相手の位置が正確に判っていたらの話で……』

『……つまり？』

『消える瞬間しか対処出来ないの、最初から消えられた状態だと何も出来ません』

『このバアーカッ！』

思わずシルフィーが叫び、セイレーンは萎縮する。すると、ファントム・ブラックの方もその弱点に気が付いたらしく、苦痛に歪んだ顔を無理矢理笑顔に転換しつつ、実体を消して姿も消す。

これでもうこちらには対処のしようがなくて、

「パルスソング！」

「ぐぶあぁッ!？」

しかしそれでも、“彼女”の攻撃はファントム・ブラックを正確に撃ち抜いた。

「や、二人ともお待ちせ」

響ミソラの、ハープ・ノートの音は。

『『ミソラー!』』

「うんうん、良いねこれ。まるでヒーローにでもなったかのような気分だよ。あはは」

ハープ・ノートは満足そうに笑いながら、ファントム・ブラックから距離をとり、シルフィーの前まで移動する。

そこで、告げる。

「シルフィー、私と交代しよう」

『え、でも……』

「大丈夫。私だったら実体なくて姿が見えなくてもちゃんと“聞こえる”から」

そんなことを事もなげに言つてのけるハーブ・ノートに、ゾツとするほどの頼もしさを感じるシルフィー達。こちら側に寝返つて正解だったと、今更ながらに思う。

彼女は「それにさ」と続けて、

「スバルくんの方は、ムーの知識が必要だから、行ってあげて」

『！』

そこでシルフィーはキクリのことを思い出した。ユノの作り出した薔薇に感情を吸収され続けているキクリのことを。

もつ助かる見込みなんてないのに、スバルは彼女を助けると言ったのだ。ただでさえ理解不能なムー文明の中でもトップクラスに理解不能なああの薔薇から。

その為にはムーの技術に詳しい者の存在が必要不可欠で、その役目はメルクリウスの傍に一万年以上いた自分がこれでもかというくらい適任だった。

『……オツケー、判った』

シルフィーは親指を立てて了承した。それを確認したハーブ・ノ

トムは頷き、二回も音波を直撃させられてグロッキー状態のファン  
トム・ブラックを睨みつける。

「……じゃ、私とセイレーンでアイツ止めするから、その際にス  
バルくんのところだ」

『了解』

構える三人。ファントム・ブラックもようやく頭の中がすっきり  
したのか臨戦体勢に入る。  
そうして、

「GOO！」

全員が駆けた。

## 第69話：決戦？

シューティングスター・ロックマンに電波変換したスバルはユノと対峙していた。“対峙”と言っても、相手は不敵に微笑むばかりで身動き一つ取ろうとしない。これは明らかな攻撃のチャンスだが、

「……君に、一つ訊きたいことがある」

あえてロックマンはそうしなかった。最優先事項はキクリを救出することであり、その方法はあの薔薇の創造主であるユノしか知らないのだ。

すると、今まで微笑むだけだったユノが、ゆっくり口を開いた。

『……何かしら？』

「あの薔薇の栄養源になった者を救出する方法」

『ないわよ、そんなもの』

にべもなく即答された。ロックマンは激昂した様子で叫ぶ。

「嘘をつくな！」

『ついていないわ。そもそも、何故救出出来るように設計しなければならぬのよ。あれは私の能力値を高めてくれるものなのよ？』

「！」

言われてみればそうだった。あれは彼女自身の力を高めるもの。

ならばそれを妨害出来るような設計には当然しない。ロックマンだって、同じものを造ろうとすればそう設計する。

しかし、それでは、

「……花菱さんは、助けられないってことじゃないか……」

『……………』

うなだれるロックマンを、ユノが少し楽しそうに眺めている。今にも嘲笑し始めそうな勢いだ。

しかし彼女は笑わず、やはり少し楽しげに訊ねた。

『そんなにあの娘を助けたいのかしら？』

「当たり前だろ!!」

反射的に絶叫するようにロックマンは言った。ユノはそれに狼狽えるようなことはせず、ただただ楽しげに続ける。

『……………でも、外部からは何をしたらって無駄。一度ああなった以上、造った私にだって救出は不可能よ』

「……………!!」

聞いて、打ちひしがれたような表情になる。同時にユノが声を上げて笑い出した。嘲るようなその声色にロックマンは噛み切らんばかりに唇を噛む。

……………しかし、ロックマンは気が付いていなかった。

その嘲笑の対象が、“救い出せないと知って絶望するロックマンではない”ことに。

ひとしきり笑った後、ユノは言った。

『……貴方、私の言葉をちゃんと聞いてた？』

「……………え？」

少し呆れたように告げられ、ロックマンはキョトンとした顔をする。それがいたく愉快だったらしく、高笑いされる。

ユノは笑いを抑えてから、

『……私は、“外部からは”と言ったでしょう？』

あ…………、と目から鱗が落ちたような気分になる。そして一條の光を見つけたような気分にも。…………彼女の言葉に一喜一憂したりするこの感じはかなり悔しくて癪なのだが。

「それって…………、でも…………」

ロックマンが神妙な面持ちで呟く。今の言葉からすると、“それがキクリが救われる唯一の方法のようなのだが、“それ”は、リスク云々より実行出来ることなのだろうか？

と、彼がそう疑問に思ったことを見透かしたかのようなタイミングでユノは、

『…………ふふふ、疑問かしら？…………いいわ、面白そうだから、少し、種明かししてあげる』

そう言った。

ハーブ・ノートとセイレーンの援護の元、ファントム・ブラックの猛攻をかい潜ってロックマンの元にたどり着いたシルフィーは、ユノとの会話を終わらせたらしい彼の表情を見て眉をひそめた。

希望を見つけたけど、同時に絶望も見つけたというように、そんな複雑な表情をしている。

何かあったのか、と訊いても「何でもない」と返され、ユノを睨んでもただ微笑むのみ。

そうして、どうしたらいいのかわらなくなり慌てる彼女に、ロックマンが言った。

「花菱さんを救う方法が判った」

それは朗報だった。そしてそれは、彼が今一番手に入れたかった情報だったはずなのだ。

……だというのに、

何でそんな浮かぬような顔をしてるの？

いつもの彼なら全力で歓喜するような場面で、何故こんなに暗い表情なのだろうか。

しかし、その疑問を口にする前にロックマンからの要請がきた。

「花菱さんの位置が知りたいんだ。調べてくれる？」

『……あ、うん。了解』

言われて、シルフィーは巨大な薔薇を眺めた。ムーの技術をふんだんに使った無駄のない構造で、ユノの技術者としての実力が相当なものだということが判る。しかし、彼女には理解出来ないような作りというほどではない。

薔薇内を走る脈のようなものの中に、電波エネルギーの流れが感じられる。それが一点から始まっていることを突き止めたシルフィーは、ロックマンに告げた。

『判った、こつちだよ』

「……うん、案内頼むね」

彼の手を掴み、飛翔する。

そこでシルフィーは、ふと不安になった。

正直、あの薔薇は初めて見るような構造をしているため、そこにキクリがいるという確証はまるでない。だが十中八九間違いないので、そこは不安には思っていない。

だから、彼女が不安に思ったのは別のものだ。

一瞬見えた、ロックマンの表情。

希望と絶望が混在したような彼の表情。

その絶望の部分にどんな感情が込められているのか、なんとなく判ったから。

今どんな気持ちなのか、微かに伝わってきたから。

情けない自分を責め立てている。許せないでいる。シルフィーには、そう感じられた。

ジェミニ・スパークの二人　ツカサとヒカルは、その広範囲を攻撃出来る雷の能力を用いて、そこら中に蔓延っているウィルスをあらかた駆逐し終えていた。

まだ両の指でも数え切れないほどの数は残っているのだが、その辺は一般に普及しているバトルウィザード達でもどうにかなるだろう。

スバルくん達が心配だな。

つい先程、学校全体の周波数を探ってみて判ったのだが、並々ならない力を持った者が一人、異様な力を持った者が一人、徐々に力が増大していく者が一人、合計三人ほど、強大な敵がいる。そしてその内の一体がミソラと、もう一体がスバルと対峙していて、更にもう一体が、誰とも戦闘を行わずに飛んでいる。

ミソラちゃんの相手と彼女との実力差はあまりないみたいだけど、スバルくんの方はヤバいな。明らかに力の総量が違う。

スバルならそう簡単に負けることはないだろうが、それでも、負けないだけで勝てる見込みはない。早々に、加勢に行くべきだ。

「……よし、これで終わりだ」

一体のウィルスに雷を落とし、地面を通じて周囲のウィルスも感電させる。少しかわいらしい悲鳴を上げながら消滅する様を眺めな

がら、スバルの位置を確認する。

グラウンド、ちょうど中心部にいるな。

そうしながら少し首を傾げる。どうも、スバルは敵とは戦闘していないようだ。それっぽい反応がまるでない。ただ、逃げている訳ではないようだ。シルフィーと共に移動している。

『ツカサ！』

「え、わっ！？」

思考の途中で、ヒカルに思い切り突き飛ばされた。抗議をかけようとするとツカサだったが、その直前に、今まで自分が立っていた場所が爆砕して閉口する。

敵襲。

ツカサは瞬時に体勢を整えた。今の感じだと、ウィルスの類が攻撃をしかけてきた訳ではなさそうだ。

周囲の周波数を探る。すると、上空五十メートル付近に、三人の強大な敵の内の、異様な力を持った者の周波数が感じられ、……その周波数が、ついこの間相対した敵のものだということに気が付いた。

「……………ヒカル、跳ぶよ」

『あ？ おっ』

ヒカルが了解すると同時に、ツカサは垂直に跳んだ。上空に蜘蛛

の巢のように張っているウェーブロードに時々足をつけ、少し休んでからまた跳ぶ。それを繰り返して、地上から五十メートルほど離れた辺りで、彼はソイツを視界に捉えた。

『…………お久しぶりですね』

身の丈ほどの大剣を背負い、腰に酒瓶をいくつもぶら下げた青年。名前は…………スバルによると、確かバツカス・アンガーだったはず。

「…………まあ、確かにそうだね」

バツカスの挨拶にツカサは適当に返した。続いて到着したヒカルは、彼を見るなり『へっ』と笑い、

『んだよ。誰かと思えば、この前俺らに負けて逃げていった奴じゃねえか』

そう言った。

その言葉に、バツカスの表情が変わる。自身の黒歴史として数えていたのかどうかは知らないが、若干悔しそうだ。

しかし、激昂するようなことはなく、静かに口を開く。

『…………ええそうですよ。その時の者です。…………光栄ですね、まさか覚えていらつしやるとは』

『まあ、そんなナリの割に弱え奴だって、かなり印象に残ったからな』

ヒカルが言葉を吐き出す度に、バツカスの表情が徐々に歪んでいく。敵の神経を逆なでしても何も良いことはないので、ツカサは早

々に黙らせた。

「……………ゴメンね」

『……………いえいえ、ほとんど事実ですので、気にしていませんよ。…ただ、あなた方は一つ勘違いをしていますので、それだけは、正させていただきます』

刹那、いつの間にか背後に移動していたバツカスが振るった大剣に、ヒカルが大きく吹っ飛ばされた。腹の部分を叩き付ける形だったので両断されてはいないが、それでも相当な威力だったらしく、ヒカルの体力が極限まで減らされたことが判る。

『ぐお、は……………!? あう……………が、ごふっ!?』

「ヒカル!!」

遠方のウェーブロードを派手に転がり、十秒も経ってようやく止まったヒカルが、うずくまって呻く。すぐさまそこまで移動したツカサは、その状態を見てゾツとした。

外傷はさほどないが、とにかく内部が酷かった。規則的に並んでいたデータがグチャグチャに掻き乱され、ヒカルはもうまとともに動くことすら不可能になっている。

……………しかし、電波変換の際、ヒカルが端から端まで電波で構成された人間になれるようになっていたのが幸이었다。もしこれが生身の部分が入っている自分のような電波人間だったら、内臓が破裂してそのショックで死んでいる。

『……………理解しましたか?』

バツカスが再び背後をとってきた。ツカサはヒカルを抱えて大きく後退する。

しかし構わず、バツカスは言った。

『この間のボクをあなたの方が弱く感じたのは、消耗していただけ。動揺していただけ。実際はこんなものです』

大剣が横に薙がれ、刃状のエネルギー波が飛び出し、ツカサ達に襲い掛かってくる。すんでのところで回避し、後退を続ける。

『それを負けた言い訳にするつもりはありませんが、……とにかく、理解していただけましたか？』

バツカスが、高速で肉薄してくる。

『あなた方とボクとの実力差が』

大剣が振り下ろされる。

その直前にツカサは呟いた。

「ヒカル、戻って」

瞬間、ヒカルが消え入りそうな声で謝罪の言葉を述べて消滅した。ちょうどその時、バツカスの大剣がツカサの身体に到達し、

しかし彼を傷付けることはなく、力を全て流されて拳でカウンタ―を叩き込まれた。

『ぐっ！？』

出した速度の分のダメージをまともに喰らったバツカスが呻きながら後退していく様を、どこか暗い表情で眺めるツカサは、さきほどのバツカスの言葉に応える形で呟いた。

「……ああ、理解したよ」

左腕を剣に変換する。

「それが君の全力なら、全快状態の力なら、全く問題ない。実力差とかそんなの、関係ない」

剣を帯電させ、切っ先をバツカスに向ける。

そして、

「ヒカルに分けられてた分の力が還元された今の僕なら、君に負けることはないよ」

力強く、言い切った。

ファントム・ブラックの動きについていけないことはなかった。ハープ・ノートは相手の動作の初動を、遠くにいなながらも聴き取ることが出来る。動いている際の空気の振動も探知出来るし、たとえ実体が消えていようが、彼が動くことで空間が撓む音を聴き取れるから問題ない。

だから、聴き取れるから、どういふ速度でどんな動きで接近してくるか判るから、多少運動神経が劣っていても苦にはならなかった。ハープ・ノート“は”。

『うわっ!?!』

セイレーンがファントム・ブラックの杖をギリギリで避けた。無理な体勢で行ったため、バランスを崩して倒れそうになる。それをチャンスと見たファントム・ブラックが追撃を仕掛けてくるが、ハープ・ノートがそれを防いだ。

「大丈夫？」

『あ、はい、何とか……』

……そうなのだ。ハープ・ノートはいいのだが、セイレーンが問題なのだ。

能力的にはハープ・ノートにも劣らないはずなのだが、音を鳴らす方に特化しすぎていて聴く方の能力がどうも芳しくない。

聴くコツは軽く教えてやったのだが、普段全くやっていないことを言われて即座に出来るほど彼女は優秀な方ではないので、まだ苦労している模様だ。

慣れるのもうちよいかかりそうだし、セイレーンは下げべきかな。……でも、「役に立たないから消えろ」って言ってるみたいで嫌だなあ。

その辺を気にする辺りに、ハープ・ノートの人の良さが表れている。

「……つと」

背後に現れたファントム・ブラックから飛び出した巨大な腕を身体を折り畳んで回避する。返す刀で音波を放つが、彼は既にそこにおらず、攻撃が空振る。

「!? セイレーン！」

彼女は瞬時に叫んだ。今のはフェイントだ。おそらくファントム・ブラックの狙いはこちらの数を減らすこと、……つまり、実力で遙かに劣るセイレーンを先に叩く。

その証拠に、セイレーンに向かうように空間が撓んでいくのが聞こえる。

もう一瞬でファントム・ブラックが到達する。肝心のセイレーンは、ハーブ・ノートの叫び声を聴いて慌てふためいていた。

「セイレーン！」

ハーブ・ノートの悲痛な叫び声が響く。そして、セイレーンの背後に現れたファントム・ブラックが杖を振り下ろして、

……杖が砕けて消滅した。

「「……………は？」」

セイレーン以外の二人が間抜けな声を上げて呆然とする。特に、今のでトドメがさせると踐んでいたファントム・ブラックは、得物を失なったことに注意を向けることすら出来なくなっている。

そこで、セイレーンが呟いた。

『はい、引つ掛かりましたね』

直後、ギユアアアアアン！ という、実際の豎琴からは到底出せないような音が鳴り響き、フロントム・ブラックが盛大に吹っ飛んだ。相手が勝利を確信した隙を狙った、戦略的な一撃だった。

ハープ・ノートは、駆け寄りながら訊ねる。

「……………何したの？」

『はい、あのですね。空間が撓む音を、微かにですが聴き取れましたので、到達するであろう場所に、目視できないレベルのアクアインパルスを設置しておいたんです』

アクアインパルス。確か、音の電波エネルギーに空気中の水分を吸収させ、それをぶつけることで、……………化学で言う、水素爆発的な現象を巻き起こして攻撃するという、セイレーンの必殺技だ。

音は見えないし、水も少量なら見えない。破壊を撒き散らすその技を、そんなに細かい、罫に応用するとは。

それに、今彼女は『空間が撓む音を聴き取れた』と言った。微かに、らしいが、それでもとんでもない話だ。ハープ・ノートだって、その微かにの段階に到るのに数ヶ月かかったというのに。

……………ちよつと過小評価しすぎだったかな。

この分だと、すぐに抜かれてしまいそうだ。

『？ どうしたんですか？』

「ん、何でもないよ」

適当に会釈し、ファントム・ブラックに視線を移す。呻きながらも立ち上がる彼を見て、右目を潰された上、音波攻撃の直撃を三回も喰らってまだ倒れないでいることに感心を覚える反面、焦燥感も生まれる。

ハーブ・ノートは、セイレーンに確認をとった。

「ねえセイレーン」

『何ですか？』

「アイツさ、怒ると能力値が上昇するんだよね？」

『はい。まあ、シルフィーさんの話が正しければですが……』

シルフィーの話は正しい。それは断言出来る。

そして正しいからこそ、彼女は焦っているのだ。

怒ると能力値が上昇する。つまりは怒れば怒るほど強くなっていく。それはもう、果てしなくゾツとする話だった。

戦っていれば、その相手に対しての怒りは自然と込み上げてくる。ム力つくとか、イラつくとか、許さないとか、そんな勢いでだ。

そんな自然を、当たり前を力に変換して強くなってしまっなんて、反則もいいところだ。

このままでは、その内手に負えなくなってしまう。というか、今もう若干手に負えなくなってきた。

さきほどの攻防。音波を避けた姿がまるで見えなかった。聞こえはしたが、見えなかったのだ。ちょっと前までは見えていたのに、もう見えなくなっている。それだけファントム・ブラックが怒り、能力値が上昇したということなのだ。

……聞いて戦うのは限界がある。相手が速かったら終わりな

んだ。だから視認して補正しないとイケないのに……

その肝心の補正が出来ない。

そうしてハーブ・ノートが苦虫を噛み潰したような顔をしていると、ふとセイレーンが呟いた。

『……ミソラが今何を考えているか、なんとなく判ります』

「え？」

反射的にセイレーンを見る。何故か、その表情は自信に満ち溢れていた。

『もう少しで彼は、私たちの手に負えなくなってしまう、でしょう？ ……そうですよ、それは確かに問題です』

まあ正解なのだが、まだそれを考えていると答えた訳でもないのにセイレーンは勝手に話を進める。

それに呆れていると、不意に手を握られた。

そして、彼女は告げる。

『……問題ですが、問題ありません。相手が手に負えなくなるなら、こちらがもつと手に負えなくなればいいだけの話なんですから』

「え？」

『だから、《デュアル》、やっちゃいましょう』

《デュアル》。

数日前に襲来した十二神将のセレスとの戦闘中に、ハーブ・ノー

トとセイレーンに発現した謎の能力だ。

ハープ・ノートとセイレーン・インパルスという別々の存在が融合して、違う存在に変換されるという、電波変換を二重にしたかのような、正体不明の、しかし強力な能力で、ソロ曰くムーの技術、セイレーン曰く心の同調、つまりシンクロにより引き起こされたとされている。

まあ、所詮正体不明なので詳しい概要などはまるで判っていないのだが。

「で、でも、あれってそんな意識的に出来るものなの？ 前に暁さんに見せてくれて頼まれた時もどうかなく？ って思ってたんだけど。セレスの時は偶然なっただけだし、今回も成功するとは」

『大丈夫、ミソラと私なんですよ？』

その自信はどこから来るんだ、と呆れるも、信頼されているのだと思うと悪い気はしない。

「……あー、はいはい、判ったよ。で、私たち、今、心は同調してるの？」

『確認します？』

提案され、二人揃って呼吸を調える。せーの、と合図し、同時に口を開いた。

「『みんなを護りたい』」

ハモる。

次いで、いひひ、と笑う。

「やっぱりコレだよなぁ〜」

『コレですよね』

数秒間微笑み合い、チラッとファントム・ブラックを見る。フラフラで、満身創痍という言葉がピッタリの様子だが、執念深い彼のことだ、あれでもいつも通りに動くのだろう。

「……あんなのさっさとやっつけて、他も、速攻で終わらせちゃおう」

『はい』

互いに両手を絡めるようにして繋ぎ、額を合わせる。そして、呪文でも唱えるかの如く、呟いた。

「『デュアル』」

第69話：決戦？（後書き）

デュアルの詳細を自分でも忘れかけていることに愕然とした今日この頃。

## 第70話：決戦？

ファントム・ブラックは、突然発生したあまりにも眩い光に、目を閉じていた。

何が起きたのかは判らない。ただ、この神々しさすら感じる光には、“こちら側”の存在にとっての絶望が含まれていることだけは、何となしに判った。

マズイ。

彼は直感に従い、この戦闘中初めて体勢を立て直す以外の目的で後退した。

……それが、一切意味のない行動だとも知らずに。

「じゅあッ!?!」

腹部に尋常ではない激痛が走った。感触からして、蹴りを入れられたのだろう。身体が浮いたのが判る。自分が空気を切り裂いているのも判る。これは、おそらく吹っ飛んでいる。

「ぐ、じゅっ……!?!」

血へドを吐き、彼は反射的に目を開いた。その結果、最初に視界に捉えたものは、“夕凧中学校の全景”。

そう。

彼は今、そんなものが見えるほどの上空まで飛ばされているのだ。

悪い、冗談だろ？

恐怖が引つ込み、逆に笑いが込み上げてくる。

こんな上空まで飛ばされるなど、地球を余裕で破壊するような人間が登場する漫画でしか見たことがない。

風圧が凄まじく、体勢を立て直すことすら叶わぬ状況で、ファントム・ブラックは飛ばされるがままとなる。

そこで、彼は見た。

相当な速度で飛ばされているはずの自分と、並行するように飛ぶ人物を。

「……？」

性別はおそらく女性。トレードマークとも言うべき金髪は身の丈ほどの長さがあり、この風圧の中で面白いくらい靡いている。

桃色の羽衣を身に纏っており、髪と相まって聖女のような印象を与える風貌だが、耳当てのようなヘッドフォンのような装飾品がそれを台無しにしていた。

パッチリした可愛らしい大きな目をしているが、瞳からはまるで感情が感じられず、酷く冷たい。

……見たこともないような人物のはずなのだが、どうも、見覚えがあるような気がしてならない。

しかしその確認を取る前に、彼女の蹴りが叩き込まれた。

ドオンッ！ という凄まじい爆音が響き渡り、砕けた地面が降り

注ぐ。それを風で弾き返ししながら、青ざめた表情のシルフィーは呟いた。

『うわ、えげつな……』

シルフィーには、見えていた。

ファントム・ブラックが凝視しないと見えないほどの上空まで飛ばされ、勢いが死なない内に吹っ飛ばした時と同じ程度の力で下方に蹴り飛ばされ地面に激突する、その一部始終が。

……敵だが、流石にファントム・ブラックが心配だ。内臓とか無事なのだろうか？ それより、あんな凄まじい勢いで地面に激突して、身体が拉げたりしていないだろうか？

『……にしても、あれが噂の《ディーヴァスタイル》』

ファントム・ブラックへの心配を打ち切り、さながら天から降臨する女神のように落下してくるハープ・ノートに感心を向ける。

今の彼女は、前にメルクリウスが話してくれたものと見事に合致していた。

女神のような神々しい風貌で、しかしセレス　十二神将の中堅クラスを軽く圧倒するほどの実力を持った化物（当時のメルクリウスの感想である）。

いやまあ、確かにあれは化物だよ。

冷や汗をかきながら、シルフィーは一人頷いた。

隣でロッキマンが、相変わらず暗い表情で薔薇を眺めている。

「シルフィー」

『ん?』

「ここで間違いないの?」

『うん。正確には、こっから十メートルくらい奥だね』

ロックマンが指し示す“ここ”は、一見すると無数にある薔薇の花びらの一つに過ぎない。しかしシルフィーには判る。その花びらは他の花びらよりも若干脆く、そして最も、薔薇全体に行き渡っている電波エネルギーの発生源に……“栄養源”に近い。

つまり、キクリに一番近いのだ。

「……………」

ロックマンが目を瞑る。おそらくは、フォルダ内から今最も効果的なバトルカードを検索しているのだろう。

それは数秒で見付かったらしく、シルフィーは離れるよう促された。

「バトルカード、ファイアバズーカ」

ロックマンの腕が火山のような形状に変化し、火口に炎のエネルギーが凝縮していく。

……ファイアバズーカは本来発射の瞬間に拡散して広範囲を攻撃するカードだが、彼はそれを好まない。

拡散したらその分威力が落ちるから、らしい。

故に、凝縮だ。

凝縮すれば、……拡散して発射される炎を一点に集中させて放て

ば、威力に加えて貫通力も増加する。

そして、その貫通力を持った炎は、今この場面では最適なのだ。

「発射」

火口から炎が噴き出す。それは最も脆い花びらをいとも容易くブチ破り、内部を焼き尽くしながら直進する。

そのまましばらく炎を放出し続け、さきほどシルフィーが伝えた距離、つまり十メートルに達するか達さないかというところでファイアバズーカを消滅させる。

そうやって内部に侵入する用の穴が形成されたが、ファイアバズーカの炎が未だに内部を燃やし続けており、とても中に入れる状態ではない。

彼は次に、ワイドウェーブを撃ち出した。

撃ち出した場所が、一人人がようやく入れる程度の広さの穴だったこともあり、本来の巨大な刃の形状は一瞬で崩れ、大量の水が穴の中に流れていくだけの地味な結果となる。

しかしそれにより、薔薇を燃やしていた残り火を全て消し去ることに成功した。

「……………」

穴に残留した水も薔薇が吸収してなくなり、ようやく入っても支障がない状態になる。

そこでロックマンは振り返り、シルフィーにこう告げてきた。

「……………じゃ、行ってくる」

穴へと降りていくロックマン。その表情はさきほどと変わらず自分を責め立てているようなそんな表情で、シルフィーは至極不安に

なつた

降下しながら、ロックマンはさきほどユノが語った種明かしを思い出していた。

『あの薔薇は確かに感情を吸収するけど、何から何まで吸い取る訳じゃないの』

『正確には、吸収する対象は“七つの大罪”に連なる感情だけで、それ以外は吸収出来ない』

“七つの大罪”というものには、ロックマンにも多少知識があった。

確か、“傲慢”“嫉妬”“憤怒”“怠惰”“強欲”“暴食”“色欲”の七つ……要するに生物が当前の如く持っている感情や欲望のことで、それが人間を罪に導くからと、一部の宗教から禁忌とされている、のだとか。

……それに連なる感情だけと彼女は言ったが、それは人間が持つ全ての感情に当て嵌まるではないか、それに、それがキクリを救出することにどう関係しているんだ、とロックマンは疑問に思ったが、それにもユノは答えてくれた。

『……別に、感情は全てが罪って訳じゃない。いくつか……まあほ

んの一握り程度だけど、罪ではない感情も存在している』

『アレはね、種を植え付けられた者の感情の中で、七つの大罪に連なる感情が一番大きい場合に花を咲かせるのよ。そうでなければ、種は対象から感情を吸収することが出来ず、存在を保てなくなつて消滅する』

『……もう、判るでしょう？』

判つた。つまり罪じゃない感情が罪の感情を上回れば、あの薔薇は存在を保てなくなると、身体から消えてくれると、そういうことだ。

ユノは、ここからは大サービスだと言つて続けた。

『さて、ではあの娘をどうやって助けるか、だけど。簡単よ。あの娘のあの感情を高めればいいだけの話』

『他人と生きていく上で確実に芽生える、数多の感情の中で最も美しく最も醜い、“嫉妬”と“憤怒”と“色欲”が強まる足掛かりにもなる、あの感情を』

『あの娘の場合、貴方じゃないと、無理でしょうね』

……目から、鱗が落ちた。

僕は馬鹿だと、いくら責め立てても足りなかった。

彼は、キクリが自分のことを好いていると、ようやく気が付いたのだ。

……そして、もう二つほど気付く。

『星河くん。あなたはもつと……周囲の自分に対する好意に敏感になるべきだと思っ』

キクリはそう言っていた。

今なら暗に、自分の好意に気付けよ、と言っていることが判るが、おそらく、これには少し違う意味もある。

ミソラやルナも、キクリと同じように文化祭と一緒に回ろうと誘ってきた。それはつまり、彼女たちも自分のことを好いているんじゃないか？ そして花菱さんはそのことに既に気が付いていて、僕があまりに鈍感だから思わずあんな台詞を言ったのではないかと、そう気付いたのだ。

……だったら、もし本当にそうだったとしたら、ユノの薔薇が成長したことも理解出来る。

自分が好いている人が、同じく好いている人と仲睦まじい様子でデートっぽいことをしていたら、なまじ強い好意を持っていた場合、巨大な嫉妬や憎悪になり変わる。

そして自分は、そのデートっぽいことを二回もしているのだ。

キクリは当然その光景を見ただろう。

そうして強まった嫉妬や憎悪が、アイツらの眼鏡にかなってしまっ  
って、利用されたのだ。

全て、僕のせいじゃないか。

僕が鈍感過ぎるから、こんなことになったんじゃないか。

ロツクマンは底まで降り立った。キクリの姿は見えない。  
しかし、構成しているデータを少し掻き分けると、肌色の、人間の手のようなものが見えてきた。  
更に掻き分けると、腕が見えて、女子用の制服が見えて、最後に、キクリの顔が見えるようになった。

……花菱キクリを、ついに見つけ出した。

「……花菱さん」

呼び掛けても、返事はない。感情が吸収されていることが影響して、意識を失っているのだろう。

聴こえていないと思う。それでも、奥底に沈んでしまった意識に届かせようとされるかのように、彼は呼び続けた。

「花菱さん。……花菱さん。……花菱さん。……花菱さん。……花菱さん。……」  
キクリさん！！！！！！！！

最後に、今まで呼んだこともない下の名前を口にした。  
そのまま手を握り、再度呼び掛ける。

「キクリさん、今まで気付いて上げられなくてゴメン。こんな目に遭わせちゃってゴメン。僕が馬鹿だから、僕が鈍すぎるからこんなことになっちゃった。……君の言う通りだったよ、傷付けることになるって」

目を伏せる。しかしすぐにキクリを見据える。

「キクリさん！！！！」

ロックマンの、スバルの叫び声が木霊した。

あれ？ 何か、星河くんの声が聴こえる。

真つ暗な空間の中で、キクリはふと気が付いた。

この空間、頭の中だと思うのだが、実際はどうなのか判らない。  
まあ、もしそうだとすると、何故彼の声が聴こえるのだろうか？

『花菱さん。

キクリさん！！』

……あはは、キクリさんだつて。間違いない、これ、私の妄想とか願望とか、そんなんだ。

スバルが自分のことを下の名前で呼ぶなどありえない。そう思っているキクリは断言した。

でも、妄想だとしてもいいなあ。名前で呼ばれるの。

星河くん……んう？ こっちがキクリって呼ばれてるんだから、スバルくん？ ……うん、この際スバルくんがいいや。あはは、恥ずかしい。

言つて、身をよじらせる。今まで苗字で呼んでいて、今初めて名前で呼んだのだ。聞かれなくてよかったと思う。聞かれてたら、気

恥ずかしさで死んでしまう。

スバルくん、か。

もう一度呼ぶ。練習でもするよつに、呼んでみる。

そこで、ふと彼女は、昔のことを思い出した。

スバルくん。

スバルと出会う前から、あの日までのことを。

第71話・キクリメモリー？（前書き）

過去編

## 第71話：キクリメモリー？

星河スバルって人の噂は、実はロックマンとして有名になる前から知っていた。

私も小四まではコダマタウンに住んでいたから、不登校だった彼のことは頻繁に耳にしていた。

……いや、ていうか、同じクラスだったし、知らない訳がなかった。

夏休み前にうちのクラスの委員長が学校行事の連絡用のプリントを渡しに彼の家に行ったらしい。

翌日にそれとなく訊いてみたところ、母親が出てきただけでスバルくんには会えなかったそうだ。

……何故そんな、頑なに人と会おうとしないのだろう。

不思議に思い、担任に訊ねてみたが、プライバシーの問題だからと何も教えてはもらえなかった。

そんなことがあったからだろうか、私は日に日に、彼のことを知りたいと思うようになった。

会ったことがないから、恋とかそういうのではなかったことは断言できる。ただ、純粋な好奇心だ。

夏休みに一回だけ、委員長の代役で彼の家に行くことがあった。

その日、偶然にも母親がパートで出掛けていたらしく、スバルくん本人がおどとした様子で応対してくれた。

……まあ、「プリント、持ってきました」「……うん、ありがとう」「っていう、……あれ、これって会話なのかな？ っていう程度

の驚くほど短いやり取りだったけど、それで私は、クラス内で初めてスバルくんと会話した人間になった。

……ただ、何だろう。目とか雰囲気とか、凄く陰りがある感じだったのが印象に残って、……何故か、クラスのみんなには「会えなかったよ」とって嘘をついた。

夏休みの終わり頃、私は転校することになった。凄くテンプレートな理由ではあるけど、お父さんの仕事の都合ってやつだ。

クラスのみんながお別れ会を開いてくれて、みんなわんわん泣いて、私も泣いて、でもその中にはやはりスバルくんはいなくて、結局、そのまま私はコダマタウンを去った。

で、一年弱の時間が経った。

ロックマンの星河スバルのことは、メテオGが降ってくるって言われてたあの日、世界中に響いていた彼のお父さんっぽい人の声で初めて知った。

いやまあ、世界中のほとんどの人がそうなんだろうけどさ。

それを聞いた私は、その星河スバルがああ星河スバルだって瞬時に判った。

根拠があった訳じゃない。星河スバルって名前だって、確かに珍しい名前ではあるけど彼一人だけってことはないだろうし、別人の可能性もあつたけど、私はそう判断した。現にその通りだったし。

しばらくして、テレビで取材されている彼を見ることがあった。

やはりその時も彼はインタビュアーに囲まれておどおどしてたけど、夏休みに会った時とは違って、人と接することが怖いとか、そういう類のものではなかったので安心したのを覚えている。

その頃から、あの星河くんがヒーローかあ……って感じで、“敬い”に近い好意を抱くようになった。

六年生の二学期終盤、スバルくんが夕凧中学校を受験するという噂が立った。

ぶっちゃけ半信半疑だったけど、夕凧中学校を下見に来た彼を偶然発見して、即座に私も受験することを決めた。

当時の私は、学力は割と良い方だったので、意外と苦勞することもなく受験に成功した。

合格発表の日に、一緒に受験した人達と共に歡喜に奮えているスバルくんがいて、一人でテンションを上げまくってはしゃぎ回ったのは、まだ記憶に新しい。

クラス割りの発表日、奇跡的に彼と同じクラスになったことを知った時に味わった飛び上がりたいほどの幸福感は、もっと記憶に新しい。

学校が始まってから一、二週間くらいは、彼ともう一人の有名人つまり響さんは、それぞれのファンに囲まれて大変そうだった。私はあえてそこには混ざらず、成り行きを傍觀してほとぼりが冷めるのを待っていた。

ていうか、質問責め質問責めで気の休まる時がなさそうだった彼が少し可哀相だったというのが本音だ。

そして、やがてあまり囲まれることもなくなった頃を見計らって、

私は、昼休みに響さんと一緒に昼食をとっていた彼に話しかけた。

「こんにちは、星河くん」

「んむ？」

私が声をかけると、口に物が入った状態の星河くんは、堅っ苦しい喋り方をする上流階級の人みたいな声を上げた。

即座に咀嚼の速度を早めて、全て飲み込んでから挨拶し返してくる。

「あ……っと、こんにちは。……えっと」

「花菱キクリだよ。出席番号はあなたの四つ前」

「……あー、ああ、ああ、うん。そうだ、花菱さん。うん、知っているよ、クラスメイトだし」

挙動不審。これは、今の発言は全て嘘だね。断言出来る。

ていうか多分、ほとんどのクラスメイトの名前とか顔とか覚えてないんじゃないかな、この人。他の人の名前呼んでるところ見たことないもん。頻繁に話しかけてる委員長の水無月さんとか、響さんとかを除いて。

まあ、構わないんだけどね全然。

「……ね、覚えてる？」

私はそう言いつつ、隣の席に座り込んだ。星河くんは困惑した様子で、

「……え、何、覚えてるって……？」

「んう？ 小四の時、君の家に行ったこと」

途端、ガタンツ！ という音が鳴った。どうやら、星河くんの対面に座っていた響さんの脚が机を蹴り上げたようだ。

二人のお弁当が宙を舞う。両方とも、中身を一つもこぼすことなく二人が芸術的にキャッチした。にわかに拍手が巻き起こる。

「わー、凄い凄い、流石！」

「うん、ありがとう。……じゃなくてさ、え、小四の時に、家に来た？」

お弁当を机に置き、やはり困惑した様子で訊ねてくる星河くん。その反応も頷ける。小四って言ったら、自分がまだ引きこもっている時期だから、他人が家に来ることなんてなかっただろうしね。

「うん。……まあ、行っただっていうか、プリント渡しに玄関先まで入っただけなんだけどね」

「……あー、そういえばそんなこともあったような……」

……超つろ覚え。でも忘れ去られてはいないみたいだからちょっと安心。

すると、突然鋭い視線を感じた。それはすんごい至近からのもので……要するに響さんのもので、何でそんなに険しい表情で睨んでくるの？ と私は少し怯んだ。

しかし、瞬時に気付いた。

自分が知らない時期の星河くんを知ってることと、馴れ馴れしく話してくることに危機感を感じてるんだ。

……そっかあ、響さんも星河くんが好きなんだなあ。

やっぱり凄いね星河くんは。国民的アイドルからも好意を持たれるなんて。

私は、何となく響さんにも挨拶した。

「響さんもこんにちは」

「……あ、うん。こんにちは」

警戒心全開の返しに私はたじろぐ。そんな心配しなくても、私まだ何もしてないし、する予定もまだありませんよー。そうしていると星河くんが、

「？ ミソラちゃんどうしたの？」

「えー！？ ううん、何にもないよスバルくん！」

そして、かなりの鈍感さん、と。

……んう？ 今、名前で呼び合ってたかなこの人達？

「……二人とも、仲良いんだね」

私が訊ねると、星河くんは照れくさそうな様子で、

「あー、うん。初めてブラザーバンドを結んだ仲だからね」

「うんうん」

響さんが何度も頷いて肯定する。なるほどねえ。……つまり、引きこもってた星河くんを外に解き放ったのも彼女だと。

「……ふーん、そっか」

私はどうにか、動揺したことを隠した。

次いで妙に居心地が悪くなり、そのまま、昼食を買いに行くという口実で逃げるようにその場を去る。

教室を出る際に、クラスメイトの男子とぶつかりそうになった。

「あ、藤枝くん。ごめんね」

「……あ、うん。……こっちこそ、ごめん」

視線を合わさず、耳をすませてようやく聴こえる程度の声で謝罪し返してくる藤枝くん。

元からそういう気質なのかは知らないけど、暗いからと、あまり誰も話しかけに行かない。ていうか、話しかけても今みたいに全く面と向かってくれない。

そのせいで、この半月の間で既に浮いているのだが、

「うーん」

どうも、あのキャラは本当の彼ではない気がする。……なんていうか、本来はもっと明るい性格なんじゃないだろうか。何か理由があつて、ああいうキャラを演じて人を避けて、人から避けられるようにしてるとか、そんな感じ。

……ま、私には関係ないか。

そうして私は、思考の対象を即座に星河くんに移して、少し落ち込みながら購買に向かった。

変化が訪れたのは、土日を挟んだ月曜日のことだった。

私は、一週間ほど前に入部した陸上部の朝練を終えて、教室でスポーツドリンクを飲みながらまったりくつろいでいた。

そんな時だった。

「おっはよー！」

ブーッ！ って、スポーツドリンクを吐き散らしそうになった。だって仕方ないじゃん。

あのミスターローテンションで「僕に近付くな。僕も近付かないから」な雰囲気全開だった藤枝くんが、超ハイテンションで死ぬほどフレンドリーに「おっはよー！」だもの。

見ると、ほとんどのクラスメイトが戸惑っている。気圧されて「お、おはよう……」って挨拶し返した人も当然戸惑っていて、そし

て、心の中では皆一様にこんなことを呟いていると思う。

『……い、一体彼に何があったんだらう？』

そんなことは気にも留めず、藤枝くんは自分の席……響さんと星河くんの真ん中に座り込んだ。すぐさま振り返り、一言。

「おはよースバルくん」

「おはよう、藤枝くん」

……スバルくん？　今まで一回も話したことなさそうだったのに、いきなりスバルくん？

クラスメイトのほとんどがそう疑問に思ったことだろう。

しかし私は気付いたね。きっと、金曜の放課後から日曜の間に、あの二人に何かあったんだと。それこそ、藤枝くんの性格が反転するくらいの何かが。

……後に水無月さんから聞いた話だと、どうも藤枝くんは、小学校の時に濡れ衣が原因で酷いイジメを受けていたらしい。だから心を鎖して、誰とも関わろうとしなかったんだと。

そしてそれを、星河くんが訊いてきたんだそうだ。

つまりだ。それを聞いてどうにかしようと思った彼が、何がしかの方法で、鎖されていた藤枝くんの心を解き放ったのだ。

おかげで、藤枝くんも凄くクラスに溶け込んでいる。凄いな、流石ロックマンだ！

そして変化は、それだけに留まらなかった。

私のクラスには、あまり登校して来ない人がいる。  
その人の名前は雛森ゆたか。席は私の一つ後ろで、出席番号も私の一つ後。

凄く可愛らしい名前だけど、小六の時点で大学生を殴り倒してしまっほどの凄まじい強さを持った不良男子。

仕事熱心すぎる両親が自分を全く構ってくれなくなり、それにより溜まった鬱憤を様々な方法で解消しはじめた結果、そんなふうになっってしまった、そういう人。

ある日、その雛森くんが珍しく包帯や湿布まみれの大怪我で、そもそも本当に珍しく、星河くんと一緒に登校してきた。

……ていうか、え？

「おは え、スバルくん！？ 何その傷!？」

星河くんにゆったり駆け寄ろうとしていた響さんが驚愕した様子で猛スピードで駆け寄る。

それも仕方のないことだ。星河くんが、雛森くんに負けず劣らずの大怪我を負って、雛森くんと同じように包帯と湿布まみれだったのだから。

あはは、といつも通りに笑う星河くんは、響さんの質問に答える形で、

「昨日ちよつと、喧嘩してきた」

途端に批難めいた（いや、めいたって言うか完全に批難そのもの）視線が彼の隣、雛森くんに集まった。まあ二人が同じくらい大怪我してたら、もう一人が真っ先に疑われるよね。

しかし、その視線に気が付いた星河くんは「いやいや」と手を振って否定する。

「これやったの雛森くんじゃないからね」

「え、じゃあ誰が……」

「ヤクザの集団」

それもそれで結構な問題のような気がするんだけど……。ていうか、何がどうなったらヤクザの集団と喧嘩になるの？

私達のそんな疑問も意に介さず、星河くんは雛森くんを押しして教壇に立たせる。

「そんなことはどうでもいいからさ。ほら、雛森くんからみんなに話があるんだって」

本人的にはどうでもいい、らしい。

雛森くんを立たせた後、星河くんは二、三步後退して傍観の体勢に入る。みんなの視線が雛森くんに集中し、やがて若干俯き気味だった彼が顔を上げる。

雛森くんは、見たこともない、清々しさに満ち溢れた表情をしていた。

「みんな、……俺はもう無意味な喧嘩はしない。ちゃんと学校も来るし、絶対 いや、出来るだけ……いや、絶対に問題とか起こさないし、みんなに迷惑はかけない。だから、なんていうかさ……」

そこで雛森くんは一拍置いて、

「今更だけど、このクラスの仲間になっていいかな？」

真剣な表情でそう訊ねる雛森くん。みんなしばらく呆然としていたが、……やがて小さく笑い出す。

「……本当、今更ね」

「お前はとつくに仲間だつて」

みんなも彼と同じくらい真剣に返す。雛森くんは泣きそうになり、教卓に突っ伏して顔を隠した。

その後ろで星河くんが満足そうに頷いていて、

「……ああ」

またこの人がどうにかしてあげたんだと、私の好意が加速していった。

陸上部に入部してから二週間経って、顧問の先生から突然こんなことを言われた。

「素晴らしいバネです。とても二ホン人だとは思えない」

曰く、私の脚のバネはアメリッパ人並らしい。誇張とか脚色とか入ってると思うけど、とにかく二ホン人離れたバネを、私は持っているのだそうだ。

「この部が創設されて以来、あなたほどの才能の持ち主が現れたことはありません。……これならば、念願の全国大会出場……いや、もしかすれば優勝も狙えるかも知れません」

いやまあ、誇張とか脚色とか……あとお世辞とか入ってるんだろうけど。何か全然悪い気はしなくて、

「これからも、精進してください」

頑張ろうと思った。

それから私は、今まで以上に真剣に部活に取り組むようになった。その日のノリにも依るけど、とにかく天性のものがあるらしい私の脚は、時々先輩方より早い記録を叩き出すことがあった（翌日大抵筋肉痛で苦しむことになるけども）。

それを一部の先輩方は快く思っていないようで、嫉みの視線が凄まじかったが、なんだかんだで期待はしているらしく、ドラマとかで見る陰湿なイジメや妨害といった類の事件は起こらなかった。

……そんななったらさ、頑張るしかないよね。

先生は期待感の塊みだいになってるし、先輩方もプライドが傷付けられながらも期待してくれていて、頑張らなかつたら罪だよね。

だから私は、良い記録が出た翌日に起こるあの筋肉痛、あれが起らないように脚の筋肉をしっかりと付けること、そして何より、スプリンターに必要な、“短時間に全力を出してそれを維持するだけの体力”を付けることを決意した。

それから私は、部活後も一人で残って練習するようになった。先

生や嫉みの視線を向けてきていた先輩方までもが心配するくらい、それはもう練習しまくった。

五月二十五日。

何か身体の調子が悪くて、私は練習を早めに切り上げて帰路にっ  
いていた。

「……頭、痛い」

あと身体中が怠い。何だろう、過労かな。

「……とにかく休んで、早めに回復させて、もっと練習しないと…  
…」

呟いて、立ち止まる。渡ろうと思っていた横断歩道の信号が赤に  
なったからだ。

うわー、ここの信号長いんだよなあ……。早く家に帰って寝たい  
のに。

「……あ」

そこで私は、ふと視線を横に向けた。そこに見えるは歩道橋。高  
齢の方とか、私みたいに急いでる人のための素晴らしき橋。

「……………」

この信号が変わるまであと二分ほど。ここで待つより、歩道橋を  
渡った方がちよつと早い。

私は歩道橋を渡ることにした。

「……おー、高い」

ぶっちゃけ、歩道橋を利用するのははじめてだ。今まで遅刻とかとは無縁だったしね。

高い場所から見る新鮮な街の景色。ちょっと感動。

「……んう、名残惜しい」

チラッと後ろを振り返る。夕日に染まったビルとか、少し遠いけど若干見える海とかが何か綺麗で、でもやっぱり帰って寝たい気持ちの方が先行したので私はさっさと降りることにした。

……そうして半ばまで降りた、その時だった。

「あ……と」

一瞬、意識が遠のいた。足元がおぼつかなくなり、一段降りようと踏み出した足が空を切る。階段から足を踏み外し、バランスが崩れて、私は落下しはじめた。

「あれ？」

一瞬だけ頭に空白が生まれる。でもそれはすぐに不安と恐怖で埋められた。

「あ……れ？」

自分がどうなっているか、どうなるか、それが判って、叫ぶことも出来ずに小さい声が洩れる。

代わりに通行人の悲鳴が聴こえる。浮遊感が身体を支配する。「

あ、このままみんなの期待に応えられないまま私、死んじゃうんだ  
って気付いて、

「やだ」

泣きそうになった。

「やだ」

言っても落下する身体は止まってなんてくれない。身体に異常が出るくらいまで馬鹿みたいに練習した私を嘲笑うかのように、徐々に、徐々に地面が近付いてくる。

私は、怖くなって目を瞑って衝撃に備えて、

ゴガンツ！ って音がして、でも音の割りに大した衝撃がなかったことに疑問を抱いた。

「あれ？」

死んだと思ったのに、どうも死んでないみたいだ。ていうか、身体中そんなに痛くない。どうなってるの？

その疑問の答えは、目を開けたらすぐに待っていた。

星河くんが、私を抱き抱えて地面に倒れていた。

つまりだ。私にほとんど傷も痛みもないのは、彼が受け止めて助けてくれたからなんだ。

「あ、ありがとう星河くん……」

胸が高鳴る。身を呈して助けてくれて、しかも私は抱き抱えられ

ていて、高鳴らない訳がなかった。

しかし、その高鳴りもすぐに治まることとなった。

私の謝礼に、返事がない。

「……………?」

首を傾げる。何で、何も言ってくれないんだろう? って、すごい不安になる。

その理由は、手を動かした際に感じたヌメツとした水っぽい感触で判った。

「ほ、しか……わ、くん?」

一面、血だらけ。その原因が、星河くんの頭から流れ出ているからだと気付くのに、そう時間はかからなかった。

「ほ、星河くん!？」

私は、喉が張り裂けそうなほど強く、叫んだ。

## 第72話：キクリメモリー？

私は錯乱していた。ただただ、星河くん！ って、そう叫ぶだけだった。

既に周囲にいた通行人が代わりに119してくれたようで、救急車はわりと早く到着した。

でも、ギリギリなんだ。あんなに血が、しかも頭から出ているんだから、彼の状態が相当悪いことくらい私でも判ることだ。

こうなつた理由を訊かれた。

錯乱した私の要領を得ない拙い説明でもどうにか判つてもらえたらしく、念のためだからと私も救急車に同乗することになった。

私が星河くんの隣で祈るように手を組んでいると、ふと星河くんが口を開いた。

意識が覚醒した訳ではなく、寝言とか譫言とかだそうだけど、彼は確かにこう言った。

「花菱さん、大丈夫？」

呆れた。

こんな状況で、頭打って死にかけてる状態で、自分の心配をしるよつてこの時に、しかも意識まで失っているくせに、それでも口から出たのは他人の心配。

私はほとほと呆れて、呆れて、呆れて、呆れて、呆れて、呆れて、

「ッ」

声を上げて泣きそうになって、我慢して、声を殺して泣いた。

私はちょっと擦り傷がある程度で、もう軽すぎるくらいに軽傷だったんだけど、医者曰く、

「脚の筋肉が疲弊しきっていますね。それとこちらが本題ですが、あなた、少し栄養が足りていませんね」

だそうで、一瞬意識が遠のいたのもそれが原因だったらしい。しばらく休養しなさいって釘を刺された。

……そして星河くんだけど、どうやら命に別状はないらしく、意識も少ししたら戻るだろうという話だった。

しかし、それでも何十針も縫うほどの大怪我であったことには変わりないので、少し様子を見るとい理由で、彼は入院してしまっ

た。

……私の、せいで。

しばらくして星河くんは目覚めたらしいが、私はどんな顔で会ったらいのか判らなくなっ、会うのが怖くなって、その日は逃げるように帰宅した。

翌日、やっぱり謝りたいなーって思って、お見舞いの品を携えて彼の病室を訪れた。学校は、……まあ、サボった。

コンコン、と扉をノックし、「どうぞ」と言われて入室する。奥にあるベッドには、頭に包帯を巻いて上体だけ起こした状態の星河くんがいた。

適当に朝の挨拶をし、まずはお見舞いの品だろうと、果物をたくさん詰めたバスケット（我ながらベタだ）を突き出そうとして、

「……あなたも、僕の知り合いなんですか？」

凍りついた。

頭が真っ白になって、焦点が定まらなくなる。

そうとは知らない星河くんは続ける。

「……頭打ったんですよ、僕。そのせいなんでしょうか、色々忘れてしまっていて……。幸い、病室のプレートに名前が書いてあったので、僕が星河スバルだっていうのは判るんですが」

言葉の一つ一つが私の胸を抉る。

そういえば、そうなのだ。彼は頭を打ったんだ。割れるくらい、あんなに血が出るくらい強く。だったら、ありえない話じゃないんだ。

星河くんは、記憶喪失になっちゃったんだ。

私が馬鹿だったから。身体のことを顧みずに練習するような馬鹿だったから。

そのせいで、彼は記憶を失ってしまった。

「あ……う……」

泣きそうになる。いや、ていうかもう泣いてる。涙が流れている

のが感触で判る。

星河くんは戸惑っている様子だった。目の前で見知らぬ人物（言ったら余計に涙が出てきた）が突然泣き出したら、普通はそうなるだろう。

「ごめん……ごめん、ごめん……ごめんなさい……！」

声の上擦って、徐々に簡単な謝罪の言葉すら上手く発音できなくなってくる。それでも私は謝り続けた。多分いくら謝ったって償いにはならないだろうけど、それでも謝り続けた。

そしてついにそれすらも言えなくなつて、もう大声で泣くしかなかったところで、

「わああああーッ!? 待ってストップごめんごめんごめん！」

悪ノリしすぎた！ な、なななっ泣かないで“花菱さん”！」

「……え？」

名前を呼ばれた。記憶を失っているはずなのに、まだ教えていない、もう覚えていないはずの私の名前を、彼は呼んだ。

……あれ？

「あれ？」

「ちょ、本当ごめん！ お約束かな？ って思ってやってみただけど、まさかそんなに効果抜群だとは……！」

慌てた様子で捲し立てる星河くん。その言葉の一つ一つを、私は吟味してみた。

『悪ノリしすぎた』

『花菱さん』

『お約束』

『やってみた』

.....まさか。

「え、もしかして.....」

「う、うん、嘘。全部片っ端から嘘。昔のことは鮮明に覚えてるし、自分が誰なのかも判ってるし、君が花菱キクリだってことももちろん覚えてる！」

「.....」

そういつことらしい。

要するに、頭を打った時のお約束 「ここはどこ？ 私は誰？  
そしてあなたは誰ですか？」的なことを、私に対して行ったとい  
う話で.....。

「星河くん」

未だ上擦り気味の声で彼を呼んだ。「はい」と即座に返事が返っ  
てきて、私はゆっくりりベッド脇の椅子に座り込む。  
そこで、一つ注文。

「一発殴らせて」

「どうぞ」

私は渾身の一撃を、……頭は今危険なので鳩尾に叩き込んだ。

「……で、学校はどうしたの？ サボリ？」

私の一撃が予想以上に効いたらしく、星河くんはうずくまりながら訊ねてきた。

「うん、サボった。何か、授業受けるの面倒くさくなっちゃって」

「あはは、この不良め」

「違うないね」

二人してクスクス笑う。ただし、彼の表情に私に対する遺恨が欠片も含まれていないことが不思議で仕方ない私は、心から笑えてはいないけど。

私はバスケットの中からリンゴ（改良種。今が旬）とあらかじめ用意していた果物ナイフを取り出した。別の鞆から、紙皿も取り出す。

「剥いてあげる」

告げて、返事は聞かずに剥きはじめた。時々家でもやってるからスルスルと剥きやすく剥くことができる。ここで皮の最長記録に挑戦するのもいいかもしれない。

そうして半分くらい途切れることなく剥いたところで、星河くんがおもむろに口を開いた。

「大丈夫？」

「……何が？ リンゴの皮剥きくらいどうってことないよ。……ていうか、私はその言葉をそっくりそのまま返してあげたいよ」

「あはは。……そうじゃなくてさ」

私の返しに笑ってた星河くんが、急に真剣な口調になった。気にしながらも皮を剥き続ける私に対して、彼は訊ねる。

「……もしかしてさ、花菱さん。気に病んでる？」

プツンと皮が途切れた。次いでサクツと指にナイフが食い込んで、ダラーと血が流れた。

「いったあつ!？」

「大丈夫じゃないじゃん!? エーと、あつた! ほら、消毒液  
!」

消毒液が手渡される。すぐさまそれを、星河くんの枕元に置いてあるティッシュに染み込ませて傷口に当てる。半端なく滲みて悶絶しそうになるも何とか我慢して、血が一瞬止まった瞬間を狙って星

河くんがスタンバイしていた絆創膏を貼った。ガーゼの部分に再び出てきた血の染みができたのを確認して、顔の前で息を吹きかけながら振りまくる。

「いたあ……。んう、油断したあ……………」

「大丈夫？」

「うん、大丈夫……………それ、何に対しての大丈夫？」

「傷」

「じゃあ大丈夫」

「そっか、よかった」

安堵の息を吐く星河くん。私は指と、途切れたリンゴの皮を見て落胆する。最長記録どころか、自己ベストすら更新できなかったよ。ある程度落ち着いて、リンゴの皮剥きを再開した私は、呟いた。

「……………で、なんの話だった？」

「……………花菱さんが気に病んでないかどうか」

ピタツ、と皮剥きを止める。もう動揺して指を裂くのは御免だ。私は紙皿に塊を置きながら、

「……………病むに決まってるじゃん。私が、自分の身体の状態すら判らない、管理できないような馬鹿だったから、こんな大怪我させちゃったんだし」

「……僕が勝手に助けた結果だから、気にしないで」

「……気にするよ」

沈黙し、長い時間静寂が流れる。

私はそれに堪えられなくなり、リンゴの皮剥きを再開させる。動揺しているからか、上手く剥けない。

やがて半分から上が規則的で綺麗で、半分から下がボコボコの歪なリンゴが出来上がり、それを食べやすい大きさに切り揃えて紙皿に乗せる。そして、あらかじめ用意しておいた爪楊枝を突き刺し、星河くんに渡した。

「……………」

彼はベッド脇の小さい机に紙皿を置き、爪楊枝が突き刺さったりリンゴを口に運んだ。しゃりしゃりという聞き慣れた音がぐもった感じで響き、星河くんの顔が少し綻んだ。

とりあえず、空気は変わったようだ。

「……花菱さん」

爪楊枝をリンゴに突き刺し、それを私に向けて差し出す星河くん。これ食べるってことなのかと、凄く恥ずかしいと、ハッキリ言ってる気がしない。

しかし残念なことに、これは食べるって意味ではなかった。

「そんなに頑張った理由、教えてくれない？」

探偵が犯人や重要参考人を指差す時に使う指を、失礼のないよう

にリンゴと爪楊枝で代用しただけの話……なんだそう。とても残念で、何より星河スバルって人そのものが非常に残念な感じで、そんな残念な人に訊ねられた私は、

「……いいよ」

別に隠すほどのことでもないのだから教えてあげることにして、ついでに、どさくさに紛れて差し出されたリンゴを口に含んだりした。

「……という訳なんだけど」

私は全てを話した。

私の脚のこと、それに先生が期待していること、私を妬みながらも一応は期待してくれている先輩のこと。

それらを全部背負って、がむしゃらに練習しまくったこと。

それに対する星河くんのコメントはこうだった。

「……まあ、馬鹿だね」

一蹴。とにかく一蹴された。目茶苦茶反論したいけど、多分がむしゃらにしすぎた辺りのことを言っているんだろうから、結局反論できない。

星河くんの言葉はまだ続いた。

「期待とか妬みとかを全部背負うのはいいけどさ、……それで身体を壊したら元も子もないじゃん」

「う……」

確かに、それは元も子もない。期待は全て裏切ることになるし、期待半分妬み半分だった先輩も、……多分嘲りまくってくるだろう。いや、喜んで態度が軟化するかも。

「本当に期待に応えたいんだったらさ、ちゃんと休まない」と

「……はい」

凄く的確なアドバイス。もしかすると、彼も昔に似たようなことがあったんじゃないだろうか。

とにかく、医者にも休めって言われてるし、星河くんにも休めって言われたんだ。休むのが今一番なんだろう。

私がそんなことを考えていると、星河くんは独り言のように呟いた。

「……でも、凄いなあ」

「え？」

「凄い？ 何が？」

「……だってさ、身体壊したのも、一つの目標に向かって突っ走った結果でしょ？ 凄いなあ……って思ってた」

「そう？ ……でもさ、凄いつて言っても、星河くんには負ける

よ。スケール違うもん」

私は笑いながらそう言った。だってそうでしょ？ 三回も地球を救ったヒーローの凄さと、全国大会出場のために頑張りすぎて身体を壊した馬鹿の凄さなんて、比べるまでもなく前者の勝利だ。

しかしそこで、星河くんは信じられない一言を口にした。

「……僕は凄くないよ」

私は耳を疑った。

しかし聞き間違いではなさそうだった。

「………や、やめてよ、そういう謙遜。星河くんがそうじゃなかったら、他の人なんて紙切れだよ？」

「………」

星河くんの表情は暗い。突然どうしたんだろう。私には凄いつて言うておいて、自分のことは凄くないなんて。

そうやって私が首を傾げていると、星河くんはぼつりぼつりと話しました。

「………凄くないよ。ヒーローなんて肩書きは後から着いてきたものだし。………まあ、浮かれてた時期もあったかもだけどさ」

そこで一呼吸。

「………僕は、別に最初から地球を救ってやろうなんて思って行動しなかつたんだよ」

「え？」

その告白に、私は目を丸くする。

「いつもいつもいつもいつも、友達や知らない誰かが危険な目に遭ったり傷付いたりしてからようやく動いて、取り返しのつかない事態になりかけてようやく本気になる。地球を救ったのだって、その延長線の話なんだよ。……だってそうでしょ？ 初めから地球を救うつもりでいたなら、地球の危機なんて訪れる訳がないんだし」

星河くんが窓の外を眺める。その顔には苦汁の色が滲んでいて、どうも昔のことを思い出している様子だった。

……そうだ。私たちは、ロックマンの星河スバルに関わりがなかった人達は、彼が地球を救ったつていう結果しか知らないんだ。その過程のことを全く気にも留めないで、世間は彼をヒーローに祭り上げていた。

星河くんはそれが酷く辛かったんだ。

いろんな人を危険に晒して傷付けて、その代償で地球を救ったような自分が英雄扱いされるのが、たまらなく許せなかったんだ。

……だから、

「だからさ、僕は君のことを凄いつて思うんだ。だって向かう先が最初から決まってるんだから」

そこで星河くんは私に視線を向けた。

私は何を言ったらいいのか判らずただ照れて、彼の言葉を聞いた。

「……目標を決めて、そこに向かってひたすら突き進めることの方

が、中途半端な使命感で戦って世界を救うことなんかよりずっと凄いと僕は思うよ。だから君は誇ったっていいんだ。自分は凄いなだっと思ってもいいんだよ」

言い終わると、星河くんは私の頭に手を置いてきた。恥ずかしかったけど、他に誰もいないし、いいかなと思って振り払わないでいた。

そこで、彼は呟く。

「……まあ、それでもやっぱりやりすぎは駄目だと思っけどね」

「う……」

恥ずかしがりながら、私は言葉を詰まらせた。だってもう、これに関しては反論の余地なんてないし。

そうして私が沈んでいると、おもむろに頭を撫でられた。置かれただけでもあれなのに、撫でられるなんて、もう、なんだろう、……… 幸せの絶頂？

「……もう、何ー？」

それでも表面上は平静を装って、私は抗議するフリをする。

星河くんは慌てた様子で、

「いや、でもさ。やりすぎたのは確かに駄目だけど、花菱さんの努力を否定してる訳じゃないからね？」

「！」

その台詞を聞いて、私は目を見開いた。胸の奥からこう、何か

競り上がってくる。

そんな私の頭を撫で回しながら、星河くんは告げた。

「……要するにさ」

とても、優しい笑みを浮かべて。

「……よく、頑張ったね」

私は呆然とした。

……初めてだった。

先輩はもちろんだけど、期待している先生ですら、期待感が先走ってそんなことは言ってくれなかった。

親も、昨日の出来事を聞いたら怒るだけで（当然だけど）そんなことは言ってくれなかった。

……初めて、私の努力に対して、「頑張ったね」って言ってもらえた。

褒められたんだ。

「あう……」

途端、今まで感じたことのない気持ちが胸の中で渦巻きはじめた。星河くんを見ていたら、恥ずかしくて堪らなくて、顔を背けたくなる。

「う……」

……そっか、そうなんだ。  
今までののは、違ったんだ。本物なんかじゃなかったんだ。  
……これが、本物なんだ。

その日は、生まれてはじめて、本当の、本気の恋をしたんだ。

### 第73話：大好きです

そうだそうだ、そんな感じだった。

言いながら、キクリは天（上下左右が一切判らないので、実際はどうか不明だが）を仰いだ。

もううつすらと霞がかかっていたような細かな部分も鮮明に思い出して、しばし懐かしさを堪能する。

そして、悲しくなった。

あの瞬間はすごい純粹だった気がするんだけどなあ。どこに行っただらうあの気持ち。

思わず溜め息が出る。いつ頃からだろうか。こんな昼ドラマみたいにドロドロした、歪んだ想いに変わってしまったのは。

もう本当に、事あるごとに嫉妬して、最近など……憎悪まで芽生えはじめているのだから。

歪んだなあ。

苦笑するキクリ。そうしながら、この空間に微かに響くスバルの声に耳を傾ける。

『キクリさん、目を覚ましてよ、キクリさん!!』

未だに声は彼女のファーストネームを呼んでいる。しかし、最初に聴いたものとは随分と毛色が変わっていた。悲痛そうな声色で、今にも泣きそうな勢いで、呼んでいる。

その上、

『目を、覚まして』

この台詞だ。

この声がキクリの妄想や願望の産物なのなら、そんなことは決して言わない。こんな、聴いてるこちらの方が悲しくなるような声色にはならない。何故なら、キクリはそんなことを考えていないし望んでいないのだから。

しかしそうになると、あまり考えたくない予想が立てられてしまう。

この声は、自分の妄想でも願望でもなく、実際にスバルが発している声だという予想が。

……それはやだなあ。

もう本当に嫌だ。

そうだとしたら、『キクリ』と呼んでいることから推測……いや、推測もクソもなく、当然の如く、キクリのことを心配しているのだろう。

悲しそうな、泣きそうな声になるくらいにまで、どうにかなった彼女を心配して、叫んでいるのだろう。

そう仮定して、自分が寝ている……いや、こんなに叫ばれていることから鑑みるに、気絶していると付け加えて仮定して、キクリは呟いた。

だったら、早く起きてあげたいなあ。

そして、大丈夫だよー、と伝えて、安心させてあげたい。

自分のせいで悲しんでいるのなら、早めに喜ばせてあげたい。

スバルは、好きな人なのだから。

思わず目で追ってしまふほど、他の女子と一緒にいたら嫉妬や憎悪を抱くほど、どうしようもなく好きなのだから。

もう歪んでいて、純粹ではないかもしれないが、やはり根っこのその部分は変わらない。

花菱キクリが星河スバルを好きだということは、どんなに歪もうが変わらないのだ。

するとその思いが届いたのか、スバルらしからぬとんでもない台詞が響いた。

『本当に、もっと、もっと早く君の気持ちに、気付いていたら、こんなことには……』

……………。

あー、やっぱりコレ妄想じゃない？

キクリは呆れて、少し意識を失った。

目を開けると、キクリの手を握りながらうなだれているスバル今はロッキマンの姿だが　　が真っ先に視界に入った。

何かもう、呪文みたいに「キクリさん……」とか言っていて、……妄想じゃなくて現実だったことに歓喜して、それどころではない

と気付いて、少し声を出してみた。

「……あー、スバルくん？」

「!？」

軽く呼ぶと、彼はバツ！ と、とんでもない勢いで顔を上げた。混乱して、咄嗟にどんな表情をしたらいいのか判らなかつたらしく、顔が歪んでいて面白い。

やがて混乱状態からは脱したらしく、感極まって上擦った声でスバルは声を上げた。

「き、キクリさん、目が覚めたの!？」

「うん、おかげさまで」

「よ、よかった。……えっと、大丈夫？ どこも痛くない？」

「痛くはないけど、……ちょっと頭がぼんやりするかな？」

そうなのだ。

痛みは毛ほどもないのだが、とにかく身体中まんべんなく怠くて、頭が霞がかかったようにぼんやりする。

一体どういう状況なのかはいまいち理解出来ないが、とりあえず、自分に巻き付いているこの蔦がなければ、直立すら出来ないほど身体が弱っていることだけは判った。

そうやってキクリが首を傾げていると、スバルの表情が変わり、独り言を呟いた。

「……意識が戻っただけで、完全に解けた訳じゃないんだ」

「？」

意味不明な言葉。それに対する説明を、当然キクリは求めた。

スバルは相当逡巡した様子だったが、状況が状況だったので、話すことを決めたようだ。

やがて説明が終了し、キクリは納得したように頷いた。

感情が吸収されてる、か。頭がぼんやりしてる原因はそれか。

現在進行形でそんなことが起こっているのなら、こうなるのも当然だ。

……そのことに対する不安や恐怖はあるので、彼の言う通り、罪に含まれない感情は吸収されないらしい。

キクリは嘆くように呟いた。

「……怒ることも、妬むことも、面倒くさがることも、食べたいて思うことも、欲しいって思うことも、勝ち誇ることも、ムラムラすることも、……出来なくなるんだねえ」

「ムラムラって……」

キクリ的な“色欲”の表現に呆れるスバル。ただ、今はそんな場合ではないのでスルーだ。

「……で、これを解く方法は、罪に含まれない感情が罪の感情を凌駕する必要がある、か。……これってさ、『きゃー、怖いよー』ってなったら解けたりするのかな？」

「解けるかもしれないけど、実際どうなのか僕には判らないよ」

「……どっちにしろ、私は今そんなに怖くないから無理だよ」

「……え、怖くないの？」

心底意外そうな表情でスバルが訊ねてくる。まあ、その疑問はもつともだ。この状況でそんなに怖くないなんて、どう考えてもおかしいと思うだろう。

キクリは小さく笑いながら、一番判りやすい怖くない理由を話した。

「だって、傍にあなたがいるんだよ？ 怖いわけないじゃん」

瞬間、スバルの顔が赤くなったことを、キクリは見逃さなかった。だが、あえて言及はしない。

「……で、恐怖以外だとどんな感情を高めればいいの？」

「え？ ……混じり気のない、凄く純粋な“楽しい”とか、同じく純粋な“好意”とかじゃ」

「あ、じゃあもう私助かないや。とっくに何もかも純粋じゃないもん」

その言葉に、スバルは絶望の極みを味わったかのような、暗い暗い表情を浮かべる。……しかし、その表情は助からないことに対して絶望した様子ではない。もっと何か、別のことに絶望しているように思えた。

……洞察力が神懸かっているキクリには、今までのスバルの言動や拳動から、全てが理解できてしまったのだが。

「……ね、スバルく　って、何か普通に呼んでるね、名前」

「うん、そうだね」

「……まあ、良かったのかもね。最後までにあなたの名前を呼ばなかった、なんてことになったら、私成仏とか絶対できないし」

「……………」

スバルが押し黙る。目を伏せて、耐え切れなくなった“何か”に抗おうとしているのが、身体の震えから判った。

そんな彼を抱いてやるうか、とキクリは一瞬思ったが、腕が動かないので断念する。

だから、今のままの体勢で、言った。

「……ね、スバルくん。さっきさ、気付いてあげていたら……とか言ってたけど、もしかして、もう、気付いてるの？」

「……………うん」

「響さんと、白金さんのも？」

「……………うん」

「へえー、あなたにしては随分進歩したじゃん」

憎まれ口を叩きつつ、感情がすっかすかになった胸の内では、歓

喜に震えている。だってそうだろう。あの台詞も妄想ではなかったのだから。

……ようやく、好意が伝わったのだから。

「私さ、文化祭が始まってから……っていうより、スバルくんと文化祭回る前後にさ、自分を戒めたんだよね」

「？」

「いつになったら解けるのか判んないくらい強い戒めなんだけど、……今、無理矢理断ち切った」

そこでキクリは、スバルの内部に在るであろうウォーロックに「耳を塞げ」と命令した。既に霧囲気から色々と察していたウォーロックは、わざわざ出てきて耳を塞ぐ瞬間まで見せて、スバルの内部に戻らずに自分達が降りてきた穴を逆走して姿を消す。

その辺のことについてはオペレーターより判ってるじゃないか、と軽く感心し、目だけ動かしてスバルを見つめる。

こちらもどうにか霧囲気を悟ったらしく、若干辛そうだったがキクリを見つめている。

そのことにも少し感心し、

「気付いてるんだったらさ、もう、気兼ねなく言えそうだよ」

意を決して、

「……私ね」

言いたかったけど、遠慮して言わないでいた、

「星河スバルくんが、大好きです」

告白の言葉を、呟いた。

告白されたスバルは、どう反応すればいいのか判らなかつた。

雰囲気からなんとなく予想はついていたので、ある程度対策は練っていたのだが、いざされてみると混乱して頭が真っ白になる。策など吹っ飛んでしまった。

……とにかく、これにはちゃんと返事しなければならない。

だって、最後のだから。

純粋な感情が既にないというキクリの言葉が真実なら、そういうことなのだから。

だから、自分のことを好いてくれているこの娘には、ちゃんと返事しなければならぬ。

満足そうに微笑んでいるキクリは、はあ……と溜め息をつきながら、付け加えた。

「……これね、別に『良ければ付き合ってください』って意味の告白じゃないからね？ そこは判ってるよね？」

「……うん」

「……でも、だからって返事がいらなんて訳でもないからね？」

「……うん」

スバルは頷いた。キクリは「よろしい」と褒める。

返事は、やはり必要だ。だが、

何を言えればいいんだ。

こんなことは初めての経験で、しかもこんな極限な状況はイレギ  
ユラーすぎて、もうどうしていいのか判らない。

キクリが、瞳に僅かな期待を宿らせてこちらを見ている。その視  
線に圧されて、圧されて、圧されまくった結果、ようやく絞り出せ  
た言葉は、

「……僕も、花菱キクリさんが、大好きです」

そんな簡単な言葉だった。

しかし嘘ではない。本心だ。確かにスバルは、キクリのことが好  
きなのだ。……そこまで特別なものではないにせよ、とにかく好き  
なのだ。

そんな本心を込めた言葉は、人間にはとても追いつけない速度で  
キクリに届き、

「……嬉しい」

キクリは、極上の笑みを浮かべた。

直後にゆっくりと目が閉じはじめ、身体から力が抜けはじめ、

やがてその全てが終わった時に、キクリは動かなくなった。

「……………」

声が出ない。

吸収された訳でもないのに、感情が、心が空になる。

その状態でスバルは、歯を噛み砕けそうなほど強く食いしばる。

そして次第に、空になった心にある一つの感情が芽生え、その全てを支配しはじめる。

その感情は、

ぶっ殺してやる。

混じり気のない、本気の殺意。

その殺意はまずユノに向いた。次いでバツカス、ファントム・ブラックへと向き、やがて敵　十二神将全員へと向いた。

アイツらはもう、僕が死んだところでこの闘いをやめようとはしない。

シルフィーの話から、彼ら、正しくは五本指には別の目的があるらしい。おそらく、スバルの抹殺などその建前でしかないのだろう。

だったら、

僕は死なない。死なずに、アイツらを全員殺す。

これほどのドス黒い感情に囚われたことなど、今までの彼の人生にはなかった。故に歯止めが利かない。

まずはユノだ。

標的を定め、跳び上がろうとする。その前に一度だけ、もう動くことのないキクリを見た。

悲しくなり、辛くなり、謝罪して、でも涙だけは堪えて、スバルは告げた。

「……君の仇は、必ずとるよ」

そうして彼は踵を返した。脚に力を込めた。この穴を一気に跳び上がり、そのままの勢いでユノに奇襲をかけるつもりなのだ。

脚に込められる力を全て込め、それを解き放ち、スバルは大きく跳び上が

「ほえ？」

……る直前に、足場が全て掻き消え、脚が伸びるだけという情けない結果となった。

混乱して状態がさっぱり理解できないスバルは、そのまま自由落下し、

「ぐあ

仰向けに地面に叩き付けられた。そして追い撃ちの如く、

「ぐえっ!?!」

腹部に、キクリが落下してきた。激痛が走り、胃液が逆流しそうになる。それをどうにか堪えたスバルは、状況を確認する。

電波の破片。……薔薇が消えた？

ひらひらと風に舞う花びらのように、薔薇を構成していた電波が舞い降りる。その一つに触ってみると、脆く崩れ去る。どうやら本当に消えたようだ。

キクリさんの感情を吸収し終えたからか？

その可能性は高い。吸収する対象がなくなれば、消えるのも判る。……死んでしまっただけは感情が生まれることはもうないだろうから、そのせいかもしれないが。

キクリさん。

スバルは腹部に乗った状態のキクリに手を伸ばした。抱き抱え、直接地面に落ちなくてよかったと安堵する。

直前の出来事のおかげで安らかな笑みを浮かべている彼女を見て、再び悲しみが溢れ、

ドクン

そんな、音のような振動のようなものを、腹部に感じた。

「……………え？」

腹部にはキクリの身体、正確に言えば胸が乗っかっている。そのことを踏まえて、今感じたものの正体を考えた結果導き出されたものは

「……………んう、もう気付いたんだ」

「……………キクリさん？」

鼓動。心臓の拍動。花菱キクリが生きているという証。  
スバルが呆然としてしていると、全く動かなかったキクリがむくり、  
と身体を起こした。

「もうちょっと引つ張れるかなーって思ってたんだけど、……………こんなに早く消えるものなんだね、さっきの薔薇」

「あ、え？」

もう何がなんだか判らない。感情がごっちゃになって、どんな表情を浮かべればいいのかすらも、ぶっちゃけ判らない。

そんなスバルのことなど意に介さず、キクリはけらけら笑いながら、

「いやあ、お約束かなー？　って思ったからやってみただけど、効果抜群だったみたいだねえ」

「……………えっと、え、それって」

「そうだよ、あの時のあなたの真似。どう？　心臓に悪いでしょ？　あの時の私の気持ち判ったか！」

キクリが高らかに叫ぶが、そこは流石にスバルも反論した。

「いや、これレベルが違いすぎると思うよ！？　僕のは記憶喪失、君のは死亡、あー、もう、……………悪ノリが過ぎるよ！」

「えへへ、ごめん」

手を頭にコツン、と当てるぶりっ子的な動作とともにキクリは謝罪した。スバルは軽くイラツとするが、そこはまあ、堪えた。それよりも今はもっと訊くべきことがある。

「……えっと、結局大丈夫だったんだ？ いや、ていつかどうやって……？」

「どうやってって、スバルくんが言った通りの結果になったってだけじゃん」

言った通りの結果。それはつまり、罪の感情を罪じゃない感情が凌駕したということなのだろう。

それはまあ、解放されたのだからそうなったのだろうが、

「……でもさつき、何もかももう純粹じゃないから無理だって……」

彼女は確かにそう言った。自身への死刑宣告を、彼女は確かに口にしていたのだ。

キクリはその問いに、疲れたためかか細い声で答えはじめた。

「まあ、確かにあの時はそうだったよ。……でもさ」

そこで彼女は一拍おき、……死亡した演技の時に浮かべた表情より幾分か人懐っこく、それでも幸福の色が一層増した笑顔を浮かべつつ、言った。

「スバルくん、私のこと好きだって言ってくれたし」

「え、……？」

「だから、好きな人に『好きだ』って言われたらそりゃあ嫉妬も憎悪も吹き飛ぶよ、って話」

最初は判然としなさそうだったスバルも、そこまで言われれば流石に判るようで、「あ、ああ……」と頷いていた。

しかしそこで、一つ気付いてしまった。

「……こうなるの、もしかして狙ってた？」

「あ、バレた？」

悪びれる様子もなく言つてのけるキクリ。

それはつまりアレだった。スバルがああいう返事をしなければならなくなるような状況をあの短い時間の中で考え、作り出したということで、要するに全てはキクリの掌の上だったという話で……

「……はあ」

一気にしんどさが増した。

溜め息をつきつつ、跳び起きて大きく背伸びする。

「……じゃ、とりあえずここから避難するよ。この破片のせいで結構神々しい風景になっちゃってるけど、そこら中戦場なんだから」

舞い散る電波の破片を眺めつつ、スバルはそう促した。「うん」と頷いて立とうとするキクリだったが、

「……………」

「……どうしたの？」

何故か、地面に手をついたまま静止した。本人も些か驚いた様子で呆然としている。

そうして、一言。

「……立てない」

それに対し、スバルは疑わしげな表情で、

「……それも、演技じゃないよね？」

「ほ、本当だよ！ 腰が抜けて立てないの！」

必死に真実だとアピールするキクリ。まあ、死ぬかもしれないなかった状況から生還したのだ。頭で特に問題にしていなくても、身体は反射的に緊張していただろうし、終わって糸が切れてしまったのだろう。

「……で、どうするの？」

訊ねると、彼女は両手を広げて、

「抱っこ」

「却下」

スバルはにべもなくそう返した。中学生にもなっってそんなこと出来るわけないだろう、瞳がそう語っていた。

「……じゃあ、おぶって」

妥協してやるよ的な雰囲気漂うキクリが注文する。それも結構嫌だったが、いつまでもこんなやり取りを続ける必要性も暇もないし、抱っこよりはマシか、とスバルはその妥協案に乗ることにした。

「……………」

十数秒かかっただけでおぶってみて、判った。身体に力が入っていない。通りで妙に時間がかかる訳だ。

それに安定してはいるが、呼吸も少し弱い。やはり感情を吸収されたことによる副作用は相当なものがあるらしい。

何か、言っただけじゃなければならぬ。とにかく、労ってやらなければならぬ。

だが、何を言っただけじゃなければならぬのだろうか。

どうせなら気の利いたことを言っただけじゃいい。しかしこういう時に言う気の利いた台詞など、スバルには何一つ思い浮かばない。

刺激しないようにゆっくりと歩きながら散々考えた結果出た言葉は、再び単純で簡単なものになってしまった。

「……お疲れ様。よく頑張ったね」

自分のセンスのなさに愕然とするスバル。しかし彼は気付いていなかった。

今自分の口から出た言葉が、かつてキクリが望んで止まなかった言葉だと。彼女が自分に恋するきっかけになった言葉だと。

「……………はう、え？」

結果、スバルからは見えない位置でグツタリしていたキクリが、顔を真っ赤にして幸福そうな表情をしていた。

思わぬタイミングで再びその言葉を聞いた彼女は悶えそうになり、しかし身体が思うように動かないため結局そうはならず、そのことに少し感謝しながら、

「……………うん」

返事して、安心しきった様子で完全にスバルの背中に身体を預けた。

第73話：大好きです（後書き）

スバミソファンの方々を敵に回すような話でしたとき。

どうでした？

ちなみに、こんな話を書いた私もスバミソファンなんだぜ。

## 第74話：決戦？

『スバルー！』

「シルフ」

纏った風で電波の破片を吹き飛ばしながら、シルフィーが飛んできた。左手は相当グツタリした様子のウォーロックの首根っこを掴んでおり、かなりの速度でこちらを搜索していたことが判った。

急いで来たようだったが、言うべきことがまるで纏まっていなかったようで、ひたすら『ハー！ ハー！』と肩で呼吸しながらロックマンの前に突っ立っている。

そんな中、彼におぶられていたキクリが弱々しく呟いた。

「……………あー、シルフちゃんだー」

『……………花菱！』

それにより、彼女が生きていることを確認できたシルフィーは、判りやすいくらいの歓喜の表情を浮かべた。

思わずロックマンの背中側に回って、キクリの顔を覗き込む。

そこで、シルフィーの表情が曇った。

『…………………………』

瞳孔の開き方が左右の目で違っている。血の通いが悪くなっているのか、少々顔が青い。ユノのエモーションドレインが相当負担になっていたことが判る。

一応は救い出せたようだが、決して良いとは言えない状態だ。

……それでもいつもの調子を崩さないキクリには、いつそ敬意すら覚える。

『……凄いね、あなたは』

「……………」

そうやってシルフィーは褒めてみたのだが、褒められた本人が何故か意外そうな表情をしている。『？』と首を傾げる彼女に、キクリはクスクスと笑いながら、

「……なんだかんだ言っても、シルフちゃんはスバルくんのウィザードなんだね」

『え？』

「似てるよねえ、って話」

クスクスクスクスと笑うキクリ。ロックマンも、妙に納得したような表情で頷いている。

その意味も気になるところだが、

シルフィー的には、それよりももっと訊いておきたいことがあった。

「……ねえ、花菱」

『んう？』

「なんで、スバルのこと下の名前で呼んでるの？」

そうなのだ。いつも、というか今日の朝までは“星河くん”と呼んでいたはずなのに、つい今さっき、彼女は“スバルくん”と言ったのだ。

何がどうなってそうだったというのか。まさか、薔薇の中で何かしら進展してしまったのだろうか。だから彼女を救出できたとか。

これはもう一大事だ。

ミソラを応援する立場としては、真相を確かめなければならない。

「……………」

キクリがもうまともに見えていないはずの目で呆然とこちらを眺めている。その胸の内がシルフィーにはなんとなく読めた。

「んう、どう答えたものかなあ」

とか、絶対そういうことを思考しているはずだ。

彼女は更に問い詰めようとするが、そこでロックマンからの妨害が入った。

「ま、まあまあ。詮索とかよそうよシルフ。“キクリさん”だって秘密にしておきたいこととかあるんだよ？」

「あー」

その妨害に、キクリが「やっちゃったよこの人」とでも言いたげな声を上げる。そしてシルフィーがその“やっちゃった”の部分を聞き逃す訳もなく、

『キクリさん！？ 今絶対キクリさんって言ったよね！？ いやも

う、本当に？ 中で一体何があったのさー！』

自分やミソラの感知していないところで、何かこう、状況が一変してしまうような何かが起こったのではないかと気が気ではないシルフィー。そのまま掴みかからんばかりの勢いで二人に詰め寄り、

『……チープなラブストーリーが繰り広げられていた。それだけの話よ』

今この場にはいなかったはずで、できればもう接触は避けたかった人物から解答され、絶句した。

『……！？』

いつの間にか背後に佇んでいた、この事態の元凶とも呼ぶべきユノ・エンヴィーから全員大きく距離をとった。その様を、滑稽で愚かなものでも見るかのような眼差しで眺めていた彼女は、ゆっくりと、密林に潜む狩人の如く接近してくる。

そこでふと、口を開いた。

『……よく成功したわね、星河スバル。どうせなら、結局救い出せなくて絶望する顔を見てみたかったけれど』

「……あまり人間を嘗めるなってことだよ、ユノ・エンヴィー」

ロクマンの若干勝ち誇ったような物言いに、『そうね』と素直に相槌を打つユノ。そんな彼女の存在にようやく気付いたらしいキクリが、ロクマンに訊ねた。

「……誰？」

「……………君をそんな目に遭わせた張本人だよ」

「……ふーん」

彼女はゆっくりと頭をもたげて、ユノに視線を向けた。すると何やら唸りだし、しばらくして突然首を傾げたかと思うと、

「……思ったほど、怒る気になれないや」

そう呟いた。それにユノを除く全員が表情を曇らせる。もう、仇に対して怒ることすら出来なくなっているのか、と。

ユノはそれすらも滑稽だと言わんばかりに、不敵に笑った。

「……………何が可笑しいんだよ」

『ふふふ、そのレベルまで吸収できているのなら、とりあえずは及第点ね、と思つて』

言つと、ユノは懐から何かを取り出した。三、四センチ程度のサイズの、見様によっては植物の種のようにも見える、何か。それを彼女は二本の指で摘みながら、こちらに見せ付けてくる。

『これが何か判るかしら?』

『……………種じゃねえのか』

その問いに、ウォーロックはあまりにもそのまんまで見たままな回答をする。ロックマン達はそれに呆れるが、意外にも、ユノは頷いし、

『……そう、種。私自身が昇華するための、種。“私が今まで吸収してきた数多の感情を凝縮して留めている”、種。そして、』

そこで彼女は言葉を切った。“種”を摘んでいない方の手で、キクリを指差す。

そして、続けた。

『その娘から吸収した感情を、いましがた詰め終えた種よ』

「!?!」

その言葉に、ロックマンの目の色が変わった。キクリをシルフィに託し、瞬時に臨戦体勢を整え、飛び掛かるうとする。しかし、先にユノの方が動いた。

「!?!」

ロックマンの眼前まで一瞬で移動し、初動を無理矢理抑えつけたのだ。

そのままの状態で、彼女は訊ねてくる。

『……何のつもりかしら?』

「……君を倒して、それをいただく」

『無理ね。あなたにそれほどの力がないことはもう調べがついている。それに、もし仮に倒せたとしてどうするつもり? 大方、その娘の感情を元に戻そうとか思っているんでしょうけど、それはより一層無理よ』

ユノは“種”をちらつかせながら、

『数万人分の感情の中から、特定の人物の感情だけをピンポイントで取り出して、元の器に戻す。そんな芸当、奇跡が起きたとしても私にだって出来ないわ』

そこまで言うと、彼女は抵抗するロックマンの力を流して地面に叩きつけた。肺の中の空気を無理矢理吐き出された彼は悶え、しかしそれでもユノを睨み続ける。

そんな彼に、ユノは少し優しげな口調で、

『……心配しなくても、各々の感情が僅かでも残っているのなら、そのうち元の容量まで戻る』

「え？」

と言おうとして咳込んでしまうロックマン。シルフィーが背中を摩って落ち着かせてあげている間に、何故かユノは踵を返した。

そのまま振り返らず、『ああそうだ』と呟き、

『あなたのお友達の……ツカサとかいう名前の子。そろそろ殺されるわよ』

そう告げた。

全員から「は？」という疑問の声が上がり、その反応をやはり滑稽に思ったらしいユノが笑う。

『ふふふ、私なんかに構っていなければ、こんなことにはならなかったでしょうね』

最後に独り言のように呟いた次の瞬間には、彼女の姿は消えていた。異常な速度なのだが、もはや誰一人としてそのことには関心を向けていない。

彼らの関心ら、全て彼女が放った言葉に向けられていた。

ツカサくんが、殺される？

ようやく一人の命を救ったというのに、また一人死にかかっているという事態に絶望するロックマン。

虚言である可能性もあるのだが、何故かそうは思えない。

酷い焦燥感に駆られたロックマンは、キクリを早急に避難させたあと、さきほどファントム・ブラックが言っていたプールへと向かった。

ツカサとバツカスの戦闘は熾烈を極めていた。

一人になったことにより身体能力が格段に向上したツカサに、バースーカーモードへと状態変化して身体能力が向上したバツカス。攻撃力や速度は後者の方が圧倒的に勝っているが、動態視力と神経伝達速度はズバ抜けて前者の方が高い。その結果、結局力が拮抗してしまい、もう十分近く戦闘を続けているというのに、未だ決着がつかないでいた。

「ロケットナックル!!」

『クロスブレイド!!』

ツカサの腕が発射され、バツカスが描いた十字型のエネルギーが放たれ、両者が激突して大きな爆発が巻き起こる。威力としては、バツカスの十字の方が遥かに上なのだが、いざぶつかってみると互角だった。

これは、ツカサの拳が十字の最も脆い箇所を打撃した結果なのが、頭に血が昇った状態のバツカスにそれが理解できる訳もなく、

『クソが、これも互角かよ!! どうなってんだオイ!?!』

完全に力が拮抗しているものと思い込んで苛立っていた。

『チツ! いいかげんだれてきやがったぜ』

「……じゃあやめたら?」

『……いや、やめねえよ。この半月、テメエのことを殺したくて殺したくてウズウズしてたんだ。テメエを殺すことだけを考えて過ごしてきたんだよ。それなのによ……』

バツカスは呪詛の言葉のように呟き、

『やめられる訳がねえだろうがッ!!!』

瞬間移動でもしたのかと錯覚するほどの速度でツカサの背後をとった。それを神懸かり的な速度で感知したツカサは、身を翻して振るわれた大剣の力を上手く流して回避する。

バツカスの体勢が崩れ、その隙について彼は、いましがた再生し

た腕を構えた。そして、

「ロケットナックル!!」

放つ。

鳩尾に拳を減り込ませ、バツカスが大きく吹っ飛んだ。呻く彼の瞳から徐々に赤みが引き、元のくすんだ色に戻る。

“酔い”が、醒めたようだった。

『ぐう……、く、そ……』

“酔い”の反動で身体中に激痛が走り、膝をつく。そんな彼の眼前に、ツカサは立った。

「……終わりだよ。もう判っただろ。あの暴走状態になったところで互角がいいところ。でも頭に血が昇ってるから、僕が誘っていることにも気付けない」

だから君は僕には勝てない、あえてそれは口には出さなかった。しかし伝わっているのだろう。バツカスは顔を歪めた。

「……君には死んでもらう。スバルくんの命を狙っていることは判ってるんだ。情けはかけない」

『……そうですね』

ツカサの宣告に、バツカスは頷いた。自嘲気味に呟く。

『ノーマルモードでは身体能力が足りない。バーサーカーモードでは思考力が足りない。確かにこれでは終わりでしょうね』

……ただ、と彼は付け加える。

『それ以外なら、話は別ですがね』

途端、二人が立っていたウェーブロードが砕け散った。バツカスの大剣から放たれた衝撃波が原因のようだった。

「なんっ……!？」

まさかの行動に驚愕するツカサ。それもそのはず。こんなもの、どう考えてもメリットがあるとは思えない。むしろデメリットまみれのはずだ。

……しかし、そうではなかった。

バツカスには、メリットがあつたのだ。

彼は、僅かでも、一瞬でも、ツカサの動揺を誘えば、距離をとれば、それで良かったのだから。

「!?!」

落下していく中で、ツカサは見た。

バツカスが、腰にぶら下げていた酒瓶を手に取ったのを。

また懲りずにバーサーカーモードになるのかと思つたが、どうも違う気がする。

酒瓶から感じられる周波数が、さきほどまでのものと微妙に異なっているような、そんな気が

ヤバイ。

直感が告げる。アレを飲ませてはならない。

ツカサは手近なウェーブロードに手をかけて体勢を立て直す。バツカスはそのまま自由落下して更に距離を離していく。

ヤバい！！

ツカサは腕を剣に変化させて飛び出した。バツカスは既に酒瓶に口をつけていた。

まだ間に合う。酒瓶の効果が出るまでにラグがあることは、既に判っている。

そうして状態変化途中の彼に追いついたツカサは、息づく間もなく斬りかかって

第75話：決戦？（前書き）

更新遅れてすみませんでした！

m ( ) m

## 第75話：決戦？

ガシャアアアンツ！ というつんざくような轟音を、ファントム・ブラックを拘束したハープ・ノートは耳にした。まるで近くで落雷があつたような、そんな凄まじい音だった。

「『……つたあ』」

小さく呻き、苦悶の表情を浮かべる。犬をも遙かに凌駕する聴力を有する彼女の耳が、今の轟音を必要以上に拾ったため、鼓膜に激痛が走つたのだ。

……そうでなくとも、相当な痛みが走るほどの音だろうが。

雷？ いや、でも今日は昼夜問わず快晴だつて今朝言つてたし。

耳を摩りつつ、ハープ・ノートは首を傾げる。

予報通り、今日は快晴だった。現に、空には欠片も雨雲が、それどころか普通の雲すら見当たらない。雷が落ちるような要素などないはずなのだ。

ならば今のは雷ではないのかと問われれば、彼女はとりあえず「No」と答えるだろう。

何故なら、今まで彼女が思い浮かべていた雷は自然発生した雷なのだから。

ハープ・ノートは知っている。

人為的に発生する雷を。それを発生させる人物を。

双葉くん。

F M星において、“雷神”の異名を持つほどの実力者であるジェミニをウィザードとして従える、同い年の少年。

彼らの能力は電気で、初日のバトルウィザード大会の様子だと、空から標的に向かって雷を落とすといった芸当も可能のようだった。先刻ファントム・ブラックがバツカスに伝えた話が真実ならば、彼もこの戦場のどこかにいるということになる。

ならば、十中八九戦闘中だろう。それもおそらく、バツカスと。

今の音からすると相当な威力だよね。

それならば、もう戦闘は終わったのだろうか。彼は、勝利を収めたのだろうか。

……そう信じるしかないだろうが。

とりあえず、今はこっちだ。

少し頭を振った後、ハーブ・ノートは眼下の敵に視線を戻した。

豎琴から伸ばした弦に搦め捕られたファントム・ブラックは、全身の骨が幾つか砕け、筋肉も数ヶ所断裂している。高所から地面に叩きつけられたというのに生きている上、この程度の怪我で済んでいることは称賛に値するが、それはどうでもいい。

もう、彼は動けない。意識はあるようだがまるで意味を為さない。何せこの怪我だ、歩くことすら不可能だろう。

「『大丈夫ー?』」

「……………」

皮肉っぽくハーブ・ノートは訊ねるが、ファントム・ブラックは無言だった。

感情の振れ幅が極端なこの状態故か、その態度に蹴り殺したくなるほどの憤りを覚えたが、どうにか抑制する。

殺してはならない。彼は指名手配犯だし、なにより、この闘いにあちら側として参戦しているくらいだから、情報を持っているかもしれないのだ。

例えば、シルフィーやセイレーン、メルクリウスすら知らないよ  
うな、十二神将たちの裏側を。

もしそうなら、これから先、対策も立てやすくなる。

シルフィーが離反する際に耳にしたというあちらの目的が判明すれば、誰を狙ってくるのか、どこに現れるのか、ある程度の予想をつけることができる。

とは言っても、彼は簡単に口を割るタイプではなさそうだ。……  
それならまあ、多少どころかかなり非人道的ではあるが、洗脳でも何でもしてみせよう。

……彼女がそう決断した、その矢先のことだった。

「……………ンフフ」

ファントム・ブラックが不敵に笑ったのは。

「『……………何がおかしいの?』」

この状況でもなお笑う彼に対して、不快感を顕にしつつハープ・ノートは訊ねた。しかし彼は答えず、ただ笑うのみ。

それに、徐々に不安が募る。

まだ何かあるんじゃないか? と。

「『……………何で、笑ってるの。いい加減鬱陶しいよ』」

様々な感情が抑制しきれないほど増加し、本音が洩れはじめる。

拘束のために若干緩めていた弦も、それに呼応してか食い込むほど強く絞まり、ファントム・ブラックは呻き声を上げた。しかし、それもすぐに笑い声に変わる。その様子に、ハープ・ノートは思わず

「『変態……』」と口にしてしまった。

それを耳にしたファントム・ブラックは、笑いながら告げる。

「……変態か。そうだな、そうだろうな。自覚はあるさ。自分でシナリオを作成し、周りがその通りに、事がその通りに動かなければ癩癩を起こす。判っている、確かに、私は変態だよ」

「『あ、いや、それじゃなくて』」

「そして」

自分の言った変態の対象がその妙な性癖に対してではない、と伝えようとしたハープ・ノートを遮り、彼は続ける。

愉快そうに。勝ち誇ったように。嬉々とした様子で、だ。

「事がシナリオ通りに運んだ時、どんなに危機的な状況であっても自然と笑いが込み上げてくる。私は、そういう変態さ」

「『!?!?』」

その一連の台詞に、ハープ・ノートは一つ懸念を抱いた。

彼は今確かに言った。事がシナリオ通りに運ばなければ癩癩を起こし、シナリオ通りに運べば笑う、と。

それは事実だろう。彼女は過去に幾度か、そういう場面に出くわしている。

……ならば現在は、そんなのだろうか？

シナリオ通りにならないと癩癩を起こすでもなく、ただ勝ち誇ったように笑っているということは、現在のこの状況は、まだ彼のシナリオの上にあるということなのだろうか？

「……私は」

ファントム・ブラックが、気味の悪い笑みを浮かべながら呟く。

「……今回、不本意ではあったが、シナリオを“二つ”用意した」

「『……ふた、つ？』」

「そう、二つだ。一つは当然、私が直接星河スバル　ロックマンを打倒するシナリオ。ユノ様の能力で戦闘能力が向上した状態ならば可能だと思ったんだが、これはまあ、見ての通り頓挫したよ」

愉快そうに自嘲する。しかし、ここではじめて気付いたのだが、彼の瞳には凄まじいほどの怒りが内包されていた。やはり、いくら二つ用意したといっても、自分の作成したシナリオが潰されるのは良い気分ではないようだ。

そして、と彼は続ける。

「もう一つだ。……いま冷静になって考えてみれば、ロックマンを亡き者にするという私のシナリオの終着点には、こちらの方が近く、確実性があるよ」

「『……』」

嫌な、予感がする。

シナリオは二つある。そしてその一方が、今まで通り自分自身を中心に据えたエピソードなのだという。

ならば、もう一つはどうなのだろう。

彼は動けない。今までなら、その時点で彼のシナリオは破綻して、遁走するか御用になる以外の選択肢が消滅する。今までならばそんなのだ。

……しかし、今回彼が用意したというもう一つのシナリオは、その口ぶりから察するに、ファントム・ブラック自身が動かなくても成立する類のシナリオなのではないのだろうか。

「……薄々、感づいているだろう？ もう一つのシナリオの主演は、私ではないことに」

まるで心を読んだかのようなタイミングで、彼はそう呟いた。

「……知りたいか、もう一つのシナリオの主演が、誰なのか」

思わず頷きそうになり、寸前で押し止める。ここで頷いてしまえば、後はもうファントム・ブラックのペースになってしまう。それだけは避けたかった。

その結果、肯定も否定もしない彼女にファントム・ブラックは苦笑する。

「まあ、初めから答えてくれるとは思っていないよ。……それで構わない。どうせ勝手に喋るからな」

そう呟きつつ、ファントム・ブラックは目を閉じた。心が読める訳ではないので想像でしかないが、もう一つのシナリオとやらを思い浮かべているのではないだろうか。

そうした後、彼は語りはじめた。

「……“裏切られた勇者”という話を知っているか？」

「『……………？』」

いま全く関係なさそうなタイトルについて、彼は訊ねた。正直、彼の問いに対して答えるつもりがないハープ・ノートだが、思わず首を傾げてしまった。問いに、ではない。そのタイトルにだ。

ハッキリ言つて、そんな後ろ向きなタイトルは全く聞いたことがなかった。

そんな彼女の気持ち伝わったのか、ファントム・ブラックは返答を待たずに口を開いた。

「……………ないだろうな。当たり前だ、恥じることはない。何せ“裏切られた勇者”は、“赤頭巾”のような改訂を試みる余地がないほどにモラルがなさすぎて、歴史から完全に抹消された話だからな」

ファントム・ブラックは、一拍置いて続ける。

「……………“裏切られた勇者”は、神が自身を遙かに上回る力を有する勇者ジークを恐れ、魔女と共に勇者を打倒するというとんでもないストーリーだ。魔女がジークの愛するお姫様を誘拐して彼をおびき出し、その場でジークを神が抹殺する、こういった流れでな」

……………確かに、それはモラルがない。それこそ“赤頭巾”の、狼は二人を丸呑みにしたのです。猟師が狼の腹をかつ捌いて二人を救出したのですみたいな、若干無理のある救いの道を与えることすら不可能な程に。

しかし、その話は今は関係ないはずだ。関係ないはずなのに、

あらすじを聞いた瞬間に、何故か今までで最も巨大な不安が過ぎ  
った。

嫌な汗が吹き出てきて、非常に気分が悪い。

そんな彼女の様子に気付いているのか、ファントム・ブラックは  
不敵に笑いつつ続ける。

「……しかし、その話はロックマン打倒には最適だった」

無慈悲な彼の言葉が、胸をえぐる。

「だから、演じさせてみたのだよ、ユノ様に、バツカス様に、貴様  
たち全員に」

「『……………』」

「無論、神役はバツカス様だ。魔女役はユノ様。ならば勇者役は？

お姫様役は？ ……簡単な話だ、神や魔女に敵対する君達さ」

上機嫌で喋り続けるファントム・ブラック。しかし彼は、そこで  
溜め息をついた。

「……しかしな、中々そのシナリオを実行するに至らなかったんだ。  
バツカス様は双葉ツカサ打倒に躍起になっており、お姫様役として  
選択したあの少女も救われた。どうにも役者がやる気がなくてな」

ただ、と彼は不敵に ……ではなく今回は獰猛に笑いつつ、告げる。

「……バツカス様が目的を果たし、ユノ様がお姫様役を再選択して  
くださった今は別だ」

「『なん……っ！』」

今、彼はなんと言った？ バツカスは目的を果たした、ユノがお姫様役を再選択した？ それは、つまり、

双葉くんが負けた上、花菱さんみたいな犠牲者がもう一人出るってこと！？

ここにきて、ハープ・ノートは明確な焦りをみせた。それはそうだが、知り合いと、無関係の誰かが危機的状況に陥っているかもしれないのだ、いてもたってもいられない。

そうやって彼女が集中を欠いた瞬間に、ファントム・ブラックは、弦を断ち切った。

「『！？』」

「気絶させないでくれてありがとう。おかげで回復する時間と抜け出す力を蓄えられた」

彼は宙に浮いて、身体の調子確かめるようにステッキを振るう。

「そしてお礼ついでだ、誤解と正解を一つずつ伝えよう」

ファントム・ブラックの姿が消える。位置は聴こえるため判るが、今は攻撃するつもりになれない。彼の言う、誤解と正解が頭の中で引っかかっているからだ。

「まず誤解だが、ユノ様が再選択したというのは、エモーションド

レインの対象ではない、あくまでお姫様役だ」

そもそもあの方が一日に吸収できる感情にも限界があるからな、と呟きつつ指を一本立てる。

「そして正解、つまり君がさきほどから知りたがっていた主役だが……君はもう、判っているだろうか？」

……その通り、とつくに判っている。ただ、彼女は信じたくないのだ。勇者役が、“彼”であることを。

だから声に出したくない。考えたくない。一度認めてしまったら、あとは嫌でも最悪のビジョンが浮かび上がってしまうから。

「ああ、そうだよ。勇者役は」

ファントム・ブラックは、そうやって口をつぐむ彼女の心をえぐるように言った。

「 星河スバル、つまりロックマンだよ」

雷鳴が轟いた瞬間、ロックマンはツカサの勝利を確信した。

バトルウィザード大会で見せた広域殲滅型のジェミニサンダーを連想したからだ。

あの技の威力は、ウィザードの状態ですらウォーロックを一撃で

戦闘不能に陥らせるほどだったから、電波変換しているであろう現在の威力は、正直図り知れない。

だから、勝ったんだ、と思った。ユノが言ったことはこちらの心を掻き乱すための狂言なんだ、と勝手に納得した。

それ故、

バツカスに足蹴にされているツカサを見た時は、心が折れそうになった。

『……おや、来ましたか星河スバル』

バツカスの視線がこちらに向く。その瞬間、ロックマンは怯んだ。鋭すぎる眼差しだった。

初めて会った時のものより、バーサーカーモード時のものより、圧倒的に。

『丁度良かった。“ワタシ”も今私用を済ませたところですからね。……それにしても、流石ですね。ユノ様のエモーシヨンドレインから解放するなんて』

流暢に、しかし淡々とバツカスは喋る。流石、と感動している様子なのに、口ぶりからは全くそれが窺えない。

それに幾分か違和感を覚えるが、しかし今はどうでも良かった。

「……どうも。……それより、早くその足を退ける」

なるべく、感情を押し殺して告げる。しかしバツカスは気にした様子もなく、やはり淡々と告げる。

『「冗談を。さきほども申し上げました通り、彼を殺さぬ限りワタシの怨念は消えません』

ツカサの頭にかかる足の重圧が増す。彼はもう身体を動かすどころか声すらも上げられないようで、まるで抵抗していなかった。

「やめろッ!!」

ロックマンがバツカスに銃口を向ける。しかし意に介さない。もはやただのバスターくらいでは、彼の意識をこちらに向けることは不可能なのだ。

バツカスが笑った。目的の達成が目前まで迫っているからだろう。

「やめろオオオオッ!!」

ロックマンは絶叫し、駆け出した。だが間に合わない。バツカスの足がツカサの頭を踏み砕く方が圧倒的に早い。

しかし、

『!?!?』

それより、ツカサが救出される方が早かった。

踏み付ける対象をなくし、宙に浮いたような状態になっていた足が、そのまま硬いコンクリートの地面を踏み砕いた。そこを中心に半径約十メートルほどが陥没し、走っていたロックマンはバランスを崩して倒れそうになる。

「う、わっ!!」

どうにか踏み止まり、瞬時にフェンスの上へ退避する。陥没した地面にプールの水が流れ込み、ちよつとした湖が出来上がる。その中心で怪訝そうにしていたバツカスがふと空を仰いだ。釣られるようにロックマンも見上げてみると、

「…………シルフ！」

シルフィーが、ツカサを抱えた状態で浮いていた。表情には全く余裕がなく、息もかなり荒い。相当ギリギリだったのだろう。

そのシルフィーが、まっすぐロックマンを指差しながら抗議をはじめた。

『…………や、やつと追いついた！ 一人でさっさと行きやがって、こつちはこの学校の地理まだ半分も覚えてないんだよ！？ 探すのどんだけ手間取ったと思ってるの！？ ……そんで来てみればこれだし、慌てて助けはしたけど、正直代わりに踏み碎かれるかと思ったよ！ ……つたく、本当にもう、私いい加減疲れたっつもの！』

不満を全てぶつけられた。彼女のその剣幕に思わずロックマンは怯み、バツカスは腰まで水に浸かりながら呆然としている。

「あ、いや、ね？ ほら、ちよつと、急がなきゃヤバいんじゃないかって思ったから、つい…………」

『知ってる！ 判ってる！ だからこそ怒ってるの！』

シルフィーが、ロックマンに詰め寄る。

『そうだよ、コイツが心配だった、それは重々承知してるよ。けど、だからって一人で行くのはおかしいでしょ！？ 相手が誰だか

判ってる？ バツカス様だよ？ メルクリウス様から聞いた話じゃ、勝てなかったんでしょ？」

「……は、はい」

『そんな相手に一人で挑んだらまた負けるでしょ？』

「……はい」

『判ってるんだったら一人で行くなよ！』

空いている手で頭を思いきり殴られる。リアクションに困るくらい痛い痛みが走り、呻き声上がる。

そんな彼の肩を、殴った手で、シルフィーは優しく掴んだ。

『……だから私も一緒に闘う。それで勝てるってわけじゃないけど、絶対一緒に闘ってやる。私だってあなたのウイザードなんだから』

ついさきほどまでとは違う落ち着いた口調で彼女は告げた。ロックマンは殴られた箇所を摩りつつ、呟く。

「……うん、ありがとう」

『ん、判ったらいいの』

腰に手を当て、嘆息するシルフィー。ロックマンは照れたように頬を掻く。そんな様子を眺めていたバツカスは、一つ呟いた。

『……痴話喧嘩は終わりましたか？』

「『違う!』」

全力で否定する二人。しかしそんな自分の発言に対する反応すらどうでもいいかのように、彼はシルフィーを指差した。

『シルフィーさん。貴女が抱えているその少年をこちらに渡してはくれませんか？ とどめを刺したいのですが』

『お断りです。コイツもスバルの友人ですから、絶対殺させません』  
即座に彼女は断った。バツカスもそれを見越していたのか、既に臨戦体勢に入っている。

『……ならば、仕方ありません』

バツカスの爪先に力が入る。それにより水面が揺れ、小さな波が生まれる。

あの人がああいう状況だったのは幸運だな。水のおかげで、いつ動くのか判りやすい。

水面に意識を集中させる。揺れが彼の動きを伝えてくれるから、こつしていれば、ある程度は安心できる。

……そう思っていたシルフィーは、一瞬後に自分の甘さを知った。

『貴女ごと、斬殺します』

『……』

背後から、バツカスの声が響いた。見ると、水溜まりには既に彼の姿はなく、少し遅れてなくなった体積分を埋めようとプールの水が再び浸水を始めていた。

いつ、動いた？

振り返りざま、シルフィーは疑問に思う。

意識は完全に水面に、ひいてはバツカスの腰付近に集中させていた。動く前兆などなかったし、動く際の波も起こらなかった。

なら何故、彼は背後にいるのか。

それほどに、彼は高速の移動ができるというのか。

疑問が尽きぬまま、バツカスの剣が振り下ろされて、

「エドギリブレード！」

ロックマンが、刀で庇った。

『……す、スバル』

「……気を、抜かない方がいいよ。コイツ、下手したらメルクリウスより速い」

余裕のなさそうな声でその事実を告げる。それは、その通りかもしれない。

メルクリウスだってこちらが感知できないほど速いが、それでも初動は見切れた。しかしバツカスは、その初動すらまるで視認できなかった。

シルフィーが一万年以上見てきたバツカスには、これほどの異常な速度はなかったはずだ。

……彼に、何が起きた？

「……シル、フ」

ロックマンが呻き声を上げる。ハツとして見ると、刀の半分以上に亀裂が走っていた。もう持ちこたえるのも限界なのだろう。

シルフィーが退避する。それを見届けたロックマンはエドギリブレードを放棄し、全力で後方に下がった。

バツカスの大剣が空を斬る。余波がロックマンたちを吹き飛ばす。空中で体勢を整えた二人は、小声で言葉を交わした。

『……どうする?』

「……とりあえず、シルフはツカサくんを安全な場所まで運んで」

『でも、そしたらスバルが……』

その言葉を遮り、ロックマンは「大丈夫」と胸を叩く。

「君が戻ってくるまではまともに闘わない。防御と逃げに徹するよ」というか流石にあれに一人で勝つのは無理そうだし、と苦笑しつつ付け加える。

ロックマンはさきほどバツカスの大剣を受け止めた方の手をプラプラと振りながら、

「……だから、早く行って早く帰ってきて。僕の予想が正しかったら、アイツ、ちょっと本気で面倒くさいことになってるから」

『……面倒くさいこと?』

「あとで話す。早く行って」

『わ、分かった』

シルフィーが全速力で離脱していく。やはりというか彼女を追おうとするバツカスに、ロックマンは二枚目のエドギリブレードで斬りかかる。大剣で簡単に受け止められるが、とりあえず今度は、動き出す前にどうにかできた。

バツカスが不満げに呟いた。

『……邪魔です、退いてください』

「退かないし、君らのターゲットってそもそも僕だろ？ 私情で見逃しちゃっていいの？」

『……………』

大剣にかかる力が増す。同時に大剣が紫色に発光し、ロックマンの刀がまるで豆腐のように斬り裂かれる。慌てて後退する彼に、バツカスは言った。

『……それもそうですね。あちらはいつでも殺せますし、優先順位を入れ替えても問題ないかもしれません』

バツカスの言葉がロックマンの耳を揺さぶる。しかしそれより、彼の意識は斬り裂かれた刀の方に向いていた。半ば辺りから先がなくなつた刀の切り口はやけに綺麗で、あの大剣が相当な切れ味を持っているということが窺える……が、

前回闘った時、あの剣にそんな切れ味はなかった。ていうか

そもそも、大剣の特性って切れ味じゃなくて破壊力だし、根本からしておかしいんだ。

それに、

先刻と今、彼の大剣に触れた方の手を眺めつつ、ロックマンは顔を歪める。

受け止めた手が、異様に痺れる。

重量とバツカス自身の膂力もあるから衝撃が凄まじいものがあるというのは理解している。前回もそうだった。しかし、今回はそれ以上だ。

受け止めた時、手首から先が異様なほど痺れた。“斬りかかった時”は肘まで痺れて手首から先の感覚が完全になくなった。

「……エドギリブレード」

痺れて感覚のなくなった腕を再び刀に変化させる。三枚目のエドギリブレード、硬度はかなりのもののはずだ。

だがおそらく、足りない。

だから、多少の副作用があるうと、防御は固めないといけない。

「……ウォリアーブラッド」

直後、表面のパーツが最大値まで硬質化する。バスターに込められる電波エネルギーの容量が増したのが判る。そして、体力が徐々に減少していくのが判る。

「……ロック」

『……おう、判ってる。内部のバグは、最大限俺が抑えてやるよ』  
頼む前に了承してくれる。長年相棒をやっているだけあって、こちらの考えはお見通しのようだ。

「ありがとう」

感謝の言葉を述べ、バツカスに向き直る。彼の片手に握られている大剣はさきほどと同じく紫色に発光しており、時々火花が散っている。

『……準備は終わりましたか？』

「おかげさまで」

感覚のない腕を無理やり動かして、構える。あちらも大剣を握り直し、臨戦体勢に入る。

そこでロックマンは、もう一度思考する。

もし、僕の予想が正しかったら、

その隙にバツカスが斬りかかってくる。まさに一瞬でこちらの背後まで移動して、だ。

ロックマンは反射的に身を屈めて斬撃を回避する。

あの剣には、頻繁に触れちゃいけない！

その確認をし、バスターを背後に放つ。十発ほど撃ったはずだが、手応えは一つ足りともない。全てかわされたのだ。

バツカスの姿が五十メートル以上先に確認できる。この距離をこんな一瞬で移動できるのだ、今の彼は。

ホントに、

ロックマンは、嘆息する。

シルフがいないとキツイ。

## 第76話：決戦？

『見つけた』

とメルクリウスは胸中で呟いた。

距離にして二百メートルほど先に、『五本指』ユノの姿を確認したのだ。

よりによってアイツかよ。ある意味ゼウスより厄介じゃねえか。

嘆くメルクリウス。

ユノは、『十二神将』の頭脳といっても過言ではない存在だ。過去にメルクリウスたちが行った数万の任務のほとんどは彼女が立案したもので、その任務に誰を着かせればどのような結果になるのか、ある程度予測できるのだそうだ（ここ数年の任務はほとんどゼウス一人で決めているらしく、出番がないと不平を漏らしていたが）。

その上戦闘能力も異様なほど高く、それが彼女がNo.2と呼ばれる所以でもあるのだが、

今は、無防備だな。

ケリユケイオンをモードグングニルへ変化させる。今から彼が行おうとしているのは不意打ちのため、感知されない程度の電波エネルギーを集束させていく。

何か知らんが、今のユノからはやる気とかが感じられない。いつもと違って、むしろ躊躇するくらいに隙だらけだ。

チャンスだ、と小さく呟きつつ、ケリユケイオンを肩に担いで投擲の体勢に入る。

この距離でこの程度の力だ、一撃で倒せるとは思っていないが、かなりの深手を負わせることは可能だろう。

そうやってシミュレーションしていたメルクリウスは、

『浅薄よね』

一瞬で地面に叩きつけられた。

『あぐツ！？』

何が起きたのかすら理解できぬまま、音といった方がしっくりくるような呻き声を上げる。

次いで両手に金属の杭のようなものが突き立てられ、地面に縫い付けられた。

絶叫がほとばしる。その中で悠然と立ち上がったユノは、嘲笑しつつ告げる。

『隙があつたから安心して不意打ちに移れそうだった？ ……本当に浅薄よねメルクリウス。私を誰だと思っているの？ 私が、あなたがいる方にだけ隙を見せているという考えには至らなかったの？』

『ツ！？』

激痛でどうにかかなりそんな頭でその言葉を聴き、顔を青ざめる。要するに初めからこちらが自分を狙っていることに気づいていたのだ。

……いや、それどころか、この学校に訪れた瞬間からこちらの位置を把握し、常に追っていたのかも知れない。

改めて、化け物だよコイツは……

動くこともままならない状態でメルクリウスは絶望する。相手方の目的は判っている。仇敵のスバル、そして自分含めた裏切り者の三人を抹殺することだ。

つまり、彼はここで殺されるということだ。

……畜生。

不甲斐ない。あまりに不甲斐なさすぎて泣けてくる。  
そんな彼の背に、ユノは座り込んだ。

『……ねえ、メルクリウス』

『……………?』

その状態でやけに落ち着いた口調で話しかけてくるユノ。てつきりすぐにでも殺されるものと思っていたメルクリウスは拍子抜けする。

ユノは続ける。

『……何故、裏切ったの?』

『……………』

『星河スバルにそこまでの魅力があるの? アポロンを殺したという怨念すら忘れてしまうほどに』

これは、

違う。そうメルクリウスは思った。ユノは、自分を殺しにきたわけではないのではないかと。

『……あなたは、アポロンとはそれなりに良好な関係を築けていたはずよね。それなのにどうして仇敵に荷担するのかしら？』

自分を十二神将に戻そうとしているのではないかと。

『仇討ち、したくないのかしら？』

『……………』

ユノの質問に、メルクリウスは黙り込むしかなかった。

当然怨念は、ある。仇討ちだって、心の表面ではしたくないと思っ  
ているが、内部ではしたくて堪らないのかもしれない。

だって、二年間に彼が消滅したという知らせが届いた時、アルテ  
ミスほどではないにせよ、大いに取り乱したのだから。

……ただ、それでも何故か、今はスバルを殺そうと思えない。

少し前までは、彼の本質をいくつ知ろうが殺すことに躊躇いは覚え  
なかった。対峙した時に至っては、様々な要因が重なって本気で  
首を刈り取るうとまでしたのだから、相当の怨念があったはずなの  
だ。

それが、あの時怒鳴られて以降、共に過ごしてゆくうちに徐々に  
徐々に減少してしまっているのだ。

元は敵だったシルフィーやセイレーン、そして自分にも、昔から  
の友人のように接してくる彼と過ごすうちに

『……別に、あんまりしようとは思わないかな』

気がついたら、メルクリウスの口は開いていた。

『……アイツはさ、他人の内面にずかずか入り込んで、それで真に望んでいることを叶えようとしてくれるんだよ。俺の時も、俺自身が気づかなかったシルフィーの味方でいたって願望を見事に読み取りやがったみたいだからな』

それに、とメルクリウスは続ける。

『アイツの近くは居心地がいいんだ。魅力とかカリスマ性とかはぜウスには全く及んでないけど、とにかく居心地がいい。……だから、まああれだ』

そこまで言っただけでユノを指差そうとして、手が動かないことを思い出して断念して、代わりに視線に全てを込めて、告げた。

『そつちには戻らない』

ユノは、その返答にしばらく言葉を失っていた。メルクリウスはある程度殺される覚悟を固め、様子を見る。

ユノは、嘆くように呟いた。

『……そつ』

その手には、金属製の杭が一本だけ握られている。

『残念だわ』

「『エコーノイズ！』」

豎琴とアンプ二つから放たれた音波が反響しつつファントム・ブラックへと向かう。しかし、どうやら命中はしなかったようだ。

動きがさつきより断然速くなってる。

それはつまり、さきほどの会話の間に、怒りや憎悪をそれほどまでに高めていたということだ。ハープ・ノートとしては、あれほど手玉に取られてあちらの方が怒りを感じていることが納得いかないのだが。

「『マシンガンストリング！』」

豎琴の弦を前方に伸ばし、校庭脇の木々に巻き付ける。それらをピンと張ると蜘蛛の巣のようなものが出来上がる。

姿の見えないファントム・ブラックが戸惑っているのが判る。そうしてできた一瞬の隙に、ハープ・ノートは付け込んだ。

「『エコーノイズ！』」

張り詰めた弦をほぼ同時に掻き鳴らす。するとその全てから無数

の音波が発生し、一斉にファントム・ブラックを襲う。彼も流石に速いから全てを喰らうことはないが、地面や弦に反響したもので、は対処しきれなかったようで、

「ぐおああああッ!？」

数十発、直撃していた。

地に伏したファントム・ブラックの姿が鮮明になる。さきほど回復したと言っていた傷が開いたのか、苦しげに呻いて身体をヒクつかせていた。

それでもなお意識を保っていられるのだから、大したものである。感心していても仕様がなかったので、五十メートルほどの距離を一瞬で詰めて、ハープ・ノートは呟く。

「『……うろちよるするな。さつさと寝るなり気絶するなりしろ。すぐにスバルくんに加勢しなきゃならないんだから』」

冷淡な台詞の最後に、僅かな焦りを見せる。スバルがそう簡単に倒されるわけがないとどれだけ自分に言い聞かせても、どうしても不安が拭いきれない。

何故なら相手が十二神将だから。決して楽観視できる相手ではないから。

今まで十二神将が現れてもどうにかになっていたのは、あまりにも都合が良すぎたのだ。

セレスは、《デュアル》なんて規格外な能力が自分に発現したから。

バツカスは、イレギュラーな存在が突如現れたから。

ヘスティアは、《デュアル》に対しての警戒心が強すぎたから。

ウルカヌスは、シルフィー曰く『何故かやる気がなさそうだった』

から。

メルクリウスは、精神的に不安定だったから。

どれも、自分も相手も万全で、余計な懸念は一切なくて、一対一で正々堂々と闘って勝ったとは言い難い。実力的にはあちらの方が上なのは間違いないのだから。

その上、今回来ているバツカスはその出来事を教訓にして油断を完全になくしているはずだ。付け入る隙が見当たらない。

そんな相手と相対できるのは、メルクリウスかディーヴァスタイル状態のハープ・ノートくらいだろう。

でも、メルクリウスはエランドやウィルスの対処で手が離せなさそうだし、私もこの状態を維持するのキツくなってきた。

このままいくと、スバルが戦闘を行っている間にバツカスとともにも相対できる者が到着できなくなる。どちらかが切り上げて向かえばどうにかなるだろうが、残念ながらメルクリウスはスバルがバツカスと戦闘を行っていることを知らない。

だから、必然的にハープ・ノートが行かなければならないのだが、

「  
ッ」

フロントム・ブラックが校舎の方へと逃げていく。ご丁寧に張られた弦を切りつつだ。

伸ばした弦を巻き取り、再生させながらハープ・ノートは彼を追いかける。傷の回復と速度に全力を注いでいるのか、異様に速い。

急がなきゃなんないのにこれだよ！

確かに早急にスバルに加勢せねばならないが、だからといってフ

アントム・ブラックは放っておいていい相手ではない。その彼が逃げ回るものだからいつまで経ってもスバルの加勢にいけない。

嫌なジレンマに凄まじい不快感が募る。その不快感を乗せて、豎琴を掻き鳴らす。

「『ブレイクソング!』」

耳をつんざくような音が鳴り響き、前方の地面を破壊する。砂や岩がアントム・ブラックの進路に降り注ぎ、視界を塞ぐ。そうして動きが止まった彼に、ハープ・ノートはもう一度音波を放った。

「『ブレイクソング!』」

自分に直進する音波を、アントム・ブラックは紙一重でかわす。標的を失った音波が砂塵を巻き込みつつさらに直進して

砂塵の向こう側、校舎付近でウィルス駆除をしていた一般人の足元を破壊した。

「『!!!!!!!!!!!!!!』」

悲鳴が上がり、一般人が倒れ伏す。目立った外傷がないため死んではないようだが、どうやら意識を失ったらしい。

「『あ、う……』」

呆然と立ち尽くすハープ・ノート。その様子に不敵な笑みを浮かべたアントム・ブラックは、ポツリと一つ、呟いた。

「……………なるほどな」

同時に彼の姿が消失する。我に返ったハーブ・ノートは空間の撓む音を聞き取り、その位置に音波を放とうとする。

しかし、できなかった。

ファントム・ブラックが、人間とウィザードが密集した地帯にいたから。

動きが止まったハーブ・ノートに、彼は言い放つ。

「……………できないだろう？ それはそうだ、何せ力が強大すぎる。どれだけ調節しようが、一般人にも被害が及ぶ」

徐々に彼の姿が鮮明になっていく。その付近にいた一般人たちが腰を抜かしている。

やがて完全に見えるようになったところで、ファントム・ブラックは告げた。

「さあ、ここにいる全員が人質だ。危害を加えてほしくなければ、その状態を解け」

バツカスは速すぎた。

あまりにも速すぎて、動き出す瞬間の微妙な身体のブレ以外は全く見えなかった。

それでもなお直撃をもらっていないのは、正直奇跡としか言いようがない。

「　　ッ！！」

背後からの首筋を狙った斬撃を、見ずに直感だけで回避する。その後すぐさま体勢を立て直し、銃口を向ける。しかし既にバツカスの姿は消えており、今度は上空から大剣が振り下ろされた。

回避できるタイミングは既に失われている。ロックマンは仕方なく、刀での防御に移る。

ギイインッ！！　という耳障りな音が鳴り響く。どうにか受け止めることには成功したが、それが精一杯で押し返すことなど到底できない。

……そしてやはり、腕がありえないほど痺れてくる。さきほどの攻防の中で幾分かマシになったというのに、また逆戻りだ。

大剣が紫色に発光する。と同時に刀が斬り裂かれる。そうくると読んでいたロックマンは既に回避行動に移っており、直撃をもらうことは避けられた。

そう、直撃をもらうこと“は”。

「ぐ……」

右肩口に斬撃の痕が生まれる。バツカスの大剣が、強固になったはずのアーマーをやすやすすと斬り裂いたからだ。

同時に斬られた付近が麻痺する。痛覚も麻痺したので痛みを感じなくなったのだが、正直意味はない。

これで両腕とも感覚がなくなった訳だけど、……キツイな。シルフが戻ってくるまで持つかどうかも怪しくなってきた。

ただでさえバグで体力が削られているのに、とロックマンは嘆く。

『どうしました？ わざわざ自分と闘えとのたまっておきながら、この程度なのですか？』

「……………うっさいな」

バスターの銃口をバツカスに向ける。エネルギーがどれだけ込められたのか、感覚がなくなっただけでよくわからない。

それでも、ロックマンは放った。

「チャージショット！」

電波エネルギーの塊がまっすぐバツカスへと向かう。威力は限界値を軽く越えたレベルのもだった。バランスがとれなくなり、思わずよろけてしまう。

当然速度も相当なもので、これには流石のバツカスも回避に移る暇がなかったらしく、大剣で受け止めている。

……………片手で、いとも容易く。

「……………マジか、アイツ」

顔面蒼白にしながら、ロックマンは後退する。彼が予想している事態とは関係なく、純粹に相手の力が規格外すぎる。

あれほどの威力を、ロックマンが現時点で出せる最大の威力を、ああも容易く受け止められる。それほどに、双方の間には大きな力の隔たりがあるのだ。

さて、どうしたものかな。

バツカスがチャージショットを打ち消したのを確認してから、特別教室棟の屋上まで跳躍する。この棟は後夜祭には使用されないし、何より化学部の研究成果など、一部にしかウケなさそうな出し物しかなかったので、文化祭中も人が少なかった。現在も、まったく気が感じられない。

そのまま棟の中へ入る。階段を飛び降りて一気に下の階まで到達し、気配を消して座り込む。横目に確認した限り、バツカスはこちらの位置を掴めないでいるようだ。

でも、すぐバレるよな。

嘆息しこの後のことを考える。おそらくシルフィーはもうこちらに向かっているだろうが、……さっきまで手合わせしてみても判ったことだが、正直、彼女が加わったところでどうにかなる程度の実力ではなかった。

隔たりが大きすぎて、対抗策がまるで浮かばない。

「ほんと　　にっ!？」

思考が纏まらない状態のまま、急いで階段まで転がり、踊り場に立つ。同時にさきほどまで彼がいた場所が粉々に砕かれ、バツカスが現れる。

彼は呆れたように呟いた。

『それで隠れていたつもりですか?』

「……いや、別に?」

返答し、速やかに下の階へ逃げる。そのまま髪入れず角を曲がり、背後に向けて、

「シュリシュリケン！」

手裏剣を放つ。このバトルカードの特性により、さきほど自分が曲がった角を曲がり、姿が見えなくなる。おそらくバツカスを襲ったのだろうが、響いた鈍く響いた斬撃音からすると、たたき落とされたのだろう。

「ッ」

後方に、思った通り無傷のバツカスが現れる。余程余裕があるのか、悠然とこちらへ歩いてくる。

近くに人は……いないな。それなら！

それを見たロックマンは、完全に振り返った。ある程度痺れが抜けた（同時にある程度痛みも戻ってきた）右腕を前へ向け、一枚、バトルカードを使用する。

「ローリングナッツ！」

木の実が狭い廊下を転がってバツカスへ向かっていく。だが動きが鈍いため、彼には容易く斬り裂かれてしまうだろう。

しかしロックマンは、バツカスの大剣が木の実を捉えるその寸前に、叫んだ。

「爆発しろ！」

同時に、木の実が爆ぜた。決して小さくない爆発が巻き起こり、天井や壁を破壊して黒っぽい煙が立ち込める。

その煙を掻き分けるようにして、バツカスが飛び出してきた。完全に不意をつかれたらしく、その身体にはいくつかの傷ができてい

る。  
『小癩なツ！』

バツカスが明確な怒りを顕にしている。一瞬だけ窓の外を眺めたロツクマンは、続けてバトルカードを使用する。

「ダミースパイダー！」

三匹のスパイダラを召喚し、バツカスを襲わせる。天井や壁を這っているため通過する隙間もなく、彼は一匹一匹斬り伏せる。

その間にロツクマンは教室に転がり込んだ。コメデイ漫画などならこれでバツカスがこの教室をスルーして一息つけるのだが、ロツクマンも流石にそこまで日和った思考はしていない。

彼は一瞬の間をおいてから、バトルカードを使用する。

「バルカンシード！」

無数の種が右腕より放出され、ドアや廊下の壁や窓ガラスを破壊して外へ飛んでいく。バツカスはどうも直感的に急停止したらしく、一発足りとも命中することはなかった。

若干の間をおいて、バツカスがその姿を現す。

『……流石にやりますね。このような場所に逃げ込んだ意図はなんなのかと疑問に思っていました。まさかあのような算段があったとは』

何やら称賛しているが、ここに逃げ込んだのは近くにあったから

というだけだし、ローリンググナッツにしたってふと思いついただけに過ぎない　という事実は敢えて告げずに身構える。

『ですが、もう終わりです。この場所では逃げることは叶いませんし、さきほどのような手も使えません』

バツカスが大剣をこちらへ向ける。ロックマンは俯いた。彼のいう通り、もはやロックマンには何もできない。

退路はなく、抵抗するにも速度に差がありすぎて何かする前に確実に殺される。

そんな絶望的な状況の中で、

ロックマンは、にやりと微笑んで言った。

「いや、終わりなのは君の方だよ、バツカス・アンガー」

『は？』

あまりにも場違いな発言に、流石のバツカスも首を傾げていた。何を血迷ったことを、と内心小馬鹿にしているに違いない。

そんな彼に、ロックマンは告げる。

「終わりって言ったんだよ。言葉の意味は判るよね。この戦闘は君の負けだ」

バツカスが反論する隙も与えず、ロックマンは続ける。

「だってそうだろ？　何があったのか知らないけれど、圧倒的な力を手にした君は、明らかな格下になった僕を　“僕達”を完全に

嘗めきつてる。だからその隙をつかせてもらった」

『何を』

「判らない？　なんで僕がこの局面でわざわざ当たるかどうかも定かじゃないバルカンシードなんか使ったのか」

言われて、ハツとした様子でバツカスは振り返った。背後のバルカンシードにより空いた大穴、その先に、

風を纏い、その風にバルカンシードを乗せたシルフィー・ウィンドが浮遊していた。

シルフィーは呟く。

『……ローリングナッツ、ダミースパイダー、バルカンシード。……なるほど、あなたの予想ってそういうことなんだ』

驚愕するバツカス。そして驚愕したということは隙が生まれたということであり、それについてシルフィーは風を放つ。

風に加護を受けて通常のバルカンシードを遙かに越える速度で種がバツカスを襲う。防御体勢に入ったものの全てを防ぎきれぬ訳もなく、いくつか直撃をもらって身体が浮く。

そしてそんな彼に、

「グレートアックス！！」

右腕を斧に変換したロックマンは切り掛かった。

特別教室棟に、バツカスの絶叫がほとばしった。

## 第77話：決戦？

ロックマンの予想はこうだった。

斬撃を受け止めた際の手の異様な痺れ、以前とは比較にならないほどの反応及び移動速度、そしてツカサと対峙しているであろう時に発生した雷。

一見関連なさげなその全てには、実は一つだけ共通する点があった。

『電気』

大剣は電気を纏っていて、身体全体神経の一本一本に至るまで電気的な負荷を与えて強化していて、雷は電気の力で強制的に発生させた。そう仮定したら辻褄が合った。

バックスが何らかの方法で電気属性に形態変化したのだと仮定すれば、全て辻褄が合った。

ロックマンが途中から木属性のバトルカードばかり使っていたのも、……校舎の構造上有利に勝負を運べそうだからというのもちろんなあったが、実を言うと、仮定を確信に変えるためでもあった。

そして確信に変わったのは二枚目ねローリングナッツの時。

バスターマックス状態のチャージショットを軽々と弾いてしまうほどの実力者が、いくら不意打ちだったとはいえ、あの程度の爆発でダメージを負いすぎだった。

しかし、十二神将があ程度のバトルカードであればどのダメージを負うことはありえない、とまでは言わない。実際、同じようなシチュエーションでセレスにファイアバズーカを使用した際は、身動きがとれないほどダメージを負っていた。

ただそれは、木属性のセレスが弱点である火属性の直撃を受けたからだ。

だからロックマンは、木属性で必要以上のダメージを負っていたバツカスが、電気属性に変化していると確信した。爆発に気付いてこちらに飛んできたシルフィーに目で軽く合図を送って、後にバルカンシードを使用した。

確実に命中させて、決定的な隙についてグレートアックスでとどめを刺すために。

『やった……た、よね？』

床に倒れ伏しているバツカスを眺めつつ、ひどく複雑そうな表情でシルフィーは呟いた。既に袂を分かっているとはいえ、同胞が両断される光景を目の当たりにするのは、やはり良い気分ではないようだ。

「……うん、やった。手応えはあったし、残骸もすぐに分解されていくと思う」

告げて、ロックマンはドッと仰向けに倒れ込んだ。終わったと認識した途端に、一気に緊張の糸が切れた。

シルフィーが慌てた様子で駆け寄ってくる。

『だ、大丈夫？』

「まあ、なんとか。でももう闘うのは無理かも……」

『……うん、色々頑張ってたもんね』

腰に手を当て、溜め息をつく。そう、彼は頑張った。むしろ頑張りすぎなくらい、過剰に。

電波ウイルスとエランダの軍勢、ファントム・ブラック、そしてユノ・エンヴィーと、未だに問題は山積みだが、彼はここでリタイアさせるべきだった。肉体的にも精神的にももうピークに達しているだろうから。

シルフィーは、ドンと胸を叩いた。

『あとは私たちに任せて！ こっちにはミソラがいるし、メルクリウス様もいる。何も問題ないよ！』

「はは、そうだね。それなら安心だ」

呟いて、ロックマンは上体だけ起こした。フラフラと右手を上げ、それに対してシルフィーは右手を差し出す。

パンツ、と軽く互いの手を叩きバトンタッチの合図とする。シルフィーは踵を返し、バッカスの傍らを通過して教室を後にしようとする。

その直前に、

ロックマンもシルフィーも、一つ違和感を覚えた。

バッカスを撃破してから、少なくとも一分以上は過ぎている。どんな電波体でも、打ち倒されてからそれだけ経てば、構成の分解が始まって消滅がしていくはずだ。

だというのに、何故、

バツカスは一分前となんら変わらぬ状態で倒れている？

『 ツ！？ 』

途端に嫌な予感を覚えたシルフィーは身構えた。しかしそれは一瞬遅く、鈍い音を響かせながら壁を貫いて隣の教室へ吹っ飛ぶ。

ロックマンはそのことを認識し、慌てて立ち上がって身構えるが、やはり遅い。彼は首を掴まれ、机や椅子を薙ぎ倒しながら壁際まで追い詰められた。

首を掴まれている状態故、空気がほとんど放出できず、言葉が上手く紡げない。だから簡単に、相手の名を呼んだ。

「バツ……カ、ス」

そう、バツカスである。ついほんのさっき致命傷を負い、消滅間近であるはずの相手だ。

そのバツカスは、俯きつつ呟く。

『 …………… 疑問ですか、不思議ですか、理解できませんか？ 何故死なないか、何故動けるか、その全てが。………… それはそうでしょう。貴方たちごときに、理解できるはずがない』

ロックマンの身体が大きく引かれる。しかし次の瞬間には思いきり壁に叩きつけられる。頭から流れ出した血液が目に入り、視界が赤く染まった。

壁に減り込んだ状態のロックマンに、聴こえているのかどうかも関係なさそうに、バツカスは呟く。

『……この《ブリッツモード》は、ワタシの奥底に眠る雷の力を特殊な薬品で強制的に呼び起こし、身体全体を電気に変換させることによって変化できます。それが何を意味するか、貴方に分かりますか？』

「……………」

『……つまり、どれだけ傷を負おうが真っ二つにされようが、構成を電気で繋ぎ合わせれば修復が可能です。貴方がいくら策を巡らせても、たとえ木属性の攻撃を直撃させても、ワタシはすぐに再生する。……ワタシがこの状態になった時点で、貴方方の勝機は潰えていたのですよ』

勝ち誇った口調で長々と語るバツカスに、立ち上がったシルフィーが斬りかかる。しかし、完全に不意をついたはずなのに斬撃は空振り、体勢が大きく崩れる。そんな彼女に、バツカスはロックマンを投げつけた。

『ッ！？』

あまりの勢いに受け止めることすらままならず、そのまま教室の壁をブチ破って外へ転がるシルフィー。激痛で言うことを聞かない身体を気力だけで無理やり駆動させ、驚くほど力の抜けたロックマンを担いで退却に移る。

しかし、退路には既にバツカス・アンガーが佇んでいた。

『……しかしそれでも、痛みはあるんですよ。繋ぎ合わせる時だつて堪え難い激痛が走ります。……分かりますね？』

絶望感で埋め尽くされた二人に、バツカスは冷酷に告げる。

『相応の痛みを、貴方方にも味わって頂きます』

フロントム・ブラックの要求は、承諾しても拒否しても良い結果を生まない最悪なものだった。

承諾してディーヴァスタイルを解除すれば、戦闘能力が格段に向上した彼には敵わなくなる。かと言って拒否すれば、彼は何の躊躇いもなく人質の一般人達を虐殺するだろう。

要求そのものを無視して彼を無力化できればそれが最善なのだが、人々が密集した地帯にいる彼にハープ・ノートが攻撃しようものなら、何をどうしようが、どれだけ手加減しようが、周囲の人々が巻き添えを喰ってしまうのは必至。要するに、八方塞がりなのだ。

「……どうした、何を迷う必要がある。解除しろ。君は、サテラポリスなんだろう？」

「『ツ！』」

彼の言う通り、ハープ・ノートはサテラポリス　より厳密に言うならばサテラポリス遊撃隊のメンバーだ。

自身の命より市民の命を優先して護り抜く、そういう組織の一員なのだ。

……ならば、やるべきことは決まっているのだろう。

「『……………分かった』」

ハープ・ノートは、承諾した。全身の力を抜いて、ハープ・ノートとセイレーンを繋いでいる構成を徐々に解いてゆく。ファントム・ブラックは不敵な笑みを浮かべ、その成り行きを静観している。

そして、ディーヴァスタイル維持の要であろうエラントとの構成を解く寸前、

ファントム・ブラックが、まるでトラックにでも撥ねられたかのように大きく吹っ飛んだ。

「『……………え?』」

思わず解除を中断してしまうレベルで呆然とし、困惑した声を上げるハープ・ノート。吹っ飛んだ本人も、大したダメージはなさそうだが何が起きたのか分かりかねている様子だ。

そんな中で、この場に ただの電波体とは次元を異にする者たちの戦場に、立ち入ってはならない人物の声が響く。

「なんか知らないけど、ストップだぜ響」

雛森ゆたかだ。その前方では、ウィザードのアイゼンが拳を突き出した状態で息を荒げている。そして後方では、明らかに戦闘タイプではない者も含め十数体のウィザードがキャノンを構えてオペレーターと共に佇んでいた。

状況から察するに、どうやら彼らがファントム・ブラックを攻撃したらしい。

ハープ・ノートは、呆然としたまま訊ねる。

「『……………あなたたち、何、してるの？』」

「『手助け』」

事もなげに言っただけのける彼らに思わず頭を抱えなくなる。

「『手助けって……、そ、そんなのいいから早く逃げて！』」

おもむろに立ち上がるファントム・ブラックを横目に確認しつつ、焦燥感に溢れた表情で彼女は叫ぶ。

今のは確実にファントム・ブラックの逆鱗に触れた。こちらがデーヴァスタイルを解除しようがしまいが、構わず一般人に危害を加えるだろう。そうなる前に全員逃げなければならぬのに、彼らは言うことを聞いてくれない。

「嫌だ。そうしたらお前が殺されるかもなんだろう？ それくらい、さっきの会話聞いてたら分かる。そんなんなら、この後ろのお前のファン達が半狂乱なって結局立ち向かっていくぜ？」

そうだよーミソラちゃん！ と、ゆたかの言葉に肯定して叫ぶオペレーターやウィザード達ミソラのファンタジーに、もう本当に頭を抱えてしまうハーブ・ノート。これは流石に、歌手活動頑張りすぎたな、と後悔してしまう。

「だから逃げない。俺らも闘う。文句は言わせない」

言うだけ言って、ゆたか達はファントム・ブラックに向き直った。しかもそれに看過されたのか、人質状態だった一般人達までもが戦意に満ちた表情で彼らの後ろにつく。

ニッ、とゆたかは笑い、叫ぶ。

「なるべく威力の高い遠距離系のバトルカードで一斉放火だ！」

途端に、各オペレーターがバトルカードを使用する。各ウィザードがプラスキャノン、ファイアバズーカなど高威力の武器を構え、間髪入れずに放った。

ファントム・ブラックの周囲に巨大な爆炎が上がり、黒煙が立ち込める。その中を、グレートアックスを携えたアイゼンが駆けた。斧が横に振られる。刃が届く範囲にファントム・ブラックが視認できる。それにゆたか達の間で歓声上がるが、

「『 だめ、退いて!!! 』」

彼の能力を知っているハーブ・ノートは、悲痛な声を上げた。同時にファントム・ブラックの身体を斧が何の手応えもなく通過し、アイゼンが大きく体勢を崩す。

『え?』

何が起こったのか理解していない様子のアイゼン。そんな彼に、ファントム・ブラックは容赦なく蹴りを入れた。短い呻き声を上げ、地面を削り取りながらゆたかの足元まで吹っ飛んだアイゼンはそのまま倒れ込む。

絶句するゆたか達。そんな彼らに、新しい傷の全くないファントム・ブラックが悠然と接近してくる。

「大したものじゃないか。私の一撃を喰らってその程度で済むとは。余程優秀なウィザードなんだろうな」

だが、とファントム・ブラックは哀れむように宣言する。

「足りない。どれだけ優秀だろうと、ただの電波体ごときが電波人間に太刀打ちできる道理はない」

途端に、後方で臨戦体勢をとっていたオペレーターやウイザード達が尻餅をついた。歴然たる力の差を改めて見せつけられ、完全に戦意喪失したようだった。

しかしそんな中で、ゆたかとアイゼンだけは戦意を失わない。

「ほう」

感心した様子のファントム・ブラック。するとおもむろに二人の首を掴み、地面に押し付ける。

そこで、彼は囁いた。

「いいな、良い目だ。そういう輩は好きだ。どうだ、私の仲間にならないか？」

「は、あ？ 何、言って……」

「電波変換できる星河スバルや響ミソラを羨ましいと思ったことはないか？」

要求の真意を分かりかねて困惑していたゆたかの動きがそこで止まる。ファントム・ブラックは、不敵に笑いつつ続ける。

「簡単に、地球を救うほどの力を得られる彼らを羨ましいと思ったことはないか？」

「それ、は……」

「あるだろう、あるに決まっている。君はそういうタイプの人間だ」  
凶星をつかれて、言葉を失うゆたか。その耳に、甘言が響く。

「私の元に来れば、得ることが可能だ」

「え？」

「どうやら君のウィザードは特別製のようだし、ハンターV.Gには元々電波変換機能が備え付けられている。調整すれば、すぐにでも電波変換は可能だ」

二人の首からファントム・ブラックは手を離す。諭すように、彼らに呟く。

「さあ私の元に来い。共に世界を手に入れようじゃないか」

「……………」

黙り込むゆたかとアイゼン。周囲は静寂に包まれる。ファントム・ブラックの口元が歪む中、二人は、口を開いた。

「『やだ』」

ファントム・ブラックは目を見開いた。まさか拒否されるとは思っていなかったのだろう。

「……………何故だ、力が欲しくないのか？」

「欲しいさ、欲しいけど、人の道を外れてまで欲しいとは思わない」

ゆたかが、まだ実体化した状態の彼の腕を掴む。アイゼンも反対側の腕を掴む。

「まあ、可能性があるってことを教えてくれたことは嬉しいけどさ」  
『でも、関係ない。学校をこんなにした奴の仲間になんて、誰がなるか』

そこまで言っつて、ゆたかは、周囲を巻き込んでしまっが故に、さきほどから何もできていないハーブ・ノートに対し、とんでもないことを要求する。

「響い！ 俺らなんか気にせず思いきりやれ！ ていつかもっ、俺らごとやれ！」

その発言に、ハーブ・ノートは呆れたように叫ぶ。

「『何言っつてんの！？ そんなことできるわけないじゃん！』」

「いいからやれっつてんだ！ なぁアイゼン、いいよな！」

『おう、いいぜ。やれやれ！』

アイゼンがやたらと身体を揺らしながら同意する。その様子を傍観していたファントム・ブラックは、心底呆れる。

人質を盾にして少し脅しただけで勝利のチャンスをフイにしようとする人間だぞ。一般人ごと敵を討つなど、できるわけがないだろう。

呆れる。本当に呆れる。そういえば、彼女はまだあの状態を解いていない。また脅して要求してみようか。

そう彼が、楽観的に思考していた最中だった。

ハープ・ノートが、豎琴を構えたのだ。

「な……!?!」

信じられないといった様子で絶句するファントム・ブラック。敵ながらに抱いていた彼女に対する良いイメージが崩されていく。

もし本当に攻撃してくるとなれば、この場に留まるのはマズイ。

彼女の音波は実体があるうがなかるうがまるで関係なくこちらにヒットする。しかもその威力はどれをとっても桁違いなのだ。

いや待て、ハツタリの可能性もあるじゃないか。ああして私を退却させて、巻き込む危険性をなくした上でトドメを刺す魂胆なんだろっ。

淡い期待を胸に抱きつつ、ハープ・ノートを睨みつける。思ったとおり、攻撃を行わない。少し苦々しい表情で固まっている。

は、はは、やはりな。彼女にそんなことが出来るわけが……

「『ッ。……エコーノイズ!!』」

「なん……ッ!?!」

しかし、音波は放たれた。人間には視認することすらかなわない速度でこちらに襲いかかってくる。

「……くそッ！」

堪らずゆたかとアイゼンの手を振りほどき上空に退く。見損なつたぞ、と叫ぶ間もなく、ハーブ・ノートに近い位置にいたアイゼンに音波が直撃し、

反射して、ファントム・ブラックを襲った。

「ぐおああッ!?!」

予想だにしなかった事態に、回避すると思慮することすらできずに更に上空に打ち上げられる。混乱の極みのような思考状態の中で、ようやく音波の直撃をもらったのだと認識した時には、彼は既に弦に搦め捕られて身動きがとれない状況に陥っていた。

弦で造られた蜘蛛の巣状の足場に降り立ったハーブ・ノートは、やはり苦々しい表情で告げる。

「『……アイゼンくんはね、自分の身体の電波構成の結合力を操ることが出来るんだよ』」

ファントム・ブラックに徐々に歩み寄る。

「『だから隙間なく完全に結合させて音波の入り込む余地をなくせば、エコーノイズの反射対象である非電波物質とほとんど同じになる』」

伸びた弦を空中で固定し切り取って、豎琴に新たな弦を生成する。

「『あの人たち、この技の本来の特性を知らないくせに、ちよつと

見たって程度の情報量でこんなこと実行させようとしたんだよ」「  
その新たな弦を上空に伸ばし、ウェーブロードに接続してドーム  
状の空中を造る。

「『私としては、完全な確証がなかったから実行したくはなかった  
んだけど。でもやらなくちゃならなかった』」

そのドーム状になった弦全体に音波を通し、音波の壁を形成する。  
これでもう、ファントム・ブラックは逃れることはできない。

「『失敗したら友達の命を奪ってしまうかもしれないのに！』」

ハープ・ノートは、そこで両手を広げて非難する。

「『それもこれも全部アンタのせいだ、ファントム・ブラック！』」  
叫ぶ彼女の周囲に大量の音波が生成される。その場に留まって互  
いに共鳴し合いその威力を上昇させる音波の後方へ下がり、豎琴だ  
った武器を通常状態のギターに変換させる。

「『はじめて会った時からいけ好かないと思ってたけど、本当、今  
回は最悪だ』」

一転して冷淡に眩き、ギターを構える。先に喰らった音波の影響  
で弦から逃れるという行動すらとれない彼に、ハープ・ノートは宣  
告する。

「『だから、これでもし死んでも文句なんて言わせない』」

直後に彼女は、ギターを掻き鳴らした。共鳴し続けた結果、音を超越してもはや衝撃と呼ぶに相応しい威力を秘めた音波が、それを合図に一斉に解き放たれる。

放たれたそれらは、全て一点　ファントム・ブラックへと集中した。

「『レゾナンスインパルス』」

直後、人体に害を及ぼすレベルの轟音と共に断末魔の悲鳴が上がり、勝負が決した。

この上ないくらいの敗北だった。

あちらの攻撃は回避できず、こちらの攻撃は回避される。ほぼ一方的にいたぶられ、もはや動くことすらままならない。

弱点が発覚しようがまるで関係なかった。《ブリッツモード》のバツカス・アングアとこちらの戦闘能力の差は如何ともし難く、

もはや、逆転は不可能だった。

『……少し、拍子抜けしているんですよ』

バツカスは、ロックマンの首筋に大剣を押し当てつつ、呆れたように呟いた。

『十二神将、いや、ムーの電波体最強と謳われていたアポロン様を討ち滅ぼした相手が、この程度のものなのか、と』

「ッ」

『やはり、まぐれだったのですね。何千年と封印されていたことによるブランクに、貴方の電波体のイレギュラーな能力。その二つが上手く噛み合った末に、あの方は滅ぼされた』

ロックマンの肩を足で踏み付ける。呻き声上がるが、彼には既に抵抗するだけの力は残されていない。

『その程度なのですよ、貴方は』

大剣が少し持ち上がる。切っ先が喉元にセットされ、僅かにでも下がればかつ切れてしまうような状態になる。少し離れた位置で倒れているシルフィーは、それを妨害したいのに、余力が残されていないため叶わない。

バツカスの宣告が、無情にも響く。

『これで十二神将の復讐劇は終幕します。そうすればすぐにでも、“あの計画”を実行に移すことができますしね』

「……計、画？　なんだよ、それ……？」

意味深なワードに、ロックマンが食いつく。だがバツカスは首を振り、その質問には応えない。

ただただ冷酷に、告げる。

『……今から命を落とす貴方には、まるで関係のないことですよ』

大剣の柄に力が入る。徐々に徐々に、組織を一つ一つ潰していくように大剣が下がってゆき、もう僅かで喉元に突き立つ。

やめて、というシルフィーの懇願は声にすらならず、ロックマンの命が奪われる。

寸前、

「今よ、バルカンシード一斉放射!」

声が響いた。

そして四方八方よりバツカスへと無数の種が放射される。総数は億はくだらないだろう。

『ッ!?!』

それほどの数の弱点属性による奇襲に、流石のバツカスも肝を冷やす。ほぼ全方位より攻撃が行われているため、その場で防御行動に移ることもできない。

バツカスは多少の被弾を覚悟で飛び上がり、距離をとった。

襲撃者達は彼の姿を見失ったようだったが、何故か異様な速度で感知し、バルカンシードの弾幕を再び張る。

その様子を呆然と眺めていたロックマンとシルフィーの耳に、聴き慣れた声が響いた。

「……で、本当に木属性で正解なの？」

「正解ですよ。ペディアが演算して導き出したのですから、間違いありません！」

ロックマンの、星河スバルの小学校時代の同級生で、今はクラスは違うけれど大切な友人、白金ルナと最少院キザマロ。その二人が、種の弾幕の中で立ち往生しているバツカスを眺めつつ言葉を交わしている。

「……いいわ、とりあえず信じてあげる。……みんな、次はダミースパイダーよ！ 屋内組は同時にバルカンシードも使用、身動きをとれなくするの！」

ルナの命令におそらく一般人と思われる集団全員が従い、一帯が巨大な蜘蛛や種に埋め尽くされる。見る人が見れば卒倒してしまい、そんな地獄絵図が繰り広げられる中、ロックマンは困惑気味に口を開く。

「……ち、ちよっと、委員、長？」

「あら何かしら、女たらしの星河スバルくん？」

妙に胸に突き刺さる発言が飛び出た。先の事態でルナの想いに気付いた彼には、それがいつになく響く。狼狽しつつ、ロックマンは訊ねる。

「なんで、ここに？ ていうか、何を……？」

「見て分からない？ 加勢よ加勢。遠くで見てて、凄いいんちっぽかったし」

「いや、そんなの、見れば分かるよ。僕が言いたいのは」

「こんな危険な場所に、なんでお前らみたいな奴らが立ち入っているんだー……でしょ？ 分かっているわよ」

若干違うが同じニュアンスの台詞をロックマンより先に口にし、ルナは嘆息する。

「分かっているわよ。護られる側の私達は明らかに場違いだって。……でもだからって、やられてしまいそうなあなた達を放っておけるわけがないでしょう？」

一歩前に出る。未だに続く前方の地獄絵図を眺め、次の一手を思索する。

「特撮ヒーロー物の逃げ惑う市民みたいに、完全に無力ってわけじゃないのよ私達は。ウィザードがいるし、闘う術だってある。だったら、倒されそうなヒーローを救ったってなんら問題はないわ」

そこで一旦言葉を切り、ルナはロックマンに向き直った。彼の目を真っすぐ見詰めて、力強く言い放つ。

「だから闘うの。あなた達が私達を護りたいと思うみたいに、私達だってあなた達を護りたいんだから」

そこまで言って、ルナは戦況の分析に戻った。天性のリーダー的才能を遺憾なく発揮し、的確かつ効果的な指示を全員に送っている。

バツカスの動きを封じること、成功している。

『……凄いよね』

その様子を眺めていたロックマンに、這い寄ってきたシルフィーが囁くように語りかける。

『前々から思ってたけど、本当に凄いよ、人間って。非力で、脆いのに、勇気だけはどんな生物も及ばないほどある。救う側に、その勇気を分けてくれる』

「……………」

『……………今なら分かる。だから、護りたいって思うんだよね、スバル達は』

「……………そうだね」

ロックマンは頷いた。身体を無理やり動かして、立ち上がる。伸ばされたシルフィーの手をとって、立たせてあげる。

力を込めて、精一杯宣言する。

「君の言う通り、だからこそ護りたいんだ」

自分達が護られる側でもあることを認識した状態で、はじめて戦場を眺める。今までの彼女達の気持ち、若干ではあるけれど、理解できる。

だからこそ、彼女達が思ったように、護りたいと心から思う。

より一層、思う。

その瞬間だった。

圧倒的にまばゆい、神々しい光が、彼らを包んだのは。

『……………これ、何？』

突然の事態にシルフィーが戸惑う。しかしロックマンは冷静だった。

ほんの何週間か前に、似たような光を見たことがあるから。

ロックマンはシルフィーに無言で笑いかけた。意味は伝わらなかつたようだが、なんとなく安心したのか、彼女も釣られて笑う。

そして

『……………いい加減、調子に乗るのはやめなさい』

低く呟いたバツカスは、大剣を大きく薙いだ。それにより発生した衝撃波が種や蜘蛛を一掃し、一般人の集団が余波で吹っ飛ぶ。

大剣を肩に担いだ彼は、全員に告げる。

『……………象に対する蟻の抵抗のようなものだとしても、限度というも

のがあります。許容できる範囲にも、限界があるんですよ』

死の宣告がなされる。

『殺されようが、文句は言えませんか』

大剣が紫色に発光する。巨大な電光が周囲を照らす。

一般人達が萎縮する中、電気力が内包された得物を地面に突き立て、エネルギーを解放する。

直前だった。

電光を打ち消すほど異様にまばゆい光が周囲を照らしたのだ。

『なッ!?!』

思わず瞼を閉じてしまうバツカス。だがそれは失敗だった。

自分に高速で接近してくる者の存在の感知が、著しく遅延してしまっただから。

『ッ!?!』

寒気立つと同時に、バツカスは反射的に大剣を地面から抜き取り、自身の前方に翳した。同時に凄まじい衝撃が走り、十メートル以上飛ばされた末に校舎の壁に激突する。

瓦礫を跳ね退け、傷付いた身体を電気を用いて修復している最中に、彼は見た。

群青色のボディにロープを纏い、流星のようなマークと風のような

なマークが施された耳当てのようなパーツを被っている、跳ねた緑色の長髪を風に靡かせた中性的な顔立ちの人物を。

『……………？』

はじめて見る人物だ。そのはずなのに、どうも見覚えがある気がしてならない。

手に握られていた透明な剣のような物体を消滅させ、こちらに悠然と歩み寄るその人物に、堪らずバツカスは訊ねる。

『……………何者、ですか？』

「『ん？』」

短く声上がる。

五メートルほどの距離を保ちつつ、その者は思考するような仕種を見せる。

やがて何かを閃いたかのように手を叩くと、こちらを真っすぐ見据えて、名乗りを上げた。

「『『シューティングスター・ロックマン・ゲイルスタイル』……………  
つて、ところかな』」

第77話：決戦？（後書き）

ネーミングに悩みました。

第78話：決戦？（前書き）

最近の中ではかなり短い方です。

## 第78話：決戦？

力が漲る。

もうほとんど尽きかけていたはずなのに、平常よりも遙かに多く。それに、感覚もいつもと違う。

空気の流れが手にとるように分かり、物体がどの位置にあるのか、電波を探らずとも感知できる。慣れない感覚ではあるが、何か心地好い気がした。

これなら……。

ほとんど別人のような姿へと変貌したロックマンに、バッカスは言い知れぬ恐怖を覚えた。

これと似通った状況を、メルクリウスの報告で聞いたことがある。セレス・クエイクが戦闘に王手をかけたその瞬間に、ハーブ・ノートに起きた変化。セイレーンと融合して、ディーヴァスタイルという強大過ぎる力を得た、その状況と。

もし今の状況がその時の状況と同じだというのなら、

星河スバルは、シルフィーと融合している。

そう考えてみると、何かしっくりくるものがあった。

今の彼には、どことなくシルフィーの面影がある。というか、外見上のほとんどの構成がシルフィーのパーツによって形成されている。

間違いない。《ゲイルスタイル》というあの姿は、ロックマンとシルフィーが融合した結果の姿だ。

だとすると、マズイですね。

前例通りならば、彼の戦闘能力は格段に上昇しているはず。いや、はずではなく、確実に上昇している。実際、目を閉じていたとはいえ、さきほどの一撃は反応が追いつかないほどの速度で行われた。

力は既に拮抗、いや、越えられているかもしれない。

ならば、チャンスは今しかない。

バツカスは大剣の柄を握りなおす。

彼は今おそらく、突然手に入れた強大な力に対して戸惑っている段階のはずだ。それならばまだ付け入る隙はある。

ハープ・ノートだって、あの状態になったばかりの時は戸惑ったはずだ。それでもセレスが敗れたのは、前例のない事態に彼女も戸惑っていたからだ。

しかしバツカスは違う。セレスが身をもって示してくれた教訓が活かされているおかげで、……全く戸惑っていない訳でもないが、ある程度は落ち着いている。

だから、やれる。今ならば、やれる。

『ふっ！』

音速を超越した速度でロックマンの背後に移動する。既に大剣に

は大量の電気を流しており、殺傷能力は充分過ぎるほどにある。  
後は横に薙げばそれで終わりのはずなのに、

バツカスは身を屈めてしまった。

『?』

彼自身、何故そのような行動をとってしまったのか分からない。  
しかし反射的にロックマンを見上げてみて、悟った。

彼の鋭い眼差しは、完全にこちらを捉えている。今手を出してい  
たら、致命的な反撃をもらっていたかもしれない。

『ッー』

バツカスは全力で後退した。上空を蜘蛛の巣の如く走るウェーブ  
ロードを足場にして、片時もロックマンから目を離さず、体勢を立  
て直すことに重点をおいて。

当然、ロックマンは追跡してくる。空気を切り裂いて抵抗を極力  
なくして、あちらも音速を超越した速度で追跡してくる。しかし、  
彼は追いつくことができている。

バツカスはそこで気付いた。動態視力はともかく、スピードだけ  
ならば、こちらが勝っているのだ、と。

はは、そうか。ならば、付け入る隙はまだある！

バツカスは地上から二百メートル以上離れた位置で立ち止まった。  
ロックマンは、そこから十メートルほど下でこちらを睨んでいる。  
その場で、バツカスは言った。

『……驚きました』

「『……………』」

『まさか、こんな一瞬で形勢逆転されるとは、思いもしませんでしたよ。流石に、油断なりませんね』

その余裕のある台詞に、ロックマンは反応を示さない。ただ冷静に、こちらを睨みつけるのみ。

バツカスは小さく笑い宣言する。

『しかしそれでも、貴方はワタシに勝てません』

直後、よほどの動態視力の持ち主でない限りは確実に見失ってしまつてあるう速度で、バツカスは駆けた。

ロックマンには視認できているようだが、そのことは大した問題ではない。

背後に回り込み、大剣を振るう。ロックマンはその斬撃を、風で作つたであろう剣で受け止める。バツカスはその時点で大剣を放棄して反対側に更に回り込み、踵落しを放つ。ロックマンはそれを回避するが、その隙にバツカスは、放棄した結果ウエーブロードから落下していく大剣を瞬時に掴み、エネルギーを込めた。

『エネルギーブレイド!!』

大剣を縦横無尽に振るう。一振り一振り毎に雷電の付加されたエネルギーの刃が飛ぶ。ノーマル、バーサーカー時とは一線を画す速度で襲い掛かるその刃を、ロックマンはバスターで迎撃している。やはりゲイルスタイルとやらに变化した影響でバスターの威力も格段に上昇しているようで、たった一発で刃が一つ碎かれる。

碎かれた刃の破片が視界を覆う。バツカスはその瞬間にロックマ

ンの背後へ回り込み、同時に斬りかかった。

タイミングは完璧。ロックマンは未だに前方の刃を警戒している。勝利をほぼ確信したバツカスの大剣がロックマンの首筋を捉え、

空気の壁のようなものに妨害され、薄皮一枚すら破ることが出来なかった。

『なん……ッ!?!』

驚愕し、動きが止まる。おもむろに大剣を掴まれ、一気に引き寄せられる。続いて腕を強く掴まれ、動作が制限された。

そこでロックマンは呟いた。

「『勝てないって言ってたけどさ、もしかしてそれ、スピードが僕より勝ってるからとか言わないよね』」

『ッ』

凶星をつかれ、押し黙るバツカス。その反応に呆れたのか、ロックマンは、

「『……確かにね、スピードは君の方が上だよ。それは認める。けどね』」

嘲るように、告げた。

「『その程度で勝てると思うなんて、君、どんだけおめでた

い頭してるんだよ」

『ぐツ!?!?』

突然、腕を掴む手に異様に力が入った。短く呻き、反射的に振り払おうとする。

しかし、振り払えない。

「『まず第一に、防御力が及んでない』」

ロックマンは呟くと同時に、バツカスを放り投げ、蹴りを入れた。ウェーブロードを五つ近く破壊しつつ地上へ落下していく。

しかしバツカスは大剣を途中のウェーブロードに突き立て、落下を強制的に中断した。

『くそツ　クロスブレイド!!』

体勢を立て直したバツカスは大剣を縦横に一度ずつ振り、十字の衝撃波を放つ。一撃必殺の威力を秘めた攻撃だということは、以前に目にしたことがあるから理解しているはずなのに、ロックマンは回避行動をとらない。

「『次に、攻撃力が及んでない』」

告げて、ロックマンは衝撃波に突っ込み、両腕を振るって弾き飛ばした。

『!?!?!?』

あまりにも軽く攻撃を無効化され、呆然とするバツカス。互いの戦闘能力に、絶望的なまでの差があることをようやく理解したのだ。

『あ、あああああッ!?!』

自棄になつてエナジーブレイドを乱射する。秒間に十数発放つベルの超高速の攻撃に、しかしロックマンの表情は変わらない。

最後に、と前置きして、彼は告げた。

「『速射力が、遠く及んでない』」

ゲイルスタイルに変化した影響からか、形状が平時とはまるで異なる銃口を刃の群れへ向ける。内部に電波エネルギーが集束しているのがハッキリと視認できる。

「『ソニックバスター』」

そのエネルギーは、声と共に小出しに発射された。バツカスの動態視力では数えることすら不可能なほどの量のバスターが、異様な速度で次々と刃に命中し、砕いてゆく。

そして余つたバスターが、容赦なくバツカスに降り注いだ。

『ぐあああああああああああああああああああああッ  
!?!』

喰らつてみてはじめて分かった。あのバスターは一発一発の威力は大したことはないのだが、一カ所に数十発ヒットするため、最終的に半端ではないダメージへと変貌する。刃が砕かれているのだっ

て、そういう理由があったからなのだ。

身体中を穿たれる。激痛で発狂しそうになる中、上空から優雅に舞い降りるロックマンを視認する。

……敵わない。

理解する。彼があのような状態に変化した時点で、自分に勝機はなかったのだ、と。

皮肉にもその事実は、ついさきほどこちらが彼に突き付けた事実と同じだった。

……もう、いいかもしれない。

いい加減、諦めた方がいいのかもしれない。

どれだけ努力しようと、肩書きが変わろうと、変わらないのかもしれない。

バツカス・アンガーという電波体は、結局《十二神将》ではなく《候補》に過ぎないのかもしれない。

もう、いい。

諦めが心を支配する。

そんな、倒れた自分の傍らに佇むロックマンを、虚ろな瞳で眺めていたバツカスの脳裏に、人間でいうところの、

走馬灯が走った。



## 第79話：決戦？

ラ・ムーによって生み出された《神クラス》の電波生命体の中で、アポロンやゼウスのような《五本指》、それと現在その《五本指》に名を連ねているアテナには及ばないまでも、それ以外の九体の《神クラス》の中では自分は中堅クラスの実力があると、バツカス・アンガーは自負していた。

実際、戦闘演習においてもかなり好成績を残せていたし、基本スベックも平均値を上回っていた。

さらに、条件付きではあるものの雷電の能力も行使可能であったし、《十二神将》に選ばれるのは自分だろう、そう信じて疑わなかった。

その上、演習時に“厄介な能力”を行使するため危険視していたハデスとペルセポネが、選定の前日に何故か辞退したので、これはもう確実だろうと、そう思った。

……だからこそ、翌日、

『最後の将は、ヘステイア・ブレイズに決定した』

それを発表された時は、絶望感に心を支配された。

選ばれなかった、《十二神将》になれなかった、と。

当然納得がいかず、彼は抗議した。何故なのかと、理由を教えてくださいと。

しかし皆が口をつぐんだ。それは皆が納得できるような落とされる何かが、バツカスに知らせるべきではない何かがあることを示し

ていた。

バツカスは問いただそうと思ったが、そこで予想外のことが起きた。

ヘステイアが、《十二神将》を辞退するなどと言い出したのだ。

彼女は明らかに譲歩している様子で、凄まじく申し訳なさそうな表情をしていた。バツカスのためを思っ、彼女は身を引いてくれたのだ。

ただ当時のバツカスは頭に血が昇っていたため、それを憐憫や蔑みから来るものだとして解釈し、つい突き返してしまった。

そして彼は《候補》になった。

同じく《候補》のハデスとペルセポネとは反りが合わなかったため、あまり会話はしなかった。

負い目でも感じているのか、やたらとヘステイアが気遣ってきたが、迷惑だからやめると（一応目上なので丁寧に）言って素っ気なくしていた。

後はずっとその調子で、任務以外はすることもなかったのだ。たいは一人で修行をしていた。

一度だけアポロンの封印のために駆り出されたが、それ以外は完全に平淡な日々が過ぎていった。

そして一万年以上の月日が流れ、アポロンの封印が解除されたことと、封印されていた本人が何者かに滅ぼされたことを知った。

それからは、今までとは打って変わって慌ただしい日々が流れた。《五本指》最強が殺されたことにより、その妹であるアルテミスが半狂乱になって暴れたため、バツカスを含めた《神クラス》六人ほどで抑えにかかったし、アポロンを滅ぼした者の調査に乗り出したりした。

そして何より、《五本指》の再選が時間を喰った。

ゼウスなど元からの《五本指》の残留は確定していたが、次期《五本指》は候補が三人いて結構荒れた。

結局投票によりアテナに決まったはいいが、すると次は、余った《十二神将》の枠を誰にするか、という話になった。

バツカス、ハデス、ペルセポネの実力は、バツカスが一万年以上修行し続けていたためほぼ同程度になっており、これも時間を喰いそうだと皆うんざりしていた。

が、以前と同じくハデス達二人が辞退した。今回は理由付きで、『バツカスの方が、《十二神将》にとって利益がある』とのことだった。

付け加えて、『バツカスさん頑張ってください！』とか、妙に癒されるエールも送られてきた。

そういつたことがあって、割りとおっさりバツカスは《十二神将》になれた。

何となしに拍子抜けしたものの、嬉しくないといえば嘘になる。

それから約二年間、彼は数々の任務をこなし続けた。

成果に比例して評価も上がり、僅かずつではあるが、《十二神将》としての誇りも芽生えはじめている。

そして、ゼウスの“あの召集”がかかったその日から、バツカスは一つ決意していたのだ。

もう決して屈しない、と。

バツカスの瞳に光が戻った。

寒気を感じるほどに鋭い眼光も復活し、ロックマンがたじろぐ。

その隙に彼は、瞬時に穿たれた箇所を電気によって無理やり修復させ、

立ち上がり様に、音速を超越した速度で蹴りを放った。

「『ぐ……ッ!?』」

不意をつかれ、回避できずにロックマンが吹っ飛ぶ。彼自身がさきほど言っていた、スピードは君の方が上だよ、と。

だから回避は間に合わない。不意をついたのだからなおさらだ。

ロックマンが体勢を立て直す。その間にバツカスは、落下して地面に突き立った大剣を拾い、構えた。

そこで一度落ち着く。落ち着いて、ロックマンの一挙一動を目を凝らして観察する。

スピードはこちらが上なのだ。電気で伝達速度を跳ね上げているのだから動態視力だって勝っている。ならば捉えられない道理はない。

するとロックマンが、周囲の瓦礫が浮き上がるほどの風力の風を

纏った。徐々にその量が増し、やがて全てが両手に集束され、風の球体が生成される。

両手を後ろに向けたロックマンはその球体を、

「『エアブラスト』」

爆発させた。

シルフィーのそれとは比べものにならないほどの風の奔流が発生し、ロックマンが凄まじい速度で突進してくる。予想を遥かに上回るそのスピードに、バツカスは目では追えても身体が追いつかない。

『いぶっ！っ！』

結果、防御が間に合わずに直撃をもらう。痛みが遅れてやって来るほどの凄まじい衝撃が走り、弾丸のような速度でバツカス身体が吹っ飛ばされる。

しかしバツカスも、タダでは済まさない。

「『……………ッ！っ！』」

直撃した箇所と同時に電気を集中させたのだ。結果、接触した箇所が痺れたらしくロックマンの動きが鈍る。

そこでバツカスは大剣を地面に深々と突き刺してブレーキをかけた。十メートルほど滑走した末にようやく止まり、間髪入れずに駆け出す。動きが鈍くなったロックマンの目前まで迫った彼は、

『エナジーブレイド！！』

縦横無尽に大剣を振るい、電波エネルギーの刃を何十発も放った。至近から大量の攻撃をもらったロックマンは、一発一発には大した

ダメージは負わないものの、何度も喰らうことによって徐々に苦痛に顔が歪んでいく。

『クロス』

刃を中断させ、続いて一撃必殺の威力を秘めた十字の衝撃波を放つべく、大剣を縦横に振るう。

しかし、

「『ソニックバスター!!』」

その間を狙われ、身体の前面にくまなくバスターを撃ち込まれる。身体が泳いで後退するバツカスに、ロックマンは続けて蹴りを、そして風の球体を叩き込んだ。

『「あああッ!?!」』

球体が爆発し、暴風が吹き荒れる。めり込むほどの勢いで地面にたたき付けられたバツカスは、ほとんど身動きがとれないような状況下で、風の剣を振り上げるロックマンを目撃する。

どうにか防御しようと、めり込んだ腕を無理やり動かしている最中に剣は振り下ろされて、

途中で、ロックマンはよろめいて膝を着いた。

「『……………あれ?』」

本人にとっても予想外だったのか、呆然とした表情で固まってい

る。バツカスも少し驚いたものの、すぐさま我に返り、隙だらけの彼に拳を叩き込んだ。

「ッ！？」

ロックマンが転がっていく。倒れはせず、再び膝をついている。何度も立ち上がるうとしている様子だったが、上手くいかないのか、柱に縋ってようやく立ち上がった。

ロックマンの突然の不調。本人は困惑している様子だったが、バツカスには少し、思い当たる節があった。

ハープ・ノートとセレス様の戦闘は二分ちよつとというかなりの早期決着だった。その戦闘の直後、ハープ・ノートはけだるい様子で電波変換を解いたと聞いた。

バツカスとしては、そのことに大した関心はなかった。早期決着は戦闘能力に差がありすぎたから、電波変換を解いたのは戦闘が終了したのだから当然だと。

だが、そこに隠された真の意味を彼は今悟った。

何のことはない。ただ単に、彼女自身が疲弊していたからなのだ。

おそらく、あの状態を維持するのには、かなりの労力を要するはずだ。あれほどの強大な力なのだから当然だろう。

それなのに、体力を失っていたらどうする。あの状態になることによって多少なりとも回復すると仮定しても、体力がゼロに近いことに変わりはない。それである状態を維持しようものなら、少ない体力が、水道水のように消費されていき、じきに空になる。

ハープ・ノートはそれを悟っていたから、早期決着させたのだ。それでもほとんど体力が残っていないから、けだるそうだったのだ。

ロックマンも同じだ。彼もシルフィーも満身創痍だった。その上での状態に変化したのだ。体力はほとんどないだろう。そういえば、彼は何か勝負を急いでいる節があった。確実に体力は尽きかけている。だからこそそのあの不調だ。今ならばあるいは倒せるかもしれないが

体力が尽きかけているのはワタシも同じだ。

こちらだって、これほど長時間を維持した経験などない。平静を装ってはいるものの、もう限界が近くて立っているのも結構辛いのだ。

おそらくもう走れない。いや、歩くことすら困難かもしれない。

だからバックスは、大剣に残された雷電の力を全て注ぎ込んだ。

大剣が紫色に発光し、火花を散らす。雷電が漏れ出て、周囲を明るく照らす。

最大技を放つ準備が完了した。

見るとロックマンも、ようやく支えなしで立てたらしく、半身になって銃口をこちらに向けている。

銃口内には風や電波エネルギーが集束し、凝縮した状態で留まっている。

あちらも、準備が整ったようだ。

バックスは大剣を振り上げる。ロックマンは脚に力を込める。緊張した、短い沈黙が流れ、そして、

『サンダーレイジ!!』

「『ストームブリンガー!!!』」

雷電と暴風が激突した。

もうほとんど体力がないことは分かっていた。

ミソラに、『デュアル』状態の感触を聞いていたから短時間になりの体力を消耗することは知っていた。

だが、あちらにも『デュアル』の情報はあるのだし、そもそもバツカスはそう簡単に勝てる相手ではない。

だから、長時間戦闘が続くことだって、覚悟の上だった。

「『おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ  
!!!』」

ロックマンのストームブリンガーとバツカスのサンダーレイジは、激突後、拮抗していた。

ある程度余力のあるあちらの攻撃と、ガス欠状態のこちらの攻撃は、威力的には大差ないようだった。

いや、むしろこちらが押されている気さえする。

ま、ずい……!!

体力も気力も、もう限界に近い。そもそも《デュアル》直前の二人の体力が既にゼロも同然だったのだから当たり前ではあるのだが、と、そこで、雷電と暴風の向こう側にいるバツカスの声が聴こえた。

『星河スバル、貴方はボクには勝てません。自分自身よりも他人を護ることを重要視する貴方などに、自らの誇りをかけて闘うボクが、負けるはずがありません!!』

途端、サンダーレイジの威力が増した。こちらが本格的に押されはじめ、徐々に踏ん張りが利かなくなってくる。

まずい、まずい!!

対抗しようともこちらも威力の増幅を試みる。しかしできない。さらに割くほどの力は、もはや彼には残されていない。押される。押される。身体が浮きはじめる。もう踏ん張ってすらいられない。

暴風が押し戻され、雷電が間近に迫る。敗北が間近に迫ってくる。

その時だった。

「スバルくん！ 頑張れええええええええええッ!!」

「そうです！ 勝って下さあああああいつ!!」

ルナとキザマロの、声援が聴こえた。

……いや、それだけではない。

「ロックマン、勝ってくれええええええッ！！」

「そんな奴ブツ倒せええええええええええッ！！」

何十人も生徒、文化祭の来客の方々が、ロックマンの背後で頻りに声援を送っていた。

もしあちらの雷電が競り勝ってしまったら、巻き込まれて死んでしまいかもしれないのに、お構いなしに、彼女達はそこにいた。

ロックマンは絶対に負けない、信じていると、そう言外に語っているようにも見えた。

それに、ロックマンは、

「『あああああああああああああッ！！』」

力をもらった。空になりかけていたはずの力が、僅かながらだが回復する。

その上でロックマンは、残された体力も気力も、その一切をストームブリンガーに注ぎ込んだ。ゲイルスタイルの維持はウォーロックとシルフィーの根性に任せる。ロックマンは、全神経を技の競り合いに集中させた。

「『おおおおおおおおおおあああああああッ！！』」

徐々に、徐々に、威力が増幅された暴風が雷電を押し戻していく。見えないが、バツカスが息を呑んだのが分かる。そのバツカスに、ロククマンは叫んだ。

「バツカス！！ 君は僕には勝てない！！ 護るために闘う僕が、自分自身のためにしか闘わない君なんかには負けるはずがないッ！！」

暴風が雷電を押し戻し続け、バツカスの間近まで迫る。彼も抵抗している様子だが、足りない。足りるわけがない。彼は一人なのだ。技に力を注ぎ込む余地なんて、もう湧いて来るはずがない。

「く、そおおおおおおおおおおおおおおおおお  
ッ！！」

バツカスの絶叫がほとばしる。  
そして、

暴風により身体をズタズタに引き裂かれたバツカスは、校舎の壁に叩きつけられて、地に倒れ伏した。

倒れ、電波変換も解けたバツカスの眼前に、スバルは座り込んでいた。こちらも、勝利すると同時に限界が訪れ、《デュアル》どころか電波変換すら解けたのだ。

かつてないほど消耗していたウォーロックとシルフィーはハンターV.Gに戻し、ルナの肩を借りてこの場まで来たものの、正直どうすればいいのか分かっていない。

するとおもむろに、バツカスが口を開いた。

「……分かってはいたんですよ。ボクは、《ブリッツモード》を解くところなる。ボクの性質に合わせたエランドの回路が、雷電に耐え切れずに、焼き切れる。このようなりスクを負わない限り、ボクは、第一線クラスの力を行使できません」

バツカスが顔を隠す。

「だからボクは、《十二神将》に選ばれなかった。実際の実力が、及んでいないから」

そう嘆く彼は、スバルには分からないが、もしかしたら泣いているのかもしれない。

敵だが、何か、気の利いた言葉をかけるべきだろうか。

ただ、彼の内面をスバルは知らない。会ったのだった二回だし、少し怒りっぽいくらいしか情報がない。

スバルは悩み、悩み、悩み抜いた末に、

「……………そんなこと、ないと思うよ」

そう言った。

キョトンとするバツカスに、彼は続ける。

「君は強いよ、僕が保証する。何せ君は、僕が今まで闘ってきた中で一番 強いつてわけじゃないけど、……そうだね、一番厄介な相手だった」

しかし、だからその……、と最終的にしどろもどろになる。もう言うべきことが尽きたのだ。

すると、バツカスが小さく笑った。

『……慰めのつもり、ですか？』

「……まあ」

『何がしたいんですか、貴方は』

「……さあ？」

くっくっ、と再びバツカスは笑う。スバルは頬を掻き、釣られてなんとなく笑う。しばらくその場に、敵同士の笑い声が響いた。

やがて、

『……何やら、馬鹿らしくなってきましたよ』

「闘うのが？」

『……そうですね。闘うのが』

「じゃあ止めようよ。止めて、償おう」

スバルは手を差し延べて、告げた。その様子に、やはりバツカスは笑う。

『償う、ですか。なるほど、魅力的な提案です。……しかし』

しかしすぐに、その表情から感情が消滅する。

『もう、手遅れです』

その時だった。

バツカスの胸の中心に、何者かの腕が突き立ったのは。

「……………え？」

困惑し、絶句するスバル。

そんな彼を尻目に、現れた何者かは、絶叫するバツカスから“何か”を引き抜いた。

途端にバツカスの身体が分解され、消滅がはじまる。我に返り、名前を叫ぶスバルに、バツカスは薄く笑い、直後に、完全に消滅した。

「……………ッ!!」

キッ、とスバルは襲撃者を睨む。しかし途端に狼狽して、素早く後退する。

襲撃者は、

ユノ・エンヴィーだった。

第79話：決戦？（後書き）

文化祭編はあとほんの少しで終わります

## 第80話：終戦

ユノはバツカスから奪った“何か”を懐にしまい込んだ。  
次いでスバルに視線を向ける。

スバルは完全に萎縮してしまっていた。  
ウォーロックもシルフィーも満身創痍、スバル自身も既に一人で歩くことすらままならない。そんな状態で、つい今しがた激闘を繰り広げた相手より強大な相手に、どう相対すれば良いというのだろうか。

「す、スバルくん……」

数メートル離れた位置で、か細い声でルナが呟いた。彼女はユノの素性を知らないが、その身に纏う凄まじい威圧感に完全に圧倒され、竦んで身動きがとれないでいるようだ。

そんなルナに、スバルは言った。

「……委員長、逃げて」

「……な、何言ってるの？ そんなこと」

「いいからッ!!」

渋る彼女に、スバルは声を張り上げた。普段ならば絶対に見せないであろう怯えた表情を見せ、僅かに後退る。

……彼女も、分かっているのだろう。ユノがスバルを殺害しにきた刺客だということが。

それならば、一人にさせたくないという気持ちは分かる。逆の立

場なら、彼だつて同じく渋るだろう。

だからスバルは、付け加えて言った。

「……ミソラちゃんでも、ゴン太でも、ジャックでもいい。誰かにこのことを知らせて、それで、救援を頼んでほしい」

「あ……」

「お願い」

「……分かったわ」

相当な葛藤があつた様子だが、了承し、たどたどしい足取りでルナは去つていった。姿が見えなくなり、スバルはホツと胸を撫で下ろす。

そこでユノが呟いた。

『優しいわね、あなたも、あの娘も』

「……そりゃどうも」

素っ気なく返しつつ、思考をフル回転させる。この場をどうやって切り抜ける？ 打開策はあるか？

しかし、どれだけ考えても、何一つ有効な案は浮かばなかった。そもそも、要である電波変換が行えない状態なのだ。仮に何か手立てがあつたとしても、まず実行に移すこと自体が不可能だ。

どうする、どうする！

それでも絶えず思考する。その間にユノがしゃがみ込み、こちら

に手を伸ばしてくる。

見た感じは綺麗な手なのだが、スバルにはもはや死神の手にしか見えない。

その手はすぐにスバルの頬に添えられた。口付けでもするかの如く、顔が徐々に接近してくる。

やがて、彼女の口がスバルの耳に触れるか触れないかという位置まで届き、

『今回は、退却させて頂くわ』

そう囁かれた。

途端にユノの感触が消えた。同時に姿も掻き消え、一瞬だけ呆然としていたスバルは、素早く周囲を見渡す。

ユノは、既にこの近辺にはいなかった。

「……………退却って」

何故だ？ と当然疑問に思う。

彼女は完全な優位に立っていたはずだ。こちらには反撃のチャンスすらないほどの、圧倒的な優位に。だというのに、何故退却する必要があるというのだろうか。

「うーん。……………」

スバルは必死に思考する。ユノの真意は一体何なのか。そのまま考えて考えて考えて、ひたすら考え続けて、  
やがて、

「……………とりあえず、委員長にもう大丈夫だよって伝えよう」

一旦思考を放棄した。

「くそっ、くそっ、くそくそくそおッ！！ 離せ、離せえッ！！」

弦と音波の障壁によって拘束されたファントム・ブラックは、子供のように喚いていた。

今回の拘束はさきほどより嚴重だ。手足もしっかりと縛ったし、消失しても音波に阻まれて脱出は不可能。二度と、同じ轍は踏まない。

さて、戦況はどうなってるのかな？

目をつむり、学校全体の電波を探る。相変わらずそこかしこでウイルスやエランドとの小競り合いが行われているようで、まだ戦闘は終わっていない様子だ。

しかし、

大きな戦闘の気配が一つも感じられない。

バツカス、ユノという強大過ぎる存在が訪れているにも関わらず、彼らが戦闘を行う際に発生する大きな電波の乱れがまるでない。もう戦闘が終了したというのだろうか。

スバルくんは！？

さらに集中して電波を探る。バツカスとの戦闘場所であったであろうプール付近を中心にして、くまなく、電波体一体ごとにちまちまと電波の反応を調べる。

そこで二体ほど、異様に反応の薄い電波体を感じとった。周囲の物音が聴こえなくなるほど集中し、その電波の反応と記録されている電波の反応を照らし合わせる。

ウォーロックとシルフィーだった。

生きてる。この二人が生きてるってことは、スバルも生きてる！

歓喜に震えるハープ・ノート。そう断言する根拠はない、ただの直感だ。しかしその直感には、妙に自信があった。

じゃあ、バツカスは。

ウォーロック達の付近をさらに探ってみる。しかし、どれだけ探ろうと、彼の反応は発見できなかった。

それはつまり、スバル達がバツカスを打ち倒したということだ。

ハープ・ノートはそこで探査を打ち切り、目を開いた。次いで、弦を解こうともがくファントム・ブラックに対し、彼と同じような笑みを浮かべつつ、宣言する。

「『残念、あなたの“もう一つのシナリオ”っていうのも頓挫したつばいよ』」

「……………!? ば、馬鹿な!？」

驚愕が彼の顔を彩り、途端に動作が止まる。どうやら学校全体の電波の反応を探査しているようだ。

何十秒も、ただひたすらに彼は探査する。信じたくないのだろう。自分の立てたシナリオが、プライドを捨ててまで立てたシナリオが潰されたなど。

しかし、どれだけ探ろうとも事実は変わらない。スバルは生き残り、バツカスは敗れて消滅した。それをようやく悟り、ファントム・ブラックは地面に突っ伏した。

「……………」

逆転の見込みはもうほとんどない。彼は完全に絶望しているだろう。おそらく、もう再起は不可能だ。

気絶させて、電波変換解かせるか。

ファントム・ブラックの傍らにしゃがみ込む。死なない程度の音波を掌で生成し、彼の脳に響かせる。

……………寸前。

彼を拘束していた弦がブチブチとちぎれ、音波の障壁が砕け散った。

「……………!？」

反射的に飛びのくハープ・ノート。弦はともかくとして、あの障壁は、さきほどの攻防で測った彼の攻撃力では到底破壊不可能な硬

度に設定してあるはずなのだ。

それが何故ああも簡単に破壊される？ まさか、さきほどより彼のスペックが突然上昇したとでも

しまった、忘れてた。

……そう、上昇だ。こちらがあまりにも優勢過ぎて、思わず失念していた。

彼はユノの能力で、怒りや憎悪を感じる度に、比例して戦闘能力が上昇する状態だったのだ。

全てのシナリオが潰されたという事態は、まさにその対象だ。ということはつまり、ファントム・ブラックの戦闘能力はまた格段に上昇したということ。

どのレベルまで上がった？ さっきまでのはせいぜいノーマル状態の私より一段階上って程度だったけど。……まさか、十二神将クラスまで上がったんじゃない。

その可能性もないとは言い切れなかった。現に、十二神将対策として用意した障壁が、しかもディーヴァスタイルになって格段に硬度が増した障壁が、容易に破られたのだから。

くそ、もう余裕がないっていうのに。

豎琴を構える。ファントム・ブラックはフラフラと立ち上がる。

「ひはは」、と狂気に満ちた笑い声を上げつつ、彼はこちらを向いて、

白目を剥いて、倒れた。



……ハーブ・ノートも、そしてファントム・ブラックも知らなかった。

ユノのセブンスデッドリーシンスは、本来自身のスペックを上昇させるのに用いられる能力だ。

基本的に、他人に分け与える能力ではないのだ。

その理由は、“感情がほとんど欠落している自分が使わないと、すぐに個体としての上昇可能なスペックの限界値を越えてしまうから”らしい。

そしてもし、その限界値を越えてしまった場合、

収まりきらない力が、能力の対象者の身体から一気に解き放たれ、起爆する。

あの点滅から、そのことを直感的に悟ったハーブが、ハーブ・ノートに告げる。

『ミソラ、今すぐ彼の周囲を障壁で囲いなさい。全力で、何が起ころうと、展開し続けなさい!』

「『え? ……………う、うん、分かった』」

言われて、ハーブ・ノートは球状に弦を展開し、音波の障壁を生成了。言われた通り全力で、残りの力を全て注ぎ込む勢いで。

そしてファントム・ブラックの点滅が、まばゆい光に成り代わった瞬間、

障壁が一瞬で砕け散りそうになるほどの威力の大爆発が巻き起こった。

「ッ」

結局、障壁は砕け散った。

爆発が治まった後だったのが不幸中の幸いだが、維持に全力を注いだ代償にハープ・ノートは力尽き、倒れ込んでしまった。

電波変換も完全に解け、一人では動くことすら叶わないほど消耗した三人は、視線だけを、爆発により生まれたクレーターへ向けた。ゾツとする。もし自分達が防いでいなかったら、学校、いや、この街がどうなっていたのか分かったものではない。

安堵して溜め息をつく三人。しばらくして、ミソラが呟いた。

「……………ファントム・ブラック、どうなったんだろう」

敵とはいえ、一応は人間だ。どうにか生きていて欲しいとは思う。ただ、彼はあの爆発の中心にいたのだ。生き残っている可能性は限りなくゼロに近い。

ハープは、残滓と呼ぶ方が相応しい程度の力を振り絞って、クレーター付近の電波を探查する。しかしどれだけ探しても、ノイズ以外の何も発見はできなかった。

そのことを告げられたミソラは消沈し、目をつむった。

彼らしい、憐れな散り様だったな、と少しでも思った自分が、許せなかった。

サテラポリス及び有志の協力者達の手によって、戦闘開始から二時間以上経過した現在、ウイルス、エランド両方の軍勢は全て撃退された。

敵の大將格であったバツカス・アンガー、ユノ・エンヴィーの二名は、星河スバルの報告によると、前者は消滅、後者は退却したとのこと。

もう一人、ファントム・ブラックことハイドについてだが、響ミソラの報告によれば、直接目撃した訳ではないものの、おそらく死亡したものと思われる、のだそうだ。

これにより、脅威は完全に去ったものと判断する。

時刻は午後八時半ちょうど。

戦闘は、終了した。

“ 暁シドウ ”

## 第80話：終戦（後書き）

とりあえず、バトルパートは終了。

文化祭編は残り一話です。

まだ全く書いていないので、確実に年明け以降の更新になります。  
すみません。

それでは皆さん、良いお年を！

年明け後に読まれた方は、明けましておめでとうございませう！

## 第81話：文化祭、終了

終戦から約二時間。破壊された校舎や地面は、ひとまずリアルワールドで補強された。

何故“補強”なのかというと、生徒や来客達が、「後夜祭はまだ終わっていない」という理由でサテラポリスに逆らって、帰宅しようとしなかったからだ。

とりあえず責任は全て暁シドウが負うことになり、滞在は承認されたものの、ほとんどの校舎がいつ崩壊しても不思議ではない状態だったため、どうにかこの場を持ちこたえさせようと、補強した訳である。

そんなこんなで再び後夜祭が開始したのだが、校内に戻ってきた活気とは正反対の気分で、屋上に寝っ転がっている者がいた。メルクリウスだ。

『……………』

……彼は、ユノに殺されなかった。振り下ろされた棘は頬を掠めただけで、ほぼ真つすぐ地面に突き立っていた。

何のつもりか、と当然彼は訊ねた。裏切り者を始末に来たのではないのかと。

ユノは、気が変わった、と返答した。何故、と再度質問すると、今度は、面白いから、と本当に面白そうに笑って答えた。

そしてやはり面白いからと、ある『話』を聞かされた

『……………ならなおさら何で俺を殺さない。それが目的なら、別世界にいる俺は今の内にやっついた方が後々楽だろうが』

メルクリウスは憎悪を込めた瞳で、怪訝そうに訊ねた。さきほどの『話』で、ウルカヌスが既に粛正されていることが分かったため、頭にきているのだ。

『さきほども言った通り、面白いからよ。それを知ったあなたは当然仲間にも話すだろうし、対策も立ててくるでしょう。それらが総じて面白いの』

事もなげ言つてのける彼女に対し苛立ちが募る。完全に躍らされているのが分かった。

『……………俺には、アンタの考えてることが分からない』

『分からないように振る舞っているから、当然ね』

ユノは溜め息混じりに告げる。すると突然、滅多にどこるか過去に一度として見たことのない表情、要するに驚愕した表情になった。しばらく周囲を見渡すような動作を見せた後、視線が一点で固定される。地面に張り付けられた状態では全く見えないが、どうもその方向に何かがあるらしい。

ユノはそちらに向けて歩を進め、メルクリウスに背を向けた。

『……………どうやら、あなたのお仲間が私の想定を遥かに越えた力

を手にしたようね』

『? どういう』

『バツカスも“糧”になるという話よ』

もう、話の繋がりが見えない。

困惑する彼を横目に眺め、彼女は跳躍する準備に入る。

『……メルクリウス、一つ、伝えておくべきことがあるわ』

その最中に、彼女は言った。

『アルテミスはもう限界よ、それは理解しているのかしら?』

『!!--!』

メルクリウスは驚愕し、絶句する。それはずっと気にかかっていて、しかしあえて思考の表面には出さないでいた事実だった。

ユノは、まるで役目を終えたかのように、

『……それじゃあ、再び会うことがあったなら、その時はよろしく』

跳躍して、一瞬にして姿を眩ました。

それから彼は、全戦闘が終了した後にはサテラポリスに救出された。傷はそこまで致命的なものでもなかったし、能力を用いければ容易に回復できる程度のものであったので、彼らには取り合わずに早々に立ち去った。

その後は適当に校舎の修復などを手伝い、現在に至るといふ訳である。

『……………』

街の光のせいで星すら拝めない夜空を眺めつつ、思う。

ユノの『話』が本当だとしたら、彼女達の計画が完遂すれば、地球が減ぶとかそういう次元の話ではなくなる。

そう、“次元”だ。“次元”に関わるレベルの事態になりかねない。

つつても、それを阻止する決定的な手段がない。

ミソラの サテラポリスの隊員に聞いた話が本当ならばバルも《デュアル》は確かに強大な戦力だ。メルクリウスのような一般の十二神将クラスならば、圧倒的優位に立った状態で戦闘を進めて行けるだろう。

が、それ以上の、特に《五本指》クラスが相手となると話は別だ。彼らの戦闘能力はまさに桁違いで、先刻のメルクリウスとユノの攻防からその実力差が窺えるだろう。

そして確実に、その誰もが《デュアル》状態のミソラ達より戦闘能力が上だ。

でも、アイツらはそんなのお構いなしに突っ込むんだろうなあ。

彼らは、そういう連中だ。

だから、この『話』はまだ伝えることはできない。

伝えたら、すぐにでも乗り込もうとするだろうから。

時期、見計らわなきゃなあ。

スバルもミソラも、どうにか歩ける程度にまでは回復した。

三時間近くもずっと休憩していたのだからある意味当然と言えば当然なのだが。

ともかく、少々フラフラしながらではあるが歩くことが可能になった彼らが向かったのは、キクリが寝かされているはずの保健室だった。

スバルが安全な場所まで運んだ後に、エモーションドレインの後遺症なのか、意識を失ったらしいのだ。

命に別状はないらしいが、それでも状態が良いとは決して言えないだろう。

そうして、消沈した気分のまま保健室の扉を開けたスバル達が見たものは、

「あ、来てくれたんだ。嬉しいなあ」

ベッドに座り、笑いながらヒラヒラと手を振っているキクリの姿だった。

「……………」

啞然とする二人。気絶したと聞いていたのに、まるでそんな事実などなかったかのような振る舞いを彼女は見せている。

「？ ほらほら、そんなところに突っ立ってないで、こっち来てよ」

訝しげな表情になったキクリが手招きをする。我に返った二人は、ひとまず彼女のベッドまで駆け寄った。

「……………えっと、大丈夫なの、花菱さん？」

「んうー？ ……大丈夫大丈夫。ちょっと怠いかな？ って程度だよ」

「でも、意識を失ったって……………」

「それはあれだよ。スバルくんに安全なところまで運んでもらって、緊張の糸が切れただけだよ」

「！？」

へらへらと流すように説明するキクリ。しかし、ミソラは聞き逃さなかった。彼女は今、“スバルくん”と言った。つい数時間前まで“星河くん”だったというのに。

驚愕するミソラに、追い撃ちがかかる。

「……キクリさん、無理とか、してないよね？」

「大丈夫、してないよー」

「！……！！？」

……聞き間違いではない。スバルも、今確かに“キクリさん”と言った。つい数時間前まで“花菱さん”だったというのに。

う、嘘。もしかして、救出する時に何かあったの！？ あ、あれ？ もしかして、結構ヤバいんじゃない？……。

狼狽し、気が気ではない様子で交互に二人を伺う。適度に冗談を交えながら、わりと楽しそうに会話している。

……以前と変わった部分は、見受けられない。

うーん。………。そっか、そうだね。名前で呼び合うようになったただけだね。私と同じに、要するにアンフェアな部分が多くなっただけだ。

そう解釈し、一人うんうんと頷くミソラ。スバルのことをいつも鈍い鈍いと言っているが、肝心なところで彼女も大概鈍かった。

「どっしたのミソラちゃん？」

「ん、何でもなーい」

「？」

ミソラは適当にごまかし、スバルは首を傾げる。キクリが笑い、

次いで溜め息をついてから告げる。

「……………ね、私のことはいいからさ、他の友達のところに行きなよ。怪我人わりと多かつたらしいから、体育館とか広いところで処置を受けてる人がいるみたいだよ」

「……………そうか。だからここにツカサくんいないのか」

保健室を隅々まで見渡し、スバルが呟く。キクリ以外にも怪我人が何人が寝っ転がっているが、あの特徴的な緑色の髪はどこにも見当たらない。

「それに、後夜祭はまだ続くって聞いたし、こんなところで初めての文化祭のラストを過ごすなんて損だよ？ ほら、行った行った」

ポン、と軽く二人を押しキクリ。よろけた二人はキョトンとして、言ってみる。

「「なら君もあなた」」

「私、一応病人。勝手に出てったら先生に怒られます」

「「ですよねー」」

ポリポリと頬を掻き、視線をキクリから離さないまま出入口に到達する。そして、

「私の分まで後夜祭楽しんできなさいな」

「「了解」」

そこで、二人は保健室を後にした。

……本当に、二人とも鈍かった。

「……………ふう」

二人が保健室から出ていったのを確認し、キクリは安堵の息をついた。

おもむろに天井を仰ぎ、何か決意したように頷く。

キクリは腕に力を入れ、立ち上がった。

……………しかし、

「……」

早々にベッドへたりこんだ。

「……………」

……彼女は、一つ嘘をついていた。

無理していないかと訊かれ、していないと答えたが、それが実は嘘なのだ。

実際は相当無理をしている。今みたいに立つことだってままだらないし、気を抜いたら再び意識を失ってしまうだろう。それほどに、ユノの能力の後遺症は酷いものだった。

なんていうか、何にしても損するよね、私。

思わず溜め息が洩れる。詳しいことは分からないが、おそらくしばらく入院することになるだろう。せつかく告白までしたのに、ほとんど会う機会がなくなってしまうのだ。

そうなればスバルだけではない、ミソラだって他のみんなだって心配するだろう。本当に、申し訳なく思う。

……でもさ、それは別に今日じゃなくてもいいよね。

再び天井を仰ぐ。今日は、まだ楽しい楽しい文化祭の最中だ。だといつのに彼らにそんな思いはしてほしくない。

だから、キクリはあえて無理をする。せめて、後夜祭が終わりを告げるその瞬間までは。

「……………あ、また誰か来た」

スバル達はその後、どうにか意識を回復したらしいツカサを見舞ったり、ウィルス討伐の最大の貢献者であるゴン太の暴食シーンを目撃して微笑んだり、仲直りしたらしく、普段通りのやり取りを繰り広げるシドウとクインティアに対してジャックと共に呆れたり、「やっと出番来ました！」と意味不明な叫び声を上げるキザマ口を怪訝そうに眺めたり、何気に活躍したクラスメイト二人と軽く談話したり、ルナに嫉妬されたり、こっちはこっちで後夜祭を楽しんでいるウィザードを遠巻きに眺めたりした上で、軽音楽部が演奏準備を進める舞台をやはり遠巻きに眺めていた。

「……………」

流石に疲れたのか、会話はない。

舞台では女子部員が軽快なノリでトークを繰り広げている。そこでふと、スバルが口を開いた。

「ミソラちゃん、何か言おうとしてたよね？」

「ふえ？」

「ダンスの時」

「……………あ、あー、あれは……………」

口をつぐむミソラ。好きですって言うつもりでした、なんて言えるはずがない。

その台詞はあの雰囲気だったからこそ伝えようと決心したものであり、こんな雰囲気ではとてもじゃないが言えない。

「な、なんでもないよ！ なんでも！」

「……そうなの？」

「そうなの！」

だから強引にごまかした。スバルは依然として怪訝そうではあったが、とりあえず引き下がってくれた。

ミソラは安堵する。

ていうか、ここで告白するのってフェアじゃないしね。同じ人を複数人が好きになったんだったら、どうせならスバルくんに決めて頂かないと。

そんなことを思考するミソラ。

それだと、スバルが全く別の女性を好きになる可能性もあるし、そもそもルナやキクリが告白をしていない前提でないと成立しない。そして、ミソラが言うフェア状態はとくにアンフェア状態に変わっているのだが、やはり気付かない。

ミソラは、一歩前へ出た。

「じゃ、私行くね」

「？ 行ってくつて、どこへ？」

「あそこ」

スバルの問いに対し、ミソラは舞台を指差しながら答えた。

「……え、行ってくつて、まさか……」

「そのまさかだよ。 スカイボード、リアライズ！」

ミソラがハンターV.Gを前方に掲げそう叫ぶと、リアルウェーブで構成されたボードが出現した。

「ミソラちゃん正気！？」

「正気です!!」

空中で浮遊するそれに乗り、まずバランスをとる。次いで観客への被害も考慮して進路を確認する。すべてクリア。そしてミソラは、

「いっくよ〜、響ミソラの（事務所に無断の）ゲリラライブだ!!」

凄まじい速度で飛んでいった。

「……元気だなあ」



頭にガツンと来るレベルの歓声が上がった。

軽音楽部員全員が「え、マジで？」みたいな喜んでいいんだか悪いんだか判断しかねている表情をしているのが見ずとも分かる。

ミソラは言った。

『本当はこういうのマネージャーさんから禁止されてるんですけど、今回はあれです、破っちゃいます。何かもう、今唄わずにはいられないんですよ！！』

やはり歓声が上がる。軽音楽部員からはやる前に終わった感が滲み出ている。

そんな彼女達に、ミソラは訊ねた。

『皆さん、私の歌全曲、伴奏出来ますか？』

『！ 出来ます！！』

MCの女子部員が全力で肯定する。活気の戻った軽音楽部員が、ミソラが中心となるように楽器の配置を入れ換える。

その最中に、ミソラは観客に確認をとった。

『あの、今はちょっと手に問題があるんで歌唱しか披露できませんが、それでも構いませんか？』

『構わない！』との声が至るところで上がる。スバルには、「あ、やっぱりあのテンション空元気の類だったんだ」という感想が浮かんだ。

配置が完了する。演奏者達にミソラは確認をとる。

『じゃ、いきますよ。最初の曲は当然』

彼女はそこで溜めに溜めて、

『ハートウエーブ！！』

その後、ミソラがデビューしてから休業する直前までのありとあらゆる曲が披露された。

しかしそれでは収まりがつかなかったらしいミソラは、本来軽音楽部が行うはずだった曲も（軽く打ち合わせして）いくつか唄った。会場のボルテージは最高潮。昔のアイドルのコンサートの如く、失神者まで現れる始末。

最終的に、行動可能な人々全員が会場の周囲に集まる事態となり、怪我人を出さないようにとスバルが尽力する羽目になった。

その調子で約四時間。

流石に全員力尽き、誰一人帰宅しないまま、地面でもお構いなしに就寝した。

明朝、校舎の本格的な修繕にあたろうと訪れた業者によれば、

「いやあ、戦争による惨状にも似た状態でしたよ。失礼な話、倒れていた皆さんが死体にしか見えませんでした」

だそうだが、あながち間違いとも言えないため、サテラポリスのお偉いさんは苦笑したという。

……まあ、何にしろ。

夕風中学校、文化祭。終了。

第82話：孤高と少女の邂逅（前書き）

お久しぶりです

ブライ登場です

## 第82話：孤高と少女の邂逅

『こんにちはシルフィーです。あの衝撃の文化祭から間もなく一週間が経過しようとしています』

と、一人で留守番させられ、暇で暇でしようがなかったシルフィーがリビングで呟いた。

スバルとウオーロックは入院中のキクリのお見舞いに、大吾は普段通りWAXAに通勤、メルクリウスもそれに連れ添って出かけていった。あかねもパートで出かけており、完全に一人なのである。

『……………なんで、誰も起こしてくれないわけ？』

現在時刻、正午過ぎ。シルフィーが目覚めたのはつい二十分前なのだ。皆が家を空けている理由は書き置きで知った。

ちなみに本日は絶好調で平日なのだが、学校は休みだ。校舎のダメージが想像以上で、修繕が長引いてしまい休校になっているのだ。だからこそ、平日の昼間にスバルがお見舞いに行けるのである。

『……………いや、まあ、自力でスリープモード解けないくらい深く眠っちゃった私も悪いと思うけどさ、だからって起こさないのおかしいでしょ。特にスバル！ 仮にもオペレーターじゃん！』

叫ぶ。リビングに声が虚しく響く。はっきり言って、悲しくなってくる。

『……………何これ。これじゃまるで私ぼっちじゃん。友達いない娘みたいじゃんちくしょー』

自棄になつて寝つ転がるシルフィー。凄まじい孤独感だ。  
メルクリウスの補佐官として選ばれた辺りから度々味わっていた  
感覚のはずなのに、妙に辛い。やはり下手に親しい間柄の相手が増  
えると駄目だな、と思う。

あの頃は、どうだったかなあ。

スツと目を閉じ、回想する。

補佐官に選ばれて 十年か二十年は、メルクリウスが任務で出  
かける度に一人になっていた。当時は若干やさぐれていて、他の補  
佐官達とも折り合いがつかなかったのだ。

毎日毎日凄まじく退屈だった。本来十二神将に同伴すべき補佐官  
なのに、メルクリウスは滅多に連れて行ってくれない。

その調子で、いつも通り部屋で寝つ転がっていた、ある日

『あ』

そこで、彼女は目を開けた。

外からスバルの話し声が聴こえてきたのだ。

お見舞いに行く途中に合流したのか行った後に合流したのか、ミ  
ソラヤルナの声も聴こえる。

はは、もし行く途中だったら、病室で修羅場が展開されてい  
たに違いない。

想像して笑う。例の一件で三人の気持ちに気付いたとスバルは言  
っていたが、結局今までと大して変わっていない。この調子だと、  
当分は友達関係のままだろう。

……友達。

そこで彼女の表情が曇る。

“友達”という言葉に、離反した後からずっと後ろめたさを感じていたのだ。

シルフィーの友達。あの日、一人で部屋にいた彼女の前に現れた《候補》の一人。

ペルセポネを、どうしても思い出してしまうから。

ノイズウェーブ。

ほとんどの電波体にとって有害な、ノイズに満ちた空間。そんな空間で、ソロことブライは修業に明け暮れていた。

普通の空間とは違い、その場にいるだけで身体に負担のかかるノイズウェーブで行ったことによる成果はひとまず出ている。

……が、足りない。まったくもって足りていない。

一月前、彼はセレス・クエイクに敗北した。

彼女の、明らかにこちらを消耗させることが目的の行動など意に介さず、一般人の救助に向かったロツクマン達を無視して、一人立

ち向かった。

結果は、惨敗だった。

文字通り手も足も出ず、一方的になぶり殺されるように、彼は敗北を喫した。

十二神将の実力は、あまりにも圧倒的なものだった。

だからこそその修業だ。

一月、危険を承知でノイズウェーブに居続けて、百体単位での上級ウィルスとの戦闘や、ノイズで狂ったはぐれウィザードとの一騎打ちも何度も経験した。

実力は以前よりかなり向上したし、今ならば一方的に敗北することもないだろう。

ただ、負けないだけで勝てない。それほどの実力を、ブライはまだ得ていない。

……いや、得られないのだ。ブライという存在に、あれほどの力を内包できるスペックがない。

ロッキマンのような外的要因によるスペックの底上げも、ブライに行う術はない。かつてはノイズによる身体強化も可能ではあったが、メテオGが消滅した時点で行使できなくなった。

……つまり、現在行っている修業にはほとんど意味がないのだ。

限界を悟り、それを認めたくなくて身体を動かさごまかしている。ただそれだけ。

「……………ッ、少し休むか……………」

力が抜け、膝をつく。軽く頭痛もするし、目が霞む。ノイズによ

る負担が一定量を越えたのだ。  
これ以上居座るのは危険だ。早急に元の世界に帰還しなければならぬ。

「……………行くぞ、ラプラス」

自身のウィザードに声をかけ、普段使用している裂け目へ歩を進める。

しかし、

「……………ラプラス？」

ブライは振り返った。ラプラスが動かないのだ。どこか一点を、頻りに見つめている。

ラプラスには表情などなく、その上全くと言っていいほど喋らないため、普通なら訳が分からず混乱するだろう。しかしブライは、そのラプラスと二年以上も共に生活しているのだ。いい加減、その行動にどういった意味があるのか理解できる。

「……………向こうに、何かあるのか？」

『ガ……………』

肯定するラプラス。ブライは少し思案した後、ラプラスに剣へ変化するよう命じた。

それを装備したブライは、呟く。

「……………行くぞ」

瞬間、高く高く跳躍する。ラプラスが示した方向とは真逆に電波

エネルギーを放出して、一気に加速する。

空間を切り裂くような勢いでノイズウェーブを翔けたブライは、その速度が信じられないほど滑らかに着地し、ブレーキをかけた。間髪入れず、剣を中段に構える。

射殺すような鋭い視線の先に、“それ”は写った。

漆黒の衣、漆黒のボディ、漆黒の髪。瞳まで漆黒で、しかし肌に当たる部分だけは不自然に白い、

そんな、ブライですらも、一目見て一瞬思考が停止してしまうような少女が、そこには倒れていた。

時間は少し遡る。

世界の裏側。

一部の者には“暗黒世界”とも呼称される漆黒の回廊を、その二人は駆けていた。

一人はハデス。ムーの電波体、十二神将セレスの後釜として選出された元《候補》の一人である。

もう一人はペルセポネ。同じく十二神将の、離反したメルクリウスの後釜として《候補》から引き抜かれつつある、少女のような風貌の電波体だ。

上下左右が確認不可能なこの回廊を、ハデスが先導して駆けていく。いつもならばペルセポネだけでもこの回廊を通過することなど容易なのだが、今回は事情があつてそれが不可能となつていた。

後方で呼吸を荒くしているペルセポネに、ハデスは声をかける。

『……………大丈夫か？』

『……………え？ あ、はい、大丈夫、です……………』

口ではそう言っているが、声は震えているし顔色もかなり悪い。やはり、弱った身体でこの回廊を通過するのは結構なリスクがあるようだ。

ハデスは振り返らず、言った。

『……………無理はするな。半分とはいえ、自らの“核”を削り取っているのだ。辛い時は素直にそう言え』

『……………はい、ありがとうございます』

頭を下げるペルセポネ。構わん、とハデスはやはり振り返らずに呟く。

そうしていると、漆黒の世界に一筋の光が差した。

『ッ！？』

『出口、だな』

二人とも立ち止まり、光の先を見つめる。そこには、最近の任務遂行の場所となっている並行世界があった。

『……………』

ペルセポネが複雑な表情を浮かべる。フードを目深に被ったハデスは、彼女をポン、と押した。

『行け。友に会いたいと、貴様自身が言っていたではないか。迷うな』

『……はい。……しかし、本当に大丈夫、なのでしょう？』

『何がだ』

『……………ゼウス様達が、追跡してこないかどうか、です』

背後を気にしつつ、ペルセポネは不安げに呟いた。

今回、彼女はムーの側から離反しようとしている。理由は友人とシルフィーと敵対したくないから。味方として側にいたいからだ。

シルフィーが離反して、次いでメルクリウスが離反してからずっと考えていたのだ。

正直、ペルセポネはゼウス達を全く信用していない。最初の十二神将選考の時に辞退したのは、彼らの近くにいるべきではないと判断したからだ（もっとも、同時期に辞退したハデスのことは、信用

しているが)。

故に、シルフィーが謀反を起こしたというゼウス達の弁を、彼女は信じていない。そもそも、メルクリウスを慕っているシルフィーが、進んで謀反など起こすはずがないのだ。

故に彼女はこう結論づけた。彼らは偽りの情報を伝えている、と。そしてこの前、その結論を裏付けるかのようにメルクリウスも離反した。

おそらく、彼は真実を知り、シルフィーの味方につくことを決心したのでろう。

……ペルセポネはその時点で、完全にムーの側についていることに嫌気がさした。

だからこそその離反だ。

……ただ、懸念があったのだ。

《神クラス》の自分が離反した時、彼らがどういった行動に出るのかが。

ハデスは溜め息をつき、応えた。

『……………出る時に言っただろう。奴らは、《神クラス》の“核”に当たる部分に執着している節がある。故に当然、《神クラス》たる貴様が離反すれば追跡もするだろう。……が、それは“核”が手元から丸々離れてしまうからだ』

故に、とハデスは彼女の胸の付近を指差して告げる。

『半分でも残っていれば、追われる心配はなくなる。それほど残っていれば、“アレ”を用いて復元も可能だろうからな』

『……………』

……そうなのだ。ペルセポネが弱っているのも、それが原因なのだ。

今、というか出る時にも彼が言ったその言葉は、要するに自身の“核”を半分削れということだったのだ。

追跡の可能性を少しでも減少させておきたかったので、文字通り身を削って決行したものの、やはり相応のリスクはあった。

まずペルセポネの力そのものが半分になってしまったし、それに伴い電波の構成がかなり不安定になっている。消滅する危険性が、低いがあるにはあるのだ。

『……………本当、なんですか？』

それに、信用していないわけではないが、その程度で彼らが追跡を行わないと確定したわけではない。“核”への執着はともかく、半分残っていれば大丈夫というのは所詮はハデスの予想でしかない。ゼウス達の真意と一致しているとも言いきれないし。

『……………ああ、一応独自に調べ上げたしな』

しかしハデスは自信ありげにそう告げる。……………正直、その調べた事項を教えてくれれば話は早いのだが。

……………昔から、そういうところが少し抜けている。

『……………分かりました、信じます』

『……………そうか。ならば、早く行け』

煩わしそうに言うハデス。逃がしているだけとはいえ、彼もかな

り危ない橋を渡っているのだ。早めに帰路につきたいのだろう。  
ペルセポネは、

『……はい、ありがとうございます。ハデス様』

そんな彼に頭を下げて、踵を返した。

あちらの世界はまだ昼間なのか明るい。特殊な体質の彼女にとっ  
て有害な光に満ちている。

……しかし、だから夜になるまで待とうなんて悠長なことも言っ  
てられないのだ。

『……ん』

身に纏う漆黒の装束で、身体をほぼ覆い隠す。左右が見えない上  
に微妙に正面も見つらく不便極まりないが、この際贅沢は言ってい  
られない。

ハデスは既にこちらに見向きもせず、ペルセポネが去るのをじっ  
と待っている。自分に全く利益がないにも拘わらずここまで手伝っ  
てくれて、本当にありがたい。

『……さようなら』

ペルセポネは聴こえるか聴こえないか曖昧な声量で呟いた。

僅かに残った未練を断ち切るように、呟いた。

そうした後、彼女は次元を移動し、ムーの側から離反した。

……最後まで、ハデスが異常なほど険しい表情を浮かべているこ  
とに気付かぬまま。

『ここが、こちら側の地球……』

そこかしこに佇む巨大なビルよりなるべく高い位置のウェーブロードに座り込みつつ、ペルセポネは呟いた。

眼下にはかなりの大都市が広がっており、人や電波体が引つ切りなしに歩き回っている。

彼女の地球ではラ・ムーの手によってほぼ壊滅している風景に軽く感動しつつ、かなりの広域に渡って電波の探査を行う。

シルフィーの、友達の電波を、必死になって探る。

そして、見つけた。

現在地から三十キロ以上離れた位置に、反応があった。

純粋なムーの電波体だからこそ感知できる、ムーの電波体特有の波長が、しかも三つも。

一番巨大な波長はおそらくメルクリウス様だ。残りの二つはその半分にも満たない程度の波長だ。……つまり、ヴィーナス様の補佐官の方と……、

ペルセポネはすつくと立ち上がり、満面の笑みを浮かべて呟く。

『フィーちゃんだ……！』

途端に彼女は駆け出した。目的地へのウェーブロードを、障害物を一切気にせず突っ切っている。

会える、やっと会えるよフィーちゃん！

普段、散々暗いと言われ続けてきた彼女の表情には笑みしかない。それはもはや、“久々に友達に会う”というより、“遠距離恋愛の相手と久々に会う”と言い換えた方がしっくりくるくらいに、幸せそうに。

あの町だ！

そうこうしているうちに、シルフィーの反応があった町にたどり着いた。さきほどの都市とは打って変わって、自然に溢れた長閑な場所だ。

非常に、落ち着ける。

『フィーちゃん、どこ……！』

さらに隈なく探査する。通り掛かった昼休憩中のサラリーマンがギョツとしているが、そんなものにかかずらう必要はないと言わんばかりに真剣に。

すぐさま切り上げ、ある一点を見つめる。

平均よりも若干大きな、“星河”という標札の一軒家を。

あの家に、複数の電波体と共に、シルフィーがいる。

『フィーちゃん！』

跳躍する。手を伸ばす。身体を構成する電波を、物体が干渉できないほどに弱め、あらゆる障害物を摺り抜けていく。

そうして、残り約二メートルほどの距離に差し掛かった瞬間だっただろうか、

突如、目の前の空間が裂けた。

『……………え？』

ブレーキの限界を遥かに越えるスピードを出していた彼女は、家ではなくその裂け目に突っ込んでしまう。真っ黒い、気分が悪くなる異様な空間に放り出され、こけて数メートル転がる。

『……………！？』

状況を全く把握できないペルセポネ。だがしかし、裂け目の向こうをしっかりと見据えていた。

『フィーちゃん！』

再び駆け出す。裂け目からあちらの世界に、シルフィーのいる場所へ向かって。

しかし、手を伸ばした瞬間に裂け目が消滅した。完全にバランスを崩し、よろけて倒れ込む。

呆然と、ついさきほどまで裂け目があった空間を眺める。そこでペルセポネは、

『フィー、ちゃん……………』

友達の名を呟いて、疲労とショックと、気分の悪さで、気を失った。

『 え！？ 』

シルフィーが突然声を上げた。

「 え！？ き、急にどうしたの！？ 」

非常に静かに展開されていた修羅場から逃げる機会を窺っていたスバルが、結構大袈裟にそれに反応する。

ミスラもルナも一応気にはなっただらしく、ギスギスとした空気を薄くして彼女に視線を向ける。

『 あ、いや、その……。みんな、今何か聴こえなかった？ 』

「 え、別に何も…… 」

「 聴こえてない…… 」

「 わよ、ねえ……？ 」

シルフィーの質問に、三人とも首を傾げる。

『……あ、そつか。なら、いいんだけど……』

わりとあっさりと引き下がる彼女を怪訝そうに眺めつつ、結局修羅場が再度展開される。

スバルが「なんでもっと話を長引かせてくれないんだ」的な批難の視線を向けてくるが、視界にすら入れずに天井を見上げる。

だよ、ね。そんなわけないもんね。

さきほど聴こえた気がする“声”を思い出して、シルフィーは苦笑いした。

そんなわけないのに、と。

第82話・孤高と少女の邂逅（後書き）

でも、ブライの出番はそんなになかったのです

### 第83話：孤高と少女の思索

いつだったか、メルクリウス様の補佐官を見る機会があった。

ハデス様からの忠告を受けて十二神将入りを辞退し、《候補》として存在していた私が、少々面倒な任務を終えて帰還して、ちょうど二人も任務から帰還してきた、その時だ。

驚いた。

メルクリウス様に対する眼差しには微かに信頼の色が見て取れたけれど、私に対する眼差しには明確な怯えが見て取れたのだ。

一応は《候補》だし、他の十二神将の補佐官の方も畏怖というのか、まあ一歩引いた感じだったけれど、でも、あの娘はそれとも全く違う。畏怖なんてものではなく純粋な恐怖。それが、あの娘の心を支配していた。

その時はメルクリウス様に挨拶しただけですぐに別れてしまい、話しかけるまではしなかったけれど、何故か彼女のことを無性に気になっていった。

そして後日、私は少し、あの娘について調べてみた。

十二体いる補佐官の最高傑作であるオリガを除いた中で、最も上位に位置する精霊シリーズの四体。その内の一体で風を司る電波体。名前はシルフィー。

彼女は精霊シリーズの四体の中で性能が最も劣っていたらしく、いわゆる虐めを受けていたらしい。

そのせいで心を閉ざしてしまつた上、溜まつた鬱憤を晴らすために下位の補佐官を相手に暴力沙汰を起こしたりして、製造からつた十年間で三十回以上も拘留されていたようだ。

メルクリウス様の補佐官となってからは、そうだったことはなくなつたようだけれど。

『……………気になる』

もう、自分でも信じられないくらいに気になった。どうしてもあの娘とお話してみたくなくて、チャンスが来るのを今か今かと待ち続けていた。

それから三ヶ月ほど経過したある日、ついにそのチャンスが訪れた。メルクリウス様が補佐官をつけずに一人で任務に出かけたのだ。神殿が静まり返る中、他の人にバレないように忍び足で彼女の部屋（というよりメルクリウス様の部屋）を訪問する。

そうしたら、

『……………！？』

あの時の様子からは信じられないほどだらけた体勢で、あの娘が寝転がっていた。まさか誰かが入ってくるとは思っていなかったらしく、一瞬そのままの状態で硬直して、すぐさま跳ね起きて壁に頭をぶつけている。

『あう……………え？』

やがて呆然と私を眺め始めるあの娘。私も呆然としている。予想もしなかった姿を、いきなり二つも見ることが出来たから。

しかしそれでは埒があかないため、すぐさま我に返って一言挨拶。

『こ、こんにちはー』

『……………あ、その、こんにちは、です』

するとあちらも慌てて応える。私は一応上司に当たる存在だったから、凄まじく固いものだったけれど。

『……………そ、そんなに畏まらなくても結構ですよ。私ってほら、ただの《候補》ですから。そんなに偉くはありませんし……………』

『か、畏まり、ますよ。《候補》っていったら、十二神将の候補じや、ないですか。充分に、補佐官の私なんかより、偉いですよ』

緊張と恐怖、それと困惑が胸の内で渦巻いているみたいで非常にしどろもどろ。ちよっと可愛かった。

その後約十分、私が偉い偉くないという訳の分からない議題で言い合い続けた。

でもその議題が、効を奏した。

『……………ふふふ、何を言い争っているんですかね、私たち』

『……………あはは、そうですね』

笑った。直接の上司以外を一切信用していない眼をしていた彼女が、微かにだけけれど笑ったのだ。

本人にとっても相当意外だったらしく、直後に口を押さえている。そして、私は悟る。

本当はこういう顔ができる娘なんだ、と。

だから私は、それから同じことを続けた。

毎回、彼女が一人になる度に訪問して、一方的にでもなんでも、

とにかく何かを話す。これの繰り返し。

最初の頃は話題を振るのは私の役目だったけれど、五年経った頃には徐々にあちらからの話題振りが始まり、十年経った頃にはついにあちらから私の部屋を訪問するようになった。

そうなつてからは、早かった。

敬語が抜けて、口調が砕けて、“フィーちゃん” “ペルセちゃん” と呼ぶようになって、

……親友つて、呼べるようになるまで。

『ん……』

目を開けると、真っ黒な空間が広がっていた。

けだるさが身体を支配する。今までになかった感覚だ。

何だろう、凄く懐かしい夢を見ていた気がする。

けだるさを圧して上体を起こす。周囲を見渡すが、やはり同じような真っ黒な空間が広がっているだけだった。

ぼんやりと霞がかかったようになっていいる頭を振り乱したり叩いたりしてみる。するとそれが効を奏したのか、眠ってしまう直前のことが徐々に思い出せてきた。

『フィーちゃん!』

叫ぶ。しかし応答がある訳もなく、周囲にこだまするのみ。

早くフィーちゃんのところへ行かないと。……というか、ここはどこなの？

もう一度周囲を見渡す。冷静になって考えてみると、この世界は些かおかしい。

まず何より、現実の物質が一切ない。どこかのサーバーにアクセスした訳でも電腦に入り込んだ訳でもないのに、こんな世界に入り込むことなどありえるのだろうか。

『……私の力が暴走した訳でもなし』

呟き、しばらく辺りを徘徊する。非常に複雑な地形をしており、まるで迷路のようだった。

出口のようなものは一向に見えず、それどころか先すら見えない。それでも諦めず徘徊を続けるも、結局元の場所に戻るはめになる。しかしその場所は、ついさきほどとは少し様子が変わっていた。

白髪の少年が、佇んでいる。

『……!』

反射的に身構えて、一気に距離をとる。少年もこちらに気付いたようで、首だけ振り返っていた。

得体の知れない存在に対し警戒心と危機感が募っていく。しかし同時に……何故だろう。少し懐かしい感覚もある。

まるで、長年離れ離れだった同胞と再会したかのような。

『……どなた、ですか？』

戦闘体勢のまま低い声で訊ねる。そんな感覚がするからといって、警戒を解いていい雰囲気でもない。あちらにも、微かにだが敵意はあるのだから。

「……………」

少年は応答しない。無言でじつ、とこちらを観察している。

『………な、何ですか？ 何で私を見るんですか？』

新たに羞恥を感じつつ一歩後ずさる。少年の方は完全に身体をこちらへ向けて、やはり無言でこちらを観察していた。

ペルセポネも、相手を探る。

補佐官クラスより一回り強い程度か。大した力は持っていないように感じるけど……。

だからといって油断は出来ない。力なんていくらでも調整して相手に誤認させることが可能だ。実際の能力値など、分かったものではない。

『……………」

相手に悟られないよう、手の平へと静かに細やかに力を集約させていく。威嚇程度の威力にしかなりはしないものの、今はそれで充分だ。

隙さえ生まれれば、それでいいのだから。

いけ。

そのままそれを放とうとして、

「……………貴様は、ペルセポネだな」

「!?」

いきなり名前を言い当てられて、驚いて機会を失った。  
少年の口は休まず動く。

「十二神将入りをハデスと共に辞退した変わり者。能力、属性は不明。そもそも直に姿を目撃した者すら、神クラスや補佐官クラスを除けば数える程度しか存在していない」

「え、え、え？」

名前どころかムーの歴史に刻まれた自身についての記述すら見事なまでに言い当てられる。現在ではその書物は失われていると聞いていたのだが、彼はそれをどこで知ったのだろうか。

「……………本当に、あなたは何なんですか？」

堪らず訊ねる。ムーの歴史に詳しくすぎる少年。その正体を知りたいという、純粋な好奇心により出た言葉だ。

少年は、なんとこちらに背を向けつつ告げる。

「……………ブライ。真名はソロ。ムーの末裔だ」

どういっつもりなんだろう。

そう、ペルセポネは疑問に思った。

聞けばブライは、ムーと星河スバル達の現状を知っている上、セレスともやり合ったことがあるらしい。

だというのに、そのセレスの仲間であるペルセポネを助けたのだそうだ。

一応は同胞と呼べる相手だから、というのは理由にはならない。セレスとはやり合っているのだから。

……とにかく、彼の真意は不明だ。

しかしどうやら、ペルセポネとやり合っつもりはないようだし、ノイスウェーブというのだぞ澱みなく歩いているところを見ると、この世界についても熟知している模様だ。

倒れていた理由を話した際には「……ついて来い」とぶっきらぼうに呟いていたし。

ならば、話は早い。

彼が何故自分を助けたのか、それは分からない。しかし、この世界からの脱出法を知っていて、それを教えてくれるというのなら、

私は、彼を。

彼女を見つけた時、ブライはすぐにムーの電波体だと分かった。厄介な相手だし、今の内に殺しておこうとも考えたが、本能がそれを制した。

こんなことは初めてだったし、最初は混乱した。

しかし、しばらくして彼女が“あの”ペルセポネだと分かった時、その理由を悟った。

ペルセポネは謎の多い電波体だ。記述も極端に少なく、正体もほぼ不明。

しかし、末裔であるブライには書物にはない裏情報とも呼べる情報がある。

それによれば、彼女には“ある力”が宿っているのだそうだ。

それが、本当なのなら。

それを知ることが出来れば、俺の能力の限界を越えるきっかけになるかも知れない。

だから今の内に恩を売っておく必要がある。口調からして、ロツクマンと似たような性格の持ち主だろうから、恩には恩で返すタイプだろう。

だから、俺はコイツを。

最大限に利用してやるぞ。

二人はそう、同じことを思った。

第84話：孤高と少女の驚愕（前書き）

初期並に短いです。

あと、ブライの話、予定より長くなるかもです

## 第84話：孤高と少女の驚愕

「どづいっことだ……!？」

ブライは呻くように呟いた。彼にしては珍しく、明確な焦りが見て取れる。

その様子が気になったらしく、ペルセポネは訊ねてきた。

「……どうしたんですか？」

「……消えている」

「？ 何がですか？」

二回目の問いに、ブライの表情が歪む。首を傾げるペルセポネに、彼は今起こっている事態を告げた。

「……俺が普段使用していた外界への裂け目が、消えている」

「えー!？」

ペルセポネの顔に驚愕と落胆が同時に浮かぶ。当然だ。ノイズウエーブの脱出法を知っていると思っについて来ていたのだから。

「どづいっ、ことですか？」

「……分からない。だが、裂け目は一つではない。他を当たるぞ」

そう言っただけは走った。ペルセポネも、渋々といった様子だったがついてくる。

……そして一時間近くノイズウェーブを走り回った結果、

「……全滅、か」

『……………』

今まで存在していたはずの裂け目が、全て消えていることを知った。

つい何時間か前まで、二年以上にも渡って存在し続けた裂け目が突如消滅したのだ。

何だ、どうなっている。ノイズウェーブに何か異常が起きたとでもいうのか？

肩で息をしつつ、ブライは座り込む。そもそも彼は、ノイズによってかかった負担が原因で相当体力を消耗しているのだ。

負担が、臨界値を越えようとしている。  
と。

「？」

頭に漆黒の衣が被さった。鬱陶しいので取ってみると、ペルセポネが身につけていた衣服だと分かった。

『使ってください。見た感じ、あなたは、相当衰弱しています』

それを着れば、ある程度は、ノイズの影響を遮断できるはずで、

とペルセポネは言った。今までローブによって隠されていたボディがあらわになっていく。深緑色に、いくつものまがまがしい形状の漆黒のラインが入った暗い色合いだった。

「……………」

他者から施しを受けることに対して抵抗したくなるものの、仕方なく羽織ってみる。

……するとどうだろうか。今まで感じていた不快感がかなり軽減されたではないか。

何かの力が付加された衣服なのか？

どうもこの衣服自体が電波障壁と似たような性能を持つ“何か”で構成されているようだ。

防御力のほどは不明だが、このような外側からの刺激を軽減させるような効力があるのはなんとなく分かる。

……ペルセポネは、何故このような特殊な衣服を着用していたのだろうか？

『……………あの、ブライさん』

疑問を抱いたところで、彼女から問いかけられた。知りたいとは思ったが、とりあえずは後回しだ。

「……………何だ？」

『私が、倒れていた付近に、裂け目はありませんでしたか？』

「？ なかったが、それがどうかしたか？」

『……やはり、ですか』

「……やはり、だと？ 貴様、裂け目が消滅した原因に何か心当たりがあるのか？」

ペルセポネは俯く。この様子は、確実に何かを知っている。

「話せ。一体何が原因だ？」

訊ねると、余計に俯いた。

一応言っておくが、見た目や雰囲気は度が過ぎるほどにクールなブライだが、その実結構短気だ。

弱い、鈍い、その他諸々。とにかく自分に利がないことに対してはとことん冷酷に冷静にキれる。

今回のペルセポネは、その“鈍い”のカテゴリに入る。

「……おい」

だから、抑えてはいるものの、現在はキれる寸前だった。

その雰囲気を知ったのか、はたまた自主的に話す気になったのか、ペルセポネは口を開いた。

『……私が、外の世界にいた時、突然裂け目が現れて、すぐに消滅した。……それは、さきほども言いました、よね』

「ああ」

『……あなたの話を、聞いていると、あの裂け目は、場所が固定さ

れているし、そう簡単に消え去るものではない。だったら、あの時私を通った裂け目が、消えたのは、絶対におかしい』

「……………それで？」

『あの裂け目が消えたのも、周辺の裂け目が消えたのも、…………私の力が、原因なのかも、しれません』

「！」

ブライの表情が変わる。ペルセポネの力。太古から彼の一族が語り継ぐ伝承に現れる、“あの力”。

もし。もしだ。本当にこの事態の原因がそれなら、やはり見込み通りだ。

彼女の力は、ブライに希望になりうる。

「……………おい、ペルセポネ。その力は」

ブライが堪らず訊ねる。普段絶対に見ることが叶わぬであろう、好奇心に満ちた表情で。

……………しかし。

『ハッ。同胞の気配がするから誰かと思って来てみれば、貴様かペルセポネ』

その瞬間に、厳格そうな老人の声が響いた。

それも、すぐ背後から。

「『 ツー!? 』」

驚いて二人は一気に距離をとる。  
体勢を立て直し、見詰める先に、彼はいた。

群青色に薄い黄色と薄い緑色のラインが入ったボディ。老人とは思えぬほどにがっしりとした体格。先が三つに別れた特殊な槍。

この特徴を持つ電波体を、ブライは知っている。何せ、十二神将に関わる文献には確実に名が記載されているのだから。  
彼は、彼の名は。

『ポセイドン、様!?』

十二神将、《五本指》。マリン・ポセイドン。

第85話：少女の感じた絶望（前書き）

大変長らくお待たせしましたm | | m

## 第85話：少女の感じた絶望

「ハッ！ ……なるほどなあ。この空間の電波が突然不安定になった原因は、貴様じゃったか」

明らかに怒気を含んだ声色でポセイドンが呟いた。ペルセポネは畏縮した様子で数歩後退し、ブライはただただ驚愕する。

《五本指》。ただでさえ異常な戦闘能力を有する十二神将の中でも、さらに頭一つ飛び抜けた存在。以前戦ったセレスなど比ではなく、修業した現在のブライでも足元にも及ばないであろう最悪の敵が眼前に佇んでいる。

何故ここにいるのか、という疑問すらもはや気にならない。生まれてはじめて、逃げなければ、とブライは思う。

ポセイドンは二人をそれぞれ眺め、背負っていた槍を手にとった後にさらに言葉を紡いだ。

「その小僧、メルクリウスの報告にあった星河スバルの仲間じゃない。……ペルセポネよ、そのような者と、何故争いもせず共にいる？」

「っ、それは……」

「そもそも、貴様がここにすることが既におかしい。ここに寄越されたの儂のみじゃし、増援が来る、とは聞いておらぬ」

そこまで聞いて、ペルセポネは一気に後退した。釣られてブライもその場を離れる。数十メートル以上の距離が開いたはずだが、何故かその呟きは鮮明に耳に届いた。

『 貴様、さては寝返りおったな 』

途端、ペルセポネが地面にたたき付けられた。そう認識した時には、ブライも地に伏していた。ポセイドンが開いた距離を一気に詰め、目視もできないほどの速度で攻撃を加えたのだ。

「かはっ!？」

遅れて痛みが襲ってくる。肺の中の空気が強制的に排出され、強烈な吐き気をもよおした。痛みも吐き気も桁違いで、もはや気絶することすらままならない。

激痛で身体が言うことを聞かず、這いつくばるしかない中、ペルセポネが立ち上がるのを見た。上空に向けられた彼女の視線を追うと、周囲に水塊を漂わせるポセイドンの姿があった。

彼は蔑むような目で二人を見下ろし、口を開く。

『 儂はな、予定を崩されることがこの世で最も不愉快なことじゃと思っておる。以前より綿密に算段を練り、その通りに行動しているというのに、最中にイレギュラーが訪れる。それがあまりに不愉快で、全てを破壊し尽くそうかと思っただことさえあつた 』

『 ……………!?!? 』

水塊の一つが落下する。地上で弾け、波が生まれ、二人に襲いかかる。ブライは電波障壁で辛くも防いだが、ペルセポネは

『 ……久々じゃよ、ここまで苛立ったのは。いくら抑えていても、

貴様の能力は周囲に影響を与えている。ただでさえ不安定なノイズをさらに不安定にし、消滅させ、結果的に僕の任務の妨げになっている。これがどういう意味か、理解はできているか？』

ポセイドンの言葉が降り注ぐ地点で、彼女は

『ペルセポネ・“ダークネス”』

漆黒の障壁を展開して、そこに佇んでいた。

あれは！

ブライは目を見開いた。ペルセポネの前方の障壁、いや障壁だけでなく彼女の周囲に漂う黒すぎる何か。それは、ブライが知らされていたものとなんら違いはなかった。

あれは彼女を象徴する力で、名称としても使われている。

ダークネス。つまり、《闇》。

伝承通りの、禁忌とされる力が、現在目の前に広がっていた。

ブライさんは動けない、か。

《闇》を展開した状態で横目で確認する。彼の戦闘能力が自分にす

ら劣ることは最初から分かっていたし、驚きはしない。心配ではあるが。

相当なダメージを負っている様子だが、死ぬほどでもないだろう。ローブを貸しておいたのだから。

あのローブは、元々ペルセポネの力を抑えるために製造した特注品だ。自身で無理矢理抑える必要をなくすために。

ついでに、《闇》なんて規格外のものを取り扱う関係で、副次的に防御性能も高い。それゆえに、さきほどの一撃を喰らってもブライが生存しているのだ。

それはさておき、今は目前の敵についてだ。

ポセイドンは今苛立っている。詳細は不明だが、なんらかの任務でこの場所に赴いたらしい。自分はどうも、それを邪魔したようだ。危険だ。

怒った彼は、正直手に負えない。同じ《五本指》ですら持て余すほどののだ。今の彼なら、一帯を丸々破壊しても不思議じゃない。そうなれば、自分とはもかく身動きの取れないブライなど一たまりもない。

だからここは、

『……理解して、いますよ。貴方の邪魔が出来て、私は、とても嬉しいです』

『……ああ？』

挑発して意識を完全にこちらへ向け、逃げる。そうすることで、ブライの安全を確保する。

『ッ！』

複数の水塊が放たれる。ペルセポネは《闇》を大きく展開して防

ぎ、それを消し去った。……いや、転移させたが正解か。

ダークゲート。《闇》で空間を歪めて、異なる位置に出入口を作る、基本的には移動用に使う技だ。

ドパアンツ！ と遠方で水塊が弾けた音が響いた。ポセイドンの意識がそちらに向いた一瞬の隙を見計らって、ペルセポネ自身がゲートへ飛び込む。すかさず入口を封鎖し、水塊を転移させた場所に出たところで出口も封鎖する。

まるで湖のようになつた一帯を眺めつつ、《闇》を素材に大鎌を生成した。すかさず臨戦体勢に入り、高速でこちらへ突進してくるポセイドンを瞬きもせず視界に捉え続ける。

そして、彼が鎌の届く範囲に入りこむ一瞬手前で、鎌を横へ振るった。

『甘いわ！』

当然、上方へ回避される。それは予想できていた。だから、

『甘いのは、そっちです』

『あ？ ……ぐおっ！？』

今の一振りで切り離して彼に纏わせておいた《闇》の欠片を、破裂させた。ダメージなんて呼べるほどの効果はないだろうが、若干でも怯んでくれればそれで充分だ。

ペルセポネはダークゲートでポセイドンの背後へ移動し、鎌を手放した。結合が解かれて形のなくなった《闇》で、彼を包み込む。それを破裂……いや、爆発させた。

『ッ！』

漆黒の奔流が巻き起こる。計測しなくても分かるくらい、空間が歪んでいる。

ナイトレイド。相手の背後に移動し、《闇》で包み、何らかの攻撃を加えることを、ペルセポネは総称してこう呼んでいた。

『……………はあ、はあ』

着地し、肩で息をする。ここまで全力で力を行使したのは数千年ぶりだったため、疲労感が尋常ではない。

……………そもそも《闇》の行使自体、身体に良いものではないのだが。

今の、うちに……………

それはともかく、今は逃走を続けよう。あの奔流は、いくら《五本指》と言えど早々抜け出せるものではない。なにせ断続的に空間が歪み続けているのだ。今頃ポセイDONは、メビウスの輪のように進めばやがて元の場所に戻るような無限ループを味わっているはずだ。

なるべく、遠くへ。

抜け出した彼が気付けるように、気配を全開にしつつ逃走する。ブライとの距離は既に数十Km以上開けているがまだ安心はできない。相手は《五本指》で、しかもポセイDONなのだから。背後で奔流が続いているのを感じつつ彼女は加速して、

『……………ハイドロシエル』

周囲に響き渡ったその声に総毛立った。

直後、水塊がペルセポネの脇を音速を越えた速度で横切った。地面に着弾したそれはペルセポネの足場を軒並み破壊し、遙か下で弾けて巨大な水柱を作る。降り注ぐ水を受けながら、崩れる足場を伝って上昇するペルセポネは、遠目で確認した。

《闇》の奔流は治まっていた。残骸がポセイドンの周囲に無造作に散らばっているので、確実に自然に治まったのではない。

つまり、ポセイドンが掃ったのだ。使用者ですら制御の難しい《闇》を。

『……………でたらめ、ですよ』

洪面を作つてそう呟いたペルセポネは、素早く周囲を見渡す。半径百メートル以上に渡つて足場が失われているが、遠方に確認できる。目視できさえすれば、ダークゲートの出口は展開可能だ。

そうしてまず入口を展開したところで、彼女は戦慄した。

『おい』

一瞬意識を離れた隙に、ポセイドンが背後にいたのだ。

『ぐツ！？』

振り返った瞬間、首を掴まれた。ポセイドンは遠方の、いたがた彼女が出口を展開しようとしていた地点に僅かに視線を向けて、口角を吊り上げる。

『ハッ！ ……貴様の手を煩わせる必要はない。儂があそこまで連れて行ってやる』

『な、あッ!?!』

ポセイドンは首を掴んだまま、足場の残骸を蹴って加速する。この後に起こるのであるう事態を察したペルセポネは必死に手を解こうとするが、いかんせん力に差がありすぎた。びくともしない。

そのまま桁外れの速度で突っ込んだ彼は、ブレーキの如くペルセポネを地面にたたき付け、急激に減速する。咄嗟に身体を《闇》でコーティングしたものの、それを越えて衝撃が襲ってくる。

十数秒間その状態が続き、突進の勢いが完全に停止した時には、ペルセポネの身体はぼろぼろだった。

『ハッ! ……つまらんなあ。貴様やハデスが扱う《闇》とやらの力はその程度なのか?』

『くあ……うっ』

『……たったこれだけで喋ることすら出来ぬようになるのか。ハッ! 十二神将候補が聞いて呆れるな』

その後も、身動きのとれないペルセポネに対しての嘲りは続いた。反論するための口はまともに言葉を紡いでくれず、言われるがままとなる。

やがてひとしきり言い終えたのか、ポセイドンはおもむろに槍を振り上げた。

『……貴様などおらずとも、儂らの計画は完遂可能だ。

それに貴様、どうやら“電脳核”を半分削り取っておるじゃろう? ならばわざわざ連れて帰る必要すらない。ハッ! ……皮肉じゃ

のう。生き残るために講じた策が原因で殺されるとは』

槍の矛先がペルセポネの胸部に向いている。確実に仕留めようとしている様子だ。

くそっ、くそっ！

抵抗が出来ない。助けも呼べないし、そもそもいない。万事休す、という言葉が頭を巡った。

まだフィーちゃんに会ってないのにつ、話せてないのにつ、死んじゃうの？

嫌だ、嫌なのに、身体が動かない……！

涙が溢れてくる。死ぬ恐怖、後悔、様々なものが押し寄せてくる。しかしやはり、身体は動かない。

『さらば、だ』

そうしている内に槍が振り下ろされた。ペルセポネの残った半分の電脳核を砕くための一撃が。

身じろぎもできない。ただ死を待っただけの中、ペルセポネは微かに口を動かして囁くように言った。

『ごめんなさい、フィーちゃん』

直後、槍が突き立った。



第85話：少女の感じた絶望（後書き）

ぐだぐだでしょ？

## 第86話：孤高の信じた希望

星河スバルについて長い間考え続けていたブライは、絆云々は理解出来なかったが、たった一つだけ理解出来たことがあった。

理論も何もなく、説明しようにも抽象的な言葉しか出せない、「護るものがあると人は強くなれる」というものだ。

自分の人生を思い返してみても気付いたが、強くなるうとした理由もムーの末裔としての“誇り”を護るためだったし、スバルが護るために強くなっていたのを知っていたから。

だが、自分と彼の“護る”の質がまるで違うことにも同時に気付いた。

ブライは自分のため、スバルは他人のため。そしてどうやら、負けた事実から推測するに、スバルの“護る”の方が強いのだ。

その理由だけは未だに理解出来なかったけれど、それならば自分も、他人のために行動すれば強くなれるのでは、と思った。

孤高を信条としている自分では到底無理だと、すぐさま諦めたが。

……ただ、やはり他人を護る強さは興味深い。

絆とやらで繋がっている相手だけでなく、そもそも面識すらない相手を護るためでも強くなるのだから。

そんなことを、地に伏した状態で思い出したブライはふと思う。

同じ他人タイプの“護る”でも、多少なりとも質の違いがあるのではないかと。

そう、例えば。

利用価値があるから護ってやろう、とか。

『……………！』

そう気付いたら、不思議と、身体は動いてくれた。

追いついて、ペルセポネの命を絶つ一撃を、全力の一撃で逸らすくらいには。

地面に槍が突き立ったことによりクレーターが出来上がる。不意をつかれたポセイドンは大きくバランスを崩していたが、予期していたブライは違う。ペルセポネを抱えて、どうにかその場を離れた。途端、足場が崩落を始める。ブライは痛みに軋む身体を動かし、必死に必死に、走る。足が離れたそばから崩れる様は冷や汗ものだったが、まあ大丈夫だ、と珍しく楽観的に思う。

やがて崩落が治まったことを確認したブライは、なるべく優しく、ペルセポネを地面に下ろす。骨が軋み、筋肉が悲鳴を上げているが、まだ身体は動きそうだ。

すると、ポセイドンの気配を感じつつ、剣を構えた彼に、息も絶え絶えといった様子のペルセポネが声をかけてきた。

『……………なにを、しているん、ですか？』

「……………愚問だな、迎撃の準備に決まっているだろう」

その返答に、彼女は驚愕の表情を見せる。

『……………冗談、ですよ。貴方じゃ、敵わないことぐらい、分かっているでしょうっ？』

「……………ああ」

そこは素直に肯定する。そんなもの戦う以前から理解していたし、さきほど痛感した。全力で攻撃して、槍の軌道を若干逸らす程度しか出来ないほどの戦闘能力差があることを。しかしそれは、戦わない理由にはならない。

「……どこかの忌ま忌ましい英雄様が、諦めない限りは希望はあるだとか、ヘドの出るようなことを言っていた」

『……は？』

「認めるのは癪だが、確かに、その通りかもしれない。だから」

そこで一旦言葉を切り、爪先から手の指まで満遍なく力を込める。目視も困難なほどの速度で突進してくるポセイドンに、覚悟を決めたブライは同じく突進する。

そして、切った言葉の続きを叫んだ。

「一度だけ奴を信じて、諦めないでやろうと、思ったただけだ！」

以前ウォーロックが、ソロは丸くなったと言っていた。確かに、そうかもしれない。誰かに礼を述べるなど、以前の彼ならば考えもしなかったことだ。

スバルを信じてみるとか、動機は不純でも誰かを助けようとする

とか、永劫ありえなかったはずのことなのだ。

自分は変わってきていると思った。

彼らと、スバルと同じ土俵に立てるかもしれないと思った。

だから圧倒的な力の差に屈しず、ひたすらに、がむしゃらに戦った。

肉が裂けても、骨が折れても、目が見えなくなっても、耳が聴こえなくなっても、鼻が利かなくなっても、関係なく。

ボロ雑巾のようになって、首を掴まれて、トドメを刺される直前になっても、諦めずに抵抗していた。

感覚が希薄になっている脚を無理矢理動かす。パスツ、と乾いた音を鳴らしながら、彼の脚は相手の胸板を叩いた。

ポセイドンは、そんな彼の行為を嘲笑する。

『ハッ！ ……くだらぬなあ。それが、さきほどから貴様が呪文のように呟いている“希望”か？』

その言葉はブライには届かない。それが分かっている彼は、答えも聞かずに、首を圧迫する。

『……余計な手間をかけさせるな、雑魚が。貴様など相手にしている暇などないのだ。響ミソラだけでなく星河スバルまでもが融合能力を発現させた今、儂らもあまり余裕がないのだからな』

骨がみしみしと音を立てる。数秒もあれば首の骨が砕け、ブライは絶命するだろう。故にポセイドンの意識は、既に彼へは向いていなかった。ポセイドンの目は、十メートルほど先で倒れているペルセポネを、獲物として捉えていた。

それが失敗だった。

ブライへの関心を失っていたから、彼は気付けなかった。  
自分が何気なく口にした少年の名に、ブライが大きく反応したこ  
とに。

感覚も意識もほとんど失い、廃人のようになったブライが、それ  
によって大きく変化したことに。

直後、ブライの身体が漆黒に染まった。

第86話・孤高の信じた希望（後書き）

ブライが全然らしくないのは、二次創作だから。

## 第87話：孤高と少女の希望

《闇》を発現させるには、いくつかの条件が必要になる。

一つ、先天的に《闇》の才能があること。

二つ、《闇》に支配されない強靱な精神を持っていること。

三つ、《闇》に堪えうる強靱な肉体を持っていること。

……四つ、一度、完膚なきまでに絶望して心が《闇》に染まること。

言うまでもないことだが、この四つの条件の最後の一つには、多大な危険が伴う。故に、それ以外の三つの条件は一つとして欠けてはならない。

そしてブライは、どれも欠けていなかった。故にあとは、絶望すれば済む話だった。ポセイドンはそれを感じるには持つてこいの相手だったし、問題もないはずだった。

しかし彼は“希望”を持つて戦っていた。スバルを信じてみるという似合わない姿勢が、結果的に彼の《闇》の発現を遅らせていたのだ。

だが、意識も聴覚もほぼ失った状態で、スバルの名だけを聞き取ったことにより、状況は一変する。

痛感したのだ。自分とスバルの根本的な違いを。

常に“希望”があると信じて生きている彼だからこそそれは掴むことが出来るのだ、と。

今まで全くと言っていいほど信じてこなかった自分が、付け焼き刃的に信じてみようと思った程度で掴める道理はないのだ、と。

途端に、ブライは失った。《闇》に染まるのを遅らせていた、最後のリミッターを。

そうしてブライは絶望し、心を《闇》に染め、

……《闇》を、発現させた。

『……嘘、あれって』

ペルセポネは目の前の光景に驚愕していた。  
ブライを中心にして、《闇》が広がっているのだ。

この現象は知っている。何せ自分自身が経験したことなのだから。  
《闇》が発現した時、今まで抑えられていた力が一気に解き放たれる。その結果、濃度が特別濃い《闇》が周囲の空間を浸蝕する。

第一段階。ハデスはそう呼んでいた。

『ぐう……、なんだ、これは』

ポセイドンが呻いて疑問を口にする。彼はすぐに異変に気付きブライを手放したが、片手に若干浸蝕された痕が見られる。

その範囲は徐々に広がっている。それに気付いたポセイドンは、躊躇いなく自らの手を叩き折った。

呻き声は短い悲鳴に変わり、治まった直後、憤慨した様子の彼は鋭い視線をこちらに向けた。

『ペルセポネ、貴様、何をした……!!』

何も、してませんよ。

この状況でペルセポネを疑うのは仕方のないことだ。《闇》のこ  
とをよく知らないポセイドンからしてみれば、彼女が何かしなければ  
あれば生まれないと、そう思っているに違いないから。

だが、何もしていない。

ブライが偶然、《闇》に覚醒したのだ。

『止める、ペルセポネ』

残った方の手で槍を握りしめ、命じてくる。そう言われても、ペ  
ルセポネにはどうしようもない。

身動きをしない彼女に、止める意志がないのだと判断したようで、  
ポセイドンは激昂して叫んで、

『貴様、聞いている　　がぶあっ!?!』

突如、十メートル以上も吹っ飛んだ。

彼は自分の身に何が起こったのか分かっていない様子だったが、  
気付いた途端、槍を地面に突き立ててブレーキをかけた。しかしそ  
れでも、かなりの距離を滑ることになっている。

その姿を眺めていたペルセポネは、ふと気付く。視界に、見知ら  
ぬ人物が佇んでいることに。

そう思って、即座に否定する。

いや、見知らないわけじゃない。あの姿を知らないだけだ。

そうだ。その人物が纏っているのは自分が貸したローブだ。顔は



まずいかもしれない。

その姿に、ペルセポネは新たに懸念を抱く。  
才能はあつたんだろう。身体も、精神も、《闇》に絶えうる強度  
を持つていたんだろう。

ただ、これはイレギュラーだ。  
発現した直後の《闇》は桁外れに強大だ。なのに、御する方法も  
知らない状態で意識がない。  
意識がなければ、精神の強度など無意味だ。下手をすれば、心が  
浸蝕されて潰れてしまつかもしれない。

動か、なきや。

目をつぶり、集中する。《闇》は、コントロールできれば非常に  
便利な代物だ。

例えば、身体が損傷すればそこに潜り込ませることで補強できる。  
ポロポロだったブライがあそこまで動けたのは、発現と同時に同様  
の効果が発生したからだ。

それを、ペルセポネは意識的に行った。

断裂していた部分を繋ぎ、どうにか動ける程度まで補強する。

効果を手で試してみると、多少痛みは伴うものの問題なく動いて  
くれた。

ゆっくりと、膝をついて立ち上がる。荒く息をしつつ、ブライが  
駆けた先を見つめる。

そうして目にしたのは

ポセイドンは、笑いながら突進してくる漆黒の男に、言い知れぬ不安を感じていた。

直感が告げている。あれは危険だ。

『ハイドロシエル!!』

先手をうつ。水の砲弾が男へ向けて高速で飛ぶ。しかし、

「はははははっ!!」

容易く真つ二つに斬り裂かれた。

『なんだと!?!』

驚愕し、反射的にその場を離れる。直後に鎌が振り下ろされ、地面に突き立った。

その部分が粉碎される。その光景に、ポセイドンはゾツとした。

もしあれが命中していれば、ああなっていたのは自分だったかもしれない。

『貴様……!!?!』

槍を構えて本格的な戦闘体勢をとる。すると、にやけるように気味悪く笑った男が、鎌を大きく振り回した。

それを槍で受け止めるが、驚くべきことに、たたらを踏むほど後退させられた。

力負けしている。その事実を、ポセイドンは許容できない。

『ナメるなよ、ガキがあー!!』

怒号を上げて押し返す。男も負けじと押し返す。額がぶつかるほどの距離まで接近した二人は、その状態でしばらく硬直する。

そうやってようやく、ポセイドンは気付いた。この男は、さきほど自分が痛め付けた男だ。

どうなっている。あの状態から回復したというのか。

その上、自分に匹敵するほどの戦闘能力を手に行っている。

あの《闇》が関わっているのは間違いなさそうだが、それにしても、上昇率が異常過ぎる。

とるに足らない存在から、こちらが本気を出さなければならぬような存在になるなど、《闇》にはそれほどの力が備わっているというのか。

だとすれば、まずいぞ。ペルセポネにこやつ、その力を扱った輩が相手側に二人もいることになる。

槍をずらして男の体勢を崩す。交差する形になったところで、背に蹴りを叩き込む。よろける彼を尻目に《acquire》を起動し、次元の断層を探す。

そして、見つけた。“ゼウスが想定した通り”ノイズウェーブにも断層が現れていた。

ノイズのデータは心許ないがとれている。今はこれを持ち帰るのが先決だ。……それと、《闇》についてゼウスに報告をせねば。



信じられない光景だが、夢ではない。  
つまり、危機は去ったということだ。

『でも、こちらは……』

吹っ飛ばされたブライの傍に寄り添って、呟く。

ペルセポネの危機は去ったが、ブライの危機は依然としてこの場にある。

ブライは、声が枯れたのか、まともに笑えていない。しかし顔は笑みを作っている。

痛みを感じた様子もない。精神が既に壊れかかっているのかもしれない。

『……………ブライさん』

名前を呼ぶ。反応はない。ペルセポネは目をつぶり、彼の額に手を添える。

『……………私も、《闇》を発現したての頃は、暴走とかよくありました。大抵の場合、自分でどうにかしてたんですけど、どうしようもない時はこうして……』

その接触部分から、自らの《闇》を送り込む。そしてブライの《闇》と同調させて、鎮静化させる。

『……………ハデス様に、抑えてもらってました。いつもされる側だったし、初めてなので、上手くいくかは分かりませんが、やってみます』

呟きながら彼の全身に《闇》を巡らせる。酷い状態だ。肉体的に

もそうだが、《闇》によって電波の方がかなり浸蝕されている。これだけでよく生きていられるものだ。

……尋常ではない才能が、彼にはあったのだろう。《闇》を発現させれば確かに戦闘能力は上昇するが、精々60%がいいところだ。しかしブライは、明らかに100%を越えて上昇していた。腕力だけかもしれないが、それでも、《五本指》に匹敵するほどに。

『……貴方は、凄いです。本当に』

称賛しつつ、浸蝕の酷い箇所をあらかじめ鎮静化させた。後は、気は抜けないものの楽な作業にはなる。そして。

『……終わりましたよ』

そう呟いて、手を退かす。途端に、ブライを包んでいた《闇》が中心の脳核へと収束し、身体の色が元に戻る。完全に治まったようだ。

一安心、といきたいところだが、治まったら治まったで今度は肉体の損傷の問題が再発した。

こればかりはペルセポネではどうしようもないので、商人でも見つけて回復薬を売ってもらうしかないだろう。

『よい、しよ……』

ブライを背負う。体格に差があるので少しフラフラするが、とりあえずはいけそうだ。

彼の身体を刺激しないように細心の注意を払って歩き出す。その最中に、聞こえていないのは分かっていたが、言った。

『……私、フィーちゃんに会うのは、後回しにしようと思います。ここからどうやって出るか知りませんし、それに、貴方の世話を、しなければならぬみたいですから』

一度息をつぐ。

『……貴方が《闇》をコントロール出来るようになるまで、私が、コーチしてあげます。貴方の力は強大ですし、ちゃんと扱えるようになれば、それこそ、“希望”になると思っています』

彼自身にとつても、ペルセポネにとつても、シルフィー達にとつても、だ。それは、あえて口にしない。

『これは、拒否は許しませんよ、ブライさん』

フラフラしながらペルセポネは歩き続ける。一瞬、「するものか」という声が聞こえた気がしたが、きつと気のせいだと思い、すぐに記憶から消した。

第87話：孤高と少女の希望（後書き）

程度を知らぬぐだぐだ感があることを、ここで謝罪させていただきます。

第88話・アゲイン？（前書き）

目次

## 第88話：アゲイン？

どうも、星河スバルです。

文化祭が終了してからちようど二週間が経過し、11月14日となりました。

あれから十二神将の襲撃もなく、平和な日々が続いています。

日曜日である今日、僕は休日を存分に謳歌する……予定でした。三日前までは。

現在僕は、学校の先輩である椎橋コウという人と共にファミレスにいた。

対面で気まずそうにもじもじしている僕に、先輩はとても熱っぽい視線を送ってきている。

……一応言っておくと、先輩は男だ。そして僕も男。それなのに熱っぽい視線とはどういうことだ、と疑問に思う人もいるだろう。

これは別に、先輩が“そっち系”のアブノーマルな趣味嗜好の持ち主だとか、そういうことではない。だって先輩は、自分の目の前にいる人間を女の子だと思っているのだから。

……ここまで言えば、伝わると思う。

そう、つまり、僕は現在、そう思われるような格好をしているのだ。

早い話が、再び女装しているのである。文化祭は終わったというのに。

け、決して、好きでやってるわけじゃないからねっ！ 女装が癖になっちゃったとか、そういうことじゃないからっ！

僕だってまさかまた女装する羽目になるとは思ってたさ。むしろ、金輪際したくなかったくらいだ。

じゃあ何でしてるんだよって話だけど、それは、さっきも言った

三日前に原因がある。

……少し、回想してみようか。

「スバルくん、もう一度だけ女装してくれない？」

昼休み、教室に戻ってきたミソラちゃんが突然そんなことを言った。

両手を胸の前で合わせて、『お願い』のポーズをとる彼女を見て、僕は数秒間呆然とした。そして彼女の言葉をじつくりと吟味し、これ以上ないっくらいに首を傾げる。

「は？」

「いや、だからね、もう一度女装して欲しいなって」

「ああ、うん。分かってる。君が何を言ったのかは充分理解してる。だからこそ言っよ。……は？」

「あ、Whyの意味のは？ か」

頷きで肯定する。

「うーん、まあ、話せば長くなるんですけどね」

「そんなありがちな前置きはいいから、早く言いなよ」

「むう、声に棘があるね」

そりゃそうだ。女装してくれなんて言われたら、棘も出るでしょうよ。不機嫌にもなるわ。

ミソラちゃんは少し考えるような素振りを見せた後、僕の手を引いて教室を出た。その際、教室や廊下から妬みと冷やかしの声がかかる。うるさくて仕方ない。

やがて中庭に到達すると、木の陰に隠れるよう促された。言われた通りに隠れると、ミソラちゃんはベンチに座る男子生徒を指差した。

「……………あの人がどうしたの？」

「私、あの人に呼び出されてたんだ」

「へえ」

呼び出されたのか。ふーん。

……………。

「……………告白、されたとか？」

「え？　ち、違う違う！　いや、最初はそうかと思ったんだけど、全然違ったの！」

慌てた様子で否定するミソラちゃん。目を見て分かったけど、とりあえず嘘は言っていないみたいだ。

そっか、告白じゃなかったのか。よかった。

……………あれ、何が『よかった』なんだ？

「あの人、三年生の椎橋コウさんっていうんだけど」

ミソラちゃんが話を続けている。自分自身への疑問はひとまず置いていて、そちらに耳を傾ける。

「文化祭である人を見かけて、何て言うか、一目惚れしたらいいんだ。それで私、結構その人と一緒にいたから、何か知らないかって訊かれたんだよ」

ミソラちゃんは喋りつつ、気まずそうな顔をする。…………何か、物凄く嫌な予感がするんだけど。

「…………で、その人っていうのが」

ミソラちゃんの指が僕を指す。やだ、ちょっと待って、その先絶対聞きたくない。

「文化祭で、突如1 - B組に現れた茶髪の美少女こと、星野スバルさん、なんだけど」

で、だ。

先輩に訊ねられたミソラちゃんは、一応僕が女装したのがその人だっことは伝えずに、適当に話をでっちあげたんだそうだ。

ミソラちゃんの親戚の子で、文化祭に呼んだついでに出し物を手伝ってもらっていた、と。

すると先輩は、番号を覚えてくれ、紹介してくれ、と迫ってきた。番号は僕なので教えることは出来ず、それで何かごちゃごちゃやっている内に紹介してあげる流れになっていたようで、引っ込みがつかなくなったんだそうだ。

そして、今週の日曜日（つまり今日）会わせると約束して、僕への女装依頼に繋がる。

……いや、もう、なんだこれ？

嫌々女装して、来客だらけの校内を羞恥に堪えて練り歩いた結果、一目惚れされたって。そんな話ありますか？

しかも紹介されるって、どうすればいいのさ。どーすればいいのさーっ！

紹介されて僕どうすんの？ 付き合えってか？ 冗談じゃない。ふざけんな。

って抗議したら、休日と一緒に過ごして、それで告白でもされたら「そんな気はありません」って言ってフレって言われたけど、そこに至るまでの過程をどうすればいいのかさっぱりだよ。

「……り、料理来るの遅いな」

「うえ？ ……そ、そうですね」

突然話しかけられる。一瞬素が出かけたが、どうにか女を演じることに成功した。疑った様子はない。

……しかし、本当は男だってバレちゃいけないっていうのが、キツイよなあ。文化祭の時は精々いらっしやいませ、くらいしか台詞

なかったし、それ以外は黙っていればバレることはなかったけど、今回は会話しなきゃならないんだぜ？

ロックマンであることを隠す時は、ロックマンの性別が男だって皆知ってたから普通に話してもバレなかったけどさ、星野スバルは女だもの。普通に話したら一瞬でバレる。

だから、先輩と一緒にいる間は女を演じ続けなければならない。慣れない女言葉を使って、何があるうと素を出さないように徹底して。

「……………」

深々と座り直す。なるべく女らしい動作で窓の外を眺める。

一つ言わせてもらおう。

どろしてこつなつた。

第89話・アゲイン？（前書き）

日常回2

## 第89話：アゲイン？

『男とのデート』という行為は、想像以上の精神的苦痛を伴った。食事はまあいい。問題はそれから後だ。

まず、映画を観た。案の定恋愛物だった。

男二人でそんなものを観なきゃならないってところが既に苦痛なのに、先輩はさりげなく手を握ってこようとしたのだ。

僕は慌てて手を引っ込めて、胸の前で庇うようなポーズをとったのだが、どうやらその行動がツボだったらしく、気持ち悪いくらい悶えていた。

次は、僕にとっては結構因縁深いあの博物館を訪れた。

ムーの遺産は既に展示されておらず、代わりに別の古代文明の遺産が展示されていたので少し感心しつつ眺めていたのだが、別の観覧スペースが空いているにも拘わらず、先輩はわざわざ僕と同じものを眺めたのだ。

その際の顔の距離、十センチ未満。

僕は慌てて飛びのき、「あの、こ、困ります……」となるべく女っぽく注意したけど、それもツボったらしい。

その後は、自然の多い道を散歩している。

先輩は隙あらば手を繋ごうとしてくるので、さりげなく「あ、あれ見てください」とか言っただけで何かしらを指差したりして回避している。

そうこうしている内に陽が落ちはじめた。

「見てください、夕陽綺麗ですよ……」

計十度目の回避。そろそろ諦めるよ。嫌がってることくらいいくらなんでも分かるだろ。

……あ、この人の脳内では一連の動作が全て照れからくるものっ

て変換されちゃうのか。面倒くさい。

「お、本当だ。綺麗だね」

先輩が反応を示す。回避成功でホツとする僕だったが、彼はおもむろに僕に視線を戻し、呟く。

「……でも、君の方が綺麗だよ」

吹き出しかけた。

「ふ……う、あ、あはは、ありがとございます。お世辞でも嬉しいです」

鳥肌が乱立する中、なるべく照れたような挙動でそう返す。お、驚いた。こんなこつ恥ずかしい台詞を現実で使う人がいるなんて。今時ドラマでも見ないよ。

と、先輩が「お世辞じゃないさ！」と大声を上げる。

「本心からそう思っている！ 君は綺麗だ！ だから僕は、その……」

そこで先輩は言葉を濁す。そんな姿をおろおろと眺めながら、僕は一つ確信していた。

この雰囲気は、そう、文化祭の動乱の中でキクリさんが告白した時と、同じだ。

となると、そろそろ来るな……。

「ひ、ひひっ、ひ……」

先輩が危ない人みたいな声を出しながら言葉の続きを紡ごうとする。でもやっぱり勇気があるみたいで、中々出てこないみたいだ。僕としては、このままへたれて逃げ出してくれれば万々歳だったんだけど、先輩は決心した様子で、一気にその言葉を紡ぎ出す！

「ひ、一目惚れしてしまったんだ！ だから、だから俺と、つ、付き合ってください！」

……来た。

来た来た来た来た来た来た来た来た来た来た。

ついに来てしまったぞこの瞬間が！

告られたよ。人生で二度目だ。でも相手は男だよ！

さあ、ここからが正念場だ。

僕は、もし告白されたら「そんな気はありません」と言ってフレと言われている（言われずともそうするけど）。

しかし、その際に注意すべきなのは、なるべく相手を傷付けないこと、とミソラちゃんは言っていた。

曰く、にべもなく断られたら、相手はどん底までへこむらしい。

だからまず、啞然とした表情を作る。次に照れた様子を見せる。

続いて喜悦と感謝を示し、数秒間悩む素振りを見せた後、

フる。

そうすれば相手は、まあ結局へこむらしいけど、それを最小限に抑えられるらしい。

……何か、体験談くさくて少しムツとするアドバイスだったけど、良い手だと思う。

その行程の内、“啞然とする”はこの思考の時間で代用するとして、次は“照れた様子を見せる”か。よし。

「……あ、はは。えっと」

それっぽく頬を掻いたり苦笑したりしてみる。ちよつと無理矢理気味だったけど、先輩は告白でいっぱいだったようで疑う様子はない。

「じゃあ次は、“喜悦と感謝を示す”か。これは簡単だな。

「……ありがとうございます。そういう風に、想ってくださいっていいんですね。その、嬉しいです」

そこまで言うと、先輩が期待に満ち溢れた表情を見せた。……本当、ごめんなさい。そんな顔されても、最終行程で突き放す羽目になっちゃうんです。

少し罪悪感があったが、女と偽って男と恋人になるという結果にならないために、僕は、最後の言葉を口にする。

「……でも、ごめんなさい。私に、その気はありません」

言った。

その言葉に、先輩の顔が驚愕に染まる。

その表情を見て、罪悪感に苛まれる。これがふる側の気持ちなのかと、ふるにも、演技でも、勇気が必要なんだな、と思った。

そのまま僕は、夕陽を背に「……失礼します」と凄く気まずい様子を見せながら踵を返して、

「……なんでだい!？」

先輩の叫び声に硬直した。

その隙に先輩は、僕の肩を強く抑える。

「僕の何がいけなかった? 配慮が足りなかったか? 言ってくれ!」

凄い形相で迫られる。これは想定外だ。

ここから先はアドリブで回避するしかないってことなのか……！

「……そ、その。実は、貴方はあまり、私の好みではないというか……」

「……そうか。……なら、君の好みの男になれるよう努力する！  
言ってくれ、どんな男が好みなんだ!？」

くそ、裏目に出た。さらに面倒な質問が飛び出たじゃないか。

こんなの答えられるわけがない。本来の、女の子の好みすら自分自身で曖昧なのに、対象外の男の好みなんて分かるわけがない。

……ごめん、先輩。僕、貴方を傷付けないよう努力していましたけど、ちよつと無理みたいです。恋愛に傷はつきものってことで勘弁してください。

「やめてください!」

手を振り払い、いかにも警戒していますといった感じの体勢をとる。呆然とする先輩に、僕は続けた。

「……やめて、ください。そういう、しつこい人は、嫌いなんです……」

色んなプレッシャーでちよつと泣きそうになっていたため、幸運にも涙声になり、この上ないくらい女っぽく拒絶することに成功した。

先輩はもちろん、信じられないといった様子で愕然とした顔をしている。



素の声で叫ぶ。声変わり途中とはいえ、男のものだと間違いなく言えるその声に、先輩は驚愕している。

しかし構わず、僕は続ける。

「……本当にさ、しつこいよ。僕はさ、貴方の傷が少しでも軽くなるよう努めてたんだ。根本的な間違いを犯してる貴方に、その事実気付かないまま失恋してもらったために、必死で……それをいつまでもいつまでもしつこい食い下がって、こっちの気遣いが台なしだよ！」

「いや、え？」

「いいよ、いいよもう。この際だ、全部教えるよ。付き合えない理由はさつき言った通りだ。……でも僕は、まだ大前提を話してない」

困惑した様子の先輩を尻目に自分の胸をばんっ、と叩く。

そして、真実を口にした。

「僕は男だ!!」

周囲にその声がこだまする。間近で聴いた先輩は耳鳴りのようなものを感じている。様子もなく、ただただ呆然としている。

「髪はカツラだ、胸はパッドだ。服はミソラちゃんから借りたものだし、星野は偽名で本当は星河だ！ 分かったか先輩！」

そこまで言った時点で、先輩は俯いていた。肩がぶるぶる震えているし、騙していたことに怒っているんだろう。

……そんな推測をした自分の甘さを、僕は直後に知ることになる。

「……………最高じゃないか！」

。

「は……………あ？」

予想の遙か斜め上に行く反応に僕はドン引いてしまっ  
な、何で、男だってカミングアウトしたのに最上級の言葉が出て  
くるんだ!？」

「星河ってことは、君は星河スバルくんだよな？」

「は、はい……………」

「あの英雄ロックマンの、星河スバルくんなんだよね？」

「そう、ですけど……………」

戦々恐々とする僕に対して、先輩はそう訊ねた。答えると、何か  
を納得したように頷いている。……………何か、桁外れに嫌な予感がする。  
先輩は、とても清々しい顔で口を開いた。

「……………正直に言おう。俺はノンケだ。しかし、最近になってとある  
男性に興味以上の何かを感じていたんだ」

ずっと、僕に指が向けられる。

「君にだよ」

やめろ。おい、やめろ。それ以上は絶対に言うな。

「俺は、男として君に惚れているんだ」

やめて、もう。聞きたくない。

「……今にして思えば、星野スバルさんに一目惚れしたのも、君なんだと無意識に気付いていたからなんだろう」

黙れって本当に。お願いだから……

「つまり、僕はどっちも好きなんだ。男の君も女の君も」

……ああ。

あああああ。

あああああつ。

ア

ツ!?

「なあ、本当にさ、付き合ってくれないか？ もう君以外の人を好きになれそうにないんだ！」

先輩が詰め寄ってくる。僕は、過去に感じたことのない種類の恐怖に身を支配されて、どうにもならなくなっていた。

ヤバイヤバイヤバイヤバイ！ この人とんでもない人間だった。普通に“あっち系”の嗜好持ってた！

嘘だろ、信じられない。世界の危機が可愛く思えてくるよ。

「いや、ちょ、待って待って」

「そう言わず！」

そう言わず！　じゃねーよ！　本当、本当にヤバイ。この人目がマジなもの！

「僕なら、その女装趣味だって許容できる。他にそんな人がいるかい？　いないだろう？」

いないでしょうね。でも履き違えるな。これは断じて趣味じゃない……！

「さあ！」

先輩はさらに詰め寄ってくる。僕は硬直してしまっている。

「ちょ、誰か、助け……！」

ついに、そんな言葉まで口にしてしまう。でも本心だ。間違いない！

本当に、誰か助けて！

……そこからどうなったのを話そうか。

結果的に言えば、僕は助かった。

心配になっただけらしいミソラちゃんが駆け付けてくれて、先輩を気

絶させたのだ。

「ちょっとお仕置きしてくる」と先輩を引きずって去っていくミソラちゃんは、最後に「……私もだからね？」と意味の分からないことを言っていた。

翌日、普通に登校してきたミソラちゃんに、どうなったのかを訊ねたら、「一連の記憶を抹消してきた」と恐ろしいことをさらっと言っただけだった。

先輩は本当に記憶を消されたようで、僕が偶然にも鉢合わせしてしまった時も、特にリアクションはなかったし。

……ただ、何か、ちらっとこちらに向いた視線が熱っぽかったのが気になった。

そういえば、男として惚れているとか言っていたことを思い出して、ゾツとした。

あの人は、もう二度と会いたくないなど、本気でそう思う。

はあ。

……どうしてこうなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0938i/>

---

流星のロックマン 古代文明再来

2011年8月19日09時58分発行